

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

第五卷 広場の市

青空文庫

著者とその影との対話

予 まさしく乗るか反るかの仕事だね、クリストフ。お前は俺を全世界と喧嘩させるつもりだったのか。

クリストフ まあ驚いた様子をするな。最初からお前は、どこへ俺が連れてゆくかを知ってたはずだ。

予 お前はあまり多くのことを非難する。敵を怒らし、友だちに迷惑をかける。たとえば、いい家庭に何か悪いことが起こっても、そんな噂はしないのがよい趣味だということを、お前は知らないのか。

クリストフ しかたがないさ。俺には趣味なんかありはしない。

予 それは俺も知っている。お前はヒューロン人みたいだ。粗野な男だ。奴らはお前を、全世界の敵だとするだろう。すでにお前はドイツで、反ドイツ主義者だとの評判を得ている。フランスでは、反フランス主義者、もしくは——この方がもっと重大だが——反ユダヤ主義者だとの評判を得るだろう。気をつけるがいい。ユダヤ人のことは一言も言

うなよ……。

汝なんじは彼らより恩を受けたれば、その悪口を言わん術すべなし……。

クリストフ　いいことも悪いことも、考えてることは皆、なぜ言っていけないのだ。
予　お前はとくに悪口を言いたがる。

クリストフ　賛辞はあとから来るんだ。キリスト教徒によりもユダヤ人に、いつそう遠慮をしなければならぬという法があるものか。彼らに俺が十分のことはしてやるとすれば、それは彼らにそれだけの値打ちがあるからだ。俺は彼らに名誉の地位を与えてやらなければならぬ。なぜなら彼らは、わが西欧の先頭に立ってそれを占めたからだ。西欧では今光が消えかかり、彼らのある者はわが文明を滅ぼそうとしかけている。しかし俺は彼らのうちに、われわれの思想行為の宝の一つたるべき者らがあることを、知らないではない。この民族のうちには、まだ偉大なものがあることを、俺は知っている。彼らの多くがもっている、献身の力、傲慢ごうまんなる冷静、最善にたいする愛と欲求、不撓ふたうの精力、世に隠れたる執拗しつような労苦、それらをことごとく俺は知っている。彼らのうちに

一つの神があることを、俺は知っている。それゆえに俺は、その神を否定した奴らを、墮落的な成功と卑しい幸福とのために、彼ら民衆の運動を裏切る奴らを、憎んでいるのだ。そういう奴らを攻撃するのは、奴らに対抗して彼ら民衆の味方をするようになるのだ。腐敗したフランス人どもを攻撃することによって、フランスを保護するのと、ちょうど同じことだ。

予 おい、お前は自分と無関係なことに干渉してるといふものだ。スガナレルの細君のことを思い出すがいい。やたらに打たれるようなことばかりしたがったじゃないか。「木と指との間に……。」イスラエルの問題は、われわれに関したことじゃない。そしてフランスの問題の方は、フランスはマルティーンのようなもので、やりこめられようと平気だ。しかしやりこめられたと人に言われることを許さない。

クリストフ それでも、真実を言つてきかせる必要がある、真実を愛すれば愛するほどなおさらだ。俺でなけりや、だれが真実を言う者があるか。——お前も駄目だ。お前たちは皆、社会的関係、礼儀、配慮、などで相互に束縛されている。ところが俺は、なんらの束縛もないし、お前たちの仲間じゃない。お前たちの徒党のいずれにも属したことはないし、議論のいずれにも加わったことはない。お前たちと合唱しなければならぬ訳

もなければ、お前たちと沈黙を共にしなければならぬ訳もない。

予　お前は外国人だ。

クリストフ　そうだ、ドイツの音楽家には、お前たちを批判する権利もなければ、お前たちを理解することもできないと、人は言うかもしれない。——よろしい、俺の方が間違つてるとしてみよう。しかし少なくとも、俺ともにお前も知っている外国のある偉い人々が——過去および現在の最も偉い人々が——お前たちのことをどう考えているか、それを俺は言つてやろう。たとい彼らが間違つてるとしても、彼らの思想は知るだけの価値がある。そしてお前たちに役だつかもしれない。いつもやるとおり、万人から賞賛されてると思い込んだり、自賛したり自卑したり——代わる代わるそんなことをするよりも、その方がやはりいいだろう。流行でもあるように、その時々々の発作に駆られて、俺たちは世界最大の民衆だと叫び、——または、ラテン民族の頽^た廢^{はい}は救うべからざるものだと叫び、——あらゆる大思想はフランスから来ると叫び、——または、俺たちはもはやヨーロッパの慰みになるばかりだと叫んで、それがなんの役にたつか。身をかじつて病弊に眼を閉じないこと、民族の生命と名誉とのために戦うという感情から、圧倒されずにかえつて激発されること、それが肝要だ。滅亡を欲しないこの民族の身体に

はめ込まれてる魂を感じた者は、その悪徳と滑稽な点とを撲滅せんがため——ことにそれらを利用しそれらによつて生きんとする奴らを撲滅せんがために、大胆にそれらを抉^{けつ}発^{ぱつ}して構わないのだ、抉^{けつ}発^{ぱつ}しなければならぬのだ。

予 たといフランスを保護せんがためにもせよ、フランスに手を触るるな。お前は善良な人々の心を乱すだろう。

クリストフ 善良な人々——と言えばまあそうだ——人が万事をごく結構だと思わないのを、多くの悲しい醜い事柄を人から示されるのを、苦に病んでいる善良な人々！ 彼ら自身こそ利用されているのだ。しかしそうだとは認めたくないのだ。他人のうちに悪を見て取るのが非常に心苦しいものだから、むしろみずから悪の犠牲となる方を好んでいる。少なくとも日に一度は、人からくりかえし説いてもらいたがっている、この最良の国民中ではすべてが正しい方向に向かっていると、また、

「……おうフランスよ、汝は永^{なが}く最上なるべし……」

と。それを聞くと善良な人々は安心して、また眠りにつく——そして他の奴らは、また勝

手なことをやりだすのだ。……善良なみごとな人々だ！ 俺は彼らに心配をかけた。これからもなおさら心配をかけるだろう。彼らに許しを願っておく。……しかしながら、圧制者らに対抗して助けてもらうことを、彼らがたとい欲しないまでも、せめてこれだけは彼らに考えてほしい、彼らと同じように圧制されながら、彼らのような忍従と幻想の力をもたない者が——またその忍従と幻想の力によってかえって圧制者らの手に渡されてる者が、いくらもあるということ。そういう人々はいかに苦しんでいることだろう！ お前も考えてみるがいい。いかにわれわれは苦しんだか！ そしてまた、ますます重苦しい空気が、腐敗した芸術が、不道徳な卑しい政治が、満足の笑みを浮かべて虚無の息吹きに身を任せる柔懦な思想が、日に日に積もってゆくのを見て、われわれとともにいかに多くの者が苦しんだか……。われわれはたがいに寄り添い、呼吸もできなほほど苦しみなから、そういう中にじっとしていたのだ……。ああ、幾何の辛い年月をいっしょに過ごしてきたことだろう！ わが権力者らは、彼らの下にわれわれの青春がもだえた苦悩を、夢にも知らないのだ……。われわれは抵抗した。われわれはみずから身を救った……。そして、今、われわれは他人を救わないでいいだろうか。こんどは他人が同じ苦しみのうちに陥つてるのを、手を差し出してもやらずに放っておいて

いいだろうか。否、彼らの運命とわれわれの運命とは結び合わされている。われわれの仲間はフランスにたくさんいる。彼らは俺が声高く説くところのことを考えてくれる。

俺は彼らのために説くつもりなのだ。やがて俺は彼らのことを口にするだろう。俺は早く示してやりたい、真のフランスを、圧制されたるフランスを、深きフランスを——ユダヤ人、キリスト教徒、あらゆる信仰と血統とを超越した自由な魂を。——しかしながら、そこに達するためには、家の扉とびらを番してる奴らの間に一条の血路を、まず開かなければならない。無気力の状態から奮いたつてついに牢獄ろうごくの壁を覆くつがえすことを、この美しい捕虜ほりよにできさしてやりたい！ 彼はおのれの力をも敵の凡庸ぼんようさをも知らないのだ。

予 お前の言うところはもつともだ。しかしお前が何をしようとも、憎むことだけは控えるがいい。

クリストフ 俺はなんらの憎悪ぞうおをもいだいてはしない。最も悪い奴らのことを考える時でさえ、奴らもやはり人間であつて、われわれと同じく苦しんでおり、いつかは死んでゆくのだということを、俺はよく知っている。しかし奴らと闘たたかわなければならぬのだ。

予 闘うことは、それがたとい善をなさんがためのものにせよ、悪をなすことなのだ。生きた一人の人間にでも苦痛を与えることがあるならば、その苦痛は、「芸術」——もし

くは「人類」、などという美わしい偶像になさんとする善によつて、償い得るものだろうか？

クリストフ お前がそういうふうを考えるならば、芸術を見捨てるがいい、そして俺をも見捨てるがいい。

予 いや、俺を見放すな。お前がいなかったら、俺はどうなるだろう？——しかし、平和はいつ来るのか。

クリストフ 獲得された時に来る。じきだ……じきだ……。頭の上をもう春の燕つばめが飛んでるのを、ながめてみる。

(よろこびの季節告ぐる美わし燕

来るを吾見ぬ。)

クリストフ 夢想にふけるな。手を引いてやるから、来るがいい。

予 やむをえない、お前についてゆこう、俺の影よ。

クリストフ 俺たち二人のうちで、どちらが影なんだ？

予 お前はほんとうに大きくなった。見違えるくらいだ。

クリストフ 太陽が傾いてきた。

La bel' A-ron - de, mi - sa - ge - re de la gay - e sai - zon
Est ve - nue, je l'ay veue...

予 俺はお前の子どもの方の方が好きだった。
クリストフ 行こう！ もう昼間は数時間しかない。

一九〇八年三月

ロマン・ローラン

秩序のうちの混乱。だらしのないぞんぎいな鉄道駅員。規則に服従しながら規則に抗言する乗客。——クリストフはフランスにはいった。

税関吏の好奇心を満足させた後、彼はパリー行きの列車に乗った。夜の闇は雨に濡れた野を覆うていた。駅々の荒い燈火は、闇に埋もれてる涯しない平野の寂しさを、さらに侘びしくてらし出していた。行き違う列車はますます数多くなつて、その汽笛で空気をつんざぎ、うとうとしてる乗客の眠りを覚まさした。もうパリーに近づいていた。

到着する一時間も前から、クリストフは降りる用意をしていた。帽子を眼深に被つた。パリーにはたくさんいると聞いていた盗人を気づかつて、首のところまで服のボタンをかけた。幾度も立ったりすわつたりした。網棚と腰掛とに幾度もかばんを置き代えた。そのたびごとにいつもの無器用さから、隣席の客にぶつかつてはその機嫌を損じていた。

停車場へはいりかけたとたんに、汽車は突然闇の中に止まった。クリストフは窓ガラス

に顔を押しつけて、外を見ようとしたが何も見えなかった。彼は同乗客の方をふり向いて、話をしかけてもよさそうな、今どこだかということを尋ねてもよさそうな、眼つきを一つ捜し求めた。しかし彼らは不機嫌な退屈そうな様子で、うとうとしてゐるか、あるいはそういうふうを装つていた。^{よそお}停車の理由を知ろうと身動きする者もいなかった。クリストフはその不活発さに驚いた。それらの傲岸^{ごうがん}冷静な人々は、彼が想像していたフランス人とは非常に違つていた。彼は汽車の揺れるたびによるめきながら、ついにかっかりしてかばんの上に腰をおろした。そしてこんどは自分がうとうとしてゐると、車室の扉^{とびら}が開く音に眼を覚ました……。パリーだ！……。隣席の人々は降りかけていた。

彼は人込みに押しつたり押されたりしながら、また、荷物をもとうと進み出る赤帽をしりぞけながら、出口の方へ進んでいった。田舎者^{いなか}のように疑い深くなつていて、自分の品を盗もうとしてゐる者ばかりのように考えられた。たいせつなかばんを肩にかついで、小言^{ここと}をくつても平気で人込みを押し分けながら、ずんずん歩いていった。そしてついに、パリーのねばねばした舗石路の上に出た。

彼は自分の荷物のことや、これから選定する住居のことや、馬車の混雑の中に巻き込まれたことなどに、あまり気を取られていたから、何も見ようとは考えなかった。まず第一

の仕事は、室を捜すことだった。旅館は不足していなかった。停車場の四方に立ち並んで、その名前がガス文字になって輝いていた。クリストフはなるべく光の薄いのを捜した。しかしどれも、彼の財布に適するほど下等ではなさそうだった。ついに彼はある横丁で、一階が飲食店になつて汚きたない宿屋を見つけた。文明館という名だった。チョッキだけのつぶりした男が、一つのテーブルでパイプを吹かしていた。クリストフがはいつて来るのを見ると、その男は駆け寄つてきた。彼はクリストフの下手へたな言葉が少しもわからなかつた。しかし一目見て、頓馬とんまな世慣れないドイツ人だと判断した。クリストフは彼に荷物を渡すのを拒んで、まるでなつていない言葉で意味を伝えようとしていた。彼はクリストフを案内して、臭い階段を通り、中庭に面してる風通しの悪い室へ通した。外の響きが達しない静かな室であることを自慢して、高い宿料を要求した。クリストフは、向こうの言うことがよくわからなかつたし、パリーの生活状態を知らなかつたし、肩は荷物で碎けそうになつていたので、すべてを承諾した。早く一人になりたかつた。しかし一人になるや否や、物品の汚なさにびつくりした。そして、心に湧わき上がってくる悲しみにふけらないため、にちやにちやする埃ほこりだらけの水に頭をひたしてから、急いで外に出かけた。嫌いやな気持ちからのがれるために、何にも見も感じもすまいとつとめた。

彼は街路へ降りた。十月の霧は濃く冷やかだった。霧の中には、郊外の諸工場の悪臭と都会の重々しい息とが混和してる、パリーの嫌な匂においがこもっていた。十歩先はもう見えなかった。ガス燈の光は、消えかかった蝟燭ろうそくの火のように震えていた。薄暗い中を群集が、ごたごたこみ合つて動いていた。馬車が行き違いぶつかり合つて、堤防のように通路をふさぎ交通をせき止めていた。馬は凍こつた泥どろの上を滑すべっていた。御者のののしる声、らっぱの響かき、電車の鉦かねの音が、耳を聳ろうするばかりの喧騒けんそうをなしていた。その音響、その動乱、その臭氣に、クリストフはつかみ取られた。彼はちよつと立ち止まったが、すぐに、あとから来る人々に押され、流れに運ばれていった。ストラスブル大通りを下りながら、何にも眼にはいらず、へまに行人人へぶつかつてばかりいた。彼は朝から物を食べていなかった。一步ごとに珈琲店カフェーへ出会つたが、中に立て込んでる群集を見ては、氣後きわくれがし嫌な心地になった。彼は巡查に尋ねかけた。しかし言葉を考え出すのにぐずぐずしていたので、巡查は終わりまで聞いてもくれずに、話の途中で肩をそびやかしながら向こうを向いた。クリストフは機械的に歩きつづけた。ある店先に人だかりがしていた。彼も機械的に同じく立ち止まった。それは写真や絵葉書の店だった。シャツ一枚のやまたはシャツもつけない女どもの姿が出ていた。絵入新聞には猥褻わいせつな冗談が並んでいた。子どもや若い婦

人らが平気でそれをながめていた。赤毛の瘦せた娘が、クリストフが見入っているのを見て、いろいろ申し込んできた。彼は意味がわからなくて彼女をながめた。彼女は愚かな微笑を見せて彼の腕を取った。彼は真赤に憤つて、彼女を振り離して遠ざかった。酒亭がつづいていた。その入口には、奇怪な道化の広告が並んでいた。群集はますます立て込んできた。不徳そうな顔つき、いかがわしい漫歩者、卑しい賤民、白粉をぬりたてた嫌な匂いの女、などがあまり多いのにクリストフは驚いた。彼はぞつとした。疲労や無気力や恐ろしい嫌悪に、ますますしめつけられて、眩暈がしてきた。彼は齒をくいしばって足を早めた。セーヌ河に近づくに従つて、霧はさらに濃くなってきた。馬車は抜け出せないほど輻輳してきた。一頭の馬が滑つて横に倒れた。御者はそれを立たせようとやたらに鞭打つた。不幸な動物は、革紐にしめつけられて振るいたったが、痛ましくもまた下に倒れて、死んだようにじつと横たわつた。このありふれた光景もクリストフにとっては、もうたまらなくなる最後の打撃だった。無関心な衆目環視の中におけるこの惨めな動物の痙攣は、それら無数の人々の間にある自分自身のむなしさを、非常な苦しきで彼に感じさせたので、——また、家畜の群れのごときその群集にたいして、その汚れたる雰囲気にたいして、その悪むべき精神状態にたいして、彼が一時間以来押えようとつとめていた嫌

悪の情が、非常な激しきで破裂してきたので、彼は息がつけなくなつた。彼は^{きよき}獻^げの発作に襲われた。通行人らは、悲しみに顔をひきつらしてこの大きな青年を、驚いてながめていった。彼は涙が^{ほお}頬に流れても、拭^{ぬぐ}おうともせずに歩きつづけた。人々はちよつと立ち止まつて彼を見送つた。彼がもし、敵意あるように思われるその群集の魂の中を、読み取ることができるのであつたら、一つの親しい同情の念を——パリー人特有の皮肉が多少交つてはいたろうけれど——ある人々のうちにおそらく見出し得たであらう。しかし彼はもう何にも見ていながつた。涙のために眼がくらんでいた。

彼はある広場の大きな泉のそばに出た。彼はその中に手をつけ顔を浸した。一人の新聞売りの小僧が^{ちようろう}嘲^{ちやうろう}弄^{ろう}的^{てき}ではあるが悪意はない気持で、彼の^{しわざ}仕業^{しわざ}を不思議そうにながめていた。そしてクリストフが落としてる帽子を拾つてくれた。水の凍るような冷たさに、クリストフはまた元気を得た。彼の気分は直つた。彼は何にも見ないようにして足を返した。もう食することも考えてはいながつた。だれにも話しかけることができないほどだつた。ちよつとしたことにもまた涙が流れそうだつた。彼は疲れはてていた。道を間違えて、やたらに歩き回り、ほんとに迷つてしまつたと思つてるとたんに、宿屋の前へ出た。——彼は宿屋の町名まで忘れてしまつていた。

彼は自分の汚ない住居へもどった。一日食事をしなかつたので、眼は燃えるようになり、心も身体も弱りきつていて、室の隅の椅子すみ いすにがつくりと腰をおろした。二時間もそのままで身動きができなかつた。ついに自失の状態からむりに身をもぎ離して、床についた。熱っぽい無感覚のうちに落ちて、幾時間も眠つたような気がしながらたえず眼を覚ました。室は息苦しかった。彼は足先から頭まで焼けるようだった。恐ろしく喉のどが渴かわいていた。馬ば鹿かげた悪夢にとらえられて、眼を開いてる時でもそれにつきまとわれた。鋭い悩みがナイフで刺されるように身にしみた。真夜中に眼を覚まし、残忍な絶望の念に襲われて、喚わめきたてようとした。その声を人に聞かれないようにと、夜具を口にいっぱい押し込んだ。狂人になるかと思われた。彼は寢床にすわって燈火をつけた。ぐっしより汗をかいていた。彼は立ち上がって、かばんを開き、ハンカチを捜した。手は古い聖バイブル書にさわった。母がシャツの間に隠しておいてくれたものである。クリストフはこの書物をあまり読んだことがなかつた。しかしただいまそれを見出して、なんとも言えない嬉うれしさを感じた。この聖書は祖父のものであり、また曾祖父そうそふのものでもあった。家長たちがそれぞれ、最後の一枚の白紙へ、自分の名前と、生しょうがい涯がいの重要な日付、誕生や結婚や死亡などを、書き込んでいた。祖父は鉛筆の大きな字体で、各章を読んだり読み返したりした日付を、書き入れて

いた。黄ばんだ紙片がいつぱい挿はさんであつて、それには老人の質しつぱく朴な感想がしるされて
いた。この聖書は祖父の寝台の上の方に、棚たなに乗せられていた。祖父は長く眠れない時し
ばしばそれを取つて、読むというよりはむしろ話し合つていた。それは曾祖父の友でもあ
つたが、また同じく、祖父の終生の伴はんりよ侶でもあつた。一家の悲喜哀樂の一世紀が、それ
から立ちのぼつていた。クリストフは今この書物といつしよにいと、いくらか孤独の感
が薄らいだ。

彼は最も痛ましいところを開いた。

それ人の世に在るは、絶えざる戦たたかい闘たたかひに在るがごとくならずや。またその日々は、
備やといびと人の日々のごとくならずや。……

我ふ臥ふせばすなわち言う、何時いつ我いつ起きいでんかと。起きぬれば夕を待ちかねつ。夜ま
で苦くるしき思いに満みてり。……

わが牀とこは我を慰なぐさめ、休やすらひ息はわが愁うれいを和ならげんと、我おぼ思おもいおる時に、汝は夢をも
て我を驚おどかし、異まぼろし象まぼろしをもて我を懼おそれしめたまう。……

何時いつまで汝我を容ゆるしたまわざるや。息をする間まだに与よえたまわざるや。我罪を犯し

たるか。我汝に何をなしたるか、おお人を護まもらせたまう者よ。……

すべては同じきに帰す。神は善と悪とを共に苦しめたまう。……

よしや我彼が御手に殺されるとも、我はなお、彼に希のぞみをかけざるを得ざるなり。

……

かかる無限の悲しみが不幸な者にたいしてなす恵みを、卑俗な心の人々は理解することができない。すべて偉大なるものは善良である。悲しみもその極度に達すれば、救済に到達する。人の魂を挫くじき悩まし根柢から破壊するものは、凡ほん庸なる悲しみや喜びである。

失われた快樂に別れを告げる力もなく、あらゆる卑劣な行ないをして新たな快樂を求めんとひそかにたくらむ、利己的な浅薄な苦しみである。クリストフは古い書物から立ちのぼる苛から辣らつな息吹いぶきに、元氣づけられた。シナイの風が、寂せき寞ぼくたる曠こう野やと力強い海との風が、瘴しょう癘れいの氣を吹き払った。クリストフの熱はとれた。彼はずっと安らかにふたたび床について、翌日まで一息に眠った。眼を覚ました時には、もう昼になっていた。室の醜みにくさがさらにはつきり眼についた。自分の惨めさと孤独さ感が感ぜられた。しかし彼はそれらをまともにながめやった。落胆は消えていた。もう男らしい憂ゆう鬱うつが残つてるのみだった。

彼はヨブの言葉をくり返した。

……

よしや我神の御手に殺さるるとも、我はなお、神に希のぞみをかけざるを得ざるなり。

彼は立ち上がった。そして泰然と戦闘を開始した。

彼はすぐその朝から、奔ほん走そうを始めようと決心した。パリーにはただ二人の知人があるばかりだった。二人とも同国の青年だった。一人は旧友のオットー・デーネルで、マイー町でラシャ商をしてる叔父おじの下に働いていた。一人はシルヴァン・コーンというマインツの若いユダヤ人で、ある大書店に雇われてるはずだった。しかし書店の所在地は不明だった。

彼は十四、五歳のころ、デーネルとたいへん親しかった（第二巻朝参照）。恋愛に先立つものでしかも恋愛をすでに含んでいる幼き友情を、彼はデーネルにたいしていだい

ていた。デーネルもまた彼を愛していた。この内気で几帳面な大子供は、クリストフの狂暴な独立不羈ふきぎの精神に魅せられてしまつて、滑稽こっけいなやり方でそれをまねようとつとめていた。クリストフはそれにいらだちもし得意でもあつた。そのころ彼らは、驚天動地の計画をたてていた。その後デーネルは、商業教育を受けるために旅行をした。それきり二人は再会もしなかつた。しかしクリストフは、デーネルが几帳面に交際をつづける土地の人々から、彼の消息を時々聞き知つていた。

シルヴァン・コーンとクリストフとの間は、まったく違つた関係だつた。二人は悪戯いたずらの盛りのころから、小学校で知り合つた。子猿こざるみたいなコーンはクリストフに悪戯をしかけた。クリストフはその窶おとしあなにかかつたのを知ると、ひどい返報をしてやつた。コーンは抵抗しなかつた。ころがされるままになつて、顔を塵ちりの中にこすりつけながら泣きまねをした。しかし彼はそのあとでまたすぐに、飽きもせず意地悪をやりだすのだった——ある日、殺してしまうぞとクリストフから本気におどかされて、恐ろしくなつてしまふまで。

さてクリストフは、早くに旅館から出かけた。途中で珈琲店カフェに立ち寄つて朝食をした。彼はその自尊心にもかかわらず、フランス語を話す機会を少しも失うまいと心がけた。おそらく幾年もパリーで生活しなければなるまいから、できるだけ早くその生活状態に順応

して、けんお嫌悪の情を克服しなければならなかつたのである。それで彼は、彼のめちな言葉
を聞いて給仕がボーイ嘲ちやうしやう笑的な様子をしたのを、ひどく気に病みながらも、強しいて平気でい
ようとつとめた。そして元氣を失わないで、なっていない文句を重々しく組み立てて、向
こうにわかるまで執拗しつようにくり返した。

彼はディーネルを捜し始めた。例によつて彼は、頭に一つの考えがあると、周囲のこと
は何一つ眼に止まらなかつた。初めて歩き回つてみると、パリイは古い乱雑な町であると
いう印象をしか得なかつた。彼は元来、一つの新しい力の驕きやうまん慢まんが漂つているのが感ぜ
られる、ごく古いとともにごく若いドイツ新帝国の町々に慣れていた。そして今パリイか
ら、不快な驚きを得た。横つ腹に穴のあいてる街路、泥どろだらけの通路、押し合つてる人混ひしご
み、入り乱れてる車——あらゆる形の乗り物があつて、古い乗合馬車、蒸汽車、電車、そ
の他各種の機関の車——歩道の上の露店、フロックコートをつけた人がいっぱい立ち並
ぶる広場には、いろんな木馬館（木馬というよりもむしろ、怪物であり化物であつた）。
普通選挙の恩恵に浴しながらも、古い賤せんみん民的な素質を脱しきらないでいる、中世都市の
遺物かと思われた。前日からの霧は、じめじめした細雨に変わっていた、もう十時過ぎな
のに、多くの店にはまだガス燈がついていた。

クリスマスはヴィクトール広場に接している街路の網目に迷い込んだ後、ようやくバ
ンク街の店を尋ねあてた。中にはいりながら彼は、長い薄暗い店の奥に、多くの店員に交
つて大^{おおこり}梱を並べてるデイナーの姿を、見かけたように思った。しかし少し近眼だった
ので、めったに誤ることのない直覺力をそなえてはいたが、視力には自信がなかった。迎
え出た店員に名前を告げると、奥の人々の間にちよつとざわめきが起こった。何かひそか
に相談し合った後、一人の若い男がその群れから出て来て、ドイツ語で言った。

「デイナーさんはお出かけになっています。」

「出かけましたって？ なかなか帰りませんか。」

「ええ、たぶん。出かけられたばかりですから。」

クリスマスはちよつと考えた。それから言った。

「構いません。待ちましょう。」

店員はびつくりして、急いでつけ加えた。

「二、三時間たたなければお帰りになりますまい。」

「なに、それくらいなんでもありません。」とクリスマスは平然と答えた。「私はパリー
でなんの用もありません。場合によっては一日待っていても平気です。」

若い店員はそれを冗談だと思つて茫然と彼をながめた。しかしクリストフはもうその男のことなんか考えていなかった。往來の方に背を向けて悠々と片隅にすわつた。そこに腰を落ち着けてしまふつもりはしかなかった。

店員は店の奥にもどつていつて、仲間の者らと耳打ちをした。彼らはおかしな狼狽の様子で、この邪魔者を追い払う方法を講じた。

不安な数分が過ぎてから、店の中扉が開いた。ディーネル氏が現われた。大きな赤ら顔で、頬と頤とに紫色の傷痕があり、赤い口髭を生やし、髪を平らになでつけて横の方で分け、金の鼻眼鏡をかけ、シャツの胸には金ボタンをつけ、太い指に指輪をはめていた。帽子と雨傘とを手にしていた。彼は何気ない様子でクリストフの方へやっていった。クリストフは椅子の上にぼんやりしていたが、驚いて飛び上がった。彼はディーネルの両手を取り、大仰な親しきで叫びだした。店員らは忍び笑いをし、ディーネルは顔を赤らめた。この堂々たる人物が、クリストフと昔の關係をふたたびつづけたくないと思つたのには、種々の理由があつた。彼は最初から威圧的な態度をしてクリストフを親しませないつもりだつた。しかしクリストフの眼つきを見るや否や、その面前では自分がふたたび小さな少年になつたような気がした。それが腹だたくもありませんかしくもあつた。彼は

急いで口早に言った。

「私の室に来ませんか。……その方がよく話しができていいでしょう。」

クリストフはそういう言葉のうちに、ディーネルの例の用心深さをまた見出した。しかし、その室にはいつて扉とびらを注意深く閉め切つても、ディーネルはなかなか彼に椅子いすをすすめようとしなかった。彼はつつ立つたまま、へまに重々しく弁解しだした。

「たいへん愉快です……私は出かけるところでした……皆はもう私が出かけたことと思つて……だが出かけなければならぬんです……ちよつとしか隙ひまがありません……さし迫つた面会の約束があるので……。」

クリストフは、店員が先刻嘘うそをついたことを悟り、その嘘は自分を追い払うためにディーネルとも相談されたものであることを悟つた。かつと血が頭に上つた。しかし我慢をして冷やかに言った。

「何も急がなくていいよ。」

ディーネルは身体をぎくりとさした。そういう無遠慮しやくが癪やくにさわつたのだつた。

「なに、急がなくてもいいつて！」と彼は言った。「用があるのに……。」
クリストフは相手をまともにながめた。

「なあに。」

大きな青年は眼を伏せた。彼はクリストフにたいして自分がいかにも卑怯ひきようだという気がしたので、クリストフを憎んだ。そして不機嫌ふきげんそうにつぶやきだした。クリストフはそれをさえぎった。

「こうなんだ、」と彼は言った、「君も知ってるだろう……。」

（この君というような言葉使いにディーネルは気を悪くしていた。彼は最初の一言から、クリストフとの間にあなたという垣根かきねをこしらえようと、いたずらに努力していた。）

「僕がこちらへやって来た訳を。」

「ええ、知っている。」とディーネルは言った。

（クリストフの逃亡とその追跡とを、彼は通信によって知っていた。）

「それでは、」とクリストフは言った、「僕が遊びに来たのでないことも知ってるだろう。僕は逃げなきゃならなかったんだ。ところが今無一物なんだ。生活しなくちゃならないんだ。」

ディーネルは要求を待っていた。そしてその要求を、満足と困却との交った気持で聞いた——（なぜなら、クリストフにたいする優越感を得られるので満足だったが、その優越

感を思うまま相手に感じさせかねたので困却した。」

「ああ、それは困ったな、」と彼はもつたいぶつて言った、「実に困った。こちらでは生活が容易じゃない。万事高い。僕のところでも何かと入費が多い。そしてあの店員全部が……。」

クリストフは軽蔑の様子でそれをさえぎった。

「僕は君に金銭を求めやしないよ。」

デーネルは狼狽した。クリストフはつづけて言った。

「景気はどうだい？ 得意があるかね。」

「ああ、ああ、悪くはない、おかげさまで……。」とデーネルは用心深く言った。（彼は半信半疑だった。）

クリストフは激しい眼つきを注いで、言い進んだ。

「君はドイツの移住者をたくさん知ってるかい？」

「ああ。」

「では、僕のことを吹聴してくれたまえ。皆音楽は好きはずだ。子供があるだろう。僕は稽古をしてやるつもりだ。」

デーネルは当惑の様子をした。

「何かあるのかい。」とクリストフは言った。「そんなことをするくらいには十分僕に音楽の心得があるのかい。」とクリストフは言った。「そんなことをするくらいには十分僕に音楽の心得があるのかい。」「君は疑ってでもいるのかい。」

彼はあたかも自分の方で世話してやるかのような調子で、世話を求めているのだった。デーネルは、向こうに恩を感じさせる喜びのためにしか何かをしてやりたくなかったので、もう彼のためには指一本も動かしてやるものかと思っていた。

「君はそれには十分すぎるほど音楽を心得てはいるが……ただ……。」

「なんだい？」

「それはむずかしいよ、たいへん困難だよ、ねえ、君の境遇では。」

「僕の境遇？」

「そうだ……つまりあの事件が、あの表沙汰ざたが……もしあれが知れ渡ると……僕にはどうも困難だ。いろいろ掛り合いを受けることになるかもしれない。」

彼はクリストフの顔が怒りにゆがんでくるのを見て言いやめた。そして急いで言い添えた。

「僕のことじゃない……僕は恐れはしない……。ああ、僕一人だけだったら……叔父おじが

いるのでね……君も知つてるとおり、この家は叔父のものなんだ。叔父に言わなけりや僕には何にもできない……。」

彼はクリストフの顔つきと今にも破裂しそうなその様子とにますます脅かされて、あわてて言いだした——（彼は根は悪い男ではなかった。吝りんしよくと見栄とが彼のうちで争っていた。クリストフに恵んでやりたくはあつたが、なるべく安価に済ましたかった。）

「五十フランばかりでどうだい。」

クリストフは真赤まつかになつた。恐ろしい様子でディーネルの方へ歩み寄つた。ディーネルは急いで扉とびらのところまでさがり、それを開いて、人を呼ぼうとした。しかしクリストフは、充血した顔を彼にさしつけただけで我慢した。

「豚め！」と彼は鳴り響く声で言った。

彼はディーネルを押しつけ、店員らの間を通つて、外に出た。敷居けんおのところで、唾つばをかつと吐いた。

彼は街路を大跨おおまたに歩いていった。怒りに酔っていた。その酔いも雨に覺さまされた。どこへ行くのか？ それを彼は知らなかつた。知人は一人もなかつた。考えようと思つて、

ある書店の前に立ち止まった。そして柵たなの書物を、見るともなくながめた。ある書物の表紙に、出版屋の名前を見てはつとした。なぜだかみずからいぶかった。やがて彼は、シルヴァン・コーンの雇われてる書店の名であることを思い出した。彼は所番地を書き取った。……しかしそれが何になるう？ もとより尋ねてなんか行くものか……。なぜって？……友人だったあのディーネルの奴やつでさえ、ああいう待遇をしたところを見ると、昔さんざんいじめられて憎んでるに違いない此奴こいつから、何が期待されよう？ 無駄むだに屈辱を受けるばかりではないか。彼の血潮は反発していた。——しかしながら、おそらくキリスト教教育から来たらしい、先天的悲観主義の気質のために、彼は人間の賤いやしさをどん底まで感じてみようとした。「俺おれは遠慮する必要はない。くたばるまではなんでもやってみなけりやいけない。」

一つの声が彼のうちで言い添えた。

「そして、くたばるものか。」

彼はふたたび所番地を確かめた。そしてコーンのところへやって行つた。少しでも横おうへ柄いな態度に出たら、すぐにその顔を張りつけてやる決心だった。

書店はマドレーヌ町にあつた。クリストフは二階の客間に上がって、シルヴァン・コー

ンを尋ねた。給仕が、「知らない」と答えた。クリストフはびっくりして発音が悪かったのだと思い、問いをくり返した。しかし給仕は、注意深く耳を傾けた後、家にそんな名前の者はいないと断言した。クリストフは面くらつて、詫^わびを言い、出かけようとした。その時廊下の奥の扉^{とびら}が開いた。見ると、コーンが一人の婦人を送り出していた。ちようど彼はディーネルから侮^{ぶへつ}蔑を受けたばかりのところだったので、皆が自分を馬鹿にしているのだと思いがちだった。それで、コーンは自分が来るのを見て、いないと言えと給仕に言いつけたのだと、彼は真^{まっ}先^{さき}に考えた。そんな浅はかなやり方に、堪えられなかった。そして憤然と帰りかけた。すると呼ばれてる声^{こゑ}が耳にはいった。コーンは鋭い眼つきで、遠くから彼を認めたのだ。そして唇^{くちびる}に笑いをたたえ、両手を広げ、大袈裟^{おおげさ}な喜びをありつたけ示して、駆け寄ってきた。

シルヴァン・コーンは、背の低い太った男で、アメリカ風にすっかり髭^{ひげ}を剃^そり、赤すぎる顔色、黒すぎる髪、広い厚ぼったい顔つき、脂^{あぶら}ぎった顔だち、皺^{しわ}寄った穿^{せん}鑿^{さく}的な小さい眼、少しゆがんだ口、重々しい意地悪げな微笑をもっていた。華^き奢^{やしや}な服装をして、身体の欠点を、高い肩や大きい臀^{しり}を、隠そうとつとめていた。そういう欠点こそ、彼の自尊心をなやます唯一のものだった。身長がもう二、三寸も伸びて身体つきがよくなることな

ら、後ろから足蹴あしげにされてもいとわなかつたろう。その他の事においては、彼は自分自身にしごく満足していた。自分に敵かたう者はないと思つていた。実際すてきな男だった。ドイツ生まれの小さなユダヤ人でありながら、のろまな太つちよでありながら、パリーの優雅な風俗の記者となり絶対批判者となつていた。社交界のつまらない噂うわさ種たねを、複雑な巧妙をきわめた筆致で書いていた。フランスの美文体、フランスの優美、フランスの嬌きょう艶えん、フランスの精神——摂政時代の風俗、赤あか踵かかとの靴くつ、ローザン式の人物——などの花形だった。彼は人から冷やかされていたが、それも成功の妨げにはならなかつた。パリ—では滑稽こっけいは身の破滅だと言う人々は、少しもパリ—を知らない輩やからである。身の破滅どころか、かえつてそのために生き上がつてゐる者がいる。パリ—では、滑稽によつてすべてが得られる、光栄をも幸運をも得られる。シルヴァン・コーンは、そのフランクフルト式な虚飾のために毎日かれこれ言われても、もはやそんなことは平氣だった。

彼は重々しい調子と頭のとつぺんから出る声とで口をきいていた。

「やあ、これは驚いた！」と彼は快活に叫びながら、あまり狭い皮膚の中につめこまれてるかと思われる指の短いぎこちない手で、クリストフの手を取つて打ち振つた。なかなかクリストフを放しそうになかつた。最も親しい友人にめぐり会つたような調子だった。ク

リストフはあつけにとられて、コーンから^{からか}揶揄^{からか}われているのではないかと疑った。しかしコーンは揶揄^{からか}つてるのではなかった。なおよく言えば、もし揶揄^{からか}つてるのだとしてもそれはいつもの伝にすぎなかった。コーンは少しも恨みを含んではいなかった。恨みを含むにはあまりに利口だった。リストフからいじめられたことなんかは、もう久しい以前に忘れてしまっていた。もし思い出したとしてもほとんど気にしなかつたろう。新しい重大な職業を帯びパリー風の華美な様子をしているところを、旧友に見せてやる機会を得て大喜びだった。驚いたと言うのも嘘ではなかった。リストフが訪れて来ようなどは、最も思いがけないことだった。彼はきわめて^{けいがん}炯眼^{けいがん}だったので、リストフの訪問には一つの利害関係の目的があることを予見してはいたが、それは自分の力にささげられた敬意だという一事だけで、すでに喜んで迎えてやる気になったのである。

「国から来たのかい。お母^{かあ}さんはどうだい。」と彼は馴^なれ馴^なれしく尋ねた。他の時だったらそれはリストフの気にさわったかもしれないが、しかし他国の都にいる今では、かえってうれしい感じを与えた。

「だがいったいどうしたんだろう。」とリストフはまだ多少疑念をいだいて尋ねた、
「先刻コーンさんという人はいないという返辞だったが。」

「コーンさんはいないよ。」とシルヴァン・コーンは笑いながら言った。「僕はコーンとはいわないんだ。ハミルトンというんだ。」

彼は言葉を切った。

「ちよつと失敬。」と彼は言った。

彼は通りかかった一人の婦人の方へ行つて、握手をして、笑顔を見せた。それからまたもどつて来た。そして、あれは激しい肉感的な小説で有名になった閨秀作家だと説明した。その近代のサフォーは、胸に紫色の飾りをつけ、種々の模様をちらし、真白に塗られたた快活な顔の上に、艶のいい金髪を束ねていた。フランシユ・コンテの訛りがある男らしい声で、気障なことを言いたてていた。

コーンはまたクリストフに種々尋ねだした。国の人たちのことを残らず尋ね、だれだれはどうなったかと聞き、すべての人を記憶していることを追従的に示していた。クリストフはもう反感を忘れてしまっていた。感謝を交えた懇切な態度で答え、コーンにとつてはまったく無関係な些細な事柄をやたらに述べた。コーンはそれをふたたびさえぎった。

「ちよつと失敬。」と彼はまた言った。

そして他の婦人客へ挨拶に行つた。

「ああそれじゃあ、」とクリストフは尋ねた、「フランスには婦人の作家ばかりなのか。」
 コーンは笑い出した。そしてしたり顔に言った。

「フランスは女だよ、君。君がもし成功したけりや、女を利用するんだね。」

クリストフはその説明に耳を貸さないうで、自分だけの話をつづけた。コーンはそれをやめさせるために尋ねた。

「だが、いったいどうして君はこちらへ来たんだい。」

「なるほど、」とクリストフは考えた、「この男は何にも知らないんだな。だからこんなに親切なんだ。知ったらがらりと変わってしまうだろう。」

彼は昂然こうぜんと語りだした、自分を最も難境に陥らせるかもしれない事柄を、すなわち、兵士らとの喧嘩けんか、自分が受けた追跡、国外への逃亡などを。

コーンは腹をかかえて笑った。

「すてきだ」と彼は叫んでいた、「すてきだ！ 実に愉快な話だ！」

彼は熱心にクリストフの手を握りしめた。官憲の鼻をあかしてやったその話を、この上もなく面白がっていた。話の主人公らを知っているだけになお面白がっていた。その滑こっけな方面を眼に見るような気がしていた。

「ところで、」と彼はつづけて言った、「もう午過ぎだ。つき合ってくれたまえ……いっしよに食事をしよう。」

クリストフはありがたく承知した。彼はこう考えていた。

「これは確かにいい人物だ。俺の思い違いだった。」

二人はいっしよに出かけた。途中でクリストフは思い切って要件をもち出した。

「君にはもう僕の境遇がわかっているだろう。僕は世に知られるまで、さしあたり仕事を、音楽教授の口でも、求めに来たんだが。僕を推薦してくれないかね。」

「いいとも！」とコーンは言った。「望みどおりの人に推薦しよう。こちらで僕はだれでも知っている。なんでもお役にたとう。」

彼は自分のもっている信用を示すのがうれしかった。

クリストフは感謝にくれた。心から大きな重荷が取れた心地がした。

食卓につくと彼は、二日も前から物を食べなかつたかのようにむさぼり食った。首のまわりにナフキンを結えつけて、ナイフですぐ食べた。コーンのハミルトンは、そのひどい食い方や田舎者めいた様子に、ごく不快を感じた。また自慢にしてる事柄をあまり注意しなくてもくれないことに、同じく不満を覚えた。彼は自分の艶福や幸運の話をして、相手を

煙に巻いてやろうとした。しかしそれは無駄な骨折りだった。クリストフは耳を傾けないで、無遠慮に話をさえぎった。彼は舌がほどけてきて馴れ馴れしくなっていた。謝恩の念で心がいつぱいになっていた。そして未来の抱負を率直にうち明けながら、コーンを困らした。ことに、テーブルの上から無理にコーンの手を取って、心こめて握りしめたので、コーンをさらにやきもきさせた。しまいには、感傷的なことを言い出して、故国にいる人々や父なるラインのために、ドイツ流の祝杯を挙げたがったので、コーンのいらだちは極度に達した。コーンは彼が今にも歌い出そうとするのを見てたまらなくなった。隣席の人々は二人の方を皮肉そうにながめていた。コーンは急な用務があるという口実を設けて立ち上がった。クリストフはそれにすがりついた。いつ推薦状をもらって、その家へやって行き、稽古を始めることができるか、それを知りたがった。

「取り計らってあげよう。今日、今晚にでも。」とコーンは約束した。「すぐに話をしてみよう。安心したまえ。」

クリストフは執拗だった。

「いつわかるだろう?」

「明日……明日……または明後日。」

「結構だ。明日また来よう。」

「いやいや、」とコーンは急いで言った、「僕の方から知らせよう。君を煩わさないように。」

「なあに、煩すも何もあるものか。そうだろう。それまで僕は、パリーで何にも用はないんだ。」

「おやおや！」とコーンは考えた。そして大声に言い出した。「いや、手紙を上げる方がいい。しばらくは面会ができないかもしれない。宿所を知らしてくれたまえ。」

クリストフは宿所を彼に書き取らした。

「よろしい。明日手紙を上げよう。」

「明日？」

「明日だ。間違いないよ。」

彼はクリストフの握手からのがれて逃げ出した。

「あああ！」と彼は思っていた。「たまらない奴だ。」

彼は店に帰ると、「あのドイツ人」が尋ねて来たら留守にするんだと、給仕に言いつけた。——十分もたつと、もうクリストフのことは忘れてしまった。

クリストフは汚きたない巢へもどった。心動かされていた。

「親切な男だ！」と彼は思っていた。「俺は彼にたいして悪いことをしたことがある。だが彼は俺を恨んでもいない！」

そういう悔恨の念が重く心にかかった。昔悪く思ったことが今いかに心苦しいか、昔ひどく当たったことを許してもらいたいと今どんなに思ってるか、コーンへ書き送ろうとした。昔のことを思うと眼に涙が湧わいてきた。しかし彼にとつては、一通の手紙を書くのは、大譜表を書くに劣らないほどの大仕事だった。そして、宿屋のインキやペンを、それは実際ひどいものではあったが、盛んにのしり散らした後、四、五枚の紙を書きなぐり消し、たくり引き裂いた後、もう我慢ができなくなつてすべてを放ほうり出した。

その日の残りの時間はなかなか過ぎなかつた。しかしクリストフは、寝苦しい昨晚と午前中の奔走とにひどく疲れていたので、椅子いすにかけたままついとうとうとした。夕方よいうやくわれに返つて、すぐに寢床についた。そして十二時間ぶつとおしにぐつすり眠つた。

翌日八時ごろから、彼は約束の返事を待ち始めた。彼はコーンの几帳面きちょうめんさを少しも疑わなかつた。コーンが店へ出る前にこの宿へ寄るかもしれないと思つて、一步も外に踏み

出さなかつた。午ひるごろになると、室をあけないために、下の飲食店から朝食を取り寄せた。それから、コーンが食事後にやって来るだろうと思つて、ふたたび待つてみた。室の中を歩き、腰をおろし、また歩き出し、階段を上つてくる足音が聞こえると、扉とびらを開いてみたりした。待ち遠しさをまぎらすためにパリーのうちを散歩してみる気も、さらに起こらなかつた。彼は寢台の上に横たわつた。思ひはたえず老母の方へ向いていつた。彼女もまたこの時彼のことを思つていたので——彼のことを思つてくれるのは彼女だけだつたのだ。彼は彼女にたいして、限らない愛情と見捨てた悔恨とを感じた。しかし手紙は出さなかつた。どういう地位を見出したか知らせ得るまで待つことにした。二人はたがい深い愛情をいだいていたにもかかわらず、愛してることだけを単に告げるような手紙を書くことは、どちらも考えていなかつたに違いない。手紙というものは、はつきりした事柄を告げるためのものであつた。——彼は寢台の上に寝そべり、頭の下に両手を組んで、ぼんやり考え込んだ。室は往来から隔たつてはいたけれど、静けさのうちにはパリーのどよめきもこもつていた。家は揺れていた。——また夜となつたが、手紙は来なかつた。

前日と同じような一日が、また始まつた。

三日目になつて、クリストフは好んで蟄ちつきよ居してゐたのが腹だたく思えて、外出しよ

うと決心した。しかしパリには、最初の晩以来、一種の本能的な嫌氣いやけを覚えていた。彼は何にも見たくなかった。なんらの好奇心も起こらなかつた。自分の生活にあまり心を奪われていたので、他人の生活を見ても面白くなかつた。過去の記念物にも、都会の塔碑にも、心ひかれなかつた。それで彼は、一週間以内にはコーンの許もとへ行くまいときめていたものの、外へ出るや否や非常に退屈して、まっすぐにコーンのところへ行つた。

言いつけられていた給仕は、ハミルトン氏は所用のためパリから出かけたと告げた。クリストフにとつては一打撃だつた。彼は口ごもりながら、いつハミルトン氏は帰るのかと尋ねた。給仕はいい加減に答えた。

「十日ばかりしましたら。」

クリストフは駭がいぜん然として家に歸つた。その後毎日室に閉じこもつた。仕事にかかることができなかった。自分のわずかな所持金——母がていねいにハンカチにくるんでカバンの底に入れて贈つてくれた些さしやう少な金額——が、どんどん減つてゆくのを見て恐ろしくなつた。彼は切りつめた生活法を守まもつた。ただ夕方だけ、夕食をしに階下の飲食店へ降りて行つた。そこでは「プロシヤ人」とか「漬シユークル菜」とかいう名前で、早くも客の間に知れ渡つてしまつた。——彼は非常な努力を払つて、フランスの音楽家らへ二、三の手紙を

書いた。それも漠然^{ぼくぜん}と名前を知ってるだけだった。十年も前に死んでる人さえあった。彼はそういう人々に、面会を求めた。綴^{つづり}字はめちやくちやだったし、文体はドイツで習慣となってる、長たらしい語位転換と儀式張った形式とで飾られていた。彼は書簡を「フランスのアカデミー院」へ贈った。——ただ一人の者がそれを読んで、友人らと大笑いをした。

一週間後に、クリストフはまた書店へ出かけた。このたびは偶然に助けられた。入口で彼は、出かけようとするシルヴァン・コーンにぶつかつた。コーンはつかまつたのを見て顔を渋めた。しかしクリストフはうれしさのあまり、その渋面に気づかなかつた。彼は例のうるさい調子で、コーンの両手を取り、^{きき}々として尋ねた。

「旅に行つてたそうだね。面白かつたかい。」

コーンはうなずいたが、しかしその顔は和らいでいなかった。クリストフは言いつづけた。

「僕が来たのは……わかつてるだろう……。話はどうだった？……え、どういうふうだい。僕のことを言ってくれたらうね。返事はどうだった。」

コーンはますます顔を渋めた。クリストフは様子ありげなその態度に驚いた。まるで別

人のようだった。

「君のことは話してみたよ。」とコーンは言った。「だがまだ結果はわからない。隙ひまがなかつたんだ。君に会った時から実に忙しかつた。用事がたくさん頭につかえているんだ。どうして片付けていいかわからないほどだ。まったくやりきれない。病気にでもなりそうだ。」

「気分がすぐれないのかい。」とクリストフは気づかわしい調子で尋ねた。

コーンは嘲あざけり気味の一瞥べつを注いで答えた。

「まったくいけない。この数日へんでこだ。非常に苦しい気持がする。」

「そりゃたいへんだ！」とクリストフは彼の腕を取りながら言った。「ほんとに用心したまえ。身体を休めなけりゃいけないね。僕まで余計な心配をかけて、実に済まない。そう言ってくれりゃよかったのに。ほんとにどんな気持だい？」

彼が悪い口実をもあまり真面目まじめに取つてるので、コーンは愉快なおかしさがこみ上げてくるのをつとめて押し隠しながらも、相手の滑稽こっけいな純朴じゆんぼくさに気が折れてしまった。皮肉はユダヤ人らにとって非常に大きな楽しみであつて——（この点においては、パリーにおけるキリスト教徒の多くはユダヤ人と同じである）——皮肉を浴びせる機会を与えて

さえもらうならば、いかに不快な者にたいしても、また敵にたいしてまでも、とくに寛大な心をいさぐようになるのである。そのうえコーンはまた、自分一身のことをクリストフが心配してくれるのを、感動せずにはいられなかった。彼は世話をしやりたい気持ちになった。

「ちよつと思いついたことがあるんだがね。」と彼は言った。「稽古けいこの口があるまで、楽譜出版の方の仕事をしないかね。」

クリストフは即座に承知した。

「いいことがある。」とコーンは言った。「ある大きな楽譜出版屋の重立った一人で、ダニエル・ヘヒトという男と、僕は懇意にしてる。それに紹介しよう。何か仕事があるだろう。僕は君の知るとおり、その方面のことは何にもわからない。しかしあの男はほんとうの音楽家だ。君なら訳なく話がまとまるだろう。」

二人は翌日の会合を約した。コーンはクリストフに恩をきかせて追っ払ったので、悪い気持はしなかった。

翌日、クリストフはコーンの店へ誘いに来た。彼はコーンの勧めによって、ヘヒトへ見

せるために自分の作曲を少しもつて来た。二人はヘヒトを、オペラ座近くの楽譜店に見出した。二人がはいって来るのを見て、ヘヒトは傲然ごうぜんと構えていた。コーンの握手へは冷やかに指先を二本差し出し、クリストフの儀式張った挨拶あいさつへは答えもしなかった。そしてコーンの求めによつて、二人を従えて隣りの室へはいった。二人にすわれとも言わなかった。火のない暖炉にもたれて壁を見つめたままつつ立っていた。

ダニエル・ヘヒトは、四十年配の背の高い冷静な男で、きちんと服装を整え、いちじらしくフェーニキア人の特長を有し、伶俐れいりで不愉快な様子、渋めた顔つき、黒い毛、アツシリアの王様みたいな長い角張った頤髯あごひげをもっていた。ほとんど真正面に人を見ず、冷やかなぶしつけな話し方をして、挨拶あいさつまでが侮辱の言のように響いた。でもその横柄おうへいさはむしろ外面的のものだった。もちろんそれは、彼の性格のうちにある軽蔑けいべつ的なものと相応じてはいたが、しかしなおいっそう、彼のうちの自動的な虚飾的なものから来るのであった。こういう種類のユダヤ人は珍しくない。そして世間では彼らのことをあまりよく言わない。彼らのひどい剛直さは、身体と魂との不治の頓馬とんまさ加減に由来することが多いけれども、世間ではそれを傲慢ごうまんの故ゆえだとしている。

シルヴァン・コーンは、氣障きざな饒舌じょうぜつの調子で大袈裟おおげさにほめたてながら、世話をしよ

うというクリストフを紹介し始めた。クリストフは冷やかな待遇に度を失って、帽子と原稿とを手にしながら身を揺つていた。コーンの言葉が終わると、それまでクリストフの存在を気にもかけないでいたようなヘヒトは、軽蔑的けいべつにクリストフの方へ顔を向け、しかもその顔をながめもしないで言った。

「クラフト……クリストフ・クラフト……私はそんな名前をまだ聞いたことがない。」
クリストフは胸のまん中を拳固げんこでなぐられたようにその言葉を聞いた。顔が赤くなってきた。彼は憤然と答えた。

「やがてあなたの耳へもはいるようになるでしょう。」

ヘヒトは眉根まゆね一つ動かさなかつた。あたかもクリストフがそこにいないかのように、泰然と言いつづけた。

「クラフト……いや、私は知らない。」

自分に知られていないのはくだらない証拠だと考える者が、世にあるが、彼もそういう人物だった。

彼はドイツ語でつづけて言った。

「そしてあなたはライン生まれですね。……音楽に關係する者があちらに多いのには、実

に驚くほどです。自分は音楽家だと思っていない者は、一人もないと言ってもいい。」

彼は冗談を言うつもりであつて、悪口を言うつもりではなかった。しかしクリストフは曲解した。彼は答え返そうとした。しかしコーンが先に口を出した。

「ですけど、」と彼はヘヒトへ言った、「私だけは音楽を少しも知らないことを、認めていただきたいものですね。」

「それはあなたの名誉ですよ。」とヘヒトは答えた。

「音楽家でないことをあなたが喜ばれるなら、」とクリストフは冷やかに言った、「残念ですが私はもう用はありません。」

ヘヒトはやはり横を向きながら、同じ無関心な調子で言った。

「あなたは音楽を書いたことがあるそうですね。何を書きましたか。もとより歌曲リートでしょう?」

「歌曲リートと、二つの交響シンフォニー曲と、交響詩や、四重奏曲や、ピアノの組曲や、舞台音楽などです。」とクリストフはむきになって言った。

「ドイツではたくさん書くものですね。」とヘヒトは軽蔑けいべつ的なていねいさで言った。

この新来の男が、そんなにたくさん作品を書いていて、しかも自分ダニエル・ヘヒト

がそれを知らないだけに、彼はなおいつそう疑念をいだいていた。

「とにかく、」と彼は言った、「あなたに仕事を頼んでもいいです、友人のハミルトンさんの推薦があるので。ただいまちようど青年叢書という叢そうしょ書物を作っています。たやすいピアノの曲を出すのです。で、シューマンの謝肉祭を簡単にして、四手や六手や八手に直すことを、あなたにしてもらえましょうか。」

クリストフは飛び上がった。

「そんなことをさせるんですか、僕に、僕に！……」

その率直な「僕に」という言葉に、コーンは面白がった。しかしヘヒトは気分を害した様子をした。

「あなたの驚く訳が私にはわからない。」と彼は言った。「そうたやすい仕事ではないですよ。やさしすぎるように思われるなら、なお結構です。今にわかることです。あなたはりっぱな音楽家だと自分で言ってるし、私もそう信ずべきですが、しかし、要するに私はあなたを知りません。」

彼は心の中でこう思っていた。

「こんな元気な奴の口ぶりでは、まるでヨハネス・ブラームスよりりっぱなものが書ける

とでもいうようだ。」

クリストフは返辞もしないで——（怒りを押えようと誓っていたからである）——頭に深く帽子をかぶり、そして扉の方へ進んでいった。コーンは笑いながらそれを引き止めた。「待ちたまえ、まあ待ちたまえ！」と彼は言った。

そしてヘヒトの方へ向いた。

「あなたに判断してもらうために、ちょうど作品を少しもって来てるんです。」

「そう、」とヘヒトは迷惑そうに言った、「では拝見しましょうか。」

クリストフは一言も言わないで、原稿を差し出した。ヘヒトはぞんざいに眼を注いだ。

「なんですか、ピアノ組曲——（読みながら）一日……ああやはり表題楽ですね……。」

彼は無関心を装いながらも、深い注意を払って読んでいった。彼はりっぱな音楽家で、自分の職業に明るかった。がもとよりそれ以上には出ていなかった。彼は初めの小節を少し読むや否や、相手の真価をすっかり感じた。そして軽蔑的な様子で楽譜をめくりながら、口をつぐんでしまった。楽譜の示してる才能にひどく心を打たれた。しかし元来の無愛想さのために、またクリストフのやり方に自尊心を害されていたために、それを少しも示さなかった。彼は一つの音符をも見落とさないで、黙って終わりまで読んだ。

「なるほど、」と彼は保護者的な調子でついに言った、「かなりよく書けている。」「
激しい非難の方がクリストフにはもつと癪しやくにさわらなかつたかもしれない。

「そんなことを言ってもらう必要はありません。」と彼は激昂げっこうして言った。

「それでも、」とヘヒトは言った、「この曲を見せる以上は、私の考えを聞くためではないですか。」

「いやちつとも。」

「そんなら、」とヘヒトはむつとして言った、「あなたが何を求めに来たのか私にはわからない。」

「僕は仕事を求めに来たので、他のことは求めません。」

「先刻言った仕事以外には、当分やっていただきたいこともありません。あの仕事にしても、たしかにお頼みするかどうかわからない。お頼みするかもしれないと言っただけです。」

「他に方法はないのですか、僕のような音楽家を使うのに。」

「あなたのような音楽家ですって？」とヘヒトは侮辱的な皮肉の調子で言った。「少なくともあなたに劣らないほどのりっぱな音楽家で、そういう仕事を体面にかかわれると思わな

かった人がいくらもあります。いちいち名を指さしてもいいですが、今パリーで名を知られるある人たちは、かえってそれを私に感謝していました。」

「それは彼らが卑劣だからだ。」とクリストフは叫び出した。——（彼はもうフランス語の言い回しを多少知っていた。）——「そんな種類の人間だと僕を思ったら間違いです。

まともに顔を見なかつたり口先だけで物を言つたりするやり方で、僕をへこませるとでも思つてるんですか。はいつて来た時だつて、僕の挨あいさつ拶さつに答えもしないで……。僕に向かつてそんな態度をして、あなたはいつたいなんです？ 音楽家とでも言うんですか。何か書いたことでもありますか。……そして、作曲を生命としての僕に向かつて、作曲の仕方を教えようともいうんですか。……そして、僕の音楽を読んだあとに、小娘どもを踊らせるために、大音楽家の作品を去勢してくだらないものになすこと以外には、何も頼むような仕事はないというんですか。……パリーの者はあなたから甘んじて教えを受けるほど卑劣なら、そういうパリー人を相手になさるがいい。僕は、そんなことをするよりくたばつてしまう方がまだましです。」

激烈な調子を押えることができなかつたのである。

ヘヒトは冷然として言つた。

「それはあなたの勝手です。」

クリストフは扉をとびらがたりといわして出て行った。ヘヒトは肩をそびやかした。そして、笑つてるシルヴァン・コーンに言った。

「皆と同じように、また頼みに来るようになりますよ。」

彼は心中ではクリストフをかつていた。かなり聡明そうめいだったから、作品の価値ばかりではなく、また人間の価値を感じることができたのだ。クリストフの攻撃的な憤りのもとに、彼は一つの力を見て取っていた。そして力の稀まれなこと——他の方面よりもいつそう芸術界において稀なこと——をよく知っていた。しかし自尊心の反発があった。いかなることがあつても自分の方が誤つてるとは承認したくなかった。クリストフの真価を認めてやりたいという公平な心はもっていたが、少なくとも向こうから頭を下げて来ない以上は、認めてやることができなかつた。彼はクリストフがまたやって来るのを待った。彼は悲しい悲観思想と人生の経験とによつて、困窮のためには人の意志もかならずや卑しくなるということを、よく知っていた。

クリストフは宿に帰った。憤りは落胆に代わっていた。万事終わった気がしていた。当

てにしていたわずかな支持も、こわれてしまったのである。ただにヘヒトばかりではなく、紹介の労を取ってくれたコーンとも、永遠の敵となったのだと疑わなかった。敵都における絶対の孤独だった。デーネルとコーンとのほかには、一人の知人もなかった。ドイツで交誼こうぎを結んだ美しい女優のコーリヌは、パリーにいなかった。彼女はまだ他国巡業中でアメリカに行っていて、こんどは独立でやっていた。有名になっていたのである。新聞には彼女の旅の華はなばな々しい記事が出ていた。また彼は、思いがけなくも職を失わせた結果になつてゐる、あの若い家庭教師のフランス婦人については、長い間考えることに苛か責やくの種となつたので、パリーへ行つたら捜し出そうと、幾度みずから誓つたかわからなかった

(第四卷反抗参照)。しかし今パリーへ来てみると、たつた一つのことを忘れてるのに気がついた。それは彼女の姓だった。どうしても思い出せなかった。ただアントアネットという名だけしか覚えていなかった。それにまた、もし思い出すことがあるうとも、こんなにかくさんの人が集まつてる中で、一人の若い家庭教師たる彼女をどうして見出せよう！彼はできるだけ早く、糊口ここうの道を立てなければならなかった。もう五フランしか残つていなかった。彼は主人へ、でつぷりした飲食店の主人へ、この付近にピアノの稽古けいこを受けそうな人はいないだろうかと、嫌いや々ながらも思い切つて尋ねてみた。主人は日に一度し

か食事をせずにドイツ語を話してこの宿泊人を、前からあまり尊敬してはいなかったが、一音楽家にすぎないことを知ると、そのわずかな敬意をも失ってしまった。音楽を閑人ひましんの業わざだと考える古めかしいフランス人だったのである。彼は馬鹿にしてかかった。

「ピアノですつて……。あなたはピアノをたたたくんですか。結構なことですか。……だが、好き好んでそんな商売をやるたあ、どうも不思議ですね。私にやどんな音楽を聞いても雨が降るようにはしか思えないんですが……。あとで私にも教えてもらいますかな。どう思う、君たちは？」と彼は酒を飲んでる労働者らの方へ向いて叫んだ。

彼らは騒々しく笑った。

「きれいな商売だ。」と一人が言った。「汚きたなかねえよ。それに、女どもの気に入るからな。」

クリストフにはまだフランス語がそうよくはわからなかった。悪口はなおさらだった。彼はなんと言おうかと考えた。怒おこつていいものかどうかわからなかった。おかみさんは彼を気の毒に思った。

「まあ、フィリップ、冗談にしているんだね。」と彼女は亭主へ言った。——それからクリストフへ向かってつづけて言った。「でもたぶん、だれかあるでしょうよ。」

「だれだい？」と亭主が尋ねた。

「グラッセの娘さん。ピアノを買ってもらったっていうじゃないの。」

「ああ、あの見栄坊どもか。なるほど。」

クリストフは肉屋の娘のことだと教えられた。両親は彼女をりっぱな令嬢に育てたがっていた。たとい近所の評判になるためばかりにでも、娘が稽古けいこを受けることを承知しそうだった。宿屋のおかみさんがあつせんしてやろうと約束した。

翌日彼女は、肉屋のおかみさんが会いたがっているとクリストフに知らした。彼は出かけた。ちようどおかみさんは、獣の死骸しかいのまん中に帳場にすわっていた。顔艶つやのよい

愛嬌あいきよう 笑いのある美しい女で、彼がやって来た訳を知ると、大風おおふうな様子をした。すぐ

に彼女は報酬の高を尋ねだして、ピアノは気持のよいものではあるが必要なものではないから、たくさん払うわけにはゆかないと急いでつけ加えた。一時間に一フラン出そうときり出した。そのあとで彼女は、半信半疑の様子で、音楽をよく心得ているのかとクリストフに尋ねた。心得てるばかりでなく自分で作りもすると彼が答えると、彼女は安心したらしく、前よりも愛想よくなった。自分で作るということが彼女の自尊心を喜ばした。娘が作曲家から稽古けいこを受けてるといふ噂うわさを、彼女は近所に広めるつもりだった。

翌日クリストフは、肉屋の娘といっしよにピアノについた。それはギターのような音がする、出物で買った恐ろしい楽器だった。娘の指は太くて短く、鍵キーの上にもごついてばかりいた。彼女は音と音との区別もできなかった。退屈でたまらなかった。初めから彼の眼前で欠伸あくびをやり始めた。そのうえ彼は、母親の監視や説明を受け、音楽および音楽教育に関する彼女の意見を聞かされた。すると彼はもう、非常に惨めみじな気持になり、惨めな恥さらしの気持になって、腹をたてるだけの力もなかった。彼はまた失望落胆に陥った。あの晩などは食事することもできなかった。数週間のうちにここまで落ちて来た以上は、今後どこまで落ちてゆくことであろう。ヘヒトの申し出に反抗したのもなんの役にたったか。現在甘受してゐる仕事の方が、さらに墮落したものではなかったか。

ある晩、彼は自分の室で涙にくれた。絶望的に寝台の前にひざまずいて祈った。だれに祈ったのか？ だれに祈り得たのか？ 彼は神を信じていなかった。神が存在しないことを信じていた。……しかし、祈らざるを得なかった。自己に祈らざるを得なかった。かつて祈ることのないものは、凡人のみである。強い魂にも時々その聖殿に隠れる必要があることを、彼らは知らないのである。クリストフは一日の屈辱からのがれると、心の鳴り渡る沈黙のうちに、自分の永久存在の現前を感じた。惨めなる生活の波は、彼の下に立ち騒

いでも、両者の間には共通なものが何かあったか？ 破壊を事とするこの世のあらゆる悩みは、その巖いわおにたいして砕け散ったではないか。クリストフは、あたかも身内に海があるように、動脈の高鳴るのを聞き、一つの声がくり返し言うのを聞いた。

「永遠だ……俺おれは……俺は。」

彼はその声をよく知っていた。記憶の及ぶ限り昔から、彼はいつもその声を聞いてたのである。ただ時々忘れることがあった。往々幾月もの間、その力強い単調な律動リズムを、意識しないことがあった。しかし彼は、その声がいつも存在していて、暗夜に怒号する大洋のように、決して響きやまぬことを知っていた。その音楽のうちに浸ることに、静安と精力とを見出してはくみ取るのだった。そして慰安を得て起たち上がった。否、いかほどつらい生活をしていても、少しも恥ずべきではなかった。顔を赤らめずに自分のパンを食し得るのだった。かかる代価をもって彼にパンを買わしてる人々こそ、顔を赤らむべきであった。忍耐だ！ やがて時期が来るだろう……。

しかし翌日になると、また忍耐がなくなり始めるのだった。彼はできるだけ我慢をしてはいたが、ついにある日、馬鹿でおまけに横着なその女郎めらうにたいして、稽古けいこ中に癩かんしゃく癩癩を破裂させた。彼女は彼の言葉つきをあざけつたり、小意地悪くも彼の言うところと反対

のことばかりをしたのである。クリストフが怒鳴りつけるのにたいして、この馬鹿娘は、金を払つて男から尊敬されないのを憤りまた恐れて、喚きたてて答えた。打たれたのだと叫んだ。——（クリストフはかなり乱暴に彼女の腕を揺つたのだつた。——母親は猛烈な勢いで駆け込んで、娘をやたらに接吻し、クリストフをのしりちらした。亭主の方もやって来て、プロシヤの乞食めに娘に手を触れさせるものかと言いつつ切つた。クリストフは憤怒のあまり蒼くなり、恥ずかしくなり、亭主や女房や娘を、締め殺すかもしれない気がして、驟雨を構わず逃げ出した。宿の者らは、彼が狼狽してもどつて来るのを見ると、すぐ事情をうち明けさせた。隣人一家にたいして好意をもたなかつた彼らは、その話を面白がつた。しかし晩になると、ドイツ人の方こそ娘をなぐるような畜生だといふ噂が、その界限にくり返し伝えられた。

クリストフは方々の楽譜店に新しい交渉を試みた。しかしなんの甲斐もなかつた。彼はフランス人を冷淡な人間だと思つた。そして彼らの乱雑な行動に驚かされた。傲慢専断な官僚気風に支配された無政府的社会、そういう印象を彼は受けた。

ある晩彼は、奔走の無結果にがつかりして大通りをさまよつてると、向こうから来るシ

ルヴァン・コーンの姿を認めた。仲違たがいをしたことと信じていたので、彼は眼をそらして、向こうの知らないうちに通り過ぎようとした。しかしコーンの方で呼びかけた。

「あの日からどうしてたんだ？」と彼は笑いながら尋ねた。「君のところへ行こうと思つたが、宿所を忘れたものだからね……。君、僕は見違えていたよ。君は実にえらい男だ。」

クリストフはびつくりしました多少極きまり悪くもなつて、相手の顔をながめた。

「僕おれに怒つてはいないのかい。」

「君に怒るつて？ 何を言いつてるんだ！」

彼は怒るところか、クリストフがへヒトをやりこめた仕方を、たいへん愉快がつていた。おかげで面白い目に会つたのだった。へヒトとクリストフとどちらが道理だか、そんなことは問題でなかった。彼は自分に与えてくれる面白みの程度によって、人の顔を見るのだった。そして、きわめて面白い興味の種を、クリストフのうちに見て取つて、それを利用したがつていた。

「会いに来てくれるとよかつたんだ。」と彼はつづけて言った。「僕は待つていたんだ。ところで今晚は、どうしてるんだい？ 飯を食いに行こう。もう放さないよ。ちやうど仲間が集まることになつてる。何人かの芸術家だけで、半月に一度の会合なんだ。こういう

連中も知っておく必要がある。来たまえ。僕が紹介してやろう。」

クリストフは服装がひどいからと断わつたが駄目^{だめ}だった。シルヴァン・コーンは彼を引っ張っていった。

二人は大通りのある料理店にはいつて、二階へ上がった。そこには三十人ばかりの青年らが集まっていた。二十歳から三十歳ばかりの連中で、盛んに議論をしていた。コーンはクリストフを、ドイツから来た脱獄者だと紹介した。彼らはクリストフになんらの注意も向けず、熱心な議論を中止しもしなかつた。コーンも来る早々から、その議論に加わりだした。

クリストフはそういうりっぱな連中に気後れ^{きわく}がして、口をつぐんだまま、懸命に耳を澄ました。彼は芸術上のいかなる大問題が議論されてるのか理解し得なかつた——フランス語の早い饒舌^{じょうぜつ}についてゆきかねたのである。いくら耳を澄ましても、ようやく聞き取り得るのは、「芸術の威厳」とか「著作者の権利」とかいう言葉に交つてる、「トラスト」、「壟断^{ろうだん}」、「代価の低廉」、「収入額」などという言葉ばかりだった。がついに、商業上の問題であることに気づいた。ある営利組合に属してらしい幾人かの作家が、事業の独占を争って反対の一組合が設けられるという計画にたいして、憤慨してるのであつ

た。数名の仲間が、全然敵方へ移った方が利益だと見て裏切ってしまったので、彼らは激怒の絶頂に達しているのであった。頭をたたき割りかねないような調子で話していた、

「……墮落……裏切り……汚辱……売節……」などと。

また他の者らは、現在の作家を攻撃してはいなかった。印税なしの出版で市場をふさいでる故人を攻撃していた。ミュッセの作品は近ごろ無版權となったので、あまりに売れすぎるらしかった。それで、過去の傑作を廉価に頒布するのは、現存作家の商売品にたいする不公平な競争であつて、それに対抗するために、過去の傑作には重税を課するという有効な政府の保護を、彼らは要求していた。

彼らは両方とも議論をやめて、昨晚の興行で某々の作品が得た収入額に耳を傾けだした。両大陸に有名なある老練戯曲家の幸福に、うっとり聞き惚れた——彼らはその戯曲家を軽蔑してはいたが、それよりもなお多くうらやんでいたのである。——彼らは作者の収入から、批評家の収入に移つていった。仲間の名高い一人の批評家が、ある通俗劇場の初回興行ごとにその提灯持ちをして、幾何の金をもらつてゐるかを——（もちろんまったくの中傷ではあろうが）——話し合つた。その批評家は正直者であつた。一度約束するとそれを忠実に果たした。しかしその大なる手腕は——（彼らの言うところによれば）

——幾度も初回興行があるように、上演作をできるだけ早くやめさせるような讃め方をすることであった。その話——（もしくは金額）——に皆大笑いをしたが、だれも驚く者ではなかつた。

そういう話の間々に彼らは、たいそうな言葉を口にしていた。「詩」のことを話したり、ラール・ポール・ラール「芸術のための芸術」の話をしていた。騒がしい収入問題の中ではそれが、「金銭のためラルジャンの芸術」と響いていた。クリストフは、フランス文学の中に新しくはいって来たこの周旋人的な風習に、不快の念を覚えた。彼は少しも金銭問題がわからなかつたので、議論を傾聴するのをやめてしまった。その時、彼らは文学談を、——あるいはむしろ文学者談を——始めた。そしてヴィクトル・ユーゴーの名前が聞こえたので、クリストフは耳をそばだてた。

それは、ユーゴーがその夫人から欺かれたかどうかの問題だった。彼らは長々と、サン・ブーヴとユーゴー夫人との恋愛を論じ合った。そのあとで彼らは、ジオルジュ・サンドの多くの情夫やその価値の比較を語りだした。それは当時の文学批評界の大問題だった。偉大な人々の家宅探索をし、その戸棚をとたな検査し、引き出しの底を探り、たんす箆筒をぶちまけた後、批評界はその寝所をまでのぞき込んだ。国王とモンテスパン夫人との寝台の下に腹はら匍

いになったローザン氏の姿勢は、ちょうど批評界が歴史と真実とを崇^{たつと}んで取つてゐる姿勢と同じだった。——（当時人々は皆、真実を崇拜していた。）——クリストフの同席者らは、真実の崇拜にとらえられてることをよく示した。この真実の探求においては、彼らは疲れを知らなかった。彼らは過去の芸術にたいすると同じく、現在の芸術にたいしてもそれを試みていた。そして正確さにたいする同じ熱情をもつて、最も顕著な現代人の私生活を分析した。普通だから知られないようなごく細かな情景にまで、彼らは不思議なほど通じていた。あたかもその当事者らが率先して、真実にたいする奉仕の念から、正確な消息を世間に提供してゐるかと思われほどだった。

クリストフはますます当惑して、隣席の人々と他のことを話そうと試みた。しかしそれでも相手にしてくれなかった。それでも初めは、ドイツに関する漠^{ばくぜん}然たる問いをかけた。しかしその問いは、これらの教養あるらしい秀^{ひい}でた人々が、パリー以外ではその専門——文学および芸術——の最も初歩の事柄をも、まったく知らないでいることを示すので、クリストフは非常に驚いた。ハウプトマン、ズーデルマン、リーベルマン、ストラウス（それもダヴィドかヨハンカリヒャールトかわからない）、などという幾人かの偉人の名前を、彼らはようやく耳にしてゐるくらいのもので、そういう人たちのことをも、おかし

な取り違えをしはすまいかと恐れて、用心深く話してゆくのであった。それにまた、彼らがクリストフに尋ねかけるのも、ただ一片の挨拶あいさつからで、好奇心からではなかった。彼らは少しも好奇心をもっていなかった。彼の答えにもろろく注意を払わなかった。そしてすぐに、他の連中が夢中になつてゐるパリーの問題の方へ、急いで加わつていった。

クリストフはおずおずと、音楽談を試みようとした。がそれらの文学者中には、一人も音楽のわかる者はいなかった。内心彼らは、音楽を下級な芸術だと見なしていた。しかし数年来音楽が成功の度を増してゆくので、ひそかに不快の念をいだいていた。そして音楽が流行になつてるといふので、それに興味をもっているらしく装よそおつていた。ことにある新しい歌劇オペラのことを盛んに口にしていた。その歌劇こそ音楽の初めであり、あるいは少なくとも、音楽に一新紀元を画するものであるとまで、唱えかねまじき様子だった。彼らの無知と軽薄とはそういう考えによく調和して、彼らはもう他のことを知る必要を感じなかった。その歌劇の作者は、クリストフが初めて名前を聞いたパリー人だったが、ある人々の説によれば、以前に存在しているすべてのものを一新し、あらゆる作を改新し、音楽を改造したのであった。クリストフは驚いて飛び上がった。彼は何よりも天才を信じたがつてはいない。しかしながら、一挙に過去を覆くつがえすそういう天才があるうか。……馬鹿な！ それは猪いのしし

武者だ。どうしてそんなことができるものか。——彼は説明を求めた。人々は説明に当惑し、またクリストフから執拗しつように尋ねられるので、仲間じゅうでの音楽家であり音楽の大批評家であるテオフィル・グージャールへうち任せた。グージャールはすぐに七度音程と九度音程とについて話しだした。クリストフはその点で彼を追求した。グージャールの音楽の知識は、スガナレルのラテン語の知識程度だった……。

——…君はラテン語を知らないのですか。

——知りません。

——（威勢よく彼は言った。）カブリキアス、アルキ・チュラム、カタラミュス、シンギュラリテル……ボニユス、ボナ、ボニユム……。

ところがグージャールは、「ラテン語を知っている」男を相手にしていることを見て取って、用心深く美学の荊棘けいげき地に立てこもった。その攻略不可能な避難所から、問題外のベートーヴェンやワグナーや古典芸術を射撃し始めた。（フランスでは、ある芸術家をほめる場合には、かならず他派の者すべてを血祭りにするのである。）過去の因襲しゆうを蹂躪りんして新芸術が君臨するのを、彼は宣言した。パリー音楽のクリストファー・コロンプスによつて発見された音楽の言葉のことを、彼は語った。それは古典の言葉を死語となし

て、それを全然廃滅させるものであった。

クリストフはその革命的天才にたいする意見を差し控え、作品を見てから何か言うつもりではあつたが、人々が音楽全体をささげつくしてその音楽上のパール神にたいして、疑惑を感じざるを得なかつた。また楽匠らにたいするかかる言を聞くと、不快な気がした。つい先ごろドイツにおいて彼自身、他の多くの楽匠らのことを云々したのは、もう忘れてしまつていた。あちらでは芸術上の革命者をもつて任じていた彼であり、批判の大胆さと血氣に逸つた率直さ^{はや}とで他人の氣を害した彼でありながら、フランスで一言発しようとする、保守的になつてゐるのをみずから感じた。彼は論争しようとした。しかも理論を提出はするがそれを証明しようとはしない教養ある人間としてではなく、正確な事実を探求しそれで人を押えつけようとする職業家として、論議するの悪趣味をもつていた。彼は専門的な説明にはいることをも恐れなかつた。論じながら彼の声は、この選良たちの耳には聞き苦しいほど調子高くなつていった。彼の議論とそれを支持する熱烈さが、ともに彼らには滑稽^{こっけい}に思われた。批評家グージャールは、一言の警句を吐いて、その途方もない議論を片付けようとあせつた。クリストフは、自分の言うところを相手が少しも知つていないのに気づいて、呆然^{ぼうぜん}としてしまつた。それから、この術^{げんがく}学的な陳腐^{ちんぷ}なドイツ人に

たいして、人々は一つの意見をたててしまった。だれも彼の音楽を知らないくせに、くだらない音楽に違いないと判断してしまった。けれども、ただちに滑稽な点をつかむ嘲笑的な眼をもつて、それから三十人ばかりの青年らの注意は、この奇怪な人物の方へ向けられていた。彼は手先の大きな痩せ腕を、拙劣に乱暴に振り動かし、金切声で叫びながら、激越な眼つきで見回すのだった。シルヴァン・コーンは、友人らに茶番を見せてるつもりだった。

話はまったく文学から離れて、婦人の方へ向いていった。実を言えば、それは同じ問題の両面であった。なぜなら、彼らの文学中ではほとんど婦人だけが問題だったし、婦人中ではほとんど文学だけが問題だった。それほど婦人らは、文学上の事柄や人に関係深かった。

パリーの社交界に名を知られている一人のりっぱな夫人が、自分の情人をしかと引き止めておくために娘と結婚したという噂に、彼らの話は落ちていった。クリストフは椅子の上でいらだちながら、澁面をしていた。コーンはその様子に気づいた。そして隣りの者を脇でつつきながら、あのドイツ人が話にやきもきしているところを見ると、きっとその婦人を知りたくてたまらながつて、注意してやめた。クリストフは真

赤つかになつて口ごもつていたが、ついに憤然として、そういう女こそ鞭打むちつべきだと言つた。人々はどつと笑い出してその提議を迎えた。するとシルヴァン・コーンはやさしい声で、花や……何……何……をもつてしても、婦人にさわるべきではないと抗議した。（彼はパリーにおいて、愛の騎士であつた。）——クリストフはそれに答えた、そういう種類の女は牝めすいぬ犬に等しいものであつて、よからぬ犬にたいしては、ただ一つの良薬すなわち鞭むちがあるばかりであると。人々はやかましく異議をもち出した。クリストフは言つた、彼らの任にんきよう侠は偽善であつて、婦人を最も尊敬しているらしい口をきく者こそ、最も婦人を尊敬しないのが常であると。そして彼はその破廉恥な話を憤慨した。人々はそれに反対して、この話には少しも破廉恥な点はなく、自然な点ばかりだと言つた。そしてこの話の女主人公も、ただ優美な婦人であるばかりでなく、卓越した女性であるということに、皆の意見は一致した。ドイツ人は叫びたてた。それなら女性とはどういうものだと思つているのかと、シルヴァン・コーンは狡こうかつ猾に尋ねた。クリストフは罨わなを張られているのを感じた。しかし彼は奮激と確信とに駆られて、それにすつかり引つかかつた。彼はそれらの嘲ちやうろ弄う的なパリー人に向かつて、自分の恋愛観を説明しだした。しかし適当な言葉が見つからずぐずぐずその言葉を捜し求め、記憶をたどつてはほんとうらしからぬ表現をばかりあ

さり、とんでもないことを言い出しては聴きき手を愉快まじめがらせ、しかもこの上なく真面目まじめくさつて、笑われてもさらに平気で、泰然と言いつづけた。いくら彼でも、厚かましく嘲笑されてることに気づかないではなかったが、それを気になかなかつたのである。ついに彼は、ある文句にはまり込んで、それから脱することができず、テーブルを拳けんこ固こで一撃し、そして口をつぐんだ。

人々は彼をさらに議論の中へ引き込もうとした。しかし彼は眉まゆをしかめて、恥はずかしげないらだつた様子で、テーブルの上に両腕をつき、もう誘いに乗らなかつた。食つたり飲んだりすること以外には、食事の終わるまで、もはや齒の根をゆるめなかつた。葡萄酒ぶどう酒にろくろく口をつけようとしてもしないそれらのフランス人に引き代え、彼はやたらに痛飲した。隣りの男は意地悪く彼を励まして、たえず杯を満たしてくれたが、彼は何の考えもなくそれを飲み干していた。彼はかかる暴飲暴食には慣れなかつたけれども、ことにそれは数週間こっけいの節食の後ではあつたけれども、よくもち堪えることができて、人々が望んでるような滑稽こっけいな様子は見せなかつた。ただ何かぼんやり考え込んでいた。人々はもう彼に注意しなかつた。彼は酒のためにうとうととしてるのだと思われていた。彼はフランス語の会話を聞き取るの疲れ以外に、文学——俳優、作者、出版者、文学上の楽屋や寢所——の詩ばかり

りなのにも、聞き疲れていた。世界がそれだけの範囲に狭せばまったかのようだった。周囲の新しい人々の顔や響きなどから、彼は一つの顔形も一つの思想もはっきりとらえることができなかった。注意のこもらないぼんやりした彼の近視眼は、おもむろに食卓を見回して、人々の上にじつとすわりながらも、別に見ているようでもなかった。けれども彼はだれよりもよく人々を見ていた。ただそれを意識してないだけだった。彼の眼は、ごく細かな物の断片を嘴くちばしでくわえてそれを一瞬間に噛かみ砕くような、それらのパリー人やユダヤ人などの眼と違っていた。彼は海綿のように、沈黙のうちに人々を吸い込み、そしてち去るのであった。彼自身も、何にも見ず何にも記憶しないような気がしていた。彼が一人になって自分自身のうちをながめ、すべてを奪い取ってきたと気づくのは、長い後——数時間またはしばしば数日の後——であった。

しかしこの時彼は、一口も食べそこなうまいとしてやたらに頬張ほおぼる、愚鈍なドイツ人の様子をしか示していなかった。そして、仲間の者らが呼びかわす名前よりほかには、何にも聞き取っていなかった。それら多くのフランス人が、フラマン人やドイツ人やユダヤ人や東洋人やイギリス産アメリカ人やスペイン産アメリカ人などのような、外国人的な名前をどうしてもつてるのかを、彼は酔っ払いの執しつ拗ようさで怪しんでいた。

彼は人々が食卓から立ち上がったのに気づかなかった。ただ一人すわったままでいた。そしてライン河畔の丘、大きな森、耕された畑、水辺の牧場、年老いた母、などのことを夢想していた。数人の仲間がまだ、室の向こうの隅すみで立ち話をしていた。多くの者はもう出かけてしまっていた。彼もついに思い切って立ち上がり、だれにも眼をくれずに、入口にかかっている自分のマントと帽子とを取りに行つた。それらを身につけてから、挨拶あいさつもせずに出かけようとした。その時扉とびらの開き目から、隣りの控え室に、ある物を見つけて夢中になつた。それは一台のピアノだった。彼は数週間なんらの楽器にも手を触れたことがなかつたのである。彼はその室にはいり、なつかしげに鍵キーをなで、腰をおろしてしまつて、帽子をかぶりマントを着たままで、演奏し始めた。どこの家だかすつかり忘れていた。二人の男が聞きに忍び込んできたのもわからなかつた。一人はシルヴァン・コーンだった。彼は音楽熱愛家だった——なぜだかは人間にはわからない。というのは、彼は音楽に少しも理解がなかつたし、いいのも悪いのも同じように好んでいたから。も一人は音楽批評家のテオフィル・グージャールだった。この男は——（いつそう簡単だが）——音楽を理解しても愛してもいなかつた。しかし音楽談をやって少しもはばからなかつた。否はばかるどころではない。自分が何を言つてるのか自分で知らない人ぐらい自由なものはないのだ。

どういうことを言おうとまったく平気だから。

テオフィル・グージャールは、背中のむくむくとした筋肉の太い肥大漢だった。黒い髯、首に重々しくたれさがった毛、没表情の太い皺が寄つてゐる額、粗雑な木彫のように変な四角形な顔、短い腕、短い脚、でっぷりした胸、まるで木挽かオーヴェルニュの人夫みたいだった。その素振りは卑しく言葉は横柄だった。当時フランスで唯一の成功の道たる政治界から、音楽界に移つてきたのだった。初めは、同郷出身の一大臣の財産を目当てにした。自分がその大臣の親戚か因縁の者かであることを——「大臣の抱え医者^{かか}の私生児」の倅^{せがれ}でもあるらしいことを——おぼろげに発見したのだった。ところが大臣というものはいつまでもつづきはしない。テオフィル・グージャールは、自分の大臣が失脚しそうになると、取れるだけのものを取つてから見捨ててしまった。ことに勲章をおもに引き出した。栄誉が好きだったのである。それからやがて、保護者もまた自分自身も、かなりきびしい打撃を受け始めると、もう政治に厭気がさして、騒動の害を被らないような仕事を、他人に迷惑をかけても自分は迷惑を受けないような安全な地位を、捜し求めた。何から考えても批評界がいちばんよさそうだった。ちょうどパリーのある大きな新聞に、音楽批評の口があいていた。この前それを受け持つてた者は、才能ある青年作曲家だったが、作品

や作家にたいしてあくまでも自分の意見を述べるので、やめさせられたのだった。グーじヤールはかつて音楽に關係したことがなく、音楽については何も知らなかった。がすぐに選ばれてしまった。才幹のある候補者はいくらもあつた。しかし少なくともグーじヤールなら、なんらの心配もいらなかつた。彼はばかばかしく自説を重んじはしなかつた。いつでも編集者の命令どおりに、非難をも贅辞をも書くのだった。音楽家でないなどということは、第二義的の問題だつた。フランスではだれでもかなり音楽を知つてゐるのだ。グーじヤールはすぐに必要な知識を得てしまつた。その方法は簡単だつた。音楽会で、あるいは音楽家かまたできるなら作曲家の隣りにすわつて、演奏作品にたいする意見を吐かせることだつた。そういう見習いを数か月やると、もうその方面のことに明るくなるのだった。鷺がらちょう鳥ひなの雛でも飛べるようになるのだった。實際グーじヤールは驚わしなんかではなかつた。彼がその新聞にいかめしく書いた批評の馬鹿さ加減は、知る人ぞ知る！ 彼はでたらめに聞いたり読んだりし、自分の鈍重な頭の中ですべてを混乱させ、そして他人に傲然ごうぜんと教訓を与えていた。洒落しやれまじりのいやに学者ぶつた気障きざな文章だつた。彼は学生監まみたいな心をもつていた。時とすると、ごくまれに無惨な反駁はんぱくを招くこともあつた。そういう場合には、知らない顔をして答弁すまいと用心した。彼は愚かな偽君子であるとともにまた

粗笨そほんな人物であつて、時の事情によつてあるいは傲慢ごうまんになりあるいは穩和ごうわになつた。公の地位か榮譽か（それによつてのみ彼は音楽上の価値を確實に認定したがつていた）をもつてさえおれば、そういう大家連中にはしきりに腰を低くしていた。その他の者にたいしては軽蔑けいべつ的な態度を取り、また食うに困つてる者を利用していた——それは馬鹿なやり方ではなかつた。

彼は權威を得また名声を博したにもかかわらず、内心では、少しも音楽に通じていないことを知つていた。そしてクリストフが音楽にきわめて理解深いことを認めた。用心して口へは出さなかつたが一種の威圧を感じた。そして今、クリストフの演奏に耳を傾けた。余念なくじつと注意を凝らしてゐるようなふうで理解しようとしてつとめた。そしてこの音楽の霧の中に何物をも見て取ることができなかつたけれども、じつとしてゐるのを苦しがつてるシルヴァン・コーンの瞬またたきに應じて、賞賛の様子を示しながら、もつともらしくうなずいていた。

ついにクリストフは、酒と音楽との陶酔から次第に覺さめてきて、背後に行なわれてゐる無言の所作をぼんやり感づいた。ふり向いて見ると、二人の愛好家が立つていた。二人はすぐ彼へ駆け寄つて、力強く握手をした。——シルヴァン・コーンは、彼が神のように演

奏したと甲^{かんだか}高に叫び、グージャールは学者ぶった様子で、彼がルビンシュタインのような左手とパデレウスキーのような右手を——（あるいは反対かもしれないが）——もつてると断言した。二人とも口をそろえて、かかる才能が長く埋もれるはずはないと公言し、その真価を世に紹介しようと約した。そしてまず手始めに二人とも、できるだけの名誉と利益とを自分のために引き出すつもりだった。

その翌日から、シルヴァン・コーンはクリストフを自宅に招いて、もってはいるがなんの役にもたてていないりっぱなピアノを、親切にも勝手に使わしてくれた。クリストフは音楽をやりたくてたまらながっていたので、少しも遠慮せずに承諾した。その招待を利用した。

初めのうちの晩は、万事都合よくいった。クリストフはピアノがひけるのでこの上もなくうれしかった。シルヴァン・コーンは控え目な態度をして彼を静かに享樂させておいた。そして彼自身も心から享樂していた。だれでも認め得るおかしな現象の一つではあるが、この男は、音楽家でなく、芸術家でもなく、最も干^{ひから}乾びた心を持ち、あらゆる詩趣や深い慰悦の情などに最も乏しくはあつたが、クリストフの音楽から肉感的な魅惑を受けた。少

しも理解しはしなかったが、一つの快樂的な力を感じた。ただ不幸にも、彼は黙つてることができなかつた。クリストフが演奏してゐる間にも、声高に口をきかずにはおられなかつた。音楽会に臨んだ気取りやのように、大袈裟な贅辞おおげさを音楽に加えたり、あるいはとんでもない考案を述べたりした。するとクリストフはピアノを打ちたたき、こんなではひきつづけられないと言つてのけた。コーンは黙つてようとつとめた。しかし自分を押えることができなかった。またすぐに、冷笑したり、唸うなり声を出したり、口笛を吹いたり、指先で調子を取つたり、鼻声を出したり、楽器の真似まねをしたりした。そして一曲が終わることに、自分のくだらない意見をぜひとクリストフに述べようとした。

彼は、ゲルマン風の感傷性と、パリー人的な空威張からいばりと、生来の自惚うぬぼれとが、不思議に混合してゐる人物だつた。あるいは得意げな気取つた判断を述べ、あるいは不条理な比較を試み、あるいは無作法なこと、卑猥ひわいなこと、狂氣じみたこと、駄洒落だしゃれめいたこと、などを口にした。ベートーヴェンをほめるのに、その作品には悪ふざけや淫蕩いんとうな肉感があると云つていた。陰鬱いんうつな思想中にもみやびな饒舌じょうぜつを見出していた。嬰ハ短調の四重奏曲も、彼にはちよつと小気味よいものだと思へた。第九交響曲の崇厳なアダジオは彼に大天使を想像させた。ハ短調の交響曲を開く三つの音のあとで彼は、「はいつてはいけない、

人がいるぞ！」と叫んだ。彼は英雄の生涯の戦争の章に、自動車の響きが認められるからと言つて、それを嘆賞した。その他いつでも、楽曲を説明するのに比喩の事柄をもち出したが、それも幼稚なはずれのものばかりだった。どうして彼が音楽を好むのか不思議なほどだった。それでも彼は音楽を好んでいた。ある曲を聞くと、最も滑稽な理解の仕方をしながらも、眼に涙をためることさえあった。しかし、ワグナーの一場面に感動したあとに、オフエンバッハのギャロップをピアノでたたき出したり、喜びの頌歌を聞いたあとに、奏楽珈琲店のたまらない一節を口ずさんだりした。するとクリストフは飛び上がった、憤りの声をたてた。——しかし最もいけないのは、シルヴァン・コーンが馬鹿げたことをする時ではなくて、深奥な精緻なことを言いたがる時であり、クリストフの眼に自分を見せかけたがる時であり、シルヴァン・コーンではなくハミルトンが口をきく時であった。そういう時クリストフは、嫌悪の眼つきを彼に注ぎ、冷酷な悪罵を彼に浴びせかけた。ハミルトンの自尊心はそれに傷つけられた。ピアノの演奏会も喧嘩に終わることがしばしばだった。しかし翌日になるとコーンはもう忘れてしまっていた。クリストフは自分の乱暴さを後悔して、またやつて来ざるを得なかった。

それでもなお、もしコーンがクリストフの演奏に他人を招待するのを控えていたら、何

事もなく済んだはずである。ところが彼は友人の音楽家を人に見せびらかしたがった。――最初招かれて来たのは三、四人のユダヤ人と、コーンの情婦とであった。彼女は白粉だらけの大きな馬鹿げきつた女で、つまらない洒落しゃれをくり返し言い、食べたものことばかりを話し、しかも、每晚よせ寄席でへんてこな踊りをしてるからというので、音楽家だとうぬぼれていた。――クリストフは嫌いやな顔をした。二度目にはシルヴァン・コーンへ向かつて、もう彼の家では演奏しないときっぱり言い切った。シルヴァン・コーンは神かけて、これからだれも招かないと誓った。しかし彼は呼んだ客たちを隣室に入れて、ひそかに前どおりにしつづけた。もとよりクリストフは長く気づかないではいなかった。彼は腹をたてて帰ってゆき、このたびはもう二度とやって来なかった。

それでも彼は、コーンを許してやらなければならなかった。コーンは彼を国家的偏見のない家庭に紹介して、稽古けいこの口を見つけてくれたのであった。

テオフィル・グージャールの方は、幾日かあとに、クリストフをその汚きたない住居へ、自分から訪ねてきた。彼はクリストフのみじめな生活を見ても、さらに嫌いや気を示さなかった。否かえって愛あい嬌きょうがよかった。彼は言った。

「時々音楽を少し聞くのも、君には愉快だろうと思つたし、僕はどこへでもはいれるので、誘いに來たんです。」

クリストフはたいへんうれしがつた。向こうの志をいかにも親切に感じて、心から感謝した。グージャールは、最初の晩とはまったく様子が変わつていた。二人でさし向かいになると、少しも高ぶらず、おとなしく、内気で、みずから学ぼうとばかりしてゐた。優越な様子と高飛車な調子とを一時取るのは、多くの者といつしよの時だけであつた。それにも、みずから学ぼうとする彼の志望は、いつも實際的な性質を帯びてゐるのだった。当面のことでないものには、少しも興味をもたなかつた。ところで目下は、手元に届いたある総譜について、クリストフの意見を知りたがつてゐた。ろくにその音符も読めなかつたので、どう考えていいかすこぶる困つてゐるのだった。

二人はいつしよにある交響曲演奏会へ行つた。入口はある演芸場と共通になつてゐた。曲がりくねつた狭い廊下を通つて、出口のない広間に達した。中の空氣は息苦しかつた。座席は狭すぎるうえにぎつしりつまつてゐた。聴衆の一部分は出入口をふさいでつつ立つてゐた。すべてフランス式の不快さだつた。退屈たいくつでたまらながつてゐるらしい一人の男が、ベートーヴェンの交響曲シンフォニーを、早く終えたいと思つてゐるかのようによい急速度で指揮して

いた。隣りの奏楽珈琲店から響いてくる腹踊りの折り返し句が、エロイカの葬送進行曲に交っていた。聴衆はたえずやって来ては席について、目配せをしあつた。やって来るのが済むと、帰りかける者が出てきた。クリストフはそれらの雑踏の間にも、頭の力を集中して作品の筋をたどつた。そして非常な努力を払つてから、愉快を感じるようになった。——（なぜなら、その管絃楽団は上手じょうずだったし、またクリストフは長い間交響曲を聞かなくて来たから。——するとちようどグージャールが、彼の腕を取つて、演奏最中に言った。

「もう出かけよう。ほかの音楽会へ行こう。」

クリストフは眉まゆをしかめた。しかしなんともし答え返さないで、案内されるままに従つた。二人はパリーを半分ほど横切つて他の音楽会場へ着いた。馬小屋みたいな匂においがする広間で、時間を違えて、夢幻的なものと通俗的なものとをやつていた。——（パリーにおいては、音楽は、二人組んで一つの室を借りる貧しい労働者に似ていた。一人が寢床から出ると、その温あたたかい蒲団ふとんの中にも一人がはいるのである。——もとより空気は通わない。ルイ十四世以来フランス人は、空気を不健康なものだと考えている。そして劇場の衛生法は、ヴェルサイユ宮殿の昔の衛生法のように、少しも息をしないということである。一人

の上品な老人が、獣使いのような身振りで、ワグナーの一幕を指揮していた。不幸な獣——その一幕——は、ちようど見世物の獅子ししに似ていた。脚燈の火に触れはすまいかと狼ろうば狙いしているが、一方では鞭むち打たれて、無理にも獅子だということを思い起こさせられているのである。物知りげな女たちや無神経な娘たちが、唇くちびるに微笑を浮かべて見物していた。獅子がうまく芸当をやり、獅子使いが敬礼をして、両方とも見物の喝かつさい采さいに報いられたあとに、グージャールはなおクリストフを、三番目の音楽会へ連れて行こうとした。しかしこんどは、クリストフは椅子いすの肱ひじ掛かけから両手を離さないで、もう動くのは嫌いやだと言つてのけた。ここでは交響曲シンフォニーの切れ端を、あすここでは協奏曲コンセルトの断片を、通りがかりに聞きかじりながら、音楽会から音楽会へと駆け回るのは、もうたくさんだった。グージャールはいたずらに、パリーでの音楽批評は聴きくより見る方が主要な仕事だと、説明してやろうと試みた。クリストフはそれに抗弁して、音楽は辻馬車つじの中で聴くようにできてるものではなくて、もつと心をこめて聴くべきものだと言った。方々の音楽会をごつちやに聴きかじるのは、彼にはとても堪えられなかった。一つの音楽会を一度聴くだけで十分だった。

彼は音楽会の数多いのにたいへん驚かされた。彼は多くのドイツ人と同じく、フランスでは音楽は大した地位を占めてはいないものと思つていた。そして少量ではあるがごく凝

つたものを聴かしてもらえらることと、期待していた。ところが初めの一週間に、十五、六もの音楽会が前に並べられた。平日毎晩音楽会があったし、また異なった町で同じ時間に、一晚二つ三つあることもしばしばだった。日曜日には、いつも同じ時間に四つあった。クリストフはそういう音楽欲に感心した。また番組の豊富なものと同じく驚かされた。彼はこれまで、ドイツ人は音響にたいする特殊な貪婪性^{どんらん}を有していると考えていたし、その貪婪性についてドイツで一度ならず不快を覚えたことがあった。ところが今彼は、パリ人の方がすぐれた食欲をもつてることを認めた。パリでは実に盛り^もりだくさんだった、二つの交響曲^{シンフォニー}、一つの協奏曲^{コンセルト}、一つもしくは二つの序曲、叙情劇一幕。しかもドイツやロシアやスカンジナビアやフランスなど各国でできたもの——ビールやシャンパンや巴^は旦^{たん}杏^{ぎょう}酒^{しゅ}や葡萄酒^{ぶどう}——を、彼らはすべて一気に飲み下した。この愚^ぐ図^ずのフランス人らがそんな大きな胃袋をもつてるのに、クリストフは感嘆させられた。だが彼らはそれくらいのことには平気だった。ダナイードの樽^{たる}……いくらつぎ込んで底には何も残らなかつた。やがてクリストフは、かく多量の音楽も、結局はごく少量にすぎないことを気づいた。あらゆる音楽会に同じ顔と同じ楽曲とを見出した。その豊富な番組は、決して一定の範囲を出てなかつた。ベートーヴェン以前のはほとんど何もなかつた。ワグナー以後のもの

のはほとんど何もなかった。また中間のものもまったく欠けていた。ドイツで著名な五、六人の作と、フランスで著名な三、四人の作と、また仏露同盟以来は、ロシアの五つ六つの曲とに、音楽はすべて限られてるかのようだった。——古いフランス人のものは何もなかった。イタリーの大家のものは何もなかった。十七、八世紀のドイツの偉人のものは何もなかった。リヒアルト・シュトラウス一人を除けば、現代のドイツ音楽は何もなかった。シュトラウスは他の人々よりも伶俐^{れいり}で、自分の新作をパリーの聴衆に聞かせに、毎年みずからやって来たのである。ベルギーの音楽は何もなかった。チェコの音楽は何もなかった。しかし最も驚くべきことには、現代のフランス音楽がほとんど何もなかった。——それでも世人は皆、世界を革新する事柄をでも話すような様子ありげな言葉で、フランス現代音楽のことを話していた。クリストフはその演奏を聴く機会をねらった。彼はなんらの偏見もなく広い好奇心をいだいていた。新しいものを知りたくてたまらなかったし、天才の作品を賛美したくてたまらなかった。しかしかになりに努力しても、そういうものを聴くにいたらなかった。というのは、それが三、四の小曲なんかだろうとは思っていなかったからである。かなり精巧に書かれてはいるが冷やかで上手に入り組ませる小曲で、彼はそれに大して注意を払っていなかった。

クリストフは自説をたてるまでにまず、音楽批評界の情勢を知ろうとつとめた。

それは容易なことではなかった。音楽批評界は、各人が自分勝手なペトー王廷に似ていた。音楽に関する種々の新聞雑誌は、おかしなほどたがいに矛盾してのみでなく、また同じ新聞雑誌のうちでも、各記事ごとにたがいに矛盾していた。そのすべてを読んだら、目がまわるかもしれないほどだった。幸いにも、各記者は自分の論説しか読んでいなかったし、公衆はどの論説も読んではいなかった。しかしクリストフは、フランスの音楽家らについて正確な観念を得たかったので、何一つ見落とすまいとつとめた。そして彼は、魚が水中を泳ぐように平然と、矛盾の中に動き回つてこの民衆の、快活な冷静さに感嘆させられた。

それらの錯雑した意見の中で、一つの事柄が彼の心を打った。それは多くの批評家の学者的な態度であった。フランス人は何事をも信じないすてきな空想家だとは、だれの戯言ぞ！^と クリストフが見たフランス人は、ラインの彼方^{かなた}のあらゆる批評家よりも、さらに多く音楽上の知識をそなえていた——何にも知らない時でさえも。

この当時、フランスの音楽批評家は、音楽を学び知ろうとつとめていた。すでに音楽を

知ってる者も幾人かあった。それらは皆独創家で自分の芸術に関する考察に努力し、みずから一人で思考しようとしていた。もとよりそれらの人々は有名ではなかった。自分の小さな雑誌の中にとじこもっていた。一、二の例外を除いては、諸新聞雑誌は彼らの味方ではなかった。彼らは伶俐な面白いっぱな人々ではあったが、孤立してるために往々逆説に傾きやすく、また仲間だけで言論する習慣のために、かしやく 仮借なき批判と じようぜつ 饒舌とに傾きがちだった。——その他の批評家らも、ハイモニー 和声の初歩を急速に覚え込んでいた。その新しく得た知識に感心していた。ちょうどジュールダンさんが文法の規則を学んだ時のように、彼らは自分の知識に こうごつ 恍惚となっていた。

「デー、アー、ダ。エフ、アー、ファ。エル、アー、ラ……。ああ実にいい……。何かを知るのには実にいいことだ！……」

彼らが口にすることは、主題や副主題、はいおん 陪音や結合音、九度の連結や長三度の連続、ハイモニー 和声に名前を与え得ると、得意然 ひたい と額をふいていた。その楽曲を説明し得たような気がし、それを自分で書いたような気がしてのだった。しかし実を言えば、学生がキケロの一ページに文法的な分解を施すのと同じく、彼らはその楽曲を学生語でくり返したのにすぎなかった。そして彼らのうちの最

も優良な者にとつても、音楽を魂の自然の言葉だと考えることはいたつてむずかしかつたので、彼らは音楽をもつて絵画の一分派だとするか、あるいはまた、音楽を科学の末に列せしめて、和声的構成の問題だけにしてしまいがちだつた。かかる学者らは、当然過去の音楽家にまでさかのぼらずにはいられなかつた。彼らはベートーヴェンのうちにも欠点を見出し、ワグナーをも攻撃した。ベルリオーズやグルックにたいしては熱罵を浴びせた。彼らにとつては、この流行の際に当たつて、ヨハン・セバスチアン・バッハやクロード・ドビュッシー以外には、何者も存在しなかつた。そして、近年あまりにもてはやされたこのバッハでさえも、すでに術^{げんがく}学的で陳腐^{ちんぷ}であると思なされ始め、要するに多少子供っぽいのだと思なされていた。ごく秀^{ひい}でた人々は、ラモーやまた偉人と言われてるクープレランなどを、妙に賞揚していた。

それらの学者の間に、激しい争論が起こつていた。彼らは皆音楽家だつた。しかし皆が同じ態度の音楽家でなかつたから、各自に自分の態度だけがいと称^えしていた。そして仲間の者らの態度をすべて馬鹿だとのしつていた。彼らはたがいに似^え而非^せ文学者だとし、似而非学者だとしていた。理想主義だの唯物主義、象徴主義だの実物主義、主観主義だの客観主義、などという言葉^{ことば}をたがいに与え合つていた。クリストフは、パリイでもドイツ

と同じ喧嘩けんかを見出すのならば、何もわざわざドイツからやって来るには及ばなかったと、みずから言った。彼らはいい音楽に向かつて、種々の異なつた享樂法を与えてもらったことを感謝もせず、自分の享樂法をしか容認しなかつた。そして新しいリユトランが、激しい論争が、当時音楽家らを兩軍に分かつていた。すなわち対位法軍と和声軍と。ちょうど大ブーチャンと小ブーチャンとのように、一方は音楽は水平に読むべきものと主張し、他方は音楽は垂直に読むべきものと主張していた。後者の人々は、味のよい和音、汗氣あせりけの多い連結、滋養分に富んだ和声、などばかりを問題にしたがつていた。あたかも菓子屋の樽うわさをでもするように、音楽のことを話していた。前者の人々は、くだらない耳だけを問題とするのを、決して許さなかつた。彼らにとつては、音楽は演説と同じものだった。議會と同じものだった。演説者らは皆一時に、あたりの者に構わずに、最後まで口をきくのがだった。いちいち聞き取れなくても平氣だ。翌日の官報で皆読むことができるのである。音楽は読まれるためにできてるので、聞かれるためにできてるのではない。クリストフは、そういう水平派と垂直派との間の論争を、初めて聞くと、皆狂人ばかりだと思つた。連続軍と重積軍とのどちらかに味方せよと促されると、ソジーの名言ではないが、例の自分一個の名言で答えた。

「僕は諸君全部の敵だ。」

すると彼らはしつこく尋ねた。

「和声と対位法と、どちらが音楽ではよりたいせつか。」

彼は答えた。

「音楽がたいせつだ。まあ君らの音楽を示してくれ。」

彼らは自分らの音楽については、皆意見が一致していた。あまり長い名声を有する過去の大家を攻撃するか、さもなくばたがいに攻撃し合ってるくせに、一つの共通な熱情ではいつも一致していた。それは音楽上の熱烈な愛国心だった。彼らにとっては、フランスは偉大な音楽的国民だった。彼らはいつても、ドイツの衰微を言明していた。——クリストフはそのために気分を害しはしなかった。彼はその批判を正当だとみずから認めていたので、本気で抗弁することができなかった。しかしフランスの音楽が最上だという説には、かなり驚かされた。実際のところ、過去にそういう形勢はどうも認めがたかった。それでもフランスの音楽家らは、自分らの芸術が遠い昔においてはすてきなものであったと肯定していた。それにまた彼らは、フランスの音楽をさらに光榮あらしむるために、まず前世紀のあらゆるフランスの光榮ある楽匠をあざけつた。ただ一人のごくりっぱな純潔な大家だけ

は例外としていた——がそれもベルギー人だったのである。そういう非難をしてから、彼らはいっそう気兼ねなしに、古代の大家を賞揚したのである。それらの大家は皆世に忘れてしまつてゐる人々で、中には今日までまつたく名を知られてない者もあつた。フランス大革命から新世界が開けたのだとする、フランスの通俗派とまつたく反対に、これらの音楽家らは、フランス大革命を一つの大山脈だと見なして、音楽の黄金時代を、芸術のエルドロードを、振り返つてながめるためには、それをよじ登らなければならぬとした。そして長い暗黒のあとに、黄金時代はふたたび来かかつてるそうだった。堅い壁はくずれかけている。音響の魔法使が、驚嘆すべき春をよみがえらせかけている。音楽の老木は、ふたたび柔らかな若葉に覆われようとしている。和^{ハーモニー}声の花壇には、無数の花が新しい曙^{あけぼの}ににこやかな眼を開きかけている。銀の音の泉の響きが、小川のさわやかな歌が、聞こえ始めている……。一つの田園詩だった。

クリストフは非常に喜んだ。しかしパリ―諸劇場の広告をながめると、マイエルベール、グノー、マスネー、および彼が知りすぎるほど知つてゐるマスカーニやレオンカヴァロ、などの名前がいつも出ていた。そういう不貞節な音楽が、娘たちの喜びそうなものが、造り花が、香水の店が、約束のアルミデスの園なのかと、クリストフは友人らに尋ねた。する

と彼らは、氣を悪くした様子で抗言した。彼らの言うところによれば、そういうものは瀕^ひ死時代の最後の名残り^{なご}だった。もうだれもそんなものを顧みる者はなかった。——実際ではカヴァレリア・ルスチカナがオペラ・コミック座に君臨して、パリアツチがオペラ座に君臨していた。マスネーとグノーとがいちばん多くもてはやされていた。音楽上の三体神ともいふべき、ミニヨンとユグノー教徒とファウストが、一千回の公演を景氣よく越していた。——しかしそういうのはなんら重きをなさない出来事だった。眼中におくに足りないことだった。一つの不都合な事実が理論の邪魔になる時には、最も簡単な方法は、その事実を否定することである。フランスの批評家らは、右のような厚かましい作品を否定し、それを喝^{かつさい}采^{さい}する公衆を否定していた。もしおだてられたら、音楽劇全体を否定するかもしれない。彼らに言わすれば、音楽劇は文学の一種であつて、それゆえに不純なものであつた。（彼らは皆文学者だったから、文学者たることを皆きらつてゐるのだつた。）表現的で叙述的で暗示的なあらゆる音楽、一言にして言えば、何かを言わんとするあらゆる音楽は、不純の名を冠せられていた。——各フランス人のうちには、ロベスピエールのごとき性質がある。だれかをまたは何かを純粹にせんがためには、いつもその首を切らざるを得なくなる。——フランスの大批評家らは純粹な音楽をしか容認しないで、その

他は衆愚の手に任していた。

クリストフは自分の趣味がいかに劣つてゐるかを考えて、非常に心細い気がした。しかし多少慰められたことには、劇を軽蔑けいべつしてゐるそれらの音楽家らが皆、劇のために書いてゐることだった。歌劇オペラを書かない者は一人もなかった。——しかしそれもまたたぶん、なんら重きをなさない事柄に違いなかった。彼らを批判するには、彼らが希望してゐるとおりに、彼らの純粹なる音楽によつてしなければならなかった。クリストフは彼らの純粹な音楽を搜した。

テオフィル・グージュールは、国民的芸術に奉仕してゐるある協会の音楽会に、クリストフを連れていった。そこでは新しい光榮が、徐々に形造られ育はぐくまれていた。それは大きな団体であつて、幾つもの礼拝堂をもつてゐる小教会であつた。各礼拝堂にはその聖者があり、各聖者にはそれぞれ信仰者があつて、この信仰者らは好んで隣りの礼拝堂の聖者を悪口していた。それらの聖者らのうちに、クリストフは初め大した差異をおかなかつた。当然のことであるが、彼はまったく異なつた芸術に馴なれきつていたので、その新しい音楽には少しも理解がなかつたし、理解できると思つてゐるだけになお理解できなかつた。

すべてが永久の薄明のうちに浸つてゐるうちに、彼には思われた。あたかも灰色の浮絵のようであつて、その各線はぼやけて沈み込んでいて、時々浮き出してはまた消えていった。それらの線のうちには、直角定規で引いたような堅い荒い冷やかな構図があつて、瘦せた女の肱ひじのように鋭角をなして曲がついてた。または波動をなしてゐる構図もあつて、煙草の煙のようにもつれてた。しかしすべては灰色の中にあつた。それでみると、フランスにはもはや太陽はないのか？ パリーへ着いてから雨と霧とにばかり会つてたクリストフは、そう信じがちであつた。しかしながら太陽がない時にも太陽を創つくり出すのが、芸術家の役目である。それらの人々は、自分の小さな燈火をよくともしてた。ただそれは螢ほたるの光ほどのものにすぎなかつた。少しも物を暖めないし、辛うじて輝いてた。作の題目は變つてた。春、正午、愛、生の喜び、野の散歩、などが取り扱われてゐることも時々あつた。けれども音楽それ自身は、少しも變つていなかつた。いつもきまつて、穩和で、蒼あおしろ白くて、縮み込み、貧血し、衰弱してた。——当時フランスでは、音楽において声低く語るのが、心ある人々の間の流行だつた。それには理由があつた。声高く語るのは叫ぶためのものだつた。中間はあり得なかつた。うつとりとさせる秀ひいでた調子か、挿樂劇メロドラマ的な誇張した調子か、その一つを選ぶしかなかつた。

クリストフは、自分にも感染してくる遅鈍な気分を振り落して、曲目をながめた。そして、灰色の空を通るそれらの細かな霧が、精確な主題を表現するつもりでいるのを見て、驚かされた。その理論にもかかわらず、この純粹な音楽は、いつもたいていは標題音楽であるか、あるいは少なくとも主題音楽であった。彼らはいたずらに文学をのしつてるのみだった。身をささえる文学の松葉杖つえが、彼らには必要だった。おかしな松葉杖だ！ クリストフは、彼らが描こうとしている主題のおかしなほど幼稚なのを、見て取った。果樹園、菜園、鳥小屋、音楽上の動物園、まったくの動植物園だった。ある者らは、管弦楽やピアノのために、ルーヴル美術館の絵画やオペラ座の壁画などを持ち出していた。クイプやボードリーやパウル・ポツテルなどを音楽に取り入れていた。傍注の助けによって、あるいはパリスの林檎りんごが、あるいはオランダの旅宿が、あるいは白馬の臀しりが、認められるのだった。それがクリストフには大きな子どもの戯れとしか思われなかった。形象にばかり興味をもち、しかも自分で絵を書くことができないので、頭に浮かぶものをすべて手帳に書き散らして、その下に太い文字で、これは人家もしくは樹木の絵であると、無邪気に書きつけてるのだった。

耳で物を見るそれらの盲目な絵かきのほかに、また哲学者らもいた。彼らは音楽のうち

に、形而上の問題を取り扱っていた。彼らの交響曲は、抽象的な主義の戦いであり、あの象徴もしくは宗教の解説であった。また同じく歌劇の中では、現在の法律的社会的問題の研究に取りかかっていた。婦人および公民の権利を宣言していた。離婚問題、実父調査、教会と国家との分離、などを平気で取り扱っていた。彼らは二派に別れていた。俗衆的象徴主義者と僧侶的象徴主義者とだった。紙屑屋の哲学者、売笑女工の社会学者、パン屋の予言者、漁夫の使徒、などを彼らは歌わしていた。ゲーテはすでに、「比喩的情景の中にカントの思想を再現する」当時の芸術家らのことを、説いている。ところがクリストフの時代の者らは、十六分音符のうちに社会学を取り入れていた。ゾラ、ニーチェ、メーテルリンク、バレス、ジョーレス、マンデス、福音書、赤い風車などが、貯水池に水を給して、歌劇や交響曲の作者らは、そこへ思想をくみ取りにやってくるのであった。彼らのうちの多くは、ワグナーの例に心酔して、「予もまた詩人なり！」と叫んでいた。そして音楽の譜線の下に、小学生徒や頽廢的な小品記者のような文体で、韻文や無韻文を得意然と書き並べていた。

それらの思想家や詩人はことごとく、純粹音楽の味方であった。しかし彼らは、音楽を書くよりも音楽を語る方をいつそう好んでいた。——それでも時々書くことがあった。で

きあがったものは、まったく無意味な音楽だった。不幸にもそれはしばしば成功した。でもやはりまったく意味のないものだった——少なくともクリストフにとっては。——それにまた実は、クリストフはそれを解く鍵かぎを有しなかった。

外国の音楽を理解せんがためには、つとめてその言葉を学ばなければならないし、その言葉を前から知っていると断つてはいけない。ところがクリストフは、一般の善良なるドイツ人と同じく、自分はフランスの言葉を知っていると断つていた。それには恕じよすべき点もある。多くのフランス人自身でさえ、彼以上によくフランスの言葉を理解してはいなかった。ルイ十四世時代のドイツ人らが、フランスの言葉を話すことばかりつとめて、ついに自国の言葉を忘れてしまったのと同様に、十九世紀のフランス音楽家らは、長い間自国の言葉を閑却していたので、彼らの音楽は一つの外国の言葉となつてしまった。ようやく近年になつて、フランスでフランスの言葉を話そうとする運動が起こつた。しかしすべての者がそれに成功することはできなかった。習慣の力はきわめて大きかつた。幾人かを除いては、彼らのフランスの言葉はベルギー風だったり、あるいはゲルマン風の臭味を保つていた。それゆえに一ドイツ人が、思い違いをするのももつともであつて、自分が理解しないという理由で、これは悪いドイツの言葉でなんらの意味もなさないものだど、平素の確信をも

つて公言するのは、当然のことであつた。

クリストフもその例に漏れなかつた。フランスの交響曲シンフォニーは、一つの抽象的な論法であつて、算術の運算のようなふうに、主題がたがいに対立しあるいはつみ重なつてゐるがように、彼には思われたのである。その組み合わせを示すためには、数字かアルファベットの文字かを置き代えてもよさそうだった。ある者は、一つの音響形式の漸進ぜんしん的展開の上に、作品を組み立てていた。その形式も、最後の部分の最後のページにしか完全には現われないうで、作品の十分の九までの間は幼虫の状態にとどまつていた。またある者は、一つの主題の上に種々の変奏曲を築いていた。その主想も、複雑から簡単へと次第に下つていつて、最後にしか現われて来なかつた。それは非常に知的な玩具がんぐだった。それで遊び得るためには、ごく老人であるとともにごく子供であらねばならなかつた。発明者には異常な努力が要するのであつた。彼らは一つの幻想曲ファンタジアを書くのに数年かかった。和音の新奇な組み合わせを求めて——表現のためかもしれないが——頭髮が白くなるほどの苦心をした。しかしそんなことは平気だ。新しい表現が生ずるのだから。人体においても器官が欲求を生むと言われているように、表現は常に思想を生むにいたるものである。要は表現が新しければよいのである。いかなる代価を払つても新奇を求めることだ！ 彼らは「すでに言われた

こと」にたいして病的な恐怖をいだいていた。最もひどい者になるとそのために身体不随に陥っていた。彼らはいつも、小心翼翼として自分を監視することにとつとめ、前に書いたものを塗抹とまつしようとして、「おや、これは前にどこで読んだのかしら……」とみずから尋ねようとばかりしてゐるらしかった。他人の楽句をつぎ合はして時間を過ぐすような音楽家が、世には——ことにドイツには——かなりある。ところがフランスの音楽家らの努力は、自分の各楽句について、すでに他人が用いた旋メロデー律の表中にそれがあつかうかを捜すことであつた。自分の鼻をやたらにねじまげて、知つてゐいかなる鼻にも似なくなるまで、否まつたく鼻だとは見えなくなるまでに、その形を変えてしまうことだつた。

そういうことをもつてしても、彼らはクリストフを欺き得なかつた。複雑な言葉を身にまとい、超人間的な激げつこう昂や管弦樂的な痙攣けいれんを装い、あるいはまた、半音から常に発して、半ば眠りかけてる騾馬ろばのように、滑すべつこい坂の縁をすれすれに、幾時間も歩きつづけるような、非有機的な和ハーモニー声や執拗しつような単調モノトニーやサラ・ベルナル式の朗詠法などを、彼らは盛んに用いてはいたけれども、それでもクリストフは、グノーやマスナー式にはあるがより不自然に、ひどく粉飾を事としてゐる、冷たい色褪あせたちつぽけな魂を、その仮面の下に見て取るのであつた。そして彼は、フランス人にたいするグルツクの不当な言葉

を、いつもみずからくり返した。

「勝手にさしておけば、いつでも俗謡にもどってゆきたがる。」

ただ彼らは、その俗謡を高尙ならしめようとつとめていた。彼らは俗歌を取り上げて、ソルボン又大学の論文みたいに堂々たる交響曲シンフォニーの主題としていた。それは当時の大機運だった。あらゆる種類のまたあらゆる国の俗歌が、各自に役目を帯びさせられていた。——彼らはそういうものをもつて、第九交響曲やフランクフランクの四重奏曲のごときものを作っていた。しかしはるかに困難なことだった。ごく明瞭めいりょうな一つの小さな楽句を頭に浮かべると、すぐに第二の楽句をその中間にはさもうとした。それはなんらの意味をも有しないものにせよ、ひどく第一のものと矛盾しがちだった。——しかもかかる憐れあわれな連中がいかに冷静で円満な音楽家だと、一般に思われていた。

そういう作品の演奏を指揮するためには、嚴格で猛々たけだけしい青年音楽長が、あたかもベートーヴェンやワグナーの軍隊をでも奮起させるかのように、ミケランジェロ風の身振りをしてあばれ喚わめいていた。聴衆は社交界の人々と音楽家の卵とで成っていた。前者は、屈でたまらながつていながら、光榮ある退屈を高価あがなに購うの名譽を、どうしても見捨てかねているのであった。後者は、専門家の乱麻をところどころ解いてゆきながら、覚えて

の知識をみずから証明して喜んでいた。そしてこの聴衆は、楽長の身振りや音楽の喧騒けんそうと同じくらいに、熱狂的な感激の喝かつさい采さいを与えていた……。

「これあるかな！……」とクリストフは言った。

（彼はもうすっかりパリーこ児こになりすましていた。）

しかしパリーの俗語に通ずることよりも、パリーの音楽に通ずることはさらにむずかかった。クリストフは何事にたいしても示す例の熱情と、フランス芸術を理解し得ないドイツ人の天性とをもって、判断をくだしていた。ただ彼は誠心をもってしていたし、誤つてることをもし指摘さるれば、それを認めるに躊躇ちゆうちよしなかつた。それゆえ、自分の判断に縛られるとは少しもみずから思わなかつた。そして自分の意見を一変させるかもしれないような新しい印象をも、うち開いた心で受け入れていた。

そしてもう今では、彼はフランスの音楽の中に、多くの才能、興味ある素材、律動リズムと和ハ声一モ二との珍しい発見物、光沢こうたくのある柔らかい精緻せいちな織物の配列、色彩の絢爛けんらん、発明力と機智との不断の傾注、などを認めざるを得なかつた。クリストフはそれを愉快に感じ、それから得るところがあつた。それらの群小音楽家たちは、ドイツの音楽家らよりも、精

神の自由をはるかに多く有していた。彼らは敢然と大道から離れて、森の中に飛び込んでいた。道に迷うことを求めていた。しかし迷い得ないほど賢い子供らであった。ある者は、数十歩行くとまた大道にもどつてきた。ある者らは、すぐに疲れてどこでも構わず立ち止まった。または、新しい小径こみちに達しかけてる者らもあつた。しかしそういう者らも、なお進みつづけることをしないで、森の出はずれに腰をおろして、木陰にぐずついていた。彼らに最も欠けてるものは、意志であり力であつた。天賦の才をことごとくそなえてはいた——がただ一つ不足してるものがあつた。それは強健な生活力だつた。さらに、その多くの努力も、雑然たる方法で費やされているらしく、途中で無駄むだに終わつてゐるしかなかった。それらの芸術家らが自分の性質を明らかに自覚し、一定の目的へ向かつて自分の力をたゆまず集中することは、めつたになかつた。それはフランスの無秩序から来る普通の結果だつた。この無秩序は、才能と善良な意志との大なる源泉を、不確定と矛盾とによつて空費さしてしまふのである。彼らの大音楽家は皆、ほとんど一人の例外もなく、たとえば近代の人を挙げずとも——ベルリオーズでもサン・サーンスでも、精力を欠き、信念を欠き、ことに内心の羅針盤らしんばんを欠いてるために、自家撞どうちやく着やくをきたし、自己を破壊するようなことばかりをし、自己を否認してゐるのであつた。

クリストフは、当時のドイツ人に通有な厚かましい軽蔑^{けいべつ}の態度で、こう考えていた。「フランス人は、自分で利用できないような発明に、無駄な努力を重ねてばかりいる。彼らの革命を利用しに来る異人種の偉人が、グルックやナポレオンのごとき者が、彼らにはいつも必要である。」

そして彼は、フランス共和暦八年霧^{ブリュメール}月十八日のことを考えて、微笑をもらったのであつた。

けれどももある一群の者らは、そういう無秩序のまん中であつて、芸術家の精神のうちに、秩序と規律とを回復せんとつとめていた。彼らはまず手初めに、今から約千四百年前ゴート人やヴァンダル人の大侵入のころ栄えていた、ある僧侶団体の記憶を呼び起こしながら、ラテン語の名称を採用していた。それほど遠い昔にさかのぼるのを、クリストフは多少驚いた。おのれの時代を俯瞰^{ふかん}するのは確かにいいことではある。しかしおそらくは、十四世紀もの高さを有する高塔は、現代の人間の運動を観測するよりもむしろ星の運動を観察する方がたやすいほどの、不慣れた観測所たるやもしれなかつた。ところがクリストフは、聖グレゴアールの子孫らがめつたにその塔上にいないのを見て、すぐに安心を覚えた。彼ら

がそれに上るのは、ただ鐘を鳴らさんがためばかりであった。その他の時には、皆下の会堂に集まっていた。クリストフはその祭式に数回臨んでみて、彼らが旧教的信仰をもつてすることに気づいたのは、しばらくたつてからであった。しかし始めの間彼は、彼らが新教のある小派の典礼に属してることだと、思い込んでいた。聴衆は跪拝きはいしていた。弟子でしらは敬虔けいけんで、偏狭で、攻撃を好んでいた。その上に立つてる首領は、ごく純潔で、ごく冷静で、わがままで、多少子供らしい人物だったが、宗教的で道徳的で芸術的であるその教義の完全無欠さを力説し、選ばれたる少数の人民らに、音楽の福音書を抽象的な言葉で説明し、驕慢きょうまんと異端とを平然としてのしつていた。そして右の二つに、芸術の罪過と人類の悪徳とを帰していた。文芸復興、宗教改革、および彼が同じ袋に入れて論じてる現代のユダヤ主義、ことごとくを帰していた。音楽上のユダヤ人らは、辱しめはづかの衣裳を着せられた後にその肖すがたを焼かれていた。巨人ヘンデルも笞刑ちけいを受けていた。ただヨハン・セバスチアン・バッハのみは、「誤つて新教徒になつた者」と上帝から認められ、その慈悲によつて特赦を受けていた。

サン・ジャック街の殿堂で布教が行なわれていた。魂と音楽とが救済されていた。天才の規則が組織的に教えられていた。勤勉な生徒らは、多くの苦心と絶対の確信とをもつて、

その方法を実地に適用していた。あたかも彼らはその敬虔な労苦によって、オーベル輩、アダム輩、および、かの偉大な罪人であり悪魔的な驢馬ろばであり、悪魔の権化ごんげにして音楽上の悪魔なるベルリオーズ、そういう父祖の、軽薄さの罪を、償おうとも思つてゐるかのようだった。そして讃むべき熱心と誠実なる信仰とをもつて、すでに認められた大家にたいする崇拜を世に広めていた。約十年間のうちに偉大な事業が完成されていた。フランスの音楽はそれで一新されたのだ。音楽を学んだのは、ただに批評家ばかりではなく、音楽家自身もであつた。今や作曲家も出て来たし、バッハの作品を知つてゐる名手まで出てきた。

——ことに、フランス人の家居的な精神を打破するのに、大なる努力がつくされたのだ。彼らは自分の家にばかり蟄ちつきよ居いしている。外に出るのをおつくうがつてゐる。それゆえ、彼らの音楽には空気が欠乏している。閉め切つた室と長椅子いすとの音楽であり、歩くことのない音楽である。野の中で作曲し、坂路をころげ降り、月光や雨の中を大股おおまたに歩き、その身振りと呼び声とで家畜の群れを恐れさせる、ベートーヴェンのごときとは、まったく正反対である。パリーの音楽家らには、「ボンの熊くま」みたいな、インスピレーション 霊 感 の騒々しさによつて隣人らの邪魔となる恐れは、少しもなかった。彼らは作曲する時、自分の楽想らくさうに弱音器をはめ、また外界の音響が伝わつて来るのを、帷幕とばりによつて防いでいたのだ。

ところでこのスコラ派は、空気を新しくしようと努めたのだった。そして過去にたいして窓を開いていた。しかしただ過去にたいしてばかりだった。言わば中庭の方のを開いたのであって、往来の方のを開いたのではなかった。それでは大した役にはたたなかつた。彼らは窓を開いたかと思うとすぐに、風邪かぜにかかりはしないかと恐れてる老婆ろうばのように、その鎧戸よろいどを閉めてしまった。その隙間すきまから、中世紀のもの、バッハ、パレストリナ、俗謡などが、多少吹き込んできた。しかしそれがなんになるう？ 室の中はやはり閉め切つた感じばかりだった。要するに、彼らにはそれの方がよかつたのである。彼らは近代の空の大流通をきらつていたのである。そして、他の者らよりも多くのことを知っていたとはいえ、またより多くのことを否定していた。この連中の中にはいると、音楽は教理的性質を帯びるのであった。それは一つの休養ではなかつた。音楽会は、歴史の授業か教化の実例かようであつた。進んだ思想も官学風になされていた。急湍きゅうたんのごときバッハも、この聖教徒らの中に迎えられると賢明になつていた。彼の音楽は、このスコラ派の頭脳にはいると、荒々しい肉感的な聖書がイギリス人の頭脳にはいつた時と同じような、一種の変形を受けるのであつた。彼が主唱する教義は、ごく貴族的な折衷主義であつて、六世紀から二十世紀にわたる三、四の音楽的大時代の各特質を、一つに合同しようと努めること

であつた。もしそれが実現できた暁には、インドのある太守が方々への旅行からもどつてきて、地球の四辺から集めてきた貴重な材料で作り上げた、あの混成建築物にも等しいほどのものが、音楽上にも得られるわけだつた。しかしフランス人特有の良識は、そういう博大な野蛮さの病弊から彼らを救い出した。彼らはその理論を實際に適用することをよく差し控えた。医者にたいするモリエールの態度と同じ態度を、彼らはその理論にたいして取つていた。療法の指図さしずは受けていたが、それに従つていなかった。最もひどいのは、自分勝手の道を進んでいた。残余の者らは、実地においては、対位法のごく困難な込み入つた練習をするだけで、みずから満足していた。そういう練習を彼らは、奏鳴曲ソナタだの四重奏曲シンフォニーだのと名づけていた……。「奏鳴曲ソナタよ、何を望むのか。」——しかし奏鳴曲はただ奏鳴曲たること以外には、まったく何も望んではいなかった。彼らの奏鳴曲の樂想は、抽象的で特徴がなく、苦心のみあつて喜びのないものだつた。それはまったく公証人的な芸術だつた。クリストフは、フランス人らがブラームスを愛しないことを初め感謝していたが、もう今では、フランスには小ブラームスがたくさんいると考へていた。勤勉な誠実なそれらのりっぱな労働者らは皆、多くの美德をもつていた。クリストフはたいへん教えられるところがあつたが、またひどく退屈して、その仲間からのがれ出た。のがれ

出てよかった、実によかった……。

戸外はなんといい気持だったろう！

それでも、パリーの音楽家中には、あらゆる流派を脱して独立してゐる者が、幾人かあった。クリストフが興味を覚えたのは、そういう人たちがばかりだった。彼らのみが、一芸術の生活力の程度を知らせるのである。流派や学会などは、皮相な流行やこしらえられた理論だけをしか示さない。しかし自分だけ離れて立っている独立者らは、その時代と民族との真の思想を見出すの機会を、より多く有している。それゆえにまた、外国人にとっては、他の者らよりも彼らの方がいつそう理解しがたいのは、事実である。

クリストフがある名高い作を初めて聞いた時も、実際そのとおりであつた。フランス人らはその作を法外にほめたてていた。最近十世紀間にその例を見ない音楽上の最大革命だと、公言してゐる者もあつた。——（十世紀といつても、フランス人には世紀ということが大した意味をなしはしない。彼らは自国の世紀以外のことはあまり考えない。）

テオフィル・グージャールとシルヴァン・コーンとは、ベレアスとメリザンドを聞かせるために、クリストフをオペラ・コミック座へ連れていった。二人は彼にその作を示すの

を非常な光榮としていた。あたかも自分で作ったかのようにだつた。それを聞いたら彼が心機一転するかもしれない、などと吹聴ふいちようしていた。劇が始まって二人はなお吹聴をやめなかつた。クリストフは二人を黙らして、耳を澄すまして聴きいた。第一幕が済むと、彼はシルヴァン・コーンの方へ身を乗り出した。コーンは眼を輝かしながら彼に尋ねたのであつた。

「おい、気むずかしや、どうだい？」
彼は言つた。

「ずっとこんな調子なのか。」

「そうだ。」

「じゃあ、からつぽだね。」

コーンは反対して、彼を俗物だとした。

「まったくからつぽだ。」とクリストフは言いつづけた。「少しも音楽がない。発展がない。連絡がない。支離滅裂だ。ごく繊細な和声ハーモニーはある。ごく巧みなごくよい趣味の管弦樂から来る、小さな効果はある。しかしそんなのは、くだらないものだ、まったくくだらないものだ……。」

彼はまた聴き始めた。すると次第に、燈火が輝いてきた。薄ら明かりのうちには何かが見え始めた。そうだ、音楽の波の下に劇を沈めようとするワグナー派の理想に反対して、簡潔を旨とする意図がその中に含まれてることを、彼はよく理解した。しかしながら、そういう犠牲的な意図は、もっていないものを犠牲にするというところから来るのではないかと、彼はやや皮肉に疑ってみた。苦心することの恐れ、疲れを最も少なくして効果を得んとする試み、ワグナー派の力強い構成に必要な激しい努力を無精ぶしょうのためにあきらめたやり方、などを彼は作の中に感じた。平坦へいたんで簡単に穏やかで微温的な朗詠法に、心ひかれなくてもなかつたが、しかしどうも単調なように思われ、ドイツ人の眼では真実のものだとは考えられなかつた。——（彼が見て取つたところによれば、朗詠法が真実らしくなろうとすればするほど、いかにフランス語が音楽に不適當であるかをますます目立たせるのであつた。あまりに論理的で、あまりに形が正しく、あまりに輪郭がはっきりしていて、それ自身で完全な一世界をなしてはいるが、しかしそれも密閉された世界なのであつた。）——けれどもその試みは珍しいものであつた。クリストフは、ワグナー派の芸術の強調的な暴戾ぼうれいさにたいする、革命的反動のその精神に、喜んで賛成した。このフランスの音楽家は、あらゆる熱烈な感情をも声低くささやかせようと、皮肉な慎重さで努めたかのよう

だった。愛も死も叫び声を挙げはしなかった。作中人物の魂の中で行なわれてる動乱も、
 旋^{メロデー}律の線のかすかな震えによつて、口角の皺^{しわ}ほどの管弦樂のおののきによつて、伝え
 られてるのみだった。あたかも作者は身を投げ出すことを恐れてるかのようだった。彼は
 趣味の天才をもつていた——がただ、フランス人の心の中に仮睡しているマスナー式なも
 のが、眼を覚^さまして情緒を吐露するような瞬間は、別であった。そういう瞬間になると、
 あまりに金色な髪の毛やあまりに赤い唇^{くちびる}が——激しい恋に駆られてる第三共和時代の中流
 婦人が、現われてくるのであった。しかしそういうのは例外であつて、作者がみずから課
 した抑制のゆるんだがためだった。その他の部分には、精練されたる簡素さが、まったく
 の簡素ではなくて意志から来た簡素さが、古い社会の繊巧な花が、全体を支配していた。
 年少の「野蛮人」たるクリストフは、それを半ばしか味わうことができなかった。ことに
 劇の全体には、詩には、嫌^{いや}氣を催させられた。年増^{としま}のパリー婦人が子供の真似^{まね}をしてお伽^と
 噺^{ばなし}をしてもらつてるのを、眼に見るような気がした。それはライン河畔の大きな娘の
 ような、感傷的で愚鈍なワグナー流の駄々^{だだ}っ児^こではなかった。しかしこのフランス・ベル
 ギーの駄々^{だだ}っ児は、その愛^{あい}嬌^{きょう}やくだらなないお座敷道具——お河童^{かっぱ}さん、ちっちゃなパ
 パ、鳩^{はと}ぼつぽ——や、社交界の婦人らがよくやる思わせぶりなどをもつてしても、前者ほ

どの価値はもたなかった。パリー人の魂はこの劇の中に反映していた。そしてこの劇は、追従的な画面のように、彼らの萎靡した宿命観、化粧室の涅槃境、柔弱な憂鬱、などの象を映し出していた。意志の痕跡は少しもなかった。何が欲求されているのかだれにもわからなかった。何がなされるのかだれにもわからなかった。

「それは私のせいじゃない、私のせいじゃない!……」とその大きな子供たちは嘆いていた。永遠の薄明のうちに展開してゆく五幕——森、洞窟、地下道、死人の室——を通じて、ようやく小島の小鳥が幾羽かもがいてるのみだった。憐れなる小鳥よ! かわいい、温かい、ちまちまとした小鳥……。あまりに強い光、荒々しい身振りや言葉や熱情、生命、それを彼らはどんなに恐れていることだろう! しかし生命は精練されたるものではない。生命は手袋をもつてとらえられるものではない……。

かかる疲憊した文明を、この瀕死の小さなギリシャを、一掃しつくすような大砲のどどろきが来るのを、クリストフは期待していたのである。

それにもかかわらず、この作品にたいする同感の念をクリストフに起こさせたのは、傲慢な憐憫の感情であったろうか? それはとにかく、彼は心ならずも多くの興味を覚

えた。芝居の帰りにはシルヴァン・コーンへ向かつて、「ごく精巧だ、ごく精巧だ、しかし活気が欠けている、僕にとつては音楽が足りない、」と飽くまで答えはしたものの、フランスの他の音楽的作品とこのペレアスを、いつしよにしないように用心していた。霧の中にもっているその燈火に、心ひかれたのであった。その周囲にはさらに、怪しい他の光がちらついているのが見えていた。それらの鬼火に彼はいらだたせられた。近づいてその輝きぐあいを知りたかつた。しかしなかなかとらえがたかつた。それらの自由な音楽家らのものが、彼にはよくわからなかつたし、それだけにまたいつそう観察したかつたけれど、容易に近づけなかつた。クリストフは他人の同情を非常に求めていたが、彼らはそういう要求をもつていないしなかつた。一、二の例外を除けば、彼らは人のものをあまり読まず、人のものをあまり知らず、また知ろうともあまり望んでいなかった。ほとんどすべての者が、皆、実際にまたわざと、人を避けた孤独の生活をし、狭い圏内に閉じこもつていた——驕きょうまん慢まんの心から、粗野な性質から、嫌悪けんおの情から、又は淡々たる心情から。人数は多くなかつたが、敵対した小さな群れに分かれて、いつしよに生きることができなかつた。極端な猜疑心さいぎをもつていて、敵や競争者を許さなかつたのはもちろんのこと、もし友人が仲間外の音楽家を賞賛したり、またはあまりに冷やかなふうや、あまりに興奮した

ふうや、あまりに卑俗なふうや、あまりに非常識なふうやで、自分を賞賛してくれたりする時には、そういう友人をも許さなかった。彼らを満足させることは至難の業^{わざ}だった。彼らの各人はついに特許の批評家を一人任命してしまった。その批評家が偶像の足下で細心に監視の眼を見張っていた。偶像は少しでも手を触れることが許されなかった。——彼らは仲間うちだけから理解されていたが、それでもよい理解を受けてるというわけにいかなかった。味方の意見や自分自身の意見によつて、おもねられゆがめられて、自分の芸術および才能についての自覚をあやまっていた。愛すべき空想家も、みずから改革者だと信じていた。十二韻脚派の芸術家らも、ワグナーの敵をもつて自任していた。ほとんどすべて^{すべて}の者が、価値せり上げ競争の犠牲となっていた。前日飛び上がったのよりもさらに高く、ことに競争者が飛び上がったのよりもさらに高く、毎日飛び上がらねばならなかった。そういう高飛びの競争には、いつも成功するとうわけにいかなかった。そしてそれも、ある職業人にとつてしか興味がなかった。彼らは聴衆を念頭におかなかった。聴衆も彼らを念頭におかなかった。彼らの芸術は、公衆のない芸術であり、音楽と職業とだけでみずから養つてる音楽であった。しかるにクリストフは、真偽はともかくとして、フランスの音楽ほど他物の支持を必要としてる音楽は他にない、というような印象を受けた。他物にか

らんで伸びるこのしなやかな植物は、支柱なしに済ますことができなかつた。すなわち文学なしに済ますことができなかつた。自分自身のうちに十分の生活理由を見出していなかつた。息が短く、血が少なく、意志がなかつた。男子の手を待つてゐる弱り果てた女のようにだつた。しかし繊細な貧血的な身体をし宝石を飾りたててゐるこのビザンチンの皇后は、輕薄才子、美学者、批評家、などという多くの宦官かんがんにとり巻かれていた。ただ国民が音楽に通じていなかつた。ワグナーやベートーヴェンやバッハやドビュッシーなどのために、二十年来騒々しく発せられていた熱狂の叫びも、一つの階級以外にはほとんど伝わっていなかつた。音楽会の増加も、すべてを押し流す潮のような音楽熱も、公衆の趣味の實際の發達とはなんらの呼応がなかつた。ただ選ばれたる人々にはのみ触れて彼らを惑亂さしてゐる過度の流行にすぎなかつた。音楽はある一握りの人々からしかほんとうには愛されてはいなかつた。しかも、作曲家や批評家など最も音楽にたずさわつてゐる者らが、いつもその数にはいるのでもなかつた。真に音楽を愛する音楽家は、フランスにはいたつて少ないのだ！

そういうふうにはクリストフは考えていた。そして、どこもそのとおりだということ、ドイツにおいてさえ眞の音楽家はそうたくさんないということ、芸術において重要なのは、

無理解な多衆ではなくて、芸術を愛し矜ほこらかな謙讓をもつて芸術に奉仕する少数の者であること、などを彼はみずから考えなかつた。そういう少数者を、彼はフランスにおいて見かけなかつたのか？ 創作家や批評家——フランスがなしたように、現今の作曲家中最も天分ある人々がなしてゐるように、喧けんそう騒を離れて黙々と勉つとめてゐるすぐれた人々、やがてはある新聞雑誌記者に、発見の光榮と味方だと称する光榮とを与へはするが、目下は生しやうが涯いに埋やみもれている、多くの芸術家——なんらの野心もなく、自分自身のことも顧慮せず、過去のフランスの偉大さを築いている石を、一つずつほじくつてゐる勤勉な学者や、あるいは、自国の音楽教育に身をささげて、來たるべきフランスの偉大さを準備してゐる勤勉な学者などの、少数の一団、それを彼は見かけなかつたのか？ もし彼が知り得たら心ひかれたに違ひないような、宝と自由と普遍的な好奇とを有する精神が、いかばかりそこにあつたことであろう！ しかし彼は、そういう人々の二、三を、通りがかりにちらと見たにすぎなかつた。彼が彼らを知つたのは、彼らの思想の漫画を通じてであつた。芸術上の小猿こざるや新聞雑誌を渡り歩く小僧などによつて、まねられ誇張せられた彼らの欠点をしか、彼は見なかつたのである。

音楽上のそういう賤民せんみんらのうちにおいて、彼に悪感をことに起こさしたものは、彼ら

の形式主義であった。彼らの間においては、かつて形式以外のものが問題となったことがなかった。感情、性格、生命などについては一言も言われなかった。真の音楽家というものは、聴覚の世界に生きてること、その日々は音楽の波となつて彼のうちに展開していること、などに気づく者は彼らのうち一人もなかった。真の音楽家にとっては、音楽は自分が呼吸する空気であり、自分を包む空である。彼の魂自身がすでに音楽である。彼の魂が愛し憎み苦しみ恐れ希うところのもの、そのすべてが音楽である。音楽的な魂は、一つの美しい肉体を愛する時にも、それを音楽として見る。魂を魅惑する恋しい眼は、碧色あおでも灰色でも 褐かっしよく色しよくでもない。その眼は音楽なのである。魂はその眼を見て、快い和音と同じ印象を受ける。かかる内的の音楽は、それを表現する音楽よりもはるかに豊富である。そして楽器の鍵けん盤ばんは、それを演奏する鍵盤よりも劣っている。不完全な楽器たる芸術が喚起せんとする生命の力、それによつて天才は測られる。——しかしこのことを、フランスにおいてどれだけの人が感じているだろうか。化学者の集まりなるこの民衆にとっては、音楽は音響結合の術としか思われていない。彼らはアルファベットを書物だと思つては、芸術を理解せんがためには人間を抽出して除かなければいけない、と彼らが説くのを聞いた時、クリストフは肩をそびやかした。彼らはそういう逆説に、大なる満足を覚えていた。

それでもつて自分の音楽性が自認できると思つていたからである。グージャールまでがそうであった。この馬鹿者は、音楽のページを暗誦するためにはどうしたらいいか、かつて了解することができなかつた。——（その秘法をクリストフから説明してもらおうとしたことがあつた。）——が今では、ベートーヴェンの魂の偉大さやワグナーの肉感性などが、フランス音楽にたいして有する関係は、画家のモデルとその肖像画との関係以上のものではないと、彼に証明したがつていた。

「それは、」とクリストフはついに我慢しかねて答えた、「美しい肉体も君にとっては、大なる情熱と同じく芸術的価値をもつていないということを、証明することになるんだ。憐れな男だね！……偉大なる魂の美が、それを反映する音楽の美を増すと同じように、完全な顔だちの美は、それを描く絵画の美をいかに増すかを、君は思ひいたらないのか。……憐れな男だね！……職業だけにしか君は興味をもたないのか。細工さえうまくいっておれば、その意味なんかは君にはどうでもいいのか。……憐れな男だね！ 演説者が何を言つてるかは聴きもせず、その声の響きばかりを聴き、意味もわからずにその身振りをなごめ、そしていかにもりつぱにしゃべると感心する奴があるが、君もそういう連中なのか。憐れな男だ、憐れな男だ！……馬鹿な奴だな！」

しかしクリストフをいらだたせたのは、単に某々の理論だけではなくて、あらゆる理論であった。ビザンチン式の論争、永遠にそして単に音楽のことばかりを言う音楽家連中の会話に、彼は悩まされた。最良な音楽家にも音楽を嫌いやにならせるほどだった。音楽家も時々はその対位法や和声を捨てて、よい書物を読んだり人生の経験を積んだりする方がいいと、クリストフはムソルグスキーと同じようなことを考えていた。音楽家にとっては、音楽だけでは十分でない。音楽だけでは、時代を達観し虚無を超越するまでにはいたらないだろう……。人生だ！ 全人生だ！ すべてを見、すべてを知ることだ。眞実を愛し求め抱きしめることだ。眞実——接せつぶん吻くちゅしてくる者にたいして噛かみつく美しいアマゾンの女王ペンテジレアよ！

音楽討論会や和音製造店などは、もうたくさんだ！ それらの和声料理の饒じょうぜつ舌ぜつなんかは、怪物でなくて一つの生物たる新しい和声を発見する道をば、決して教えてくれないであろう。

クリストフは、壇びんの中に侏儒しゅじゆをでも孵化ふかさせるために蒸留器あたたを大事に温めてる、それからワグナー派の学者たちに背を向けた。そしてフランスの音楽界から脱出して、文学界とパリーの社会とを知ろうとつとめた。

クリストフがまず当時のフランス文学と近づきになったのは——フランスの大多数の人々と同じように——日刊新聞によつてであつた。彼は自分の語学を完成するとともに、できるだけ早くパリーの思想に通じたかつたので、最もパリーのだと言われてる新聞を、ごく丹念に読もうと努めた。第一日目に彼は、記事や写真で数欄を埋めてる恐ろしい雑報のうち、一つの短編小説を読んだ。十五歳になる娘といっしよに寝る父親のことが書いてあつた。ごく自然でまたかなり痛切なこととして叙述されていた。二日目には同じ新聞で、父親と十二歳になる息子とがやはり娘といっしよに寝る短編を読んだ。三日目には、兄と妹とがいっしよに寝る短編を読んだ。四日目には、二人の姉妹がいっしよに寝る短編を読んだ。五日目には……彼は嘔吐おうとを催して新聞を投げ捨て、シルヴァン・コーンに言った。「ああ、これはいっさいどうしたんだ？ 君たちは病気なのか。」

「それが芸術さ。」

クリストフは肩をそびやかした。

「冗談はよせよ。」

コーンはますます笑った。

「冗談なものか。まあこれを見てみたまえ。」

彼は芸術と道徳とに関する最近の調査を、クリストフに示した。調査の結果によれば、

「恋愛はすべてを神聖にす、」 「肉欲は芸術の酵母なり、」 「芸術は不道徳たり得ず、」

「道徳は偽善的教育によつて注入せられたる因襲なり、」ただ「大なる欲望」のみが問題である、などということになるのであつた。——遊蕩者の風俗を描いたある長編小説の

純潔さが、どの新聞を見ても、多くの文学者の書信によつて証明されていた。回答者のうちには、文学の大家や謹厳な批評家などがあつた。通俗で旧教的なある家庭詩人は、ギリシャの悪習のごく細密な描写に、芸術家としての祝福をささげていた。ローマ、アレキサンドリア、ビザンチン、イタリーおよびフランスの文芸復興、大世紀……などの各時代を通ずる放逸のありさまを勤勉に細叙してある小説に、多くの叙情的な称賛の辞が浴びせられていた。それらの小説には放逸の変遷が何一つ省かれていなかった。また他の一群の研究は、世界各国を包含していた。細心な作者らは、聖ベノア修道会員のような忍耐をもつて、世界五か所の遊蕩場の研究に身をささげていた。それらの快樂の地理学者や歴史家のうちの、秀でた詩人やりっぱな著作家が現われていた。人々が彼らを他人と區別して

るのは、ただその博識によつてばかりだった。彼らは完璧な措辞をもつて、古代の遊蕩を語っていた。

最も驚くべきことには、りっぱな人々や真の芸術家らが、フランス文芸界において正當な名声を博してゐる人々までが、まったく不適當なこの仕事に努力していた。ある人々は他人をまねて、朝刊新聞が切り売りする卑猥なものを書こうと苦心していた。彼らはそれを、一週に一、二回、きまつた日に規則正しく生み出してゐた。しかもすでに数年来引きつづいてることだった。彼らはもう何も言うことがなくなつても、でたらめな無作法な新しいものを頭からしぼり出しながら、やたらに生み出してばかりいた。公衆は食ベすぎて、いかなる料理にも飽いてしまい、やがて、最も淫蕩な快樂の想像をもつまらなく思うようになつてゐた。それでただ競り上げを、永久の競り上げ——他人よりもまさり自分自身よりもまさろうとする——を、なさなければならなかつた。そして彼らは自分の血をしぼり出し、自分の臟腑をしぼり出してゐた。それは痛ましいまた奇怪な光景であつた。

クリストフは、そういうあさましい職業の内幕に通じてゐなかつた。もし通じていても、そのために大目に見てやりはしなかつたであらう。なぜなら彼から見れば、銀三十枚のために芸術を売る芸術家ほど、世に許しがたいものはなかつたから……。

——愛する人々の生活を確かにしてやるためにでも、いけないのか。

——いけない。

——それは人情がないというものだ。

——人情があることが問題じゃない。一個の人間たることが問題なのだ。……人情だつて……毛色が変わった君らの人情こそ、憐れな^{あわ}ものだ。……人は同時に多くのものを愛するものではない、多くの神に仕えるものではない……

クリストフは、勤労な生活をしているうち、自分の小さなドイツの町の地平線から、ほとんど外に出たことがなかったもので、パリに展開されてる芸術上の腐敗は、ほとんどすべての大都会に共通のものであるということを、気づき得なかったのである。そして、

「ラテンの不道徳」にたいする「貞節なるドイツ」の遺传的偏見が、彼のうちに目覚め^{めざ}ていた。それでもシルヴァン・コーンはシュプレー河畔に起こっている事柄を、強暴なる性質のためにその醜事がさらに嫌悪^{けんお}すべきものとなつている、ドイツ帝国の選良階級の恐るべき腐敗を、クリストフの説にりっぱに対向せしめ得るはずであった。しかしシルヴァン・コーンはそれを利用しようとは思わなかった。彼はパリーの風俗に平気であるごとく、ベルリンの風俗にも平気であった。「各民衆にはそれぞれの風習があるものだ、」と彼は

皮肉な考え方をして、周囲の社会の風習を自然なものだと思っていた。それを見てクリストフは、それらの風習は民族本来の性質であるとまで考えた。ゆえに彼は同国人らと同じように、ヨーロッパの精神的貴族社会を呑噬どんぜいしつつある腐食のうちに、フランスの芸術に固有な悪徳を、ラテン諸民族の欠点を、見て取らずにはいられなかった。

パリーの文学とのこの初めの接触は、彼には心苦しいものだった。後にその心苦しさを忘れるまでには、多少の時間がかかった。とは言えそれらの作家の一人が、「基礎的娯楽の趣味」と高尚な名前をつけてるもの、それにばかり関係してるとはならないような作品も、ないではなかった。しかしその最もりっぱな最もよい作品は、クリストフの眼には触れなかった。それらの作品は、シルヴァン・コーンなどの連中に賛成を求めてはいなかった。それらは彼らを念頭においてはいなかったし、彼らもそれらを念頭においてはいなかった。両方ともたがい知らなかった。シルヴァン・コーンはかつて、そういう作の噂うわさをクリストフにしたことがなかった。彼は自分や自分の友人らがフランス芸術を代表してるのだと、真面目まじめに思い込んでいたし、自分らが偉人だと認めた者以外には、才能もなく、芸術もなく、フランスもないと、思い込んでいた。クリストフは、フランス文芸の名誉たりフランスの王冠たる詩人らについては、なんらの知るところもなかった。ただ数人の小

説家だけが、パレスとアナトール・フランスとの数冊の書が、凡庸ほんようの潮の上に浮き出して彼の手に達した。しかし彼はまだフランス語に十分慣れていなかったたので、後者の博識な皮肉、前者の頭腦的官能主義を、十分味わうことができなかつた。それでも、アナトール・フランスの温室の中に萌もえ出てる橙樹オレンジの鉢植えはちう、パレスの魂の墓地にのぞき出てる繊細な水仙花すいせんか、それらの前に彼はしばらく足を止めて珍しげにながめた。また、メーテルリンクのやや崇高でやや幼稚な天才の前にも、しばらく足を止めた。世俗的な単調な一つの神秘主義がそれから発散していた。彼ははつと飛びのいて、こんどは太い急湍きゅうたんの中に、前から知っていたゾラの泥深い浪漫主義ロマンチスムの中に、落ち込んでいった。それから出たかと思うと、文学の大汜濫はんらんの中にすっかりおぼれてしまった。

水に浸つたそれらの平野からは、女の匂いが立ちのぼっていた。当時の文学には、女性的男子と女子とがいっぱい群がっていた。——もし女が、いかなる男もかつて完全に見て取り得なかつたものを、すなわち女性の魂の奥底を、描写するだけの誠実を有するならば、女が文筆を執ることは結構である。しかしごく少数者のみがそれをなし得るのであって、大多数の女はただ男をひきつけんがためにのみ書いていた。彼女らはその客間におけると同じく、書物の中においても虚言者であつた。くだらない化粧に凝り読者と戯れていた。

自分のちよつとした不都合を語るべき聴罪師をもたなくなつてからは、それを公衆に語つていた。無数の小説が現われた。ほとんどいつも不貞なもので、いつも様子ぶつたもので、舌たるい言葉で書かれ、香水店の匂いのする言葉で、気のぬけた温かい甘い異臭のある言葉で書かれていた。その匂いが文学全体の中にもつていた。クリストフはゲーテと同じように考えた。「婦人には思うまま詩や小説を作らせて構わない。しかし男子は女のようなことを書いてはいけない。そういうことをする男子こそ、俺は嫌いだ。」その中途半端な愛嬌振り、そのいかがわしい仇つぽさ、最もつまらない人物のために好んで費やされるその感傷風、気取りと粗暴とでこね上げられたその文体、それらの野卑な心理学者を、彼は嫌悪の情なしには見る事ができなかった。

しかしクリストフは、自分にはよく判断できないことを知っていた。彼は言葉の市場から来る喧騒に耳を聳していた。笛の美しい節は喧騒の中に消え失せて、聞き取ることができなかつた。というのは、快樂を主としたそれらの作品の間にも、底の方に、アツチカのないならかな丘陵の線が清澄な空に微笑んでいないでもなかつた。——多くの才能と優美の生ノ楽しみ、文体の美しさ、または、ペルジノや若いラファエルの手になった、半ば眼を閉じて恋の夢に微笑んでいる憂わしげな青年にも似寄つた思想。しかしクリストフには

それが少しも見えなかった。精神の諸流を、何物も彼に示してはくれなかった。フランス人自身でも、それを知るのは困難であつたらう。そして、彼が確かに見て取り得た唯一のことは、著作の過多という一事だつた。あたかも社会的災難とも言えるほどだつた。男も女も将校も俳優も紳士も囚人も、すべての者が筆を執つてゐるかのようだつた。まったく一つの流行病だつた。

クリストフは意見をたてるのを一時断念した。シルヴァン・コーンのような案内者についていると、まったく道に迷つてしまふかもしれないような気がした。ドイツにおいてある文学会から得た経験にてらしてみると、どうも自信がもてなかつた。書物や雑誌にたいして疑惑があつた。それらは多くの閑人^{ひまじん}どもの意見だけを代表するものでないかどうか、あるいはただ作者だけの一人よがりでないかどうか、それがわからなかつた。芝居の方がずっと正確に、社会の実情を伝えてくれるのだった。芝居はパリーの日常生活に、法外な場所を占めていた。それは放縦^{ほうじゆう}な料理店だったが、それでもこれら二百万人の食欲を満足させるに足りなかつた。三十余の大劇場、その他四方にある小劇場、奏楽珈琲店、種々の見世物——每晚興行して毎晩ほとんど満員となる有余の小屋。多数の役者や事務員。政府の補助を受けてる四大劇場だけでも、三千人近くの専属人員と、千万フラン余

の費用。大根役者の人気ばかりで湧きたつてるパリー全市。一步ごとに眼に触れるものは、彼らのしかめ顔を示して、無数の写真や絵や漫画、彼らの鼻声を示して蓄音器、芸術や政治に関する彼らの意見を掲げて新聞。彼らはそれぞれ自分の新聞をもつていた。大胆な立ち入った覚え書きを発表していた。人真似まねをして時間をつぶす遊惰な大子供たるパリー人中で、それらの完全な猿さるどもが牛耳ぎゆうじを取つていた。そして劇作家らは、彼らの侍従となつていた。クリストフはシルヴァン・コーンに、反映と影との王国へ案内してくれと頼んだ。

しかしシルヴァン・コーンは、書物の世界におけると同じく、この世界においても安全な案内者ではなかった。クリストフが彼のおかげによって、パリーの芝居から受けた最初の印象は、最初の読書から受けた印象に劣らず不快なものであった。頭腦的ぼい売淫いんの同じ精神が、至るところに支配してようであった。

この快樂の商人のうちに、二派あつた。その一つは、おめでたい旧式で、国民式であつて、無遠慮な賤いやしい快樂、醜悪や貪欲どんよくや肉体的欠陥などの喜び、半裸体の人々、兵卒小屋の冗談、羹物あつものや赤胡椒こしよや油の乗つた肉や特別室——ふぎけきつた四幕のあとで、事件の錯綜さくそうによつて、欺あざむこうとしてる夫の寢床に正妻がはいるようなことになつて、法典

の勝利をもたらすがゆえに——（法律が救われるれば美德も救われるというのだ）——彼らの言葉に従えば、卑猥ひわいと道徳とを和解させんとする「男らしい淡泊たんぱくさ」——結婚に淫いんと蕩うの様子を与えながら結婚を保護する放逸な貞節さ——いわゆるゴール風なのであった。

他の一派は、近代式であった。前者よりはるかに精練されたとともに、またより嫌味いやみなものであった。パリー化されたユダヤ人ら（およびユダヤ化されたキリスト教徒ら）が芝居にうようよはいり込んで、衰退した世界主義の特徴たるいつもの感情の陰謀を、芝居に導き入れていた。父祖を恥じてる息子むすこどもが、民族の意識を打ち消さんとつとめていた。そしてうまく成功していた。古臭い自分らの魂を赤裸になした後、彼らに残ってる性格と言えば、他民族のあらゆる知的道徳的価値を混ぜ合わせるということばかりだった。彼らは諸種の民族で、一つのマケドニア人を、一つの雑炊を、作り上げていた。それが彼らの享樂方法だった。パリーの芝居の頭立かしちった人々は、汚辱と感情とをこね合わせることに、美德に悪徳の匂いを与えること、悪徳に美德の匂いを与えること、年齢や性や家族や愛情の諸関係をかき回すこと、などに秀ひいでていた。かくて彼らの芸術は、それ独特の臭みをもっていた。その臭みは、よいとともに悪いもので、言い換えれば、ごく悪いものだった。彼らはそれを「非道徳主義」と名づけていた。

彼らが当時好んで用いていた主人公の一人は、恋してる老人であつた。彼らの芝居には、そういう老人の姿がたくさん並んでいた。彼らはそういう類型的人物を描写するに当たつて、機微にわたる多くの事柄を並べたてていた。あるいは、六十歳にもなる主人公が、自分の娘を腹心の友としていた。彼は娘に自分の情婦のことを話し、娘は彼に自分の情人らのことを話した。二人は親しく相談し合つた。親切な父は娘の不品行を助けた。親切な娘は父の不貞な情婦に近づいて、もどつて来てくれるように懇願し、家へ連れ込んできた。あるいは、りつぱな老人が自分の情婦の内密話の相手になつていた。彼は彼女の情人らのことを彼女と噂し、彼女の放逸の話を懇望し、ついにはそれに愉快をさえ感ずるようになった。それからまた、情人らも出て来るのであつた。皆りつぱな紳士であるが、昔の情婦たちの雇い監督となり、彼女らの取り引きや情交などを監視した。社交界の婦人は盗み做事としていた。男子は媒介人であり、娘は淫猥^{いんわい}だつた。すべてそれらのことは、上流社会、富裕な階級——唯一の有力な階級、においてであつた。そういう社会においては、腐敗した商品を華美の魅惑に包んで、客に提供することができるからであつた。かく扮装^{ふんそう}して市場に立ち現われると、若い女や年取つた男どもが、それを非常に喜んだ。屍体^{しかたい}と後宮の臙脂^{えんじ}との匂いが、そこから発散していた。

彼らの文体も、その感情と同じく混成したものであった。彼らはあらゆる階級のまたあらゆる国の言葉から、一つの混合的隠語をこしらえていた。それは銜学的げんがくで、冗漫で、古典的で、叙情的で、気取りすぎた、嫌味いやみたらしい、下等なものであつて、外国的な調子をもつてるように思われる、駄法螺だぼらや穿ちうがや露骨や機知などの混和だった。彼らは皮肉であつて滑稽こっけいな氣質をそなえてはいたが、自然の機才をあまりもつていなかった。しかし器用だったから、パリ―風に機才をかなり巧みにこしらえ出していた。たとい宝石はいつても最も清く透きわたつてはいないとは言え、またその縁取りがたいいおかしな凝りすぎた趣味になつてるとは言え、少なくともそれは光を受くれば輝くのであつた。それだけで十分なのだつた。彼らはもとより伶俐れいりであつて、りっぱな観察者ではあつたが、その眼は商売生活のために数世紀来ゆがめられていて、顕微鏡で人の感情を調べ、細かな物を大きくなし、しかも虚飾を非常に好んで、偉大なものは少しも見えないので、実は近視眼的観察者であつた。それゆえ彼らには、その成り上がり者的な紳士気取りの考えによつて、上品な社会の理想だと思ふようなもの以外は、何一つ描くことができなかつた。盗み取つた金と無節操な女とを争つて享樂せんとする、疲れたる道楽者や冒険者などという一握りの人々のみだつた。

時とすると、ユダヤ的なそれら著作家等の眞の性質が、ある言葉の響きに一種の不思議な反響を返して、眼をさまし、彼らの存在の深みから表面にのぞき出してきた。するとそれは、幾多の世紀と人種との異様な混和であり、砂漠の息吹さいぶくきであつた。その息吹さいぶくきは海の彼方かなたからこれらパリーの寢所の中へ、種々のものをもたらしてきた、トルコ市場の悪臭の輝かがやき、種々の幻影、陶醉したる肉感、力強い罵ののしり、瘰けいれん癧いれんを起こしかけてる激しい神經痛、破壊にたいする熱狂、数世紀来影の中にすわっていたのが、獅子ししのように立ち上がつて、自分自身や敵人種の上に、奮然と殿堂の円柱を揺り倒す、かのサムソン。

クリストフは鼻をつまんで、シルヴァン・コーンに言った。

「力はこもつてるが、しかし臭い。たくさんだ。他ほかのものを見に行こう。」

「何を？」とシルヴァン・コーンは尋ねた。

「フランスをさ。」

「これがフランスだ。」とコーンは言った。

「そんなことがあるものか。」とクリストフは言った。「フランスはこんなものじゃない。」

「フランスもドイツと同じだ。」

「僕はそう思わない。こんなふうの国民なら、長くはつづくまい。もう腐った臭いにおがして
るから。まだ他に何かあるに違いない。」

「これ以上のものは何もないんだ。」

「他に何かあるはずだ。」とクリストフは強情を張った。

「そりゃあ、かわいい魂の人たちもいるし、」とシルヴァン・コーンは言った、「そういう人たちのための芝居もあるさ。君はそんなのが見たいのかい。それじゃ見せてあげてもいい。」

彼はクリストフをフランス座へ連れていった。

その晩は、法律問題を取り扱った散文の近代劇が演ぜられていた。

クリストフには最初からして、どういう世界でそれが起こってるのかわからなかった。俳優らの声はこの上もなく豊量で緩ゆるやかで莊重で嚴格だった。あたかも言葉づかいの稽古けいこをでも授けるかのように、あらゆる綴りつづりを皆発音していた。悲しい吃逆しゃくりとともにたえず十二音脚をふんでるかと思われた。所作は莊嚴でほとんど神前の儀式めいていた。ギリシヤの寛袍かんぼうのように仮衣をまとった女主人公が、片腕を挙げ、頭をたれて、やはりアンチ

ゴーネらしい演技方をしていた。そして持ち前の美しいアルトの最も奥深い音をまろばしながら、永久の献身を示す微笑をたたえていた。りっぱな父親は、痛ましい品位を示し、黒衣のうちに浪漫主義ロマンチズムの気味を見せて、剣術者めいた足取りで歩いていた。色男の立役者は、冷やかに喉のどをひきつらして涙をしぼっていた。一編の作は悲劇物語めいた文体で書かれていた。抽象的な言葉、お役所的な形容、官学的な比喩ひゆなどばかりだった。一つの動きもなければ、不意の叫びもなかった。始めから終わりまで時計のような組み立て、固定した題目、劇的図形、戯曲の骸骨がいこつであって、その上にはなんらの肉もなく、ただ書物的文句をつけてるのみだった。大胆らしく見せかけようとしたその議論の底には、臆病おくびょうな観念が潜んでいた。様子ぶった小市民の魂だった。

女主人公は、一人の子どもを設けてるつまらない夫と離婚して、愛してる正直な男に再婚したのであった。かかる場合においてさえ離婚は、偏見によってもそうだが、また自然からも罰せられるということを証明するのが、一編の主眼であった。それは実に容易なことであった。先夫がその女を不意に一度わが物にするようなふうには、作者はくふうしていた。そしてそのあとで、悔恨やおそらくは恥辱をも感ぜさせるとともに、それだけまたさらに強く、正直な男である第二の夫を愛したいという欲求を感ぜさせるはずの、ごく単純な自

然の道を取らないで、作者は自然を無視した勇壮な心境を提出していた。自然を無視してなら有徳たることも訳はない。フランスの作家たちは、美徳ということにあまり慣れていないらしい。彼らは美徳の話をする時には、いつでも無理なこじつけ方をする。どうにも信じようがない。あたかもコルネイユの英雄を、悲劇の王様を、いつも取り扱っているかのようなのである。——それらの富裕な主人公や、少なくともパリーに一つの屋敷と田舎いなかに二、三の別邸とをもっているそれらの女主人公は、王様と同じではないだろうか？ この種の作者にとつては、富裕は一つの美であり、ほとんど一つの美徳であるのだ。

観客は脚本よりもさらに不思議だった。いかなる不真実さにも彼らは驚かなかつた。面白い場所になつて、笑わせるべき文句を、笑う用意をする余裕を与えるために、俳優がまず予告しながら口にする時には、彼らは皆笑つた。また悲劇人形どもが、在来の型に従つて泣きじやくつたり喚わめいたり気絶したりする時には、彼らは感動のあまり涙を流して、鼻をかんだり咳せきをしたりした。

「だからフランス人は軽薄だと言われるんだ。」とクリストフは芝居から出て叫んだ。

「何事でもすぐにわかるものじゃないさ。」とシルヴァン・コーンは快活に言った。「君は徳操を見たがつてたが、フランスにも徳操があることはわかつたろう。」

「あんなのは徳操じゃない、」とクリストフは言い返した、「ただ雄弁というものだ。」
「フランスでは、」とシルヴァン・コーンは言った、「芝居の徳操はいつも雄弁なんだ。」
「裁判所の徳操なら、」とクリストフは言った、「いちばん饒舌な者が勝つにきまつてるさ。僕は弁護士が嫌いだ。フランスには詩人はいないのか。」

シルヴァン・コーンは彼を詩劇へ連れていった。

フランスには詩人がいた。偉大な詩人さえもあつた。しかし芝居は彼らのためのものではなかつた。三文詩人のために存在してるのであつた。芝居と詩との関係は、歌劇と音楽との関係と同じである。ベルリオーズが言ったように、娼家と恋愛との関係である。

クリストフは種々のものを見た。身を売るのを名譽としていて、十字架に上るキリストに比較されてる、清浄によつて娼婦たる貴婦人——忠実なるあまり友人を欺いてる男——貞節なる三角関係——妻に裏切られてる雄々しい夫（この類型は、純潔なる売笑婦と同様、全歐的の題目となつていた。マルク王の例は彼らを熱狂させていた。聖フーベルトの鹿のように、彼らはもはや円光をいただいでしか現われなかつた）——クリストフはまた、シメーヌのように恋と義理との板ばさみとなつて浮気娘をも見た。恋は新しい情婦のも

とに走ることを求め、義理は古い男のもとにとどまることを求めていた。古い男というのは、彼女に金を与えてる老人で、もとより彼女から欺かれてるのであった。終わりになると彼女はいつも敢然として、義理の方に従うのであった。——クリストフは、その義理なるものは汚らわしい利害と大差ないものだと思った。しかし観客は満足していた。義理という言葉だけで十分なのであった。実物はどうでもよかった。保証のしるしがついてるだけでした。

情欲的な不道德とコルネイユ風の勇侠ゆうきやうとが、最も矛盾した方法で一致し得る時に、芸術の極致に達するのであった。かくてこのパリーの観客は、精神の放逸じやうぜつも、操も、すべてにおいて満足させられていた。——それには無理からぬ点もあった。彼らは放逸ではあるがさらにより多く饒舌じやうぜつだった。雄弁じゆうべんに出会うと恍惚こうこうとなるのだった。りっぱな演説を聞くためなら鞭打むちたれても構わないほどだった。美德にせよ悪徳にせよ、すてきな勇侠ゆうきやうにせよ卑猥ひわいな下劣げらうにせよ、調子のよい脚韻きゃくうんと響ひびきのよい言葉とで飾られる時には、彼らはどんな物でも丸飲みにした。あらゆるものが対句たいくの材料となった。すべてが文句だった。すべてが遊戯ゆうぎだった。ユーゴーはその霹靂へきれきの声を聞かせようとする時、すぐに弱音機を用いて（彼の使徒たるマンデスが言ったように）小さな子供をも驚かすま

いとしたり。（この使徒はそれを賞賛のつもりで言ってるのだった。）——フランス詩人の芸術のうちには、自然の力が感ぜられることはかつてなかった。彼らはすべてを世間風になした、恋愛も苦悶も死をも。また音楽におけると同じように——フランスにおいてはまだ年若い比較的素朴な芸術である音楽におけるよりも、さらにはなはだしく——彼らは「すでに言われたこと」にたいして恐怖をいだいていた。最も天分に富んだ詩人らは、逆の道を取ろうと冷静に努めていた。その方法は簡単だった。伝説か童謡かを選んで、それらに本来の意味と正反対なことを語らした。かくて、青髭はその妻たちから打たれ、ポリフェモスはみずから善意をもって眼をえぐって、アシスとガラテアとの幸福のために身を犠牲にした。すべてそれらのものうちには、形式以外にはなんらの真面目さもなかった。クリストフ（彼はよく理解してない批判者であつたらうけれど）の眼から見れば、それら形式の大家らは、おのれの文体を創造して縦横に描写する大作家というよりも、むしろ小作家であり模造大家であるように思われた。

彼らの勇武劇の中には、詩的虚偽がこの上もなく横柄に現われていた。彼らは英雄と
いうものについて、滑稽な観念をいだいていた。

壮大なる魂、驚わしの眼まなざし差、

前廊の如く広く高ひたき額たい、

魅力ある輝かしき剛ふう壯なる風貌ぼうぼう、

戦おのきに満みてる心、夢に満みてる眼、

そを持つこそ肝要なれ。

かかる詩句が真ま面目めに受け取られていた。大袈裟おおげさな言葉や羽根飾り、ブリキの剣と厚紙の兜かぶとをつけた芝居がかりの空威張からいばり、そういう扮装ふんそうの下にはいつも、操あやつり人形のギニョル式に歴史をもてあそんでる無謀なヴォードヴィル作者サルドウー流の、救済しがたい軽薄さが見て取られるのであった。シラノのごとき虚きよ妄もうな勇武に相当するものが、現実げんじつにあり得るだろうか。しかもこの詩人らは、驚天動地の業わざを演じていた。皇帝とその軍団、神聖同盟の軍勢、文芸復興期の傭兵ようへいなど、宇宙を荒した人類の旋風をことごとく、その墳墓から引き出していた——それも、残酷な軍隊と囚とらわれの婦女らに取り囲まれ、殺戮さつりくのさなかにあつても平然として、十年か十五年か前に見た一婦人にたいする、空想的な馬鹿げた恋で身を焦がしてあるある傀儡かいらいを、示さんがためであつた——あるいは、恋人に愛

されないからといって、わざわざ死地に身をさらしてゐる国王アンリー四世を、示さんがためであった。

かくてその薄野呂うすのろな人々は、国王や英雄らの室内劇をやっていた。キロス大王の時代の有名な馬鹿者ども、理想的なガスコン人ども——スキュデリーやラ・カルプルネード——のふさわしい後裔こうえいであり、真の英雄主義の敵たる、あり得べからざる虚偽の英雄主義の謳歌者おっかであつた……。フランスは慧敏けいびんだと自称してゐるくせに、滑稽こっけいにたいしては少しも感じがないということをして、クリストフは見て取つて驚いた。

何よりもいけないのは、宗教が流行してゐる時だつた。当時、四旬節祭の間、俳優らがゲート座で、オルガンの伴奏につれて、ボシユエの説教を読んでいた。イスラエル式の作者らが、イスラエル式の女優のために、聖テレザに関する悲劇を書いてゐた。ボデイニエール座では十字架への途が演ぜられ、アンビギユ座では幼きキリストが、ポルト・サン・マルタン座では御受難が、オデオン座ではイエスが、動植物園ではキリストに関する管絃樂の組曲が、それぞれ演ぜられてゐた。ある華々はなばなしい話し手が、豊艶ほうえんな恋愛の詩人が、シャートレー座で贖罪について講演をしてゐた。もとより、これらの俗人らが福音書中で最もよく頭に留めてゐるのは、ピラトとマグダラのマリアとであつた——「真理とはなんぞ

や？」と狂気の処女とであった。——そして広場を彷徨する彼らのキリストは恐ろしく饒舌で、世間的良心批判のごく機微な点にまで通じていた。

クリストフは言った。

「これはいちばんひどい。虚偽の化身だ。僕は息がつけなくなる。出て行こう。」

それでも、偉大な古典芸術が存在していた。現代ローマの気障な建築物中における、古代殿堂の廃址のように、それは近代の工芸品の中にそびえ立っていた。しかしクリストフは、モリエールを除いては、それを鑑賞し得るまでになつていなかった。彼には言葉の深い意味がわからなかった。したがって、民族の特性がつかめなかった。十七世紀の悲劇くらい彼にわかりにくいものはなかった。それはちょうどフランスの中心に位しているがためにかえって、外国人にとつては最も近づきたいフランス芸術の田舎だった。クリストフから見ると、それはたまらなく退屈なもので、冷淡乾燥で、嬌媚や術学を事としてる嫌味なものだった。貧弱なあるいは無理な筋の運び、修辞学の議論みたいに抽象的な、あるいは社交婦人の会話みたいに実のない人物。古い主題と主人公との漫画。理性と理屈と空論と心理と時代後れの考古学との陳列。議論に議論に議論、フランス流のはてしない饒舌。それがりっぱであるかどうかを、クリストフは皮肉にも判断することを拒んだ。

彼はそういうものに少しも興味を覚えなかった。シンナの演説者らによって代わる代わる主張される問題がたといなんであろうと、それら議論機械のいずれが最後に勝利を占めるかは、彼にとつてまったく無関係だった。

そのうえ彼は、フランスの観客が自分と同意見でないこと、たいへん喝采かつさいしてゐることを、見て取ったのである。しかしそれは、彼の誤解を一掃する役にはたたなかつた。彼は観客を通じて芝居を見ていた。そして、古典者流のある変形した特質を、近代フランス人のうちに認めた。あまりに明徹な眼が、婀娜あだな老婦人のしぼんだ顔のうちに、その娘の純粹な顔だちを見て取るがよくなものだった。そういう観察は、恋の幻を生ぜしむるにはあまり適しないものである……。たがいに顔を見馴みなれてる一家族の人々のように、フランス人はその類似さに気づかないでいた。しかしクリストフはそれにびつくりして、それを誇張していた。もはやその類似をしか眼に止めなかつた。現代の芸術は、偉大な祖先の漫画を示しているように思われた。そして偉大な祖先自身も、彼の眼には漫画として映じた。崇高な荒唐無稽こうとうむけいな心境を至るにもち出そうと熱中してる、末流の詩的修辭家らと、本物のコルネイユとを、彼はもはや区別しなかつた。またラシーヌも氣障きざな態度で自分の心をのぞいてるパリーの群小心理家らの末流と、混同して考えられた。

それらの老書生らは、少しも古典芸術の外に踏み出さなかった。批評家らは際限もなくタルチュフやフェードルについて議論をつづけていた。それに少しも飽きることがなかった。老人になつてからも、子どもの時に面白がつた同じ冗談に笑つていた。民族がつづく最後までそのとおりかもしれない。およそ世界のいかなる国でも、祖先崇拜の情をそれほど根深く維持してゐるものはなかった。宇宙のうちで祖先以外の他の部分は、彼らになんらの興味をも起こさなかつた。いかに大多数の者が、フランスにおいて大王の御代において書かれたもの以外は、何一つ読んでいなかつたし、何一つ読みたがらなかつたことだろう！ 彼らの芝居には、ゲーテも、シルレルも、クライストも、グリルパルツェルも、ヘッベルも、ストリンドベリーも、ローペも、カルデロンも、他国のいかなる偉人の作も、演ぜられていなかつた。ただ古代ギリシャの物だけは別だつた。彼らは古代ギリシャの後継者だと自称してゐた——（ヨーロッパのあらゆる国民と同様に）またごくまれにシェイクスピアを取り入れたがつてゐた。それは試金石だつた。彼らのうちには演戯上の二派があつた。一方では、エミル・オージエの劇のように、通俗的な写実主義をもつて、リヤ王を演じてゐた。他方では、ヴィクトル・ユーゴー式の声太な勇ましい調子で、ハムレットを歌劇オペラにしてゐた。現実も詩的であり得ること、生命にあふれた心にとつては詩も一の自

発的言語であること、などを彼らは思い及ばなかった。そしてシエイクスピヤは虚偽のよ
うに思われて、また急いでロスタンに立ちもどつていた。

けれどもこの二十年來、芝居を改革するために努力が尽くされてきた。パリー文学の狭
い範囲は広げられていた。大胆を装つてすべてに手が触れられていた。外部の変動が、一
般の生活が、恐ろしい力で慣習の幕を押し破つたことも、二、三度あつた。しかしながら、
その裂け目はまた急いで縫い合わされた。ありのままに事物を見ることを恐れてる、氣の
小さな父親らであつた。社会の精神、古典的伝統、精神と形式との旧習、深い真摯しんしの欠乏、
などは彼らをして、その大胆な試みを最後まで押し進めることを許さなかつた。最も痛切
な問題も巧みな遊戯となつた。そしていつも帰するところは婦人——つまらない婦人——
の問題であつた。イブセンの勇壮な無秩序、トルストイの福音、ニーチエの超人など、偉
大な人々の影法師が、彼らの舞台でなんと悲しげな顔をしていたことだろう！……

パリーの著作者らは、新しいことを考へてゐる様子をするのに、たいへん骨折つていた。
が根本は皆保守的であつた。大雑誌、大新聞、政府補助の劇場、学芸会などのうちにあつ
て、過去が、「永遠なる昨日」が、これほど一般的に君臨してゐる文学は、ヨーロッパに他
に例がなかつた。パリーが文学における關係は、ロンドンが政治におけるのと等しかつた。

すなわちヨーロッパ精神の調節機であった。フランス翰林院かんりんいんは、一つのイギリス上院であった。旧制に成っている幾多の制度は、その古い精神を新しい社会に飽くまで課そうとしていた。革命的な諸分子は、すぐに排斥されるか同化されるかした。そうされるのがまた彼らの本望でもあった。政府は政治上では社会主義的態度を装よそおっていたが、芸術上では、官学派の導くままになっていた。人々は諸学芸会にたいして民間の団体としてしか争わなかつた。それもへまな争い方だつた。なぜなら、団体の一人がある学芸会にはいり得るようになる、すぐにそれへはいり込んで、最もひどく官学風になるからであつた。そのうえ、ある軍隊の前衛にしようが後列にしようが、作者はその軍隊の捕虜ほりよであり、その軍隊の思想の捕虜であつた。ある者は官学的な信条のうちに蟄居ちつきよし、ある者は革命的な信条のうちに蟄居していた。そして結局は、いずれにしても同じ目隠しであつた。

クリストフの眼を覚さませるために、シルヴァン・コーンはまた特殊な芝居へ連れて行くと言ひ出した——精練の極致たる芝居へ。そこでは、殺戮さつりく、強姦ごうかん、狂暴、拷問、えぐり出された両眼、臟腑ぞつぷをぬき出された腹など、あまりに開化した選良人らの神経を刺激し、隠れたる野蛮性を満足させるようなものが、見られるのであつた。美しい女や当世

風の才士などからなる観客——裁判所の息苦しい室の中に午後じゆうはいり込んで、しゃべったり笑ったりボンボンをかじったりしながら、破廉恥な裁判を傍聴するのと、同じような奴ら——に、それは非常な魅力を及ぼしていた。しかしクリストフは、憤然としてそれを拒んだ。この種の芸術にはいり込めばはいり込むほど、臭気ますますはつきりしてきて、やがて彼をとらえ、ほのかに匂つてたのが、次に執拗しつようになり、息苦しいほどになつてきた。それは死の臭気だつた。

死、それはかかる華麗と喧騒けんそうのもと至るところにあつた。それらのある作品にたいしてただちに嫌悪けんおの情を感じたのが、なにゆえであるか今やクリストフにわかつた。彼を不快ならしめたのは、その不道徳ではなかつた。道徳、不道徳、非道徳——そういう言葉は皆なんらの意味をもなさない。クリストフはかつて道徳論をたてたことはなかつた。彼は過去のうちに、ごく偉大な詩人と音楽家とを愛していた。しかしそれらはけちな聖者ではなかつた。彼は偉大な芸術家に出会う機会を得る時、告白録を尋ねはしなかつた。むしろこう尋ねた。

「あなたは健全ですか。」

健全であること、それが万事だつた。ゲートルは言った。「もし詩人が病んでるなら、ま

ず回復することから始めるがよい。回復したら、その時に書くがよい。」

パリーの著作者らは病氣になつていた。あるいは、健全な者はそれを恥として、健全なことをみずから押し隠し、りっぱな病氣にかかろうとつとめていた。彼らの病氣は、その芸術の何かの特質に現われてはしなかつた——快樂の嗜好しじょうに、思想の極端な放逸しょうさに、破壊的な批評精神に、現われてはしなかつた。すべてそれらの特質は、健全でも不健全でもあり得るのであつた——場合によつては、實際にそうであつた。その中には死の萌芽ぼうがは少しもなかつた。もし死があるとしても、それはそういう力から来たものではなかつた。それらの人々の力の使い方から来たのであつた。それらの人々の中にあるのであつた。——そして彼クリストフもまた、快樂を好んでいた。彼もまた自由気ままを好んでいた。彼はかつて種々意見を率直に述べたために、故郷の小さなドイツの町で不評を買つたことがあつた。ところが今では、それらの意見がパリー人らによつて唱道けんおされているのを見出し、そしてパリー人らによつて唱道けんおされると、今では嫌悪けんおの情を感じた。それにしても意見は同じものだつた。しかしながら同じ響きをたててはいなかつた。クリストフがいらだつて、過去の大家らの軛くびきを払いのけた時、パリーの審美眼と道徳とにたいする征途にのぼつた時、それは彼にとつて、これらの才人らにとつてのようになつた一つの遊戯ではなかつた、彼は真摯しんし

だった、恐ろしく真摯だった。そして彼の反抗の目的は、生命だった、来たるべき幾世紀間にわたる豊饒な巨大な生命だった。ところがこれらの人々にあつては、すべてが無益な享樂のみに向かつていた。無益、無益。それが謎を解く鍵であつた。思想と官能との不妊的な放蕩。機才と技巧とに富んだはなやかな芸術——確かに美しくはある形式、外国の影響を受けてもなお巍然とそびえてる美の伝統——芝居としての一つの芝居、文体としての一つの文体、おのれの業をよく知つてる作者、書くことを知つてる著作者、かつて強健であつた芸術の、思想の、かなり美しい骸骨。が要するに骸骨だった。音色のよい言葉、響きのよい文句、空虚の中でぶつかり合う諸観念の金属的な軋り、機知と戯れ、肉感の纏綿してゐる頭脳、理屈っぽい感覚。すべてそれらのものは、なんの役にもたつていなかった、利己的な享樂以外にはなんの役にもたつていなかった。死へ向かいつつあつた。全ヨーロッパがひそかに観察し——喜んで——いる、フランスの恐るべき人口減少と類似の現象だった。多くの才と知力とが、多くの精練された官能が、一種の恥ずべき自洗行為のうち消費されていた。彼らはそのことに少しも気づかなかつた。彼らは笑つていた。しかしその一事こそ、クリストフを安心させたことだった。彼らもなおよく笑うことを知つていたので。すべてが失われたのではなかつた。彼らが真面目な顔をしたがる時には、

彼は彼らをあまり愛せられなかった。芸術のうちに快楽の道具をしか求めていないような著作家らが、無私無欲な宗教の牧師らしいふりを装よそおうのを見るくらい、彼の気色を害するものはなかった。

「われわれは芸術家だ。」とシルヴァン・コーンは満足げにくり返していた。「われわれは芸術のために芸術をこしらえてるんだ。芸術は常に純潔である。芸術の中にあるものは清浄なものばかりである。何事にも面白がる漫遊者として、われわれは人生を探究してるんだ。われわれは珍しい悦楽の愛好者であり、美を慕う永遠のドン・ファンである。」

「君らは偽善者だ。」とついにクリストフは用捨なく答え返した。「あえて言うのを許してくれ。僕は今まで、僕の国だけが偽善者の国だと思っていた。ドイツ人は偽善者であつて、常におのれの利益を追求しながらいつも理想を口にしてるし、利己的なことばかり考へながら理想主義者だと自信している。しかし君らはさらにひどい。芸術と美とおおげさに祭り上げた芸術と美と）の名のもとに、国民的淫いんいつ佚おほを覆い隠している——しかも一方には、真理だの科学だの知的義務などの名のもとに、道徳的ピラト主義を押し隠しもしないくせに。君らの真理や科学や知的義務などは、そのいかめしい探究の可能的結果については、口をぬぐつて関せず焉えんとしている。芸術のための芸術だつて……なるほどりっぱ

な信念だ。しかしそれは強者のみの信念だ。芸術！ それは驚が餌食をつかむように、人生をつかみ取り、それを空中に運び去り、それとともに清朗な空間に上昇することだ。…：そのためには、爪と大きな翼と力強い心とが必要だ。しかし君らは小雀にすぎない。一片の腐肉を見出すと、即座にそれをつつついて、ちゅうちゅう鳴きながら争っている…：、芸術のための芸術だつて！…：災なるかなだ。芸術というものは、いかなる賤しい風来人にも渡される賤しい餌ではない。確かに一つの享樂であり、最も人を陶醉させる享樂ではある。しかしながら、激しい闘いによつてのみ得られる享樂であり、力の勝利を冠する月桂樹である。芸術とは、征服せられたる人生なのだ。人生の帝王なのだ。シーザーになりたくば、シーザーの魂をもたなければならぬ。君らは芝居の上の王様にすぎない。君らはただ役割だけを演じている。役割を信じてさえもない。そして、自分の畸形を誇る役者のように、君らは君らの畸形で文学を作っている。自国民のあらゆる病氣、努力の恐れ、快樂の嗜好、肉感的な觀念、空想的な人道主義、意志を快く麻痺させて、あらゆる活動の理由を奪い去るもの、そういうものを大事に育て上げている。阿片喫煙所へばかり案内したがっている。そして君らはよく知っていないながら、決して口には言わない、最後には死が控えていることを。——そこで僕が言つてやろう、死が存在するところには芸術は

存在しないと。芸術、それは人を生きさせるものだ。しかし君らの著作者は、最も正直な者でさえも、いかにも卑怯ひきょうで、蔽眼布めかくしが眼から落ちた時でさえ、見えないふうを装よそおっている。彼らは厚かましくもこう言っている。

『それが危険であることは僕も認める、中には毒がある。しかし才能に富んでるではないか！』

あたかも軽罪裁判所で一無頼漢について判事が言うように、

『此奴こいつは悪者には違いない。しかしなかなか才能のある奴やつだ！』

クリストフは、フランスの批評界はいつたいなんの役にたつかを怪しんだ。とって、批評家がいなかった。批評家は芸術家の方面にうようよしていた。多くの作品は人に見られることができなくなっていた。作品は批評家らの下に埋もれていた。

クリストフは概して、批評界にたいして穏和ではなかった。近代社会中に第四もしくは第五階級のごときものを形成している、この無数の芸術批評家らの有用さを、彼はなかなか認めることができなかった。彼はそこに、人生をながめる務めを他人に譲つて——他人の代理となつて感じて——一つの疲弊した時代の徴候を、見て取っていた。時代が自

分の眼をもつて、人生の反映たる芸術を見ることさえできなくなり、なお他の仲介者を、反映の反映を、一言にして言えば批評家を、必要としているということに、彼は多少恥辱を感じていた。それはしごくもつともなことだった。少なくともそれらの反映は、忠実なものであらねばならなかった。しかしそれらは、周囲に並んでる群集の不安定さをしか、映し出してはいなかった。あたかも、自分の姿を見ようとする好奇な連中の顔を、彩色の天井とともに映し出してる、あの博物館の大鏡のごときものだった。

ある時代において、それらの批評家がフランスで非常な權威を得た。公衆は彼らの判定の前に低頭した。そして彼らを、芸術家よりもすぐれた者だと、賢明な芸術家だと――

(この両語は調和しがたく思われるが)――見なすほどになった。それ以来批評家らは、はなはだしく増加した。彼らはあまりに占考者じみていた。そのために本来の職務が煩わされた。各自に自分だけが唯一の真理の占有者だと主張する者どもが、非常に多くある時には、人はもはや彼らを信じ得られなくなる。そしてついには彼らも、もはや自分自身を信じられなくなる。かくて絶望が到来した。例のフランス流によって彼らは朝三暮四、極端から極端へと移り変わっていつて、すべてを知っていると公言したかと思えば、すぐあとでは何にも知らないと公言した。彼らはそれを名譽にかけて言い、また自惚うぬぼれをもつてさえ

言つた。何事かを肯定してあとですぐにそれを否定しないのは、あるいは少なくともそれに疑問をつけないのは、上品なやり方ではないということ、それらの柔惰な者どもはルナンから教え込まれていた。「常に然り然りであり、その次に否々である、」と聖パウロが評したような人物に、ルナンは属していた。フランスの選良な人々は皆、この水陸りよう両りよう棲せい的な信条に心酔していた。精神の遊惰と性格の柔弱とは、それをいいことにしていた。彼らはもはや一つの作品について、良いとも悪いとも、真まだとも嘘うそだとも、賢いとも愚かだとも、言わなくなつた。彼らはこう言つた。

「そうかもしれない……そうでないとも言えない……俺おれにはわからない……俺はごめんこうむろう。」

もし淫いん猥わいな芝居が演ぜられていても、「これは淫猥だ、」とは彼らは言わなかつた。彼らはこう言つた。

「スガナレルさん、どうかそういう言い方は変えてください。私どもの哲学によると、なんでも不確実に言わなければなりません。それですから、『これは淫猥だ、』と言つてはいけません。『私には……どうも、これは淫猥のように思われる。……しかし、確かにそうだというのではない。あるいは傑作であるかもしれない。傑作でないとはだれにも言え

ない。』と言わなければいけません。」

そこにはもはや、芸術にたいして暴慢だとの咎めとがを受ける危険はなかった。昔、シルレルは彼らに教えをたれたことがあった。彼は当時の雑誌新聞記者らを、用捨もなくけちな暴君と呼んで、次の事柄を頭に入れさした。

婢僕ひぼくの本分

何よりもまず、女王の出御される家が、きれいになつていなければいけない。気をつけて、室々そうじを掃除せよ。そのために諸君はここにいるのだ。

しかし女王が出御されたならば、すぐに退さがつてしまえ。女王の椅子いすに、召使風情ふせいが腰をおろしてはいけない。

ところが、現今の批評家どもは許してやらなければならなかった。彼らはもはや女王の椅子に腰掛けてはいなかった。婢僕たることを求められたので、すなわち婢僕となつていった。——しかし悪い婢僕だった。彼らは少しも掃除しなかった。室は散らかつていった。彼らは室を片づけ清潔にするよりは、むしろ腕をこまねいて、自分の仕事を委ゆたねていた、主

人に、当時の神に——普通選挙に。

実のところ、少し以前から、当時の無政府的無気力さにたいして、反動の気運が起こっていた。ある真面目な人々は公衆の衛生を目的とした戦いを——まだごく微弱なものではあったが——企てていた。しかしクリストフは、自分の周囲にそういう様子を少しも見出さなかった。そのうえ、人は彼らに耳を貸さなかった、もしくは彼らを嘲笑っていた。時々ある強健な芸術家が、一般にもてはやされる芸術の不健全な愚劣さにたいして、反抗の氣勢を示すと、その作者らは傲然として、公衆が満足してる以上は自分の方が正当だと答え返した。非難の口をつぐませるにはそれで十分だった。公衆がそう言ったのだ。それは芸術の最上の審判なのだ！そして、公衆を腐敗させた人々のためにする腐敗した公衆の立証は、拒否してかまわないこと、また、芸術家は公衆に命令するためにあるものであって、公衆が芸術家に命令するものではないこと、それにはだれも思い及ばなかった。数——客と収入額との数——にたいする崇拜が、この商売人化された民主主義の芸術観を支配していた。作者らのあとについて、批評家らも従順に、芸術品の本務は人を喜ばすことだと、宣言していた。成功が掟であった。成功がつづく間は平伏するのほかはなかった。かくて批評家らは、快楽の相場の変動を予知しようと、作品にたいする公衆の意見をその

眼色で読み取ろうと、つとめていた。またおかしなことには、公衆の方でも、作品をどう考えていいかを、批評家の眼色で読み取ろうとつとめていた。そして両方から眼を見合わしていた。しかもたがいの眼の中には、自分自身の不決断が見て取られるばかりだった。

けれども、大胆な批評が最も必要な場合であった。無政府的共和国にあつては、万能である流行が、保守的な国におけるように退転することは、めったにあるものではない。流行は常に前進してゆく。そして精神的似而非自由えせが、たえずせり上がってゆく。それにはほとんどだれも抵抗しようとしめない。群集は本音を吐くことができない。心の底では不快を感じているが、しかしだれもあえて、自分がひそかに感じてることを言い得ない。ここでもし批評家が強かつたならば、あえて強くあり得たならば、いかなる権威を彼は握るところだろう！ 頑強がんきょうな批評家は数年のうちに、（と若い専制者クリストフは考えた、）一般趣味のナポレオンとなることもでき、芸術のあらゆる病人をピセートル療養院へ追い払うこともできるかもしれない。しかし、もはやナポレオンは存在しない。……第一、批評家らは皆、腐敗した空気の中に住んでいる。しかもそれに気づかなくなっている。次に、彼らにはあえて語り得ない。彼らは皆知り合っていて、小さな仲間を形造っていて、たがいに遠慮しなければならなくなっている。独立してる者は一人もない。独立せんがためには、

組合生活を捨て、友誼ゆうぎをも捨てなければならぬだろう。それだけの勇氣を、この柔弱な時代にだれがもつてゐるだろうか？ 率直な正しい批評は、それをなす者がこうむることのある不快事を、償い得るものであるかどうかを、最も優良な人々でさえ疑つてゐる時代なのだ。本分のために自分の生活を火宅となし得る者が、だれかあるだろうか？ あえて世論に対抗し、一般の愚蒙ぐもうと戦い、現時の勝利者らの凡庸ぼんようさを暴露ばくろし、馬鹿者どもの手中に渡されてゐる無名孤独な芸術家を擁護し、服従をのみ知つてゐる人々の精神に帝王の精神を課し得る者が、あるだろうか？——劇場の廊下で初日の晩に、批評家らが言い合つてゐる言葉を、クリストフはふと耳にすることがあつた。

「どうだい。まずいね。失敗だね。」

しかも翌日になると彼らは、傑作だとか、新しいシエクスピヤだとか、天才の羽ばたきが頭上をかすめたなどと、新聞記事の中で言つてゐた。

「君らの芸術に欠けてゐるものは、」とクリストフはシルヴァン・コーンに言つた、「才能よりもむしろ性格だ。君らに多く必要なのは、偉大な批評家であり、レツシングであり、また……。」

「ボアローかね？」とシルヴァン・コーンはひやかして言つた。

「おそらくそうだ。十人の天才芸術家よりも一人のボアローだ。」

「ボアローがいたって、」とシルヴァン・コーンは言った、「だれも耳を貸すまいよ。」

「耳を貸す者がいないとすれば、その男がボアローでないからだ。」とクリストフは答え返した。

「僕は誓っておくが、もし僕が君らの赤裸々な実相を言つてやろうと思つたら、その時こそは、いかに僕が無器用であるにせよ、君らに耳を傾けさせないではおかない。かならず君らに丸飲みにさせてみせる。」

「そうかねえ。」とシルヴァン・コーンは冷笑した。

彼は公衆一般の柔惰にいかにも意を安んじ満足してる様子だったので、クリストフは彼をながめながら、この男は自分よりはるかにフランスにたいして門外漢だなど、にわかに感じた。

「こんなはずではない。」と彼は、通俗な劇場から嫌いやになつて出てきた晩と同じように、ふたたび言った。

「他に何かあるはずだ。」

「このうえ何がほしいんだ？」とコーンは尋ねた。

クリストフは執拗しつようにくり返した。

「フランスさ。」

「フランスとは、われわれのことだよ。」とシルヴァン・コーンは笑い出しながら言った。クリストフはちよつと彼を見つめ、それから首を振って、またくり返した。

「他に何かある。」

「じゃあ捜してみるがいい。」とシルヴァン・コーンはますます笑いながら言った。

クリストフは捜しあてることができた。まさしく彼らは他のものを隠しもっていた。

二

パリーの芸術が発酵して思想の醸造桶おけを、クリストフは次第にはつきりとのぞき込むにつけ、一つの強い印象を受けた。それは、この世界一家的な社会における婦人の最上権であった。婦人はこの社会で、法外な異常な地位を占めていた。もはや男子の伴侶はんりよたることだけでは満足しなかつた。男子と同等になつてさえも満足しなかつた。婦人の喜びが男子にとつての第一の掟とならなければ承知しなかつた。そして男子もそれに賛成していた。民衆は老衰してゆく時、その意志や信念やあらゆる生存の理由を、快樂を与えてくれる者の手に委ねゆだるものである。男子は作品を作る。しかし女子は男子を作る——（当時のフランスにおけるごとく、女子もまた作品を作ることに立ち交らない時には）——そして女子が作るというのも、実は破壊するといった方が至当かもしれない。もちろん、永遠の女性は常に、優良な男子の上に刺激的な力を与えはした。しかし一般男子にとっては、疲弊した時代にとっては、だれかが言ったように、まったく別な女性がある。この女性もま

た永遠なものではあるが、男子を下へ引きおろすのである。そしてかかる女性こそ、パリの思想の主人であり、フランス共和国の王であった。

クリストフは、シルヴァン・コーンの紹介により、また自分の技倆ぎりようによって、多くの客間サロンから迎えられていたが、そこで彼は珍しげに、パリ婦人を観察した。彼は多くの外国人と同じく、自分が出会った二、三の類型によつて得た仮借かしゃくなき意見を、フランス婦人全般に押し広げてしまった。その類型というのは、年若な婦人で、大して背が高くなく、さほど清楚せいそでもなく、しなやかな身体、染めた髪の毛、愛嬌ある顔の上にある、身体不相応に大きな帽子。はつきりした顔だち、少し脹ふくれつ気味の肉。どれもみな、かなり格好はよいが、たいてい卑俗で、特質のない小さな鼻。なんら深い生命はないがいつも活発であつて、できるだけ輝かせ、できるだけ大きく見せようとつとめてる眼。しまりのよいきつぱりした口。ほつてりした頤あご。恋愛事件にばかり没頭しながらも、決して世間や家庭への注意をも怠らないそれら華奢きゃしゃな婦人らの、物質的な性質を示してる顔の下部。きれいであるが、民族的な根は少しもない。それら社交婦人のほとんどすべてには、一種の臭みを感じられた。腐敗してる中流婦人の臭みであり、もしくはそう見せたがってる中流婦人

の臭みであつて、その階級特有の伝統が見えていた、慎重、儉約、冷静、實際的能力、利己主義など。貧弱なる生活。官能の要求よりもむしろ頭の好奇心から多く発した、快樂の欲望。平凡なしかも断固たる意志。きわめてりっぱに衣服をまとい、自動的な細かな身振りをしていた。手の甲や掌で、髪や櫛をこまかにたたきなでていた。そしていつも、大鏡の近くでもまた遠くでも、自分の姿が映るようなふうに——そして他人をも監視できるようになうに——すわるのであつた。そのうえになお、食事の時でもまたはお茶の時でも、よくみがかれて光つてる匙やナイフや銀の珈琲皿などに、自分の顔がちらと映るのを見落とさないで、何よりもその方を多く気にかけていた。食卓ではきびしい摂生法を守っていた。理想的な白粉ののりぐあいを害するかもしれないような食物は、いっさい口にしないで、水ばかり飲んでいた。

クリストフが出入する周囲には、ユダヤ婦人が割合に多かつた。彼はユーディット・マンハイムに出会つて以来、ユダヤ婦人にあまり空望をかけはしなかつたが、それでも、いつも彼女らにひきつけられた。シルヴァン・コーンは彼を、イスラエル系統の二、三の客間へ紹介していた。そこで彼は、才知を好むこの民衆に通例の才知をもって迎えられた。その晩餐の席で出会つたのは銀行家、技師、新聞記者、国際的仲介人、アルジェリアの

黒奴売買人的な者ども——すべてフランス共和国の実務家らであった。彼らは明敏で精力家で、他人には無頓着で、微笑をたたえ、腹藏なきふりをし、しかも腹の底を堅く閉ざしていた。クリストフは、肉と花とを積んだ豪華な食卓のまわりに集まつてそれらの人々の、過去と未来とのうちに、そのきびしい額の下に、種々の罪悪が潜んでるように感ずることがあった。ほとんどすべての者が醜かった。しかし婦人の連中は、全体として見ると、かなり光っていた。あまり近寄つてながめてはいけなかつた。多くは線や色の繊麗さを欠いていた。しかし光輝はそなえていて、かなり強烈な物質的生気をもつた風貌、見せつけがましく傲然と差し出している美しい肩、その美やまたは醜をも、男子をとらえる毘となすだけの才能、などをもっていた。美術家だったら、ローマ式の古い型、ネロやハドリアヌス時代の婦人を、彼女らのうちのある者に見出したであろう。また、肉感的な表情をし重々しい頤がしつかりと首にくつついていて、獸的な美がないでもない、パルマ式な顔も見られた。またある者は、房々とした縮れ毛と、燃えるような果敢な眼とをもつていた。よく観察すると、そういう女らは慧敏で、鋭利で、万事にゆきわたり、他の女よりもさらに男らしく、それでもまたさらに女性であつた。またかかる連中の間に、あちらこちらに、いつそう靈的な顔が際だつていた。その清純な顔たちは、ローマを越えて、

ラバンの国へまでさかのぼるものであった。静寂の詩が、砂漠の諧調が、その顔には感ぜられた。しかしクリストフはそばに寄って行って、このレベツカのような婦人が、ローマのファウスチナやヴェニスの聖バルブなどのような婦人とかわす言葉を聞いた時、それもやはり他の者らと同じく、ユダヤ系のパリー女にすぎないことを知った。しかも本来のパリー女よりいっそうパリーの的で、いっそう技巧的であり作り物であつて、マドンナのような眼で人々の魂や身体を赤裸に看破しながら、平氣な意地悪を言つていた。

クリストフはどの連中にも仲間入りすることができずに、一つの連中から他の連中へとさまよい歩いた。男子らは、獐猛な調子で狩獵の話をし、粗暴な調子で恋愛の話をし、ただ金銭のことだけは、冷靜な嘲笑的な正確さで話していた。喫煙室で用件を書き取つていた。一輪の薔薇をボタンの穴にさして、重々しい喉声の愛嬌ををふりまきながら、女たちの椅子から椅子へと歩き回つてる色男について、次のような言葉をクリストフは耳にした。

「なに、彼奴は自由な身になつたのか。」

客間の片隅では、若い女優や貴婦人の情事について、二人の婦人が話し合つていた。時々音楽の演奏が催されることもあつた。クリストフは演奏を求められた。女流詩人らが

息を切らし汗を流しながら、シユリー・プリユドンムやオーギュスト・ドルシャンの詩句を、朦朧もうろうたる調子で誦しょうした。ある名高い大根役者が来て、天国的なオルガン伴奏につれて、神秘なる譚歌をおごそかに吟じた。しかしその音楽も詩句もあまりに馬鹿げていたので、クリストフは気色が悪くなった。しかしそれらローマ型の婦人らは非常に愉快がつて、みごとな齒並みを見せながら心から笑っていた。またイプセンの物が演ぜられることもあった。社会の柱たる人々にたいする偉人の争闘が、これらの婦人たちの慰みとなったのは、面白い結末と言うべきである。

次に彼らは皆、芸術談をなす義務があるかのようにおのずから信じていた。それは実にとまらないことだった。ことに婦人らは、昵懇じっこんや礼儀や退屈や愚蒙などのために、イプセン、ワグナー、トルストイ、などの話を始めるのであった。一度会話がこの方面に向かつてくると、もう引き止める術すべがなかった。その病癖は感染していった。銀行家や仲買人や奴隷売買人らの芸術観を、聞かなければならなかった。クリストフは、返答を避け話頭をそらそうとつとめたが無駄むだだった。彼らは競うて、音楽や高級の詩の話をもちかけてきた。ベルリオーズが言ったように、「その連中はきわめて冷静にそういう言葉を使った。あたかも酒や女やまた他のくだらない事柄をでも話すように。」ある精神病専門の医者は、

イプセンの女主人公のうちに、自分の患者の一人の姿を、その方がはるかに馬鹿ではあつたが、認めていた。一人の技師は、人形の家の中で同情し得られる人物は夫であると、本気で断言していた。名高い大根役者——著名な喜劇役者——は、ニーチエやカーライルに關して、深奥な思想を震え声で口ごもっていた。ベラスケス——（それは当時の神であつた）——の絵を見るといつでも、「大粒の涙が頬ほおに流れざるを得ない」と、彼はクリストフに話してきかした。それでも彼のうち明け話——やはりクリストフにたいしての——によれば、彼はいかに芸術を高位にすえるにしても、実人生の芸術を、行為を、さらに高位にすえていて、もし演じたい役割を選ぶとすれば、ビスマルクの役を選びたがっていた。また時々一座の中には、いわゆる才人が交つていた。しかしそのために会話が明らかに高尚となるようなことはなかつた。彼らが言つてるつもりでいる事や現に言つてる事などを、クリストフはよくあらためてみた。するとたいい彼らは、何にも言っていないことが多かつた。謎なぞめいた微笑を浮かべて満足しきつていた。自分の名声だけで生きていて、それを損じないようにしていた。また弁舌家もいた。たいい南欧の者だつた。この連中はどんなことでも話した。価値にたいする感じを具えていなかった。すべてを同一の平面に置いていた。シエイクスピア気取りの者もいた。モリエール気取りの者もいた。あるいはイ

エス・キリスト気取りの者もいた。彼らはイプセンを子デューマに比較したり、トルストイをジョルジュ・サンドに比較したりした。そしてそれはもちろん、フランスがすべてを發明したのだということを示さんためであつた。普通彼らはどの外国語も知らなかつた。しかしそれに困らされはしなかつた。彼らが真実のことを言つてゐるかどうかは、その聴き手にはどうでもいいことだつた。大事なことは、面白くてできるだけ国民的自尊心におもねるような事柄を、口にするということだつた。外国人は盛んにののしられていた！ その時々のお像を除けば。偶像と言へばグリーグ、ワグナー、ニーチェ、ゴッリキー、ダヌンチオ、だれであろうと、とにかく流行にとつてその一つがいつも必要だつた。ただし長つづきはしなかつた。今日の偶像はいつか塵箱ちりばこに入れられるの運命にあつた。

当時にあつては、偶像はベートーヴェンだつた。ベートーヴェンが——いづくんぞ知らん——流行児だつたのだ。少なくとも、上流人士と文学者との間ではそうだつた。音楽家らの方は、フランスにおける芸術趣味の一の法則たるシーソー的な方法で、すぐにベートーヴェンから離れてしまつていた。フランス人は自分の考えを知るためには、まず隣人の考えを知りたがり、それによつて、同じように考えるかあるいは反対に考えるかするものである。かくて、ベートーヴェンが広く知られてきたのを見ると、音楽家らのうちの最も

秀ひいでた人々は、ベートーヴェンも自分らから見るとそう秀でた者ではないと考え始めた。彼らは世論に先んじようとしていて、決して世論のあとに従ってゆこうとはしなかった。世論に同意するよりはむしろ、それに背を向けたがっていた。それで彼らはベートーヴェンをもつて、金切り声で叫ぶ聾の老人だとした。傾聴すべき道德家ではあるかもしれないが、音楽家としては買いかぶられてるものだと、断定する者さえあった。——そういう悪い冗談は、クリストフの趣味に適しなかった。また上流人士の心酔もやはり彼を満足させなかった。もしベートーヴェンがその時パリへ来たら、彼は当時の獅子ししとなり得たであろう。惜しいかな彼は一世紀前に死んでいた。それにまた、感傷的な伝記によって世に広く知られてる、彼の生しょう涯がいの多少小説的な事情の方が、彼の音楽よりもさらに多く、この流行を助けていた。獅子のような顔つきをした彼の荒々しい面影は、小説的な顔だちとななされていた。婦人らは彼に同情を寄せていた。もし自分が彼を知っていたら彼をあれほど不幸にはさせなかつたものと、彼女らははばかり言っていた。そしてベートーヴェンがその言葉を真面目まじめに取るの恐れがなかつただけに、なおさら彼女らはその寛大な心をささげようとしていた。がこの好々爺こうこうやはもはや故人となつて、何物をも求めてはいなかつたのである。——それゆえに、名手や管弦楽長や劇場主らは、多くの憐憫れんぴんを彼にかけて

やっていた。そしてベートーヴェンの代表者だという資格で、ベートーヴェンにさきざられた敬意を身に引き受けていた。ごく高価な華麗な大音楽会は、上流人士らに、その寛仁さを示す機会を与えていた。——時としてはまた、ベートーヴェンの交響曲シンフォニーを見せる機会を与えていた。俳優や軽薄才子や遊蕩者ゆうとうや、芸術の運命を監理するの任をフランス共和国から帯びせられた政治家、そういう連中から成る委員らが、ベートーヴェンの記念碑建設の計画を、世間に発表していた。ベートーヴェンが生きていたらその足下に踏みこじられそうな下劣な連中が、かつぎ上げられてる若干のりっぱな人物とともに、その名簿に名を連ねていた。

クリストフはながめまた聴いていた。悪口を言うまいと齒をくいしばっていた。そんな晩じゆう、気を張りつめ身体をひきつらしていた。口をきくことも黙つてることもできなかった。愉快からでもなくまた必要からでもなく、口をきかなければいけないという礼儀から口をきくことは、彼には卑しい恥ずかしいことのように思われた。心底の考えを口に出すことは、彼に許されなかった。つまらないお座なりを言うことは、彼にはできない業だった。しかも黙つていて礼を失しつしないだけの才能を、彼はもっていなかった。隣席の人をながめるにしても、あまりにじつと見つめるのであった。彼はわれ知らず隣席の人を研

究してるのであつて、向こうはそれを不快に感じた。口をきけば、自分の言うところをあまりに信じすぎていた。それは皆のものにとつて、また彼自身にとつても、気まずいことだった。彼は自分の来るべき場所でないことをよく知っていた。そして相当に伶俐で、一座の調子が合つてゐるのを感じることができ、自分が交つてゐるためにその調子が狂つてゐるのを感じることができたので、来客らと同じように自分でも自分の態度が気に入らなかつた。彼はみずから自分を恨みまた他人を恨んでいた。

真夜中ごろついに街路に出て一人つきりになると、厭で厭でたまらなくて、歩いて帰るだけの力がなかつた。昔少年名手であつたころ、大公爵邸の演奏から帰る途中、幾度もしただがつたと同じように、往來のまん中に寝そべつてしまひたかつた。時とすると、一週間の間五、六フランしかもたないにもかかわらず、その二フランを馬車に費やしてしまふこともあつた。早く逃げ出すために急いで馬車に飛び乗るのだった。馬車に運ばれながらがつかりして嘆息していた。家に帰つても寢床の中で、眠りながら嘆息していた……。それから突然、おかしな言葉を思ひ出して放笑した。その身振りを真似て言葉をくり返しながら、自分でもびつくりした。翌日、または数日後、一人で歩き回りながら、にわかに獣のように唸り出すことがあつた。……なぜああいう連中に会いに行くのか？　なぜ彼らに会

いにまたやつて行くのか？ 他人と同様に身振りをししかめ顔をし、面白くもないことに面白がつてるふうをすることが、なぜ余儀ないのか？——面白くないというのはほんとうなのか？——一年前だったら、彼はかかる仲間には我慢ができなかったはずである。しかし今や、彼らは彼をいらだかせながらも実は面白がらせていた。パリ―風の無関心さが多少彼のうちにしみ込んできたのか？ 彼は不安の念をもって、自分が弱くなったのではないかと怪しむこともあった。しかし反対に、彼はいつそう強くなったのだった。他国の社会において、彼の精神はいつそう自由になったのだった。彼の眼はわれにもあらず、世間の大喜劇に向かって開かれていた。

そのうえ、芸術家を知るにつれてその作品に興味をもちだしてくるこのパリ―の社会から、自分の芸術が知られんことを望むならば、彼は否でも応でもかかる生活をつづけなければならなかった。またこれらの俗衆の間に、生活に必要な稽古けいこの口を得んと望むならば、彼は人に知られることを求めなければならなかった。

それにまた、人は一つの心をもっている。心は知らず知らず愛着する。いかなる環境にあっても、愛着の対象を見出してゆく。もし愛着しないとすれば、生きることができないのである。

クリストフが稽古を授けてる若い令嬢のうちに、自動車を製造してる富豪の娘で、コレット・ストウヴァンというのがあった。父はフランスに帰化してるベルギー人で、アンヴェルスに住まつてるアングロ・アメリカ人とオランダ婦人との間の子であつた。娘の母親はイタリー人であつた。それはまつたくパリー的な家庭だつた。クリストフにとっては——また多くの他人の眼から見ても——コレット・ストウヴァンはフランスの若い令嬢の典型だつた。

彼女は十八歳になつていた。若い男たちにやさしみを送るビロードのような真黒な眼、湿んだ光を眼いっばいにみなぎらすスペイン風な瞳、すねたような口つきをしながら話の間に軽く颯めたり動かしたりする、やや長い奇妙な小さい鼻、乱れた髪、愛嬌たつぷりの顔、白粉をなすりつけた平凡な肌、やや脹れつ気味の大きな顔だち、太った子猫のような様子。

彼女はごくすらりとした身体つきで、服の着つけもよく、誘惑的な挑戦的な姿だつたが、わざとらしい馬鹿げた嬌態をいつも見せていた。小娘らしいふりを装つて、船底肱掛椅子でいつまでも身体を揺り、「どう、そんなのないの？」などと小さな叫び声を

たて、食卓で自分の好きな料理が出ると、両手をたたき、客間では、巻煙草たばこを吹かして、男の前で女の友だちにたいする途方もない愛情の様子を見せ、その首に飛びつき、その手をなで、その耳にささやき、やさしい細い声で、無邪気なことを言い、また巧みに悪口をも言い、場合によつては、何気ないふうでごく際きわどい事をも言い、またいつそうそれを人にも言わせ、——きわめておとなしい小娘のような清純な様子をし、重々しい眼瞼まぶたのある、肉欲的な陰險な輝いた眼で、狡こうかつ猾かくそうな横目を使い、あらゆる冗談を待ち受け、あらゆる猥みだらな話を拾い取り、どこかで男の心を釣つろうとつとめていた。

それらの猿知恵ざるは、小犬のようなそれらの道化振りは、猫ねこ被かぶりのその無邪気さは、いかにしてもクリストフの気に入るはずがなかった。放ほうじゆう縦じゆうな娘の策略に巻き込まれたり、あるいは面白おもしろいような眼でそれをながめることよりも、彼には他になすべきことがあつた。彼はパンを得なければならなかった、自分の生命と思想とを死から救わなければならなかった。客間の鸚鵡おうむたる彼女らから受ける唯一の利益は、この必要な方法を得るということだけだつた。彼は金の代わりに彼女に、稽古けいこを授けていた。額ひたいに皺しわを寄せ、仕事に気をこめて、熱心にやりながら、仕事をつまらなさ加減のために気を散らされないようにし、またコレット・ストウヴァンのように婀娜あだつぽい弟子でしたちの擲揄やゆのために、気を散らされな

いようにつとめていた。彼はコレットにたいしても、その小さな従妹いとこにたいするくらいに注意をしか払っていなかった。この従妹というのは、黙った内気な十二歳の少女で、ストウヴァン家に引き取られていたものであるが、やはりクリストフからピアノを教わっていた。

しかしコレットはきわめて機敏だったので、自分の容色もクリストフにたいしては無駄むだであると感じずにはいなかったし、またきわめて柔和だったので、一時彼のやり方に順応せずにはいなかった。彼女はそれをみずからつとめるにも及ばなかった。それは生来の一本能だった。彼女は女だった、形のない波のようなものだった。彼女が出会うあらゆる魂は、彼女にとつては器うつわのようなもので、彼女は好奇心からまた必要から、すぐにその形をみずから取るのであった。存在せんがためには、いつも他の人となる必要があった。彼女の性格と言えば、一つの性格者でないということであった。彼女はしばしば自分の器を取り換えていた。

クリストフは彼女をひきつけていた。それには多くの理由があつたが、その第一のものは、彼が彼女からひきつけられていないということだった。なお他の理由としては、彼女の知つてゐるあらゆる青年と彼が異なつてゐるからでもあつた。こんな形のこんな粗暴な容器

に、彼女はまだかつて順応しようとしたことがなかった。また最後の理由としては、彼女は容器や人々の正確な価値を一見して評価するのに、民族的な巧こうけい慧さをそなえていたから、クリストフには優雅な点はないが、骨董品こつとう的なパリー人の示すことのできない堅実さをもっているということを、完全に見て取ったからであった。

彼女は現代の暇な若い娘の大多数と同じ調子で、音楽をやっていた。盛んにやるとともにほとんどやつていかなかった。言い換えれば、常に音楽をやりながらほとんど何にも知らなかった。仕事がないために、様子ぶるために、楽しみのために、終日ピアノをたたきちらしていた。あるいは自転車でも取扱うようなふうにやることもあった。あるいは趣味と魂とをこめてごくうまくひくこともあった。——（彼女は一つの魂をもつても言えるほどだった。しかしそれには、一つの魂をもつてだれかの地位に身を置けば十分なのであった）——彼女はクリストフを知る前には、マスナー、グリーグ、トーマ、などを好むこともできた。しかしクリストフを知ってから、そういう人々をもう好まないこともできた。そして今ではバツハやベートーヴェンをごく正しくひいていた——（実を言えばそれは大したことでない）——しかしいいことには、彼女は彼らを好んでいた。が結局は、彼女が好んでいたものは、ベートーヴェンでもトーマでもバツハでもグリーグでもなかつ

た。それは、音符をであり、音響をであり、鍵盤盤の上を走る自分の指をであり、神経の弦を刺激する弦の震えをであり、快感をそそるそのくすぐりをであった。

貴族的な邸宅の客間の中は、やや色褪せた壁布で飾られていて、室のまん中の画架の上には、強健なストウヴァン夫人の肖像がかかっていた。流行児の一家が描いたもので、眼には光がなく、身体は螺旋状にねじ曲げて、百万長者の魂の世に稀有なことを表現するため、あたかも水なき花のように、憔悴した姿に描かれていた。ガラス窓の壁口からは、白雪を頂いた老樹が見えていた。——その大きな客間の中に、いつもピアノにすわつてゐるコレットを、クリストフは見出した。彼女は際限もなく同じ楽句をくり返し、柔らかな調子はずれの響きで耳を楽しませていた。

「ああ、」とクリストフはいりながら言った、「また猫が喉を鳴らしていますね。」

「いやな方！」と彼女は笑いながら言った。

(そして彼女はやや湿っぽい手を彼に差し出した。)

「……まあ聴いてちょうだい。りっぱじゃありませんか。」

「たいへん結構です。」と彼は冷淡な調子で言った。

「聴いていらつしやらないのね。……よく聴いてちょうだいよ！」

「聞いていますよ。……いつも同じものですね。」

「ああ、あなたは音楽家じゃないわね。」と彼女はむつとして言った。

「それでも音楽のつもりですか。」

「え、音楽じゃないんですって？……では、なんだとおっしゃるの？」

「御自分でよくわかってるでしょう。失礼に当たるから私の口からは言いますまい。」

「そんならなおおっしゃらなけりやいけません。」

「言ってもらいたいんですか。……お気の毒さま！……いったいあなたは、ピアノを相手に何をしてるのか自分で知っていますか。……あなたはふざけてるんです。」

「まあ！」

「そうですとも。あなたはピアノにこう言っています、ピアノさん、ピアノさん、優しい言葉を聞かしてちょうだい、もつとよ、私をかわいがってちょうだい、ちよつとキスしてちょうだいよ！」

「もうたくさんよ！」とコレットは半ば笑い半ば怒^{おこ}って言った。「あなたには人を尊敬する念が少しもないのね。」

「少しもありませんよ。」

「横柄おうへいな方ね。……それに第一もしそうだったとしても、それこそほんとうに音楽を愛する仕方ではありませんか。」

「ああ、お願いだから、音楽とそんなことを混同しないでください。」

「でもそれが音楽ですわ。美しい和音は接吻せつぶんと同じですもの。」

「そんなことをあなたに教えた覚えはありません。」

「でもほんとにそうじゃありませんか……。なぜ肩を怒らしなさるの。なぜ顔をしかめなさるの？」

「不快だからです。」

「まあひどいわ。」

「不品行の話でもするような調子で、音楽のことを言われるのを聞くのは、私は不快です。……しかし、それはあなたが悪いのではない。あなたの世界が悪いからです。あなたをとり巻いてるこの無趣味な社会は、芸術を一種の許された道楽だと見なしている。……さあ、おすすめなさい。奏鳴曲ソナタをひいてごらんなさい。」

「でも、もう少し話しましょう。」

「私は話をしに来てるわけではありません。ピアノを教えに来てるのです。……さあ、やり

ましよう。」

「御親切ね！」とコレットは当惑して言った。——心のうちでは、かくひどい取り扱いを受けたのがうれしかった。

彼女はできるだけ努めて稽古けいこの曲を弾ひいた。そして器用だったので、かなりにひけたし、時とすると上じょうず手にひけることもあった。クリストフはそれにごまかされはしなかった。

「何にも感じていなくせに、よく感じてるかのようなひき方をしてる、このずるい小娘」の巧みさを、心の中で笑っていた。それでもやはり、心うれしい同情を感じないでもなかった。コレットの方では、ピアノの稽古けいこよりも話の方がずっと面白かったので、あらゆる口実を捜しては話をしようとした。クリストフは、思っていることを言えば不快を与える恐れがあるという口実で、話をすまいとしたが駄目だめだった。彼女はいつでも彼に思っていることを言わしてしまった。そしてそれがひどいことであればあるほど、ますます彼女は腹をたてなかつた。彼女にとってはその一つの娯楽だった。しかしこの機敏な小娘は、クリストフが誠実を最も愛していることを感じていたので、勇ましく言いさからって、頑固がんこに議論をした。そして二人はいつも仲よく別れた。

けれどももしそのままですら、クリストフはかかる客間的な友誼ゆうぎになんらの幻をも
かけなかつたろうし、少しの親交も二人の間には生じなかつたろう。ところがある日コレ
ットは、誘惑したい本能と不意の出来心とで、彼にいろんなことをうち明けた。

前日、彼女の両親は自宅で招待会を催した。彼女は狂人のように笑いしやべりふざけた。
しかし翌朝になって、クリストフが稽古を授けに来た時には、彼女はがっかりして、顔だ
ちにはしまりがなく、顔色は曇り、不機嫌ふきげんだった。ろくに口もきかなかつた。気力つきた
様子をしていた。彼女はピアノにつき、力ないひき方をし、経過句を間違え、やり直し、
また間違え、突然ひきやめ、そして言った。

「できません……ごめんなさい……少し待つてちようだいな……。」

気分が悪いのかと彼は尋ねた。彼女はいいえと答えた。

——気が向かないのであつた……そんなことがよくあつた……ほんとに妙だった。怒ら
れるようなことではなかつた。

彼はまた他の日に来ようと言つた。しかし彼女はいてくれと頼んだ。

「ちよつとの間ですわ……じきによくなくなるでしょうから……ほんとに私馬鹿ばかですわね。」
いつもの彼女でないことを彼は感じた。しかしその訳を尋ねたくなかつた。そして話を

転ずるつもりで言った。

「昨晚あんなに華やかに振舞ったからでしょう。あまり元氣を使いすぎましたね。」

彼女は皮肉な微笑みをちよつと浮かべた。

「あなたはそうじやありませんでしたわね。」と彼女は答えた。

彼は率直に笑った。

「あなたは一言も口をおききなさらなかつたのね。」と彼女は言いつづけた。

「ええ一言も。」

「でも面白い方がいましたわ。」

「ええ、すてきな饒舌家だの才子だのが。なんでも理解し、なんでも説明し、なんでも見のがし——何にも感じない、骨抜きフランス人たちの間にはいって、私はまごついてしまいましたよ。幾時間もたてつづけに、恋愛や芸術の話をするような連中でしたね。たまらないじやありませんか。」

「でもあなたには面白かつたはずだと思いますわ、恋愛かさもなくば芸術の話が。」

「そんなことは話すべきものではなくて、なすべきものです。」

「だって、なすことができるければ？」とコレットはちよつと口をとがらして言った。

クリストフは笑いながら答えた。

「その時は他人に任せるまでです。万人が芸術のために生まれてるわけではありません。」

「恋愛のためにも？」

「恋愛のためにもです。」

「つまらないわね。では私たちには何が残るんでしょう。」

「家事があります。」

「ありがとうよ！」とコレットは不快げに言った。

彼女はまたピアノに手を置き、ふたたびやってみ、ふたたび経過句を間違え、鍵^{キー}をうちたたき、そして嘆息した。

「できません。……私はまったく何をやっても駄目ね。あなたのおっしゃるのがもつとでもですわ。女はなんの役にもたちませんわ。」

「そう言うのは多少いいことです。」とクリストフは純^{じゆんぼく}朴^{ぼく}な調子で言った。

彼女はしかられてる小娘のような極^{きま}り悪げな様子で彼をながめ、そして言った。

「そんなに手^てきびしくおっしゃるものではありませんわ。」

「私は善良な婦人の悪口を言ってるではありません。」とクリストフは快活に答え返し

た。「善良な婦人は地上の楽園です。ただ、地上の楽園は……。」

「そうよ、だれも見ることがありませんわ。」

「私はそれほど悲観していません。私が言いたいのは、この私が見たことがないということです。しかしそれは存在するかもしれません。存在してるなら見出したいものだと思っと思っています。ただ、見出すのが容易でないのです。善良な婦人と天才の男子とは、いずれも滅多にありません。」

「そしてその二つを除くと、他の男や女は皆物の数には入りませんか。」

「いやかえって、そういう男女こそ、物の数にはいるのです……世間にとっては。」

「でもあなたにとっては？」

「私にとつては、ないも同じです。」

「ほんとに手きびしい方ね！」とコレットはくり返した。

「少々です。少しは手きびしい者もなくちやいけません。もちろん他人に関してです。

……もしところどころに小石が少し交っていないければ、世の中はぐずぐずになってしまいうでしょう。」

「ええ、もつともですわ。あなたは強いから仕合わせですわ。」とコレットは悲しげに言

った。「でも強くない人たちには——ことに女には、あまり厳格になすつてはいけません……。私たちが自分の弱さをどんなに苦しんでるか、御存じないでしょう。なぜって、私たちが笑ったりふざけたり小賢こせいかしいことをやったりしてゐるのを見て、あなたは私たちの頭にはそれ以外に何にもないと考えて、私たちを軽蔑けいべつなすつてゐるじゃありませんか。社交界に出て、そのあふれるような活気である種の成功を勝ち得る、十五から十八くらいの娘の頭に、どんなことが浮かんでゐるか、それをあなたが読み取ってくださいたら！もちろん、よく踊ったり、つまらないことや、間違つたことや、苦にが々しいことなどを言つて、自分でも笑つてゐるので他人をも笑わせませすし、またいくらかは馬鹿者どもの言うままになつて、決して見出せないような光をめいめいの眼の底に捜し求めたりしますけれど、夜自分の家に帰つて、ひっそりした居間の中にとじこもり、孤独の苦しみにひざまずいて祈る様子を、もしあなたが御覧なすつたら！……」

「そんなこともあるんですか。」とクリストフはあきれたように言った。「え、苦しむことが、そんなに苦しむことが？」

コレットは答えなかつた。しかし彼女の眼には涙が出て来た。彼女は微笑ほほえもうとした。そしてクリストフに手を差し出した。彼は心を動かされてその手をとつた。

「かわいいそうに！」と彼は言った。「苦しいんなら、そんな生活から脱するために、なぜ何にもしないんです？」

「どうせよとおっしゃるのですか。どうにも仕方ないじやありませんか。あなたがたの方方は、のがれることもできませんし、なんでも勝手なことがおできになります。けれども私たちは、社交上の務めと楽しみの範囲内に、永久に閉じこめられています。それから出ることができません。」

「われわれ同様にあなたがたが自分を解放することを、だれが妨げるものですか。あなたがたが自分の好きな仕事をして、われわれのように独立できる仕事をするのを、だれが妨げるものですか。」

「あなたがたのようにですって？ まあ、クラブトさん！ あなたがたの仕事だつて大して独立の助けになつてはしませんわ。……でも、少なくともあなたがたは仕事を喜んでいらつしやるんでしょう。ところが私たちは、どんな仕事に適してらんでしょうか？ 気に入る仕事は一つだつてありませんもの。」

——— そうですね。私はよく知っています、私たちは今のところ何事にでも関係し、自分に無関係な多くの事柄に興味をもつてゐるようなふうをしています。それほど何かに興味を

もちたがっています。私だつて同じですわ。救済事業に関係し、慈善会に関係しています。ソルボン又大学の講義、ベルグソンやジュール・ルメートルの講演、歴史協会、古典研究会、いろんなものに出ては、ノートばかり取っています……何を書いてるのか自分にもわかりません……そして無理にも、たいへん面白いと思ひ込もうとしたり、少なくとも有益だと思ひ込もうとしています。でも、その反対だということを私はよく知っています。そんなものは私にはどうでもいいことなんです。ほんとに退屈でたまりません！……ありふれた考えをそのまま言つてるきりだというので、私をまた軽蔑けいべつなすつてはいけませんよ。そりや私もやはり馬鹿ですわ。けれど、哲学だの歴史だの科学だのが、私になんの役にたつでしょう？ 芸術についても——御承知のとおり——私はピアノをたたいたり、つまらないものを書き散らしたり、きたならしい水彩画をかいたりしています——でもそれで生活が充実するでしょうか？ 私たちの生活には一つの目的があるばかりです、結婚という目的が。けれども、あなたと同じように私にもよくわかつてる、あんな人たちのだれかと結婚するのが、愉快なことでしょうか？ 私はあの人たちのありのままの姿を見て取っています。いつでも幻を描くことのできるドイツのグレートヘンたちのようには、私はなることができないのです。……恐ろしいことではありませんか、結婚した女たちや、その結

婚の相手の男たちを、自分の周囲にながめて、自分もやがては同じようなことをし、身体や精神をゆがめ、その人たちのように平凡になつてしまふのかと、考えてみますのは！……そんな生活やその義務などを甘受するには、確かに克己の精神が必要ですわ。ところがどんな女にもそれができるといふわけにはゆきません。……そして時は過ぎてゆき、年は流れ去り、青春は去つてしまいます。それでも、美しいもの、善良なものが、私たちのうちにはあつたんですのに——それさえもう、なんの役にもたらず、日に日に死んでゆき、馬鹿な人たちに、人に軽蔑けいべつされたまた私たちを軽蔑するような人たちに、我慢して与えてしまわなければならぬでしょう。……そしてだれも私たちを理解してはくれません。女は男にとつて謎なぞだと言われるかもしれない。そして、私たちをつまらないおかしなものだと思ふのも、男の方にはまだ許せます。けれども女の人は私たちを理解してくれてもいい訳です。自分でも私たちと同じだつたことがあるんですもの。ただ昔のことを思い出すだけで足りるんですわ。……それなのにまるつきり駄目なんです。少しも力になつてはくれません。母親でさえも私たちのことを知りません。ほんとうに私たちを知ろうともつとめません。ただ私たちを結婚させようとはかりしています。その他のことは、生きようと死のうと、勝手にするがいいというのです。社会は私たちをまったくうつつちやつておくの

です。」

「力を落としてはいけません。」とクリストフは言った。「人は各自に人生の経験をやり直さなければなりません。勇気があれば万事うまくゆきます。あなたの世界以外に捜してごらんさい。フランスにはまだりっぱな人が多少あるはずですよ。」

「あるにはありますわ。私の知ってる人にもありますわ。でも皆厭いやな人ばかりですもの。」

……それに、ほんとのことを言いますと、自分の生きてる世界が私には不快なのです。けれども今ではもう、この世界を離れて生きられようとは私には思われません。習慣になつてしまったのです。ある種の安楽と、それから、もちろん金では買えませんがかし金が必要になれば得られない、贅ぜいたく沢と社交とのある精練さが、私には必要なのです。それがほんとうに輝かしいものでないことは、私も知っています。しかし私は自分自身をよく知っています。私は弱いんです。……ねえどうぞ、自分のつまらない卑ひきよう怯さを私がうち明けたからって、私から離れないでくださいね。私の言うことを快く聴いてくださいね。あなたと話すことはどんなにか私のためになるでしょう！ あなたは強くて健全な方だと、私は感じていますの。あなたにすっかり信頼していますわ。少しは私の友だちにもなつてくださいな、ねえ。」

「私も望むところです。」とクリストフは言った。「しかし私に何ができましよう？」

「私の言うことを聴いて、私に論^{ざと}して、私に力をつけてください。私はむちやくちやになることがよくありますの。するともうどうしていいかわからなくなります。『争^{まじ}つたつて何になる？ 苦しんだつて何になる？ あれだつてこれだつて同じことだ。だれだつて構^まわない、なんだつて構^まわない！』と自分で考えます。ほんとに恐^{おそ}ろしい心ですわ。そんな心になりたくありません。私を助けてください、助けてくださいね！」

彼女はがっかりしたふうで、十歳も老^ふけたように見えた。従順な懇願的なやさしい眼で、クリストフをながめていた。彼は向^{むか}こうの望みどおりにすべて誓^{ちか}つてやった。すると彼女は元氣^{げんき}づき、笑^{わら}みを浮かべ、また快活^{くわい}になった。

そして晩には、彼女はいつものとおりに、笑^{わら}つたりふざけたりしていた。

その日以来、二人はきまつて親しい話をした。室には二人きりだった。彼女はなんでも思うまま彼へうち明けた。彼はそれを理解して助言してやるのに、たいへん苦心^{くしん}した。彼女はその助言に耳を傾^{かたむ}け、場合によつては、ごくおとなしい小娘^{せうにや}のように、叱^{しつ}責^{せき}を真^ま面目^めくさつて注意深く聞いた。それは彼女にとって、憂^{うれ}晴^{せい}らしでもあり、面白くもあり、支

持でさえもあつた。彼女は感動した媚^こびある流し目で、彼に感謝した。——しかし彼女の生活は、少しも變化しなかつた。ただ一つの気晴らしがふえたにすぎなかつた。

彼女の一日は轉身の連続だつた。非常に遅^{おそ}く午^{ひる}ごろに起き上がった。不眠症にかかつていて、明け方にならなければ眠れないのだつた。昼間は何にもしなかつた。一つの詩句、一つの思想、思想の断片、会話の思い出、一つの楽句、自分の氣に入つた面影、などをとり留めもなく心にくり返した。ほんとうに氣分がはつきりしてくるのは、午後の四時か五時ごろからであつた。それまでは、眼^{まぶた}瞼が重く、顔がむくんで、不機^{ふきげん}嫌^{けん}そうな眠^ねりそうな様子をしていた。そして幾人かの親しい友だちが来ると、彼女は初めて元氣になつた。その友だちらも皆、彼女と同様に饒^{じょうぜつ}舌^{ぜつ}で、彼女と同様にパリーの噂^{うわさ}話を聞きたがつていた。皆はいつしよになつて、際限もなく恋愛を論じた。恋愛の心理、それこそ、化粧や秘密事や悪口などとともに、いつも変わらぬ話題だつた。彼女の周囲にはまた、隙^{ひま}な青年連中が集まつていた。彼らは日に二、三時間は、女の裳^{しやうい}衣^いの間で過^あぎさなければ承知しなかつたし、裳^{しやうい}衣^いをつけることさえできそうだつた、なぜなら、娘らしい魂と話し方とをそなえていたから。クリストフに割り当てられた時間もあつた。それは聴罪師の時間だつた。コレットはただちに、真^ま面目^めな考え込んだふうになつた。彼女はあたかも、ボドレ

ーが語つてる、懺悔室ざんげにおける若きフランス婦人のようであった。「その述べたてる事柄は、冷静に準備された問題であつて、簡明な整頓せいとんと明晰めいせきとの模範とも称せられるほどで、言わなければならぬすべてのことが、正しい順序に配列され、はつきりした種類に区分されていた。」——そのあとで、彼女は前よりもいっそうはしやいでいた。日が暮れてゆくに従つて、ますます若々しくなつた。晩には芝居へ行つた。いつも変わらぬ同じ顔をそこに見出すのが、いつも変わらぬ楽しみだつた。——楽しみ、それは演ぜられてる芝居から受けるのではなくて、よく知つてる癖をまた見て取られる馴染なじみの役者から受けるのであつた。また、棧敷さしきに会いに来る人たちと、向こう棧敷にいる人々の悪口や、女優らの悪口をかわした。生娘きむすめの役をしてる女優が「腐つたソースのような」鈍い声を出してると言つたり、花形女優が「ランプの笠かさのような」着物をつけてると言つたりした。——あるいはまた、夜会へ出かけた。その楽しみは、自分の姿を人に見せることだつた。もちろんきれいな女にとつてである。——（そのきれいさも日によつて異なつていた。パリーの美人くらい変わりやすいものはない。）——そして服装や身体の欠点など、すべて人々にたいする批評の種を、新たに仕入れた。話の方は少しもやらなかつた。——遅くなくて家に帰つた。なかなか寝られなかつた。（最も眼が冴さえてる時間だつた。）テーブルのま

わりにぐずづついていた。書物を開いてみた。ある言葉や身振りを思い出して一人で笑った。退屈してきた。非常に味気なかった。眠ることができなかった。そして夜中に突然、絶望の発作に襲われるのだった。

クリストフは、時々数時間しかコレットに会っていなかったし、彼女の転身の二、三をしか見ることができなかった。右のようなことを知るだけでもかなり困難だった。いったい彼女はいつが真面目なのか——あるいは、彼女はいつも真面目なのか——あるいは、彼女は決して真面目なことがないのか、それを彼は怪しんでいた。コレット自身もそれは答えることができなかったろう。遊惰な拘束された欲望にすぎない多くの若い娘と同じく、彼女も闇夜やみよの中に生きていた。自分がいかなるものであるかをも知らなかった。なぜなら、自分の欲するところを知らなかったし、実際に行なってみないうちはそれを知ることができなかった。そして彼女は、周囲の人々の真似まねをしようとして、彼らの道徳的標準にならおうとつとめながら、できるだけ多くの自由と少しの危険とをもって、自己流に行なってみるのだった。彼女は選択を急がなかった。すべてを利用するためにすべてをやなしたがっていた。

しかしクリストフのような友を相手には、都合よくいかなかった。人が彼を捨てて、彼

から尊敬されていない者らを取り、もしくは彼から軽蔑けいべつされてる者らを取ることは、彼も許していた。しかし彼は彼らと同視されることを人に許さなかった。人はそれぞれ自分の趣味をもっている。しかし少なくとも、趣味は一つでなければいけない。

彼がことに我慢しかねたことは、彼から最も厭いやがられるようにならなければならぬ青年らを、コレットが自分の周囲に集めて喜んでるらしいことだった。たまらない気取りやどもで、多くは金持ちでとかく閑散であるか、あるいは何かの官省の閑官の気に入りであった——いずれにしても同じことだった。皆物を書いていた——書いてると自称していた。それは第三共和政時代における一つの精神病であった。ことに虚栄的な怠惰の一形式であった——知的労働はあらゆる労働のうちで、最も点検しがたいものだったし、最も空威張からいばりのきくものだったから。彼らはその大なる労苦については、控え目ではあるがしかしもつたいぶつた言葉を、少しばかり口にするきりだった。自分の仕事の重大さをしみじみ感じてるがようであり、その重荷の下に苦しんでるがようだった。初めのうちクリストフは、彼らの作品や名前を全然知らないので少々困却した。そしてひそかに調べてみた。戯曲界の大立物だと彼らから言われている一人の男の書いた物を、彼はことに知りたかった。ところが、その大劇作家はただ一幕物を一つ作ったのみだと知って、彼はびっくりした。しかもその

一幕物が、最近十年間にわたって彼らの雑誌の一つに発表された、一連の短編というよりむしろ一連の小品からでき上がった一つの長編小説を、さらに抜粋してきたものであった。他の者らの作も、同じような分量だった。二、三の一幕物、二、三の短編、二、三の詩だった。一つの論文で名高くなつてゐる者もいた。「これから作るはずの」書物で有名になつてゐる者もいた。彼らは大きな長い作品をいつも軽蔑けいべつしてゐた。文句中の言葉の布置を極端に重んじてゐるらしかった。それでも、「思想」という言葉が彼らの話にはしばしば出て来た。しかし普通の意味とは異なつてゐるらしかった。文体の些細ささいな事柄にその言葉をあてはめていた。とは言え、彼らのうちにも、偉大な思想家や偉大な諷刺家ふうしがいた。そういう連中は、物を書く時に、深遠巧妙な言葉を読者が見誤らないようにとイタリツクになつてゐた。

彼らは皆自己崇拜者であつた。それが彼らの有する唯一の崇拜だった。その崇拜を他人にも分かとうとしてゐた。あいにくなことには、他人も皆それをすでにそなえてゐた。彼らは話すにも、歩くにも、煙草たばこを吹かすにも、新聞を読むにも、頭や眼を向けるにも、たがいに挨拶あいさつし合うにも、たえず公衆を念頭に置いてやつてゐた。道化どうけは青年につきものである、彼らが微々たる人物であればあるほど。換言すれば人から閑却さるればさるるほ

ど、なおさらそうである。ことに女性にたいしては、ひどく骨を折る。なぜなら、女性を渴望してるからであり、女性から渴望されることを——さらに——望んでいるからである。しかし初対面の男にたいしてさえ、彼らは気取つてみせる。啞然たる眼つきをしか期待できなような擦れ違う男にたいしてさえ、そうである。クリストフはしばしばそういうくだらない孔雀の雛どもに出会つた。画家や音楽家や俳優などの卵どもであつて、ヴァン・ダイク、レンブラント、ベラスケス、ベートーヴェン、などのよく知られてる様子をまねたり、りつぱな画家、りつぱな音楽家、りつぱな労働者、深遠な思想家、快活な好男子、ダニユーヴの百姓、自然人、などの役割を演じたりして……。他人に注目されてるかどうかを見るために、通りすがりにちらと横目をつかつた。クリストフは彼らがやつて来るのを見、いよいよそばに近づいてくると、意地悪くも素知らぬ顔で眼をそらした。しかし彼らは長く気にはしなかつた。二、三步も行くと、もう次に出会う人に気取つて見せていた。——コレットの客間に集まる連中は、いくらか垢ぬけがしていた。彼らはことに精神を粉飾していた。二、三のモデルをもつていた。しかもそのモデルがすでに本物ではなかつた。あるいはまた、彼らは一つの観念をまねていた。力、喜悦、憐憫、連帯責任、社会主義、無政府主義、信仰、自由、などと。それが彼らの役割だつた。最も高

尚な思想をも文学上の一事となし、人間の魂の最も勇壯な飛躍にも、流行の襟飾りと同じ役目を帯ばせるだけの才能を、彼らはりっぱにそなえていた。

しかし彼らの最も得意な世界は、恋愛であった。恋愛は彼らの領有だった。快樂の研究においては彼らの通じないところはなかった。彼らはその手腕に任して、解釈の名譽を得るがために新しい問題までこしらえ出した。そういうことはいつでも、他に能事のない連中の仕事だった。恋をしていないから、せめて「恋を作り出す」のである。そしてことに恋を説き明かすのである。原文はきわめて貧弱なくせに、注釈が馬鹿に豊富だった。社会学は最も放縱な思想に珍味を与えていた。当時はすべてが社会学の天幕に覆われていた。自分の不貞な欲望を満足させるのがいかに愉快であろうとも、それを満足させながら新時代のために働いているのだと思ひ込まなかつたら、何か物足りない点が生ずるほどだった。それは明らかにパリー的な一種の社会主義であった。恋愛社会主義であった。

かかる恋愛の小宮廷を当時沸きたたせていた問題の中に、結婚における男女の平等および恋愛にたいする権利の平等というのがあった。善良で正直で抗弁好きでやや滑稽な青年ら——スカンジナビア人やスイス人のごとき——がいて、貞操の平等を要求して、女子と同じく男子も童貞で結婚すべきことを主張していた。パリー式の通人らは他の種類の

平等を、不品行の平等を要求して、男子と同様に女子も身を流して結婚すべきことを——情人をもつの権利を——主張していた。パリ—人らは、想像上においても実行上においてもあまりに姦淫かんいんをやり遂げたがために、それをもう無趣味に思い始めていた。文学界においては、もつと特殊な考案をもつてそれに換えようとしていた。それは若い娘の売淫ばいいんであった——言う意味は、規則的な、普遍的な、貞節な、端正な、家庭的な、おまけに社会的な、売淫である。——最近に現われた巧妙な一事が、この問題に範例をたれていた。諧かいぎやく諷ふう的な博識の四百ページ中で、「ベーコンの方法の規則に従って」、「快樂の最上整理法」が研究されていた。それは自由恋愛の講義で、優雅、適宜、良趣味、品位、美、真理、貞操、道徳、などがしきりに説かれていた。墮落したがってる上流の若い娘らにとつては、ベルカン式の好読物だった。——それは一時福音書となって、コレットの小宮廷でも盛んにもてはやされ、注釈されていた。もちろん、弟子でしたちのいつものやり方に漏れず彼らも、正しいものや、よく観察されたものや、かなり人間的なものまでが、逆説の下に隠されてるのをすべてうち捨てて、その悪いものをばかり取り上げていた。その甘いちつちやな花の花壇から、彼らは最も有毒なものを摘み取らずにはおかなかった。すなわち次のような警句を。——「逸樂の趣味は勤勉の趣味を鋭敏にするのみである。」——「処

女が享樂しないうちに母となるのは奇怪である。」——「童貞の男子を所有することは女子にとつて、思慮深き母性へ至る自然の準備である。」——「息子の自由を護るに用いると同じ微妙謹慎な精神をもつて、娘の自由を取り計らつてやるのは」母親たる者の役目である。——「年若な娘らは現今、講演会や友人の家の茶話会などから平気な顔でもどつてくるが、それと同じ様子で情人のもともからもどつてくる」時代が、やがて来るであろう。

コレットは笑いながら、こういう教えはきわめてもつともであると断言していた。

クリストフはそれらのことが大きらいだった。彼はその重大さとそれが流すかも知れない害毒とを、誇張して考えていた。ところがフランス人は、文学を実行するにはあまりに賢い。それら小型のデイドロー輩は、大ドウニーの小銭は、普通の生活においては、大百科辞典の非凡なパニユルジュのように、他の人々と同じく正直でかつ気の小さな市民となつてゐる。彼らは実行においてかく臆病おくびょうであるからこそ、でき得る限りの極端にまで実行を（頭の中の実行を）押し進めて喜ぶのである。それは少しも危険のない遊戯である。しかしクリストフは、フランス式の享樂者ではなかつた。

コレットを取り巻いてる青年らのうちに、彼女から好まれてるらしい者が一人いた。も

ちろんこの青年はまた、クリストフにとつては最も堪えがたい人物でもあった。

それは、貴族的な文学を書いたり第三共和政の貴族をもって任じたりして、成金の息子連中の一人だった。名前をリュシアン・レヴィー・クールといった。両方に広く離れた眼、鋭い眼つき、曲がった鼻、厚い唇、ヴァン・ダイク風に先とがりに刈り込んだ金褐色の髻、よく似合つてる早老の禿げかかりの頭、舌つたるい言葉つき、優美な物腰、いつも揉み手をしてる細い柔らかい手、をもつていた。非常な丁寧さを、巧妙な愛想を、いつも装つていて、実は嫌いで排斥したがつてる者にたいしてもそうだった。

クリストフは前に、文学者らの晩餐会へシルヴァン・コーンから初めて連れて行かれた時、この男に会つたことがあつた。そして、言葉をかわしはしなかつたが、その声を聞いただけですでに、一種の嫌悪を覚えた。彼はこの嫌悪の理由が自分でもわからなかつたが、あとになってその深い理由がわかるようになってきた。人には愛情の突発もあれば、また憎悪の突発もある——と言うのが悪ければ——（あらゆる情熱とともに憎悪という言葉をも恐れるやさしい魂の人に不快をかけないため）——敵を感じて身を護る健全な人の本能、と言つてもいい。

彼はクリストフと正反対に、皮肉と分解との精神を代表していた。死にかかつてる古い

社会のうちにあるすべての偉大なもの、すなわち家庭や結婚や宗教や祖国、また芸術においては、すべて男らしいもの、純潔なもの、健全なもの、民衆的なもの、あるいは、思想や感情や偉人や人間のうちにあるあらゆる信念、などをことごとく彼は、やさしく丁寧にひそかに攻撃していた。そういう思想の底には、分析の、極度の分析の、機械的な楽しみ、思想そのものを咬み砕かんとする、一種の動物的な欲求、あたかも蛆虫うじむしのような本能、があるばかりだった。そしてこの完全な知的咬嚼こうこうと相並んで、娘らしい肉感的快樂があった。娘といつても、それは青鞥者流せいとうの娘である。なぜなら、彼にあっては、すべてが文学的であり、もしくは文学的たるべきであつた。彼にとつては、すべてが文学の材料であつた、自分のまた友人の幸運も悪徳もことごとく。彼は小説や戯曲を書いていたが、その中で、両親の私生活、その内密事、友人らの内密事、自分の内密事、女との関係、なかならず、自分の親友の細君との関係、などをきわめて巧みに語っていた。人物の描写も手ぎわよくなされていた。読者もその細君も友人も皆、描写の精確なことをほめていた。彼は女の打ち明け話か寵愛ちようあいかを受ける時には、それを書物の中で言わずには済ませなかつた。——普通に考えると、彼の不謹慎な叙述は彼とその「関係の女たち」との間を冷たくするのが、当然らしく思われた。しかしそんなことは少しもなかつた。女たちはほとんど

ど迷惑がりもしなかった。ただ形式のことだけをかれこれ言っていたが、内心では、自分の裸体姿を公衆にさらしてもらったのがうれしかった。その顔に仮面を残してさえおけば、彼女らの貞節は無事だった。また彼の方でも、なんら意趣返し的心も、また誹謗ひぼうの心をも、それらの饒舌じょうぜつに含ましてはいなかった。彼は普通一般の者に比べて、さらに悪戯いたずらな息子むすこでもなければ、さらにいけない情人でもなかった。彼が自分の父や母や情婦のことを露骨にあばいてる同じ章の中にも、彼らのことを詩的な愛情と魅力とで述べてるページがあつた。実際のところ、彼は極端に親密な態度だった。しかしながら、愛するものをも尊敬しないで済ませる連中の一人だった。尊敬するところではない。多少軽蔑けいべつできるようなものを彼らはいっそう愛するのである。自分の愛情の対象は自分にいっそう近くいっそう人間的であるように彼らは考える。勇壮とかことに純潔とかいうことを少しも理解し得ない俗人どもである。勇壮や純潔などを、虚偽かあるいは精神の弱さかであるように見なしがちである。それでももちろん彼らは、芸術上の英傑をだれよりもよく理解してるとの確信をもち、その英傑らを保護者的な馴れ馴れなしさで批判するのである。

レヴィー・クールは、富裕閑散な中流市民階級の腐敗した生娘きむすめらと、いたってよく気が合っていた。彼は彼女らにとって一のお友だちであり、彼女らを教育し彼女らから必要

とされてる、ずっと自由な老練な一種の墮落した女中であつた。彼女らは彼にたいして少しも気兼ねをしなかつた。そしてプシユケーの燈火を手にしては自分らに好き勝手なことをさせるこの赤裸な両性の男を、物珍しげに研究していた。

繊細な性質をもち生命の墮落的な磨損ますんからのがれようとの感心な願いをもつてらしい、コレットのような若い娘が、どうしてかかる連中といつしよになるのを喜ぶことができるのか、クリストフには了解がいかなかつた。……クリストフは少しも人の心理に通じていなかった。リュシアン・レヴィー・クールの方がはるかによく通じていた。クリストフはコレットの信頼者であつたが、コレットはリュシアン・レヴィー・クールの信頼者であつた。すなわち彼女はレヴィー・クールにたいして大なる優越をもつていた。自分より弱い男を相手にすると思うことは、女にとつては気持のいいことである。女はそこに二つのものを同時にみずから満足させる、自分のうちにあるよくないものと、よい方のものすなわち母性的本能とを。リュシアン・レヴィー・クールはそれをよく知っていた。女の心を動かす最も確実な方法の一つは、この秘密な急所を突くことである。その上にコレットは、あまり自慢にもしていないがしかしりぞけようともしていない種々の本能をもつていて、自分を弱々しくまたかなり卑怯ひきょうに感じていた。それで、親しい男の厚かましく組み立て

られた告白を聞いて、他人も自分と同様であると考え、人間的性質はそのままだに容認する
 がいいと考えるのは、彼女にとつてうれしいことだった。すると彼女は、自分に快い性癖
 と戦わないで満足して、こうあるのが当然だと勝手な理屈をつけ、どうにもできない——
 （悲しいかな！）——ことにたいしては、反抗しないで寛大であるのがすなわち賢明なや
 り方だと、勝手に考えた。それこそ、実行に少しも困難でない賢明なやり方であつた。

清朗な心で人生をながめ得る者にとつては、社会の胸の中に、皮相な文明の極度の精練
 と深い動物性との間に、常に存在する矛盾は、大なる興味を含んでるものである。化石や
 化石された魂などでいっばいになつていないあらゆる客間は、あたかも二つの地層のよう
 に、たがいにつみ重ねられた二層の会話を現わしている。その一つは——皆が耳にしてる
 もので——知能のうちにある。他の一つは——あまり人に気づかれはしないが、しかし最
 も大きなもので——本能のうちに、動物性のうちにある。それら二つの会話は、しばしば
 たがいに撞着する。精神が慣習の通貨をたがいにかわしてる一方に、肉体は欲望や怨
 恨を口にし、あるいはさらに多く、好奇や倦怠や嫌悪を口にしている。その動物性は、
 幾世紀もの文明によつて馴養され、檻の中のみじめな獅子ほどに愚鈍にされてはいる
 が、それでもやはり餌食にあこがれている。

しかしクリストフは、年齢と情熱の死滅とのみがもたらしてくる公平無私な心境には、まだ到達していなかった。彼はコレットの相談者たる役目を、ごく真面目まじめに取ってしまった。彼女は彼に助けを求めたのだつたし、彼は彼女が軽率にも危険に身をさらしているのを見て取った。それで彼はもはや、リュシアン・レヴィー・クールにたいして敵意を隠さなかつた。レヴィー・クールの方では最初、クリストフにたいして、完璧かんぺきなしかも皮肉な礼節の態度を取っていた。彼もまた敵の様子を探っていた。しかし、恐るべき敵ではないと判断して、それとなく馬鹿にしていた。彼はクリストフから感心されさえすれば、心よく折り合つてゆけるのであつた。しかしそれはできない相談だつた。彼もよくそれを感じた。なぜならクリストフは考えを隠す術すべを知らなかつたから。そこでリュシアン・レヴィー・クールは、単に思想上の抽象的な対抗から、注意深く鈍ほろこさ先を隠した対人間的な戦いへ、それとなく移つていった。コレットがその懸賞品たるべきはずだつた。

彼女は二人の友を平等にあやなしていた。クリストフの道徳的優秀さと才能とを味わっていたが、またリュシアン・レヴィー・クールの面白い不道徳性と機知とをも味わっていた。そして内心では、後者の方により多くの楽しみを見出していた。クリストフは彼女に少しも叱責しっせきを控えなかつた。彼女は殊勝げにしおらしくそれを聴いた。それで彼の心も

和らいだ。彼女はかなり善良であったが、心弱さと温良そのものとのために本気でなかった。半ば狂言をやっていた。クリストフと同じように考えてるふうを装^{よそお}っていた。実は彼のような友人の価値をよく知ってはいた。しかし友情のためになんらかの犠牲を払うのを欲しなかった。何物にたいしてもまただれにたいしても、なんらの犠牲をも払いたくなかった。自分に最も便利で最も快いことを欲していた。それで彼女は、リュシアン・レヴィー・クールをいつも迎えてることをクリストフに隠した。友だちを皆引き止めてその皆を満足させるの技^{ぎりょう}倆をもつていなければならぬ者に必要な一種の技術に、子どもの時から馴^ならされてる社交裡^りの若い女性特有の、みごとにかわいい自然さをもって、彼女は嘘^{うそ}をついていた。クリストフに不快をかけないためだということを、みずから嘘の口実としていた。しかし実際においては、彼の言うところをもっともであるを知っていたからであり、彼と仲違^{たが}いをしないで自分の好きなことをやはりしたいからであった。クリストフは時々その狡^{こうかつ}猾な策略に気づいた。そして叱責し声を荒らげた。彼女はそれでもやはり、かわいらしいやや悲しげな後悔した小娘のふうを装った。そして彼にやさしい眼つき——女性の最後の策——を送った。クリストフの友情を失うかもしれないと感ずることは、彼女にとつてほんとうに悲しかった。彼女は誘惑的なまた真^ま面目な様子をした。すると果たして、

しばらくはクリストフの心を和らげることができた。しかし早晩、破裂に終わるの運命にあった。クリストフのいらだちのうちには、知らず知らずごく少しの嫉妬しつとがはいり込んでいた。そしてコレットの追従ついで的な策略のうちには、同じくごく少しの恋愛がはいり込んでいた。不和はそのためにますますひどくなるのほかはなかった。

ある日、クリストフはコレットが嘘をついてる現場を押えて、リュシアン・レヴィー・クールと自分とどちらかを選べと、手詰めの談判をした。彼女はその問題を避けようと試みた。そしてしまいには、好きな者はだれでも友だちにしておく権利があると主張した。彼女の言うところはまったく正当だった。クリストフは自分の方が滑稽こっけいだと気づいた。しかし自分がかく厳格な態度を取るのには利己心からではないということも、またよく知っていた。彼はコレットにたいして誠実な愛情をいいていたのである。たとい彼女の意志に逆らおうとも彼女を救いたかった。それで彼はへまに言い張った。彼女は返辞を拒んだ。彼は言った。

「コレットさん、では私たちがもう友だちでなくなることを望むんですか。」
彼女は言った。

「いいえ、ちつとも。あなたが友だちでなくなってしまうと、私はたいへん悲しいん

ですもの。」

「しかしあなたは私どもの友情に、少しの犠牲をも払いたがらないじやありませんか。」

「犠牲ですって！ まあ馬鹿なことをおつしやるのね。」と彼女は言った。「いつでも何かのために何かを犠牲にしなければならぬという訳があるでしょうか？ それはキリスト教的な馬鹿げた考えですわ。つまりあなたは、知らず知らず古臭いお坊さんになっていらっしゃるのね。」

「そうかもしれません。」と彼は言った。「私にとっては、これかあれかです。善と悪との間に、私は空間を認めません、たとい髪の毛一筋ほど。」

「ええ、知っています。」と彼女は言った。「だから私はあなたが好きです。ほんとに、たいへん好きですわ。けれど……。」

「けれど、も一人の方も同様に好きだ、というんでしよう。」

彼女は笑った。そして、いちばんかわいい眼つきをしいちばんやさしい声をして言った。「お友だちでいてくださいね！」

彼はまた負けかかった。しかしそこに、リュシアン・レヴィー・クールがはいつて来た。そして同じかわいい眼つきと同じやさしい声とが、彼を迎えるのに使われた。クリストフ

は口をつぐんで、コレットが芝居をうつてるのをながめた。それから、交誼こうぎを絶とうと決心して立ち去った。心が悲しかった。しかし、いつも執着して罣わなにかかっただけばかりいるのは、いかにも愚かなことだった。

彼は家に帰って、機械的に書物を片付けながら、退屈なまま聖書を開いて読んだ。

……主しゆは宣たまえり、シオンの娘らは、首を硬かたくし、眼を動かし、気取りたる小足にて歩み、足の輪を鳴らせばなりと。

主はシオンの娘らの頭の頂はげを禿はげとなし、その裸の地を見出したもうべし……。

彼はコレットの素振りを考えて放笑ふきだした。そして機嫌きげんよく床についた。それから、自分にとつては聖書も滑稽こっけいな読み物となったところをみると、自分もまたパリーの腐敗に冒されたのに違いないと考えた。けれども彼はやはり寢床の中で、そのおかしな大審判者の判決文をくり返し思い出していた。そしてあの年若な女友だちの頭にはそれがどう響くか、想像してみようとした。彼は子どものように笑いながら眠った。自分の新しい苦しみのこととはもはや考えていなかった。可もなく不可もないことだ……。彼はそれに馴なれていた。

彼はなおコレットにピアノの稽古けいこを授けることはやめなかった。しかしそれから後は、彼女から親しい対談をされるような機会を避けた。彼女がいかに悲しい様子をしたり、怒ったふりをしたり、そのつまらない術策じゆさくを弄ろうしたりしても、彼はがんばっていた。二人は不機嫌ふきげんな顔を合あった。ついには彼女の方から、口実くつじを設けて稽古の回数を減らした。彼もまた口実を設けてストウヴァン家の夜会へ招待されたのを断わった。

パリーの社交界はもうたくさんだった。その空虚、無為、精神的無力、神経衰弱、理由も目的もなくただ空費される妄評もうひよう、などに彼はもう堪えることができなかつた。芸術のための芸術の、また快樂のための快樂の、この沈滞せる雰囲氣ふんいきの中に、どうして一民衆が生活し得るかを、彼は怪しんだ。それでもこの民衆は生活していた。かつては偉大だった。まだ世界においてかなりつばな顔つきをしていた。遠くからながめる者には幻をかきさしていた。しかし、どこからその生存の理由をくみ取っているのか？ 何物も信ぜず、快樂をしか信じていないのに……。

クリストフはそこまで考えを進めていると、青年男女の騒々しい一群に、往来の中で出会った。彼らは一つの車をひいていた。車の中には一人の老牧師がすわって、左右の人々に祝福を与えていた。その少し先を見ると、フランス兵らが斧おのを振りあげて、教会堂とびらの扉

をこわしており、それにたいしてりっぱな紳士らが、椅子をかざして対抗していた。クリストフはフランス人がな何かを信じてることに気づいた——何をであるかはまだわからなかった。人の説明によれば、一世紀間の共同生活の後に国家は教会と分離したのであって、教会が快く別れ去ることを欲しなかったので、法と力とをそなえた強い国家は、教会を駆逐してゐるのであった。クリストフはそれを適宜なやり方だとは思わなかった。しかし彼は、パリーの芸術家らの無政府的享樂主義に弱らされていたので、いかにつまらない主旨にせよ、それに熱中せんとする人々に出会うと、ある喜びを感じざるを得なかった。

彼はやがて、そういう人物がフランスにはたくさんいることを認めた。政治新聞はホメロスの英雄らのようにたがいに戦つていた。内乱を煽動する記事を毎日掲げていた。実を言えば、それもただ言葉の上のことだけで、実際の腕力沙汰になることはめつたになかった。けれども、他人が書いてる道徳を実地に行なうような率直な者も、いないではなかった。すると、不思議な光景が見られるのであった。フランスから分離したつもりでいる地方、脱走した連隊、焼かれた県庁、憲兵隊の先頭に立つて馬に乗つてる収税吏、自由思想家らが自由の名においてこわそうとしてる教会堂を保護せんため、釜に湯を煮たて手に鎌をもつてゐる農夫、アルコール地方にたいして反抗した葡萄酒地方へ話しかけるため、木

の上に登っている民衆の贖主^{あがないぬし}。ここかしこに無数の群集がいて、拳固^{げんこ}を差し出し、怒鳴^なつて真赤^{まっか}になつていたが、しまいには本気でなぐり合うのだった。共和政府は民衆に媚^こびていた。そして次には、民衆を薙^なぎ払^なわせていた。民衆の方でもまた、民衆の赤子——将校や兵卒——の頭をたたき割つていた。かくてそれぞれ、自分の主旨と拳固^{げんこ}とのりつばなことを、他人に証明してみせていた。そういうありさまを遠くから新聞を通じてながめると、数世紀も逆転したがように思われるのだった。フランスは——この懐疑的なフランスは——熱狂的な民衆であるということ、クリストフは発見した。しかしいかなる意味において熱狂的だかは、知ることができなかった。宗教に味方してかあるいは反対してか？ 理性に味方してかあるいは反対してか？ 祖国に味方してかあるいは反対してか？——彼らはそれらすべての意味において熱狂的だった。彼らは熱狂的であるという快樂のために熱狂的になつてゐるがようだった。

ある晩彼は、ストウヴァン家の客間で時々出会つたことのある、社会主義の一代議士と話を交えることになつた。彼はすでにこの男と言葉をかわしたことはあつたが、その肩書は少しも知らなかつた。これまで二人は音楽のことを話したにすぎなかつた。彼はこの社

交界の男が過激な党派の一首領だときいて、たいへん驚かさされた。

このアシル・ルーサンは好男子であつて、きんかつしよく金褐色の髻ひげ、喉のどにかかった言葉つき、つやつやした顔色、懇切な物腰、卑俗な素質を含んである種の高雅さ、時々仄ほの仄見える朴ぼくと訥つな身振り、すなわち、人前で爪つめをみがくやり方、人に話しかける時にはいつも、相手の服をつかんだり手を握つたり腕をたいたいたりする、ごく平民的な習慣、——それに、大食家で、大酒家で、道楽者で、笑い好きで、権力を得んとて突進する一平民に見るような貪欲どんよくをそなえていた。また円転滑脱で、環境と相手とに従つて様子を変えるのが巧みで、もつともらしい様子でよくしゃべり、聞き上手じょうずで、人の言うことにすぐ同化した。そのうえ、よく物に同感し、怜悧れいりであつて、生来の趣味と後天的趣味と虚栄心とから、何物にも興味をもつた。そしてかなり正直だつた、自分の利害に衝突しないくらいに程度のにおいて、また正直でないことが危険であるような場合に応じて。

彼の細君はかなりきれいだつた。背が高く、格好がよく、骨格が丈夫で、身体つきもすらりとしていて、きつちり合つた華美な服装は、肉体の強健な円まるみをとくによく示していた。縮れた黒髪に縁取られた顔、大きな黒い厚ぼつたい眼、とがり気味の頤あご、そして、実は太いけれど見たところかなりほつそりとした顔つきは、ただ瞬またたきがちな近視の眼とつぼ

めた口の動きで、少し損ぜられてるのみだった。ある小鳥のようなわざとらしい落ち着きのない態度と、愛嬌あいきょうを装よそおつてはいるが淑しとやかさと親愛しんあいさに富んだ話し方をそなえていた。中流の富裕な商家の生まれで、自由な精神と徳操とを有し、宗教にでも執着するよ
うな調子で、世間的な無数の仕事に執着していた。芸術的な社会的な仕事をももちろん引
き受けていた。一つの客間サロンを作ることに、通俗大学にも芸術を普及させることに、博愛的
や児童心理学などに従事すること——それも大した熱心や深い興味をもってではなく——
たえずある学科を暗誦あんしゅうせんとし自分の知識を自負して教育ある若い女に見るような、
無邪気な街げんがく学心、それからまた、生来の温良な性質、気取りたい性質、などが入り交つ
た心持をもつてであつた。彼女はただ何かをしないではおれなかつた。しかし自分のして
る事に興味をもつ必要はなかつた。いつも指先に編み物をもてあそんでしきりなしに針を
動かし、あたかも世界の安危はその用もない仕事にかかるとでもいうようなふうをし
てる婦人が、世にはよくあるものだが、ちようどそういう熱中の仕事ぶりに彼女のも似
ていた。そしてまた彼女のうちには——「編み物をする女」と同じく——自分を手本とし
て他の女に教えをたれる、正直な婦人の小さな虚栄心があつた。

代議士は彼女にたいして温かい軽蔑けいべつ心をいだいていた。彼が彼女を妻に選んだのは、

彼の快樂と安靜とに好都合だった。彼女は美しかった。彼はその美を享樂して、それ以外は何にも彼女に求めなかった。彼女も彼にそれ以上を求めなかった。彼は彼女を愛し、しかも彼女を欺いていた。彼女は自分の分け前さえ得れば、そんなことには平気だった。おそらくある種の興味を見出してさえいたのだろう。彼女は冷靜で肉感的であつた。妾嬖めかけの心ばえをそなえていた。

彼らには四、五歳になるきれいな児こが二人あつた。そして彼女は、夫の政治や流行および芸術の最近の傾向などに氣をつけるのと、同じかわい冷やかな勉強さで、家庭の賢母として子どもの世話をしていた。そういう中であつて彼女は、進んだ理論や極度に頽たいはい廢はい的な芸術や世態の動搖や市民的感情などの、最も不思議な混和体を形造つていた。

彼らはクリストフを自宅に招待した。ルーサン夫人はりっぱな音楽家で、みごとにピアノをひいた。微妙な確實な手をもつていた。小さな頭を振りたてて鍵キーを見つめ、鍵の上を両手を躍おどらしながら、牝めんどり鶏どりがくちばしで物を突つついてるような様子だった。音楽にかけて多くのフランス婦人よりも天分に富み教養が深くはあつたが、もとよりその深い意味にはまったく無関心だった。音楽は彼女にとって、音と律動リズムと調子との連続であつて、彼女はそれを正確に聴き取りまたは暗誦してのみだった。自分にとつても魂は必要ではな

かつたから、音楽のうちにも魂を捜そうとしなかつた。愛想がよく伶俐れいりで単純でいつも人の世話をしたが、つて彼女にでもそうであるが、クリストフにも歓待をつくしてくれた。クリストフは別にありがたいと思わなかつた。彼は彼女に多くの同情を寄せていながつた。いてもいなくても同じような者だと思つていた。彼女が夫の情事を知りながら情婦らとともに夫を分有して満足してゐることをも、彼はわれ知らず許しがたく思つてゐたに違ひない。受動的だということはあらゆる悪徳のうちでも、彼が最も許しがたく思つてたものである。

アシル・ルーサンにたいしては、彼はもつと親しい交わりを結んだ。ルーサンは他の芸術を愛すると同じように、音楽をも粗野ではあるが真面目まじめな心で愛してゐた。一つの交響曲オニを愛する時には、それといつしよに臥ふせるような様子だつた。教養は浅薄だつたが、それを巧みに利用してゐた。この点においては彼の妻も何かの役にたつた。そして彼は、自分と同じような強健な一平民の姿をクリストフのうちに認めて、クリストフに興味を覚えた。そのうへ彼は、この種の変人を目近に観察したが、つていたし——（彼は人間をいくつ観察しても飽きない好奇心をもつてゐた）——パリーきたんに関する彼の印象を知りたがつてゐた。そしてクリストフの露骨な忌憚きたんなき意見を面白がつた。彼はかなり懷疑的だつたの

で、それらの意見の正確さを認めることができた。クリストフがドイツ人であることは邪魔にはならなかった。かえってその反対だった。彼は国家的偏見を超越すると自負していた。そして結局、彼は真面目に「人間的」だった——（それが彼の主要な特長だった）——すべて人間的なものに同情を寄せていた。しかしながら、それでもやはり彼は、フランス人——古い民族、古い文明——の方が、ドイツ人よりも優秀だという確信をいだかざるを得なかったし、ドイツ人をあざけらずにはいられなかった。

クリストフはアシル・ルーサンの家で、過去に大臣でありあるいは未来に大臣たるべき、他の政治家らに出会った。それらの著名な人々から話せる男だと判断されて、そのおのおの一人一人話をしたら、彼はかなり愉快を感じたかもしれない。一般に伝えられている意見と反対に、彼は知り合いの文学者仲間よりも、これら政治家の連中をより興味深く感じた。人類の熱情や大なる利害問題にたいして、彼らはいっそう活発な打ち開けた知力をもっていた。たいていは南欧生まれの話し^{じょうず}上手で、驚くべきほど芸術愛好家だった。その点だけを言えば、「ほとんど文学者と同じだった。もちろん彼らは芸術にかなり無知で、ことに外国の芸術には無知だった。しかし彼らは皆、多少の芸術通をもって任じてい

た。そしてしばしばほんとうに芸術を愛していた。大臣連中の会議が、小雑誌の会合に似てくることさえあった。ある者は脚本を作っていた。ある者はヴァイオリンをかき鳴らし、ワグナー狂だった。ある者は絵画を塗りたてていた。そしてだれも皆、印象派の画を集め、頽^{たいはい}廃派の書物を読み、彼らの思想とは大敵である極端に貴族的な芸術を、追^{ついしやう}従^{じゆう}的に味わっていた。社会主義もしくは過激社会主義のそれら大臣連中が、飢餓階級の使徒らが、精緻^{せいぢ}な享樂の方面における通人を気取つてのを見ると、クリストフは変な気がした。もちろんそういうことをするのも彼らの権利ではあった。しかし彼から見るとあまり誠実だとは思われなかった。

最も不思議なことには、彼らは個人としては、懷疑的で快樂主義者で虚無主義者で無政府主義者であるくせに、一度実行に移ると、すぐに熱狂的になるのであった。最も享樂的な連中でも、権力を得るようになると、東方的な小さな専制者になるのだった。すべてを意のままに指導して何物をも自由にさせない病癖をもっていた。懷疑的な精神と暴君的な氣質とをもっていた。誘惑の方があまりに強いので、専制者中の最も偉大なる者によって昔制定された、中央集権制の恐るべき機関を利用せずに、それを濫用してばかりいた。その結果一種の共和的帝政主義が生じ、近年になつては、無信仰的なカトリック主義がその

上につみ重なってきた。

ある期間政治家らは、物体——というのは財の謂いである——の支配をしか主張しなかった。靈魂の方はほとんどそのままに放っておいた。鑄直いなおすことができなかつたからである。靈魂の方でもまた、政治には関与しなかつた。政治は靈魂の上や下をすべり越していた。フランスにおいては政治は、商業や工業の有利なしかし不確実な一分派だと考えられていた。知識階級は政治家らを軽蔑けいべつし、政治家らは知識階級を軽蔑していた。——ところが最近になって、政治家らと知識階級の最下級者らとの間に、多少の接近が生じてき、やがて間もなく同盟が結ばれた。思想の絶対支配権を僭せん有ゆうする新しい一つの力が、舞台に現われてきた。それは自由思想家らであつた。彼らのうちに専制政治の完全な一機関を見出したも一つの力と、彼らは結託した。彼らは教会を破壊するよりもむしろ、それに取って代わろうとした。そして実際彼らは、自由思想という一つの教会を作り上げた。特殊な教理問答、儀式、洗礼、最初の聖体拝受、結婚、地方のまた一国の教議會、ならびにローマの万国的教議會、などをもつていた。「自由に思考する」ために群をなして団結しなければならぬ、それら無数の憐あわれな愚人どもは、実に笑止の至りだつた。實際のところ、彼らの思想の自由なるものは、他人の思想の自由を理性の名において禁ずることにあるの

だった。カトリック教徒らが聖母を信ずると同じように彼らは理性を信じていた。この両者の人々はともに、理性もしくは聖母というものは、それ自身では何物でもなく源は他にあることを、少しも気づかずにいた。そして、カトリック教会がその僧侶そうりよの軍隊や修道会を備えて、ひそかに国民の血管中にはいり込んで病毒を伝播てんぱさせ、反対者のあらゆる活力を絶滅さしてると同じく、反カトリックのこの教会の方でも、秘密結社員らを備えていて、その本部たるグラン・トリアンにおいては、敬虔けいけんなる密告者らがフランスの四方から毎日送ってくる秘密通信を、残らず帳簿に書き取っていた。共和政府では、軍隊や大衆や国家のあらゆる肢体したいを実は脅かして、それら乞食坊主こじきや理性の狂信者らの密偵を、内々奨励していた。そして、彼らが国家に仕えるふりしながら、次第に国家に取って代わらんと目ざしていることを、少しも気づかなかつたし、また国家が徐々に、パラゲーのジエズイット派のそれとほとんど選ぶところのない、無信仰的な神権政治へ進みつつあることを、少しも気づかなかつた。

クリストフはルーサンの家で、それら俗衆的使徒の数名に会った。彼らは皆いずれ劣らぬ拝物教徒であった。当時彼らは、法廷からキリストを追い出したことを歓喜していた。数個の木片を破壊したことで、すでに宗教そのものを破壊したと信じていた。カトリック

教徒から奪ってきたジャンヌ・ダルクやその聖母の旗を、独占してる者らもあつた。この新しい教会の長老の一人、他の教会のフランス人らと戦っていた一人の將軍は、ヴェルキングトリックスを称揚して反僧侶的な演説を試みた。自由思想派が銅像をささげたこのガリアの首領が、平民の子であつたことを祝し、ローマに（ローマ教会に）対抗したフランスの第一人者だつたことを祝した。ある海軍大臣は、艦隊を浄化しカトリック派を憤慨させるため、戦艦にエルネスト・ルナンという名をつけた。また他の自由精神の人々は、芸術を純化せんとつとめていた。彼らは十七世紀の古典文学を抹殺^{まつざつ}し、また神の名でラ・フォンテーヌの物語を汚すことを許さなかつた。昔の音楽についても同じくそれを許さなかつた。クリストフが實際聞いたところによると、ある過激派の老人——（年を取つて過激なのは馬鹿の骨頂だ、とゲーテは言った）——は、ベートーヴェンの宗教的な歌曲が通俗音楽会のうちに加えられることを、ひどく憤慨していた。彼はその歌詞を変えよと要求していた。

なおいつそう過激な他の人々は、あらゆる宗教的音楽とそれを教える学校とを、そつくり廃止してしまうことを望んでいた。このベネチアでアテネ人だと見なされてある美術学校の校長は、やはり音楽家らに音楽を教える必要があることを、つとめて説明したけれ

ど甲斐かいがなかった。彼は説いた。「兵營へいえいに送られた一兵卒は、銃の操法や射撃法を徐々に教えられる。年若い作曲家についても同様である。頭には無数の觀念くわんが湧わいているが、その分類はまだ行なわれてはいない。」そして彼は、自分の勇氣にみずから恐れて、一句ごとにくり返した。「私は老いたる自由思想家である……私は老いたる共和主義者である……。」それから彼は大胆に次のことを宣言した。「ベルゴレージの作が歌劇であるかミサ曲であるかを知るのは、重要なことではない。それが人間的な芸術の作品であるかどうかを知るのが、肝腎かんじんである。」——しかし相手の一徹な論理は、この「老自由思想家」へ、「老共和主義者」へ、答え返した。「二種の音楽があるのだ、すなわち教会堂で歌われる音楽と、他の場所で歌われる音楽と。」第一のものは理性と国家との敵であった。そして国家的理性はそれを廃止すべきであった。

これらの馬鹿者どもは皆、危険な人物というよりもむしろ滑稽こっけいな人物と言うべきであった。しかしながらただ、彼らの背後には真に価値ある人々が隠れていた。この人々は彼らの支柱となっていて、彼らと同じく——おそらく彼ら以上に——理性の狂信者であった。トルストイはどこかで、宗教や哲学や政治や芸術や科学などを支配してる、かかる「伝染的影響」のことを述べている。「人はかかるばかげた影響の狂愚さを、それから脱した時

にしか認めない。それに服従しての間は、いかにもそれを真実だと思つて、論議する必要をも考えない。」それはまったく、チューリップにたいする熱愛、ようじゆつ妖術者にたいする信仰、文学様式の変態などと同じものだった。——理性の宗教はそういう狂愚の一つだった。最も愚昧ぐまいな者にも最も教養ある者にも、議院の有象無象にも大学の最も賢明なるある人々にも、等しく感染していた。そして愚者におけるよりも智者においてさらに危険だった。なぜなら、愚者においては平穩な遲鈍な樂天思想とよく調和して、力をゆるめられていたからである。ところが智者の方においては、その弾力は緊張され、狂信的な悲觀思想によつて刃が鋭くなされていた。この悲觀思想は、自然と理性との根本的な敵対を少しも見誤ることがなく、邪悪な自然にたいする、抽象的な自由、抽象的な正義、抽象的な真理、などの戦いをますます激しくならしむるのみだった。そこには、カルヴィン派式の、ジャンセニスト式の、ジャコバン式の、理想主義の根底があり、人間の救うべからざる墮落にたいする古い信仰があつた。それを破り得るものは、また破るべき務めを持つてゐるものは、ただ、心中に理性——神の精神——が吹き渡つてゐる選ばれたる人々の、動かしがたい傲ごうま慢性のみであつた。それはきわめてフランス人の典型だった。「人間的」でない知的なフランス人だった。鉄のように堅い小石、何物もそれを貫くことができない。それは触れ

るものすべてを破損させる。

クリストフはアシル・ルーサンの家で、それら理屈的な狂人の数人と話をして、非常に驚かされた。フランスに関する彼の考えは、そのために覆えくつがされた。彼は一般に伝えられてる意見どおりに、フランス人とは円満な社交的な寛大な自由好きな民衆だと、これまで信じていた。ところが今、自家独特な三段論法の犠牲に他のすべてをいつでも供さんとして、抽象的観念の狂人、論理の病人を、見出したのであった。彼らはたえず自由のことを口にしていたが、最も自由を了解せず最も自由に堪えきれぬ人々だった。知的熱情のため、もしくは常に理性を失うまいとするために、これほど冷淡な苛酷かこくな専制的性格になつてゐる者は、世界のどこにも見出されないほどだった。

それはただ一党派のことだけではなかった。どの党派も同じことだった。彼らは、自分の祖国の、自分の地方の、自分の団体の、自分の狭い頭腦の、政治的もしくは宗教的の形式以外には、何物も見ようとしなかった。そのうちには反ユダヤ主義者らがいた。あらゆる財産上の特権者らにたいする激しい憎悪のうちに、全身の力を費やしつくしていた。なぜなら彼らは、あらゆるユダヤ人を憎んでいたし、自分の憎むあらゆる者をユダヤ人だと呼んでいた。また国家主義者らがいた。他のあらゆる国民を憎み——（ごく温和な時には

軽蔑するだけで満足していたが——自国民のうちにおいてさえ、自分らと同じ考えをしない人々を、外国人だの変節漢だの叛逆者だのと呼んでいた。また反新教徒らがいだ。すべての新教徒らはイギリス人かドイツ人かであると信じ、それを皆フランスから駆逐しようとしていた。また西方主義者らは、ライン河以東には何物も認めようとしなかった。北方主義者らは、ロアール河以南には何物も認めようとしなかった。南方主義者らは、ロアール河以北の者を野蛮人だと呼んでいた。その他、ゲルマン民族たることを光榮としてる人々、ゴール民族たることを光榮としてる人々、そして最も狂愚なのは、父祖の敗亡を誇りとしてる「ローマ人」ら。あるいはまた、ブルトン人、ローレン人、フェリブル人、アルビジオア人。それから、カルパントラスの者、ポントアーズの者、カンペル・コランタンの者。いずれも皆自分自身をしか認めず、自分であることを貴族の肩書とし、他人が異なった意見をもつことを許さなかった。この種の人間にたいしては施す術がない。彼らはいかなる理屈にも耳を貸さない。自分以外の全世界を焼きつくすか、自分が焼かれるか、いずれかのほかはないのである。

かかる民衆が共和政体にあるのは仕合わせなことだと、クリストフは考えた。それら小さな専制者らは、たがいに滅ぼし合っていたからである。もし彼らの一人が国王になって

いたとすれば、他のだれにも十分の空気は残されなかつたであろう。

理屈癖の民衆にも、彼らを救う一つの長所——矛盾どうちやく撞つ着——があることを、クリストフは知らなかつた。

フランスの政治家らもその例に漏れなかつた。彼らの専制主義は無政府主義で緩和されていた。彼らはたえず一方の極端から他の極端へと移つていた。左方において思想の狂信者らにすぎるとすれば、右方においては思想の無政府主義者らにすぎつていた。彼らの周囲にはいつも、享樂的な社会主義者やくだらない猟官連の群れが見えていた。こういう連中は、勝利にならないうちは用心して戦闘に加わらないで、いつも自由思想家軍のあとについて行き、その勝利のあとには毎回、敗北者らの遺留品を奪い合つた。理性の選手らが努力していたのは、理性のためにはなかつた……かくも汝努むれど、そは汝自身のためならず……。それはこの一所不住の利用者らのためにであつた。彼らは自国の伝統を喜んで蹂躪じゅうりんするが、一つの信仰を破壊してそのあとへ他の信仰をすえるの意志はなく、そのあとへ自分自身をすえようとばかりしていた。

クリストフは、リュシアン・レヴィー・クールがこの仲間であることを認めた。リュシ

アン・レヴィー・クールが社会主義者だと聞いてもあまり驚きはしなかった。社会主義の成功が確かなので、リュシアン・レヴィー・クールはそれに加担したのだと、単純に考えた。しかし、リュシアン・レヴィー・クールが反対党の陣営にも同じく顔出しをするような策を取つてゐるのを、彼は今まで知らなかった。レヴィー・クールはそこで、政治および芸術上の最も反自由思想家たる人々と、反ユダヤ主義の人々とまで、うまく交誼こうぎを結んでいた。クリストフはアシル・ルーサンに尋ねた。

「どうしてあなたはあんな男を仲間にしておくのですか。」

ルーサンは答えた。

「なかなか才があるですからね。それに彼はわれわれのために働いてくれてるんです。旧世界を破壊してくれてるんです。」

「破壊しているのは私もよく知っています。」とクリストフは言った。「しかしあまりよく破壊するので、なんで建て直したらいいかわからなくなりはしませんか。あなたの新しい家のために彼が十分の材料を残してくれるだろうと、あなたは信じていられるのですか。あなたの普請場ふしんにはもう虫がくいこんでいますよ……。」

社会主義をむしばむ者はリュシアン・レヴィー・クールのみではなかった。社会主義の

新聞にはこの種の小文士がいっぱい群がっていた。彼らは芸術ラル・プールの芸術のための芸術の味方であり、贅ぜいたく沢を事とする無政府主義者であつて、成功へ至り得る道をすべて占領していた。彼らは他人の道をさえぎり、民衆の機関だと言われる新聞に、おのれの頽たいはい廢的な享樂主義と生存競争との匂においを満たしていた。彼らは地位だけで満足しなかつた。榮譽までも求めていた。にわか造りの銅像や、石膏せつこう細工の天才の前での演説が、これほど多い時代はかつて見られなかつた。仲間の偉大なだれかへ周期的に、光榮の居い候きこうどもが饗きやう宴えんをささげていた。それも彼の功業が一つ成つた機会にはなく、勲章を一つ授けられた機会においてであつた、なぜなら、彼らが最も感動するのは勲章だったから。耽美主義者たんび、超人、居留外国人、社会主義の大臣、などが皆一致して、あのコルシカの将校が制定したレジオン・ドヌールへの叙勲を祝賀していた。

ルーサンはクリストフの驚きを面白がつた。彼はこのドイツ人が自分の仲間をあまりに酷評してるのだとは思わなかつた。彼自身もクリストフと二人きりになると、彼らを容赦なく批判した。彼はだれよりもよく彼らの愚劣さや策略を知つていた。とは言うものの、彼らの支持を得るために彼らを助けてやらなければならなかつた。なおまた、親しい談話のうちでは軽蔑けいべつ的な言葉で民衆のことを平氣に論じても、一度議政壇上に立つと彼は別

人の観があつた。頭から出る声を張り上げ、鼻にかかった打ちおろすような厳おごそかな鋭い調子になり、顫せんおん音や鈍重な音を出し、羽ばたきのような震えがちの広い大きな身振りをした。彼はまったくムーネー・シュリーの芝居を演じていた。

ルーサンがいかなる程度まで社会主義を信じているかを、クリストフは解き明かそうと努めた。心底において彼が信じていないことは明らかだった。彼はあまりに懐疑的だった。それでも彼は思想の一部分では信じていた。自分でもそれが一部分にすぎない——（そしておそらく最も重要な部分ではないだろう）——ことをよく知ってはいたが、それでも生活や行為をそれに従つて規定していた。なぜならその方が便宜であつたから。それは実際上の利害からばかりでなく、また生活的利害、存在および行動の理由からでもあつた。社会主義の信仰は彼自身にとつては一種の国家的宗教だった。——大多数の人は彼と同じような生き方をしてるものである。内心では信じてもないところの、宗教的信仰、道徳的信仰、社会的信仰、もしくは純粹に實際的な信仰——（自分の職業や自分の仕事や人生における自分の役目の有用さなどにたいする信仰）——そういうものの上に彼らの生活は立てられている。しかし彼らは内心では信じていないということをみずから知りたがらない。なぜなら、そういう信仰の様子、各人がみずからその教師たる公然の宗旨が、生きんため

には必要であるから。

ルーサンは最も下等なうちの一人ではなかった。この党派では実に多くの者が、社会主義もしくは急進主義を「やって」いた——それも、野心からとも言えないほどのものだった。それほど彼らの野心は短見浅慮で、直接の利益と再選との範囲を出でなかった。彼らは新しい社会を信ずるようなふりをしていた。おそらくかつて信じたことがあったのだろう。しかし実際は、死にかかっている社会の遺物によって生活しようとしか考えていなかった。近視的な便宜主義が享樂的な虚無主義に仕えていた。未来の大利害は現在の利己主義にささげられていた。彼らは軍隊の減員を行なっていた。選挙人の意を迎えるためには祖国の四肢を断つかもしれなかった。彼らに欠けているのは知力ではなかった。彼らはなすべきことをよく知っていた。しかしそれを少しもなさなかった。なすには多くの努力がいるからだ。彼らはおのれの生活と国民の生活とを、最少の労力で整えようと欲していた。社会の上下を通じて、できるかぎり快樂を多くして努力を少なくせんとする同一の道德が支配していた。かかる不道德な道德が、多難な政治を導いてゆく唯一の糸であった。そこでは、首領らが無政府の実例を示していた。不統一な政策が一時に十鬼^とを追って、途中で

それを一つ一つ取り逃がしていた。平和主義の陸軍省と相並んでる好戦的な外交、軍隊を刷新せんがためにかえって破壊してゐる陸軍大臣、造兵職工らを反乱さしてゐる海軍大臣、戦争の恐怖を説いてゐる軍事教官、道楽的な将校、道楽的な裁判官、道楽的な革命者、道楽的な愛国者。一般にわたる政治道德の墮落であつた。各人は国家から、職務や手当や勲位を授かることばかり待つてゐた。そして実際に国家は、それを顧客らにかならず振りまいてゐた。権力者の子や甥おいや縁故の者や部下などに、名誉と仕事とをおごつてやつた。議員らは歳費の増額をみずから投票してゐた。財産や地位や肩書など国家のあらゆる資源が、ほしいままに濫費されてゐた。——そして、上層の实例の痛ましい反響として、下層には怠業が起こつてゐた。祖国にたいする反抗を教える小学教員、手紙や電報を焼く郵便局員、機械の歯車仕掛けに砂や金剛砂を投げ込む工場職工、造兵ぞうへい廠しょうを破壊する造兵職工、焼かれる船舶、労働者自身の手によつてなされる恐るべき労働の浪費——富者の破壊ではなく、世界の富の破壊であつた。

この仕事を確認するために、選ばれたる知者らが、民衆のこの自殺的行為を、幸福にたいする神聖なる権利という名において、理性と権利の上に立脚せしめて喜んでゐた。病人めいた人道主義は、善悪の差別を無視し、罪人の「責任なき神聖なる」人そのものにな

いして憐憫れんびんの情を寄せ、罪惡の前に平伏して罪惡に社会を委ゆだねていた。

クリストフはこう考えた。

「フランスは自由というものに酔っている。狂乱を演じたあとで酔い倒れてしまふだろう。そして眼を覚さます時には、拘留所にぶち込まれてるだろう。」

この過激民主政のうちで、最もクリストフの氣を害したことは、明らかに根底の不確実な連中によつて最も悪い政治的暴逆が冷やかになされるのを、目撃することであつた。かかる浮薄な徒輩と、彼らがなしもしくは許かこくしてゐる苛酷な行為との間には、あまりに厚かましい不均衡が存在していた。彼らの中には二つの矛盾したものがあるようだった。すなわち何物をも信じない不安定な性質と、何物にも耳を傾けず、ただ人生をかき回す理屈癖の理性と。種々の方法でいじめつけられてゐる平和な市民やカトリック教徒や将校などが、なぜ彼らを放逐しないのかしらと、クリストフは怪しんだ。そして彼は何にも隠かくすことができなかった。ルーサンは容易に彼の考えを推知した。ルーサンは笑い出して言った。「もちろんそれは、君か僕か、とにかくわれわれがやることでしょう。しかし彼らにはなかなかやれはしない。少しの断固たる決心もできない憐あわれな奴どもです。ただ答え返すの

がうまいばかりです。倶楽部クラブのために馬鹿ばかになり、アメリカ人やユダヤ人に身を売つてゐる、
耄碌もうろくした貴族どもで、自分の近代主義を証明するためには、流行の小説や芝居の中で演
ぜさせられる屈辱的な役目を喜び、侮辱する者らの御機嫌きげんを取つてるといふ奴どもです。
何にも読まず、何にも理解せず、何にも学ぼうとせず、ただいたずらに苦々にがにがしい無用な
悪口を言うことばかりを知つてゐる、癩かんしやくもちの俗輩ぶくろです。——その熱情と言つたら、
ただ眠ることだけです。ためこんだ金かね囊ぶくろの上にぐつすり寝込んで、眠りの邪魔になる
ような者を憎み、または働いてゐる者をも憎むんです。なぜなら、自分たちが眠つてゐる間に
他人が動きまわつてゐることは、彼らの邪魔になるからです。……もし君がそういう連中を
よく知つたら、君はわれわれの方に同情を寄せてくれるようになるでしょう。「しかしク
リストフは、両者いずれにたいしても大なる嫌忌けんきの念を感じるのみだつた。なぜなら彼は、
被迫害者の下劣さは迫害者の下劣さを許してやる口実にならうとは考えなかつたから。彼
はストウヴァン家で、富裕な不機嫌ふきげんなこの中流市民の典型的人物にしばしば出会つていた。
ルーサンは彼らのことをこう彼に言つてきかせた。

……恥もあらずほまれ誉もあらず

いたずらに生くる者らの悲しき魂……。

ルーサンおよびその仲間の者らが、それらの人物を統御する力を自信してのみでなく、またその力を濫用するの権利をも自信してることについては、クリストフも明らかにその理由を見て取っていた。統御の道具立ては彼らに不足していなかった。なんらの意志もなく盲目的に服従してる、無数の役人。阿諛的あゆな風習、共和黨員のない共和国。巡遊の王者の前に歓喜してる、社会主義の新聞。肩書や金モールや勲章の前に平伏してる奴僕的な魂。それらを制御するには、しやぶるべき骨を、レジオン・ドヌール勲章を、餌えとして投げてやれば十分だった。もし一の王者があつて、フランスの公民をことごとく貴族にしてやると約束したならば、フランスの公民は皆王党になったかもしれない。

政治家らは好機に際会していた。一七八九年の三つの階級のうち、第一の階級は滅亡していた。第二の階級は放逐されるか嫌疑けんぎを受くるかしていた。第三の階級は勝利に飽いて眠っていた。そして今や、脅威的な排他的な姿で擡たい頭とうしてきた第四の階級は、屈服させるのにまだ困難ではなかった。頹たい廢はいしたローマが野蛮人の群れを取り扱ったと同じように、頹廢したフランス共和政府はこの第四階級を取り扱っていた。ローマはもはや野蛮人

らを国境外に掃蕩そうとうする力がなくて、彼らを自分のうちに合体させ、そして間もなく彼らは最上の番犬となってしまうたのである。社会主義者だと自称してブルジョア階級の代表者らも、労働階級の選良中の最も知力すぐれた人々を、隠密おんみつに引きつけ併合していた。彼らは無産党からその首領らを切り放し、その新しい血を自分のうちに注入し、その代わりには、ブルジョアの観念を彼らにつめこんでいた。

ブルジョア階級が試みてる民衆併合の企てのうちで、当時最も不思議な実例の一つは、通俗大学であった。それは、人の知り得るあらゆる事物の知識を雑然と並べた、小さな工場だった。そこで教えることになつてゐる科目は、綱領の示すとおり、「物理学や生物学や社会学などの知識の各部門、すなわち、天文学、宇宙学、人類学、人種学、生理学、心理学、精神病学、地理学、言語学、美学、論理学、その他」であった。しかし、ピコ・デラ・ミランドラの頭を割つてぶちまけたとて、それがなんの役にたつものか！

もとより、通俗大学のあるものうちには、その起原においては、誠実な理想主義、真や美や精神生活を万人に分かとうとする要求が、存在していた。それはりっぱな事柄だった。一日の激しい労働を終わつて、狭い息苦しい講堂にやって来、疲労よりもさらに強

い知識欲をいだいてる、それら労働者らの集まりは、感嘆すべき光景を呈していた。しかしながら、いかに人々はそれら憐れな者たちを濫用したことだろう！ 知力すぐれ慈心ある少数の真の使徒に比して、巧者だというよりもむしろつばな意向をもった少数の善良な心の人に比して、愚者、饒舌家じょうぜつ、陰謀家、読者のない著作家、聴衆のない弁舌家、教師、牧師、巧弁家、ピアニスト、批評家、すべて自分の製作物で民衆をおぼらそうとする徒輩が、いかに多かつたことだろう。彼らは各自に自分の商品を並べたててばかりいた。最も客を多く呼んだ者は、いうまでもなく、香具師やぐし、哲学的駄弁家だべん、天国的な社会を匂におわして一般的観念を盛んにこね回して連中であつた。

通俗大学はまた、頽廢たいはい的な彫刻や詩や音楽など、極端に貴族的な審美主義のはげ口であつた。人々は思想を若返らせ民族を再生させるために、民衆の君臨を望んでいた。そしてまず手始めに、ブルジョア階級の精練さを民衆に移し伝えていた。民衆はそれをむさぼるように受け取っていた。それが氣に入つたからではなくて、それがブルジョア的なものだつたからである。クリストフはある時、ルーサン夫人からそれら通俗大学の一つに案内されたが、そこで、ガブリエル・フォーレの優しき歌とベートーヴェンの晩年の四重奏曲の一つとの間には喜んで、ドビュッシーの作を彼女が民衆に演奏してきかせるのを聞

いた。彼は趣味と思想との徐々の進歩につれて、幾年もの時日を経た後にようやく、ペー
トーヴェンの晩年の作が理解できるようになったのだった。それで彼は気の毒そうに隣席
の一人に尋ねた。

「君にあれがわかりますか。」

相手の男はあたかも怒った牡鷄おんどりのように憤然とした様子をして言った。

「わかるとも。君くらいには俺おれにだってわからないことがあるものか。」

そして、理解していることを証明するために、喧嘩腰けんかでクリストフをながめながら、一つ
の遁走とんそう曲を復吟した。

クリストフは狼狽ろうばいして逃げ出した。あいつどもは国民の生きたる源泉をまで害毒して
しまっている、と彼は考えた。もはやそこには民衆は存在しなかった。

「お前たちだつて民衆だ！」と民衆劇場を建設しようと企ててるかかる善人どもの一人に、
ある労働者が言った言葉どおりだった。「俺もお前たちと同じくブルジョアだぜ！」

ある夕方、やや褪あせた温あたかい色彩の東方産の絨じゅうたん緞たんのような柔らかい空が、薄暗い都
会の上に広がってる時、クリストフは河岸通りに沿って、ノートル・ダムからアンヴェア

リードの方へやって行つた。たれこめてきた闇の中には、戦いの最中に振り上げてるモーゼの腕のように、大寺院の塔がそびえていた。サント・シャペル会堂の黄金彫りの尖頂が、花咲ける聖き棘が、立ち込んだ屋並みから突き出ていた。流れの彼方には、ルール美術館の厳かな正面が広げられていて、その退屈そうな小窓には、夕陽が生々とした残照を投げていた。廃兵院の広地の奥、その濠や高い壁の後ろ、厳肅な寂寞さの中には、遠い昔の戦勝の交響曲のように、薄黒い金色の円屋根が浮き出していた。そして凱旋門は、勇敢なる進軍のように、帝国軍団の超人間的な大跨を、丘の上に踏み開いていた。

クリストフはにわかに、巨人の死骸の大なる手足が平野を覆うているような印象を受けた。彼は恐怖に胸迫つて、そこに立ち止まりながらながめやつた、地上から消え失せた物語めいた巨人の化石を、かつては全世界がその足音を聞いた巨人の化石を。——それは、廃兵院の円屋根を頭にいただき、大堂宇の無数の腕で空を抱いてるルール美術館を帯にまとい、ナポレオン凱旋門の堂々たる両足を世界に踏み広げてる、一民族であつた。しかし今では、この凱旗門の踵の下に、侏儒どもが蠢動していた。

クリストフは名声を求めはしなかつたが、シルヴァン・コーンやグージャールから紹介

されて、パリ―社会にかなり知られていた。芝居の初日や音楽会などで、この二人の友人のいずれかといっしょにいつも見出せる、彼の顔つきの独特さ、またその非常な醜さ、その身体つきや服装や唐突拙劣な素振りなどの滑稽さ、時々その口から漏れる矛盾した奇抜な言葉、垢ぬけはしていないがしかし広い強健な知力、また、ドイツでの脱走や官憲との喧嘩やフランスへの逃亡などについて、シルヴァン・コーンがふれ歩いた小説的な物語、それらのものは、世界一家的な大客間となつてこの全パリーの、閑散でまたたえず働いてる好奇心の的と彼をなしてしまった。そして彼が、自己の意見を吐かずにとただ観察し傾聴し理解に努力しながら、控え目にしてる間は、その作品や思想の根底が人から知られない間は、皆からかなりよく思われていた。フランス人らは彼がドイツにとどまっていられなかつたことを幸いだとしていた。ことにフランスの音楽家らは、ドイツの音楽に関するクリストフの苛酷な批判を、自分らになされた敬意でもあるかのように感謝していた。――（それも実際はすでに陳腐な批判であつて、彼自身もはや今日では賛成できかねるようなものが多かつた。そういう四、五の論説が近ごろドイツの一雑誌に掲げられたので、シルヴァン・コーンはその奇警な逆説を人に言い伝え誇張していたのだった。）――クリストフは人々の興味をひくだけで、少しもその邪魔にはならなかつた。彼はだれの

地位をも奪いはしなかった。一派の大立物となることも、彼一人の思いのままだった。何にも書かないでもよいし、もしくははできるだけわずかしか書かないでもよいし、ことに自分の作を少しも人に聞かせなくても済むし、グージャールみたいな連中に思想を供給してやるだけで十分だった。この連中は有名な言葉を格言としていた——ただ少しそれを修正して。

私の杯さかずきは大きくはないが、しかし私は……他人の杯で飲む。

強い性格は、行動するよりもむしろ感ずることの方が多い青年らにたいして、ことにその光輝を働かせるものである。クリストフの周囲には青年が乏しくはなかった。一般にこれらの青年は、閑ひまな連中で、意志もなく、目的もなく、存在の理由をも有せず、勉強の机を恐れ、自分一人になるのを恐れ、肱掛椅子ひしかけいすにいつまでもすわり込み、自分の家に帰って自分自身と差し向かいになることを避けるためには、あらゆる口実を設けながら、珈琲店や芝居をうろつき回っていた。彼らは無味乾燥な談話に加わり来、そこに腰を落ち着け、幾時間もぐずついていた。ようやく立ち上がる時には、胃袋が妙にふくれきり、胸むなくそ糞の

悪い気持になり、飽き飽きしながら物足りなくて、もつとつづけたくもあればまたつづけるのが厭いやでもあるのだった。そういう青年らがクリストフを取り巻いていた。あたかも、生命にすがりつくために一つの魂へ取りつこうとうかがつて「待ち伏せの怨おんりよう霊」、ゲートのいわゆる彪むくいぬ犬、のようであった。

虚栄心の強い馬鹿者なら、そういう寄生虫の取り巻き連中を喜んだかもしれない。しかしクリストフは偶像の真似まねをしたくなかった。そのうえ、彼がなしていることのうちに、ルナン式の、ニーチエ式の、ローズ・クロアの、雌雄両性的の、へんてこな意向があると思つてそれら賛美者らの、馬鹿ばかげきつた生意気さに彼はぞつとした。彼は皆を追つ払つてしまった。彼は受動的な役目を演ずべき人間ではなかった。彼のうちではすべてが行動を目的としていた。彼は理解せんがために観察していた。そして行動せんがために理解したがっていた。偏見の拘束を受けないで、彼はすべてを調べ、音楽に関しては、各国各時代の思想の形式や表現の方法を、ことごとく研究していた。そして真実だと思われる点は、皆取り用いていた。彼が研究していたフランス芸術家らは、新式の巧みなる発明者で、たえず発明することに苦心し、しかもその発明を途中で放ほうてき擲してしまふのであったが、彼はそれと異なつて、音楽の言葉を改新することよりもむしろ、それをさらに力強く話すこ

とにつとめていた。彼は珍奇でありたいとは少しも心掛けなかったが、力強くありたいと心掛けていた。そういう熱烈な気力は、織巧と適宜とのフランス精神とは反対だった。様式のための様子を、その気力は軽蔑けいべつしていた。彼にとつては、フランスの優良な芸術家らも贅ぜいたく品職工のように思われた。パリーの最も完全な詩人の一人は、「各自の商品や生産品や見切品を付した現代フランス詩壇の労働表」をこしらえて面白がっていた。そして、「玻璃製の大燭台、東方諸国の織物、金や青銅の記念牌、未亡人用の透かしレース、彩色彫刻、花模様の陶器」など、仲間のたれ彼の工場からこしらえ出されるものを、列挙していた。彼自身もまた、「文芸の大製作所の片隅かたすみに、古い絨緞じゅうたんを繕すたったり廃れた古代の鎗やりをみがいたり」してるところを示していた。——手工の完成をのみ注意して、かかる良職工観みたいな芸術家観にも、美が存しないではなかった。しかしそれはクリストフを満足させなかった。彼はそこに職業的威厳を認めはしたが、それが懐抱する生命の貧弱さを軽蔑していた。彼には書くために書くということが考えられなかった。彼は言葉を言いはしないで、事柄を言っていた——言いたがっていた。

彼らは事柄を言えど汝なんじらは言葉を言うのみ……。

クリストフの精神は、新しい世界を吸収するだけの休息の時期を経た後に、にわかには創作の欲求にとらえられた。パリーと自身との間に感ぜられる反対性は、彼の個性を際立たせながら彼の力を倍加せしめた。ぜびとも自己表現を求める熱情の溢漲いっちょうであつた。その熱情は各種のものだつた。彼はそのすべてから、同様の激しきで刺激された。彼は作品をこしらえ出して、心に満ちている愛情やまたは憎悪ぞうおを放散せざるを得なかつた。また、意志をも忍諦にんていをも、彼のうちで衝突し合つてたがいにも同等の生存権をもつてゐるあらゆる悪魔を、放散せざるを得なかつた。一作品の中に一つの熱情の荷をおろすや否や——（時とするとその作品を終わりまで書きつづけるだけの忍耐がないこともあつた）——すぐに彼は反対の熱情に落ち込んでいった。しかしその矛盾は表面のみだつた。彼は常に変わりがながらも、常に同じだつた。彼のあらゆる作品は、同一の目的に達する種々の道筋だつた。彼の魂は一つの山嶽さんかくであつた。彼はそのあらゆる道を進んだ。ある道は羊腸ようちようとして木陰にたゆたつていた。ある道は日にさらされて険峻けんしゆんな坂をなしていった。そしてそのすべてが、山頂に鎮座してゐる神へ達するのだった。愛情、憎悪、意志、忍諦、すべて極度に達した人間的な力は、永遠に接触してすでに永遠を分有するものである。人は各自分の

うちに永遠なるものをもっている、信仰者も無信仰者も、至るところに生命を見出す者も、至るところに生命を否定する者も、生命や否定や万事を疑う者も、——またそれらがいかに矛盾する事柄を同時に魂の中に抱擁していたクリストフも。そしてあらゆる矛盾は永遠の力の中に融け込んでしまう。クリストフにとって重要なことは、その力を自分のうちにまた他人のうちに呼び覚ますこと、火炉の上にかかえの薪を投ずること、永遠をして燃えたさせることであつた。パリーの逸樂的な闇夜の中にあつて、彼の心のうちには大なる炎が上がつていた。彼はいかなる信仰にも縛られていないとみずから信じていたが、実は全身が信仰の炬火にすぎなかつた。

それは最もフランス人の皮肉の的となりやすいものだつた。信仰はきわめて精練された社会が最も許しがたく思う感情の一つである。なぜなら、そういう社会はみずから信仰を失つてゐるから。青年の夢想にたいする大多数の人々の暗黙なあるいは嘲笑的な敵意のうちには、自分らも昔はそのとおりであり、そういう野心をいだきながらそれを実現できなかつたのだという、苦々しい考えが多くは交つてゐる。すべて自分の魂を否定した人々、自分のうちに仕事をもちながらそれを完成しなかつた人々は、こう考える。

「私にしても夢想したことをしとげることができなかつた。どうして彼らにできるものか。

私は彼らがしとげることを望まない。」

人間のうちにはいかにヘツダ・ガブラーが多いことだろう！ 新しい自由な力を絶滅せんとする、なんとという陰險な悪意であることぞ！ 沈黙によつて、皮肉によつて、磨損ますんさせることによつて、落胆させることによつて——また、おりよき邪悪な誘惑によつて、それらの力を殺さんとする、なんとというみごとな手ぎわであることぞ！……

そういう人物はいずれの国にもいる。クリストフはドイツで彼らに出会つたので、彼らのことをよく知つていた。彼はそういう連中にたいしては武装をしていた。彼の防御法は簡単だつた。自分の方から先に攻撃していつた。彼らが少しでも好意を見せると、すぐに宣戦を布告した。それらの危険な味方はかならず敵となしてしまつた。しかしこの率直な策略は、自分の性格を保全するためには最も有効であつたとは言え、芸術家としての生涯しやうを容易がならしむるためには有効でなかつた。クリストフはドイツにいた時と同じ方法をまたやり出した。余儀ないことだつた。変わった事情はただ一つきりだつた。すなわち彼の気分がごく快活になつてゐるのみだつた。

彼はだれでも耳を傾ける人には、フランスの芸術家らに関する忌憚きたんなき批評を元気に言つてきかした。かくて多くの恨みを買つた。伶俐れいりな人々がなすように、何か一派の援助を

つないでおくだけの用心をさえしなかった。こちらから称賛してやれば向こうでもこちらを称賛するような芸術家らを、彼は自分の周囲にたやすく見出せたはずである。あとで称賛してもらつても向こうから先に称賛してくる者さえあつた。彼らは自分がほめる者を一つの債務者だと見なし、時期が来ればいつでもその債権の償却を要求し得ることと考へていた。それはうまく投じた資金であつた。——しかしクリストフを相手にしては、投じそこなつた資金と言うべきだつた。クリストフは少しも償却しなかつた。さらにいけないことには、彼は自分の作をほめてくれる連中の作を、凡庸ほんようだと思つだけの厚顔をそなへていた。彼らは口にごそ言いはしなかつたが、それを深く根にもつて、次の機会には仕返しをしてやろうと誓つていた。

クリストフは多くの拙劣なことをなしたが、リュシアン・レヴィー・クールとの喧嘩けんかはことに拙劣だつた。彼は至るところにレヴィー・クールを見出した。そして、外見上意地悪いことは少しもせず、彼よりもいつその温情をそなえてるらしく、そしてとにかく彼よりはいつその節度をそなえてる、この穏和なていねいな男にたいして、大袈裟おおげさな反感を隠すことができなかった。彼は議論を吹きかけた。その題目がいかにもつまらない時でも、議論はいつもクリストフのせいでにわかしんらつに辛辣しんらつになつてきて、聞いてる人々をびつ

くりさした。あたかもクリストフはあらゆる口実を設けて、リュシアン・レヴィー・クルにまっしぐらに突進したが、つてゐるかのようだった。でも決してやりこめることはできなかった。相手はいつも、自分の方が間違つてゐることがいかにも明白な時にでも、うまく振舞うのに巧妙をきわめていた。クリストフの世馴よなれないことをことに目だたせるような慥いんきんで、自分の身を護つていた。それにクリストフの方では、フランス語のしゃべり方がまずく、覚えたての隠語やまた下等な言葉まで交え、しかもそれらを多くの外国人のようにならぬに使つていたので、レヴィー・クルの戦術を失敗に終わらせることは不可能だった。そしてその皮肉な穏和さにたいして猛然とぶつかつていった。人は皆クリストフの方が悪いと思つた。なぜなら、彼がひそかに感じていたところのことを、だれも見取れ得なかつたから。すなわちそれは、穏和の偽瞞ぎまんであつた。一つの力に衝突してそれを切り捨てることのできない時に、ひそかに暗黙のうちにそれを窒息させようとするのであつた。彼はクリストフと同じく時日に期待をかける男だったので、別に急いではいなかつた。クリストフの方は建設せんがためにであつたが、彼の方は破壊せんがためにであつた。クリストフをストウヴァン家の客間から次第に遠ざけたように、クリストフからシルヴァン・コーンやグージャールを引き離すのは、むずかしいことではなかつた。彼はクリストフ

の周囲を空虚にしていった。

クリストフ自身でもそれを助長していた。彼はいずれの流派にも属しなかったし、なおよく言えばあらゆる流派の敵だったので、だれをも満足させなかった。彼はユダヤ人どもを好まなかった。しかし反ユダヤ主義者らをさらに好まなかった。悪いからというのではなく力強いからというので、この有力な小政党たるユダヤ人どもに反抗してる、大多数の者らの卑怯さ、嫉妬や怨恨の下劣な本能に訴えたやり方、それを彼はきらっていた。かくて彼は、ユダヤ人からは反ユダヤ主義者だと見なされ、反ユダヤ主義者からはユダヤ党と見なされた。また芸術家らは、彼のうちに敵を感じた。知らず知らずにクリストフは芸術において、実際以上にドイツ的だった。パリーのある音楽の快樂的な恬静さに對抗して、彼は激しい意志を、雄々しい健全な悲觀思想を称揚していた。彼の作に歓喜が現われる時には、それはいつも、通俗芸術の貴族的な保護者らにまで不快を催させるような、趣味の欠如と平民的な熱狂となされていた。形式は学者ぶつた粗剛なものだった。そのうえ彼は反抗心から、様式における表面的な閑却や、外的な独自性にたいする無頓着などを、ともすると装いがちであった。フランスの音楽家らにとつては、それはきわめて不快なことに違いなかった。それで、彼から自作のあるものを見せられた者らは、よく見

てみようともせず、ドイツのワグナー末派にたいする輕蔑のうちに、彼をも一括してしまった。クリストフはそれをほとんど気にもとめなかった。彼は内心で笑いながら、フランス文芸復興期の愉快な一音楽家の詩句を——自分の場合にあてはめて——くり返した。

.....

さあ、人の言葉を気にかけるな。

このクリストフには某のごとき対位法がない、

某のごとき和声がない、という人の言葉を。

俺もまた他人にない何かをもっているのだ。

しかし、音楽会で自作を演奏してもらおうとすると、彼は扉が閉ざされてるのを見出した。演奏すべき——もしくはは演奏すべからざる——フランスの青年音楽家らの作品が、すでに十分あった。無名な一ドイツ人の作品にたいする余地はなかった。

クリストフは奔走につとめなかった。彼は家に閉じこもってまた書き始めた。パリーの奴らに聞いてもらおうともうまいと、それはどうでもよかった。彼は自分の楽しみに書

いてるので、成功せんがために書いてるのではなかった。真の芸術家は作品の未来には気をとめない。十年後には何も残らないことを知りながら人家の正面に愉快に絵を書いていた、文芸復興期の画家らのようなものである。そしてクリストフは、好時期の到来を待ちながら穏やかに仕事をしていた。その時意外な援助がやって来た。

クリストフは当時、劇的形式に心ひかれていた。彼はまだ内心の情緒の波に自由に没頭し得なかった。その情緒を明確な主題の中に流し込みたがっていた。そして、まだ十分に自己を統御していないし、自己の真相をはつきり知ってもいない、年若な精神にとっては、手にあまる自分の魂を閉じこめるべき任意の限界を定めることは、確かにいいことに違いない。それは思想の流れを導くのに必要な水門である。——不幸にも、クリストフには詩人の素質が欠けていた。彼は伝説や歴史の中から、自分の主題を取って来なければならなかった。

数か月以来彼の心に浮かんでいる幻想のうちには、聖書の種々の幻影が交っていた。——流離中の友として母から贈られた聖書は、彼にとっては夢想の源であった。彼は宗教的な精神においてそれを読みはしなかったけれど、このヘブライのイーリアスともいうべき

書物の、精神力もしくはなおよく言えば生命力は、パリーの塵煙じんえんによごれた裸の魂を晩に洗うべき泉であった。彼は書物の神聖な意味を氣にとめはしなかった。しかし、その中で呼吸される粗野な自然と原始的な個人との息吹いぶきによつて、それはやはり彼にとつて神聖な書物だった。信仰のうちに併呑へいどんされた土地、鼓動してゐる山嶽さんかく、歡喜してゐる空、人間の獅子しし、それらにたいする賛歌を彼は飲み込んだ。

彼がことに愛していた聖書中の面影の一つは、青年期のダヴィデであった。ヴェロキオやミケランジェロがその崇高な作品中に現わしている、フロレンスの悪童みたいな皮肉な微笑やまたは悲壯な緊張を、彼はダヴィデに想像しなかった。彼はそれらの作品をまだ知らなかつたのである。彼が想像したダヴィデは、勇武がその中に眠つてゐる童貞の心をもつた、詩的な牧人であり、南方のジークフリートであり、より高雅な民族の者であり、身体と思想とがよりよく調和した者であった。——なぜなら、彼はラテン精神にいくら反抗しても無駄むだであつた。ラテン精神は彼のうちに沁み込み始めていた。芸術に影響してくるものは、ただ芸術のみではない、思想のみではない。すべて周囲のもの——人や事物、身振りや動作、線や光である。パリーの雰囂ふんいき気はきわめて強烈である。それは最も反発的な魂をも鑄直す。そしてことにゲルマン魂は、反抗することができにくい。ゲルマン魂は国民

的倨傲きよぼうのうちにくるまっていながら、ヨーロッパのあらゆる魂のうちで、最も国民性を失いやすいものである。クリストフの魂はすでに、ラテン芸術から、如上のことがなかったら決してもち得ないような、一つの簡明さを、心の明朗さを、またある程度まで造形的美をさえも、知らず知らずのうちに取り始めていた。彼のダヴィデはその証拠であった。彼はダヴィデとサウルの邂逅かいこうを取り扱いたかった。そして人物二人の交響曲の一齣こまに立案した。

花咲いた灌木かんぼくの曠野こうやの中の、寂しい丘の上に、牧童が寝そべって、日向で夢想にふけていた。清朗な光、虫の羽音、草葉のやさしい戦そよぎ、通りゆく羊ひつじの群れの銀の鈴音、大地の力、それらのものが、自分の聖きよき運命をまだ知らないこの少年の夢想を揺っていた。彼はうつとりしながら、自分の声と笛の音とを、なごやかな静寂のうちに融とかし込んでいた。その歌にはいかにも静穏明快な喜びがこもっていて、聞く人に喜びや悲しみを考えさせることなく、ただかくのとおりであってこれ以外ではあり得ないというように、思わせるのであった。……にわかには、大きな影が境界の上に広がってきた。空気がひっそりとなつた。生命は大地の血管中に潜み込んだかと思われた。ただ静かに笛の歌のみがつづいていた。サウルが幻影に駆られながら通りかかった。心乱れたこの王は、虚無にさいなまれ

て、嵐あらしに吹きゆがめられつつ燃えさかる炎のように、いらだっていた。自分の周囲と身内とにある空虚にたいして、懇願こんがんしののしり挑いどみかかっていた。そして彼が息つきて曠野くわうげの上に倒れかけた時、なおつづけられてる牧童ぼくどうの歌の平和な微笑ほほえみが、静寂しやうじやくのうちにまた現われてきた。サウルは騒さわぎたつ胸むねの動悸どうきを押えながら、寝そべってる少年のそばへ無言で近づいていった。なお無言のまま少年を見守みまもった。その傍かたわらにすわって、この牧童ぼくどうの頭に熱い手をのせた。ダヴィデは心臆おくしもせず、振り向いて王をながめた。そしてサウルの膝ひざに頭をのせて、また歌をつづけた。夕闇ゆうやみが落ちてきた。ダヴィデは歌いながら眠ひつてしまい、サウルは泣いていた。そして星の輝く夜のうちに、甦そせい生せいした自然の賛歌と回癒かいゆした魂の感謝の歌とが、新たに起こってきた。

クリストフはその場面を書きながら、自分自身の喜びにばかりとらわれていた。彼は実演の方法などは考えもしなかった。ことに、芝居の舞台にのぼされることがあろうとは思おもい浮かべもしなかった。音楽会で採用してくれる時には演奏してもらおうつもりだった。

ある晩彼は、その作品のことをアシル・ルーサンに話した。そして願われるまま、ピアノでひいて大略を知らせようとした。するとルーサンはその作に感激して、ぜひともパリの舞台にのぼせるべきものだと言い出し、自分が万事尽力すると誓ちかった。クリストフの

思いもかけないことだった。数日後に、ルーサンがそれを本気にしてるところを見ると、彼はさらにびっくりした。それから、シルヴァン・コーンやグージャールやリュシアン・レヴィー・クールまでが、それに興味をもつてることを知ると、彼は驚きのあまり呆気あつけに取られた。この連中の私的な恨みは芸術にたいする愛にうち負けたのだと、彼は認めざるを得なかった。彼のまったく意外とするところだった。その上演を最も急がないのはクリストフ自身だった。作品は少しも芝居のために作られたものではなかった。舞台にのぼせるのは無意味なことだった。しかしルーサンは非常に固執し、シルヴァン・コーンは盛んに説きすすめ、グージャールはいかにも信じきってるふうだったので、クリストフもついに我を折った。彼は卑怯ひきょうだった。それほど自分の音楽を聞きたがっていたのである。

万事はルーサンの手で容易に運んだ。劇場理事らも芸術家らも競って彼の意をむかえた。ちようどある新聞が、慈善事業のために盛んな昼興行マチネーを催しかけていた。その中でダヴィデが上演されることになった。りっぱな管弦楽団が集められた。歌手たちの方については、ダヴィデの役に理想的な者を見出したとルーサンは言っていた。

試演が始まった。管弦楽団はフランス流に多少訓練が欠けてはいたが、最初の一回をかなりよくやってのけた。サウルの歌手は、やや疲れたしかしりっぱな声をもっていた。そ

して自分の職務をよく心得ていた。ダヴィデの歌手の方は、背の高い太った格好のよい美人であったが、その声は感傷的で下品であつて、挿樂劇的メロドラマな顫音トレモロと奏樂珈琲店的な風情ふぜいとで重々しく広がつていった。クリストフは顔をしかめた。最初の小節を幾つか歌つた時から早くも、彼女にはその役が勤まらないことが明らかにわかつた。管弦樂の第一休止の時に、彼は座主に会いに行つた。座主はこの音樂会の物質的方面いっさいの責任を帯びていて、シルヴァン・コーンとともに試演に臨んでいた。彼はクリストフがやって来るのを見て、顔を輝かせながら言つた。

「どうです、御満足ですか。」

「ええ、」とクリストフは言つた、「うまくゆくだろうと思ひます。がただ一ついけないことがあるんです。それはあの女歌手です。代えなけりやいけませんまい。穩やかに言つてください。あなたは……馴なれておいででしょうから。他の歌手を一人見つけてくださるくらいはたやすいことでしょう。」

座主は呆氣あっけにとられた様子をした。クリストフが真面目まじめに言つてるかどうかをうかがうかのように、彼の顔をながめた。そして言つた。

「だが、そんなことはできませんよ。」

「なぜできないんです？」とクリストフは尋ねた。

座主はシルヴァン・コーンとずるい目配せをし合って、そして言った。

「しかし、あの女はなかなかいい腕前ですよ。」

「ちつとも腕前はありません。」とクリストフは言った。

「え！ あんないい声なのに！」

「ちつともよかありません。」

「それにまた美人ですがね。」

「そんなことはどうでもいいんです。」

「でも害にはならないよ。」とシルヴァン・コーンは笑いながら言った。

「僕はダヴィデを、歌い方を知ってるダヴィデを、求めてるんだ。美しいヘレナを求めてるんじゃない。」とクリストフは言った。

座主は当惑して鼻をなでていた。

「困りますね、実際困りますね……。」と彼は言った。「あの女はりっぱな芸術家ですがね……確かですよ。今日は多分全力を尽くさなかったのでしょうか。もっとためてごらんなさい。」

「そうしてみましよう。」とクリストフは言った。「しかし時間を無駄むだに使うだけのことでしょう。」

彼はまた試演にかかった。こんどはさらにいけなかった。終わりまで我慢するのが容易ではなかった。彼はいらいらしてきた。女歌手にたいする彼の注意の言葉は、最初は冷淡だがしかしていねいだったのが、そつけない辛しんらつ辣なものになっていった。彼女は彼を満足させんがために明らかに骨折こげっていたし、彼の機嫌きげんを取るためしきりに流し目を使っていたが、彼は少しも容赦しなかった。そして事がめんどうになりかけた時に、座主は用心深くも試演を中止させた。クリストフの小言こごとを受けて不機嫌になつてゐる歌手をなだめるため、彼は急いでそのそばに行つて、重苦しい冗談を盛んに言いかけた。その取りなしを見ていたクリストフは、我慢しかねた様子を押し隠しもしないで、無理に座主をこちらへ来させて、そして言った。

「議論の余地はありません。私はあの婦人がきらいです。実に不愉快です。しかし選んだのは私ではありません。いいように都合をつけていただけなものです。」

座主は困った様子で下を向いて、気がなさそうな調子で言った。

「私にはどうにもできません。ルーサン氏へ話してください。」

「なんでルーサン氏に關係があるんです？」とクリストフは尋ねた。「私はこんなことで氏にめんどうをかけたくありません。」

「なにめんどうな訳があるものか。」とシルヴァン・コーンは皮肉らしく言った。

そして彼は、ちようどはいって来たルーサンの方を指さした。

クリストフはその前に行った。ルーサンはすこぶる上機嫌きげんで大声をたてた。

「どうしました、もう済んだのですか。僕も少し聞きたかったですね。ところで、君の御意見はどうです。満足ですか。」

「万事好都合です。」とクリストフは言った。「お礼の申しようもありません……。」

「いや、どうしまして。」

「ただ一つうまくゆかないことがあるんです。」

「言つてごらんさい。なんとか都合しましょう。君が満足しさえすればいいんですから。」

「というのは、あの女歌手のことです。ここだけの語ですが、あれはどうてい駄目だめです。ルーサンの晴れやかな顔はにわかに冷え切った。彼は厳格な様子で言った。

「それは意外ですね。」

「あの女はまったくなんの価値もありません。」とクリストフは言いつづけた。「声も、趣味も、技倆ぎりょうも、露ほどの才能もありません。先刻お聞きにならなくて仕合わせでした……。」

ルーサンはますますしかつめらしい様子になり、クリストフの言葉をさえぎって、きつぱりと言つてのけた。

「僕はサント・イグレーヌ嬢の真価を知っています。大なる手腕をもつてゐる芸術家です。僕は非常に感嘆しています。パリーの趣味ある人々は皆、僕と同様に考えています。」

そして彼はクリストフに背中を向けた。見ると、彼はその女優に腕を貸していつしよに出で行つた。クリストフは茫然ぼうぜんとたたずんでいた。すると、先刻から大喜びをしてその光景を見ていたシルヴァン・コーンが、彼の腕をとらえ、いつしよに劇場の階段を降りてゆく時に、笑いながら言つた。

「だが君は、あの女が彼の情婦だということを知らないのか。」

クリストフはそれで事情がわかつた。してみると、作品が上場されたのは、彼女のためにであつて、彼のためにではなかつたのだ。ルーサンの意気込み、その出費、取り巻き連中の熱心、などの理由が彼にわかつた。彼はシルヴァン・コーンの言葉に耳を傾けて、サ

ント・イグレーヌに関する話を聞いた。彼女は演芸館の歌手であつて、通俗な小芝居に出て成功した後、そういう連中の多くの例に漏れず、もつと自分の才能にふさわしい舞台で歌いたいという野心を起こした。そしてルーサンを頼りとして、オペラ座かオペラ・コミック座かへはいりたがつていた。もとよりそれを望んでいたルーサンは、ダヴィデ上演の機会をとらえて、ほとんどなんらの劇的所作をも要求せず、しかも形体の優美さを十分に發揮させてくれる役を、その新進女優にやらして、彼女の 抒情的天分を、パリーの公衆に安全に見せてやるつもりだつた。

クリストフはその話を終わりまで傾聴した。それから、シルヴァン・コーンの腕を離して笑い出した。彼は長い間笑つた。笑い絶えてから言つた。

「僕は君らがきらいだ。フランス人は皆きらいなんだ。君らにとっては、芸術はなんでもないんだらう。いつでも婦人ばかりが問題だ。一人の舞妓のために、一人の歌妓のために、某氏の情婦のために、あるいは某夫人の 鬚眉の女のために、歌劇を上演するのだ。君らは 淫猥なことをしか頭においていないんだ。だが僕はそのために君らを憎みはしない。君らはそういう人間だ。よかつたらそのままにいるがいい。そして泥水の中に餌を捜し回したまえ。しかし僕は別れよう。僕たちはいつしよに暮らせるようにはできていないんだ。

さようなら。」

彼はコーンと別れた。そして家に帰ると、作品を撤回する由をルーサンへ書き贈った。もちろん撤回の理由も隠さなかった。

それが、ルーサンおよびその一派との絶縁だった。その結果はただちに現われてきた。

諸新聞は上演計画についてある風説を流布るふしていたし、作曲家と実演者との葛藤かつとうの話は噂うわさの種とならざるを得なかった。ある音楽会の司会者は好奇心を起こして、日曜日の昼興マチ行ネーにその作を採用した。その幸運もクリストフにとつては一つの災難であつた。作品は演奏された——そして失敗した。女歌手の味方は皆、無礼な音楽家を懲らしめてやろうと牒しめし合わせていた。残余の聴衆は交響詩に退屈しきつて、玄くろうと人筋の決議に雷同した。そのうえ運の悪いことには、クリストフは自分の技能を見せるため、ピアノと管弦楽とのためファンタジヤの幻想曲を一つ、その音楽会で聞かせることを不用意にも承諾した。聴衆の不穏な気分は演奏者らをいたわりたい心から、ダヴィデ実演の間はある程度まで押えられていたが、作者自身と面を合わせる段になると——その演奏もまた大して正確ではなかったが——自由に発露された。クリストフは聴衆席の喧騒けんそうに気を腐らし、楽曲の途中で突然中止した。そして、にわかに静まり返つた聴衆を不快な様子でながめながら、マルブルーの出征をひ

いた——そして傲然ごうぜんと言った。

「諸君にはこれが適当です！」

そこで彼は立ち上がって出て行つた。

大した騒ぎだつた。人々は彼が聴衆を侮辱したと叫び、客席に来て謝罪すべきだと叫んだ。諸新聞は翌日、パリーのよき趣味によつて罰せられた野卑なドイツ人を、いっしょになつて筆誅ひつちゆうした。

その次には、ふたたびひっそりと静まり返つてしまつた。クリストフはまたもや、敵意を含んだ他国の大都市の中で孤立した。今までになくひどい孤立だつた。しかし彼はもはや気にしなかつた。これが自分の運命である、生涯しょうがいこのとおりだろう、と彼は信じ始めていた。

彼は知らなかつた、偉大な魂は決して孤独でないことを、時の運によつて友をもたないことがあるとしても、ついにはいつも友を作り出すものであることを、それは自分のうちに満ちてる愛を周囲に放射することを、また、自分は永久に孤立だと信じてる現在においても、彼は世の最も幸福な人々よりさらに多くの愛を他から受けていたことを。

ストウヴァン家には十三、四歳の少女がいて、クリストフはこれにも、コレットと同時に稽古けいこを授けていた。彼女はコレットの従妹いとこで、グラチア・ブオンテンピという名前だった。金色の顔色をした少女で、頬骨ほおほねの肉が軽く薔薇色ばらを帯び、頬がふつくらとして、田舎娘なかのような健康をもち、やや反り返そった小さな鼻、いつも半ば開いてる切れのいい大きな口、まっ白な円い頤あご、やさしく微笑ほほえんでる静かな眼、長い細やかな房々ふさふさした髪に縁取られてる円い額まるひたい、そしてその髪は、縮れもせずにとだ軽ゆるやかな波動をなして、顔にたれていた。静かな美しい眼つきをした、顔の大きな、アンドレア・デル・サルトの幼い聖母に似ていた。

彼女はイタリーの者だった。両親はほとんど一年じゅう北部イタリーの田舎いなかの、大きな所有地に住んでいた。野原や牧場や小さな運河などがあつた。屋上の平屋根からは、金色の葡萄畑ぶどうの波が足下に見おろせた。黒いのがつた糸杉いとすぎの姿がところどころにそびえていた。その向こうには畑がうちつづいていた。閑寂だった。地を耘うなつてる牛の鳴声や、犁すきを取つてる百姓の甲高い声かんが聞こえていた。

「シッ！……ダア、ダア、ダア……」

蟬せみが木の間で鳴いていた。蛙かえるが水のほとりに鳴いていた。そして夜には、銀の波をなした月光の下に、無限の静寂があつた。遠くで、柴小屋しばの中にうとうととしてる収穫の番人が、眼覚めざめてることを盗人に知らせんがため、時々小銃を打っていた。半ば眠りながら聞く人々にとつては、その音も、夜の時間を遠くで刻んでる、平和な時計の音と異ならなかつた。そして静寂はまた、襜ひだの広い柔らかなマントのように、人の魂を包んでいった。

小さなグラチアの周囲では、人生が眠つてるかのようだった。人々はあまり彼女に干渉しなかつた。彼女は美しい静穩のうちに浸つて、静かに生長していった。いらだちも気忙きせわしさもなかつた。彼女は怠惰で、ぶらついたり寝坊したりするのが好きだった。幾時間も庭の中に寝そべっていた。夏の小川の上の蠅はえのように、静寂の上に漂っていた。そして時とすると、理由もなく突然走り出すことがあつた。頭と上半身とを軽く右に傾けながら、しなやかに暢のびのび々として、小さな動物のように駆けた。飛びはねる面白さのために石ころの間を登つたり滑すべつたりする、まったくの子山羊やぎであつた。また彼女は、犬や蛙や草や木や、家畜場の百姓や動物などを相手に、話をした。周囲の小さな生物が非常に好きだった。大きなものも好きだった。しかし大きなものにたいしては、さほど夢中にはならなかつた。彼女はごくまれにしか客に接しなかつた。この土地は町から遠くて、かけ離れていた。日

焼けのした顔に眼を輝かし、頭をもたげ胸をつき出して、ゆったりした歩き方をする、真面目じめくさった百姓や田舎娘いなかが、埃ほこりの多い街道の上を、引きずり加減の足取りで、ごくまれに通つていった。グラチアはただ一人で、ひっそりした庭の中で幾日も過ごした。だれにも会わなかった。決して退屈もしなかった。何にも恐こわくはなかった。

ある時一人の浮浪人が、人のいない農場へ鶏を盗みにはいった。すると、小声で歌いながら草の上に寝そべって、長いパンをかじつてる少女に出つくわして、びっくりして立ち止まった。彼女は平気で男をながめて、なんの用かと尋ねた。男は言った。

「何かもらいに来たのだ。くれなけりやひどいことをするぞ。」

彼女は自分のパンを差し出した。そして微笑を浮かべた眼で言った。

「ひどいことをするものではありませんよ。」

すると男は立ち去つていった。

彼女の母は死んだ。父はいたつてやさしく、気が弱かった。彼はりっぱな血統の老イタリー人で、強健で快活で愛想がよかったが、しかし多少子どもらしいところがあつて、娘の教育を指導することがとうていできなかつた。その老ブオンテンピの妹に当たるストウヴァン夫人は、葬式のためにやつて来て、娘の一人ぼっちな境遇にびっくりし、喪の悲し

みを晴らしてやるために、彼女をしばらくパリーへ連れて行こうとした。グラチアは泣いた。年とった父も泣いた。しかしストウヴァン夫人が一度思い定めた以上は、もうあきらめるよりほかに仕方がなかった。彼女に逆らうことはとうていできなかつた。彼女は一家じゆうでのしつかり者だつた。パリーの家においてさえ、すべてを支配していた、夫をも娘をも、また情人らをも——というのは、彼女は義務と快樂とを同時にやつてのけていた。實際的でしかも熱情的だつた——そのうえ、きわめて社交的で活動的だつた。

パリーに連れて来られると、もの静かなグラチアは、美しい従姉いとこのコレットが大好きになつた。コレットは彼女を面白がつた。人々はこのやさしい小さな芽生めばえを、社交裡りに引き入れたり芝居に連れていったりした。彼女はもう子どもではないのに、皆から子どもとして取り扱われ、自分でもやはり子どものように思つていた。心の中の感情を押し隠していたし、その感情を恐がつていた。それはある物もしくはある人にたいする愛情の跳躍だつた。彼女はひそかにコレットを慕つていた。コレットのリボンを盗みハンケチを盗んだ。その前で一言も口がきけないこともしばしばだつた。コレットを待つていたり、これからコレットに会えるのだとわかつていたりする時には、待ち遠しさとうれしさで震えていた。芝居で、胸を露あらわにした美しい従姉いとこが、同じ棧敷さじきの中にはいつて来て、衆目をひく

のを見る時には、彼女は愛情のあふれたやさしいつつましい微笑ほほえみを浮かべた。そしてコレットから言葉をかけられると、気がぼーつとなった。白い長衣をまとい、ふうわりと解いた美しい黒髪を、かつしよく褐色の肩にたらし、長い手袋の先を口にかみ、手もちぶさたのあまりにはその切れ目へ指先をつつ込みながら、芝居の間じゆうたえず彼女は、コレットの方へふり向いては、親しい眼つきを求めたり、自分が感じてる楽しみを分かとうとしたり、または、かつしよく褐色の澄んだ眼で言いたがった。

「私あなたを愛しててよ。」

パリー近郊の森の中を散歩する時には、彼女はコレットの影の中を歩み、その足もとにすわり、その前へ駆け出し、邪魔になるような枝を折り取り、ぬかるみ泥濘の中に石を置いたりした。ある夕方庭の中で、コレットは寒けを覚えて、彼女にその肩掛をかしてくれと頼むと、彼女は、自分の愛してる人が自分の物を少し身につけてくれ、次にその身体の香かおりがこもったままを返してもらえらといううれしさのあまり、思わず喜びの声をたてた――

（あとでそれを恥ずかしく思いはしたが）。

彼女に楽しい胸騒ぎを起こさせるものとしては、なおその他に、ひそかに読んでる詩集――（彼女はまだ子どもの書物だけしか許されていなかったの）――のあるページがあ

った。それからさらに、ある種の音楽があった。皆からは音楽がわかるものかと言われていたし、自分でも何にもわからないと思ひ込んでいたが、しかしそれでも、感動のあまり顔色を変え汗ばんでいた。そういう時彼女のうちに何が起こってるかは、だれも知らなかった。

その他の点においては、彼女はいつもおとなしい小娘で、うっかりしていて、怠惰で、かなり食い辛^{しんぼう}棒で、なんでもないことに顔を赤らめ、あるいは幾時間も黙り込み、あるいは快活にしゃべりたて、すぐに笑ったり泣いたりし、しかも突然のすすり泣きや子どもらしい笑い方をするのだった。彼女は笑うのが好きで、つまらないことを面白がった。決して大人ぶるところがなかった。まだ子どものままだった。ことに彼女は善良で、人に心配をかけることを苦にし、また少しでも人から小言^{こごと}を言われるのを苦にした。ごく謙遜^{けんそん}で、いつでも引つ込みがちで、美しいとかりっぱだとか思えるようなものは、なんでも愛したがり感嘆したがっていて、他人のうちに実際以上の美点をみて取りがちであった。彼女の教育はたいへん遅れていたもので、人々はそれに気を配った。かくて彼女は、クリストフについてピアノの稽古^{けいこ}を受けた。

彼女は叔母^{おば}の家の夜会で初めてクリストフに会った。たくさんの人が集まっていた。ク

リストフは聴衆に応じて機宜の処置を取ることができなかつたので、長々しいアダジオを一つ演奏した。皆は欠伸あくびをしだした。曲は終わるかと思うとまた始まつていた。いつになつたら終わるか見当がつかなくなつた。ストウヴァン夫人はじりじりしていた。コレットはこのうえもなく面白がつていた。事情の滑稽こっけいさを残らず味わつていた。かくまでクリストフが無頓着むとんじやくなのを不快に思うわけにはゆかなかつた。彼が一つの力であることを彼女は感じて、かえつて同情の念が起こつた。しかしまた滑稽でもあつた。そして彼を弁護してやることをよく差し控えた。ただ小さなグラチア一人が、涙を浮かべるほどその音楽に感動していた。彼女は客間の片隅かたすみに隠れていた。しまいには、自分の感動を人に見られたくないのです、またクリストフが嘲笑ちやうしやうされるのを見るのがつらくて、逃げ出してしまつた。

数日後に、晩食の時、ストウヴァン夫人は彼女の前で、クリストフからピアノの稽古を受けさせることを話した。グラチアははつとして、スープ皿ざらの中に匙さしを取り落し、自分と従姉いしごとにスープをはねかけた。コレットは、行儀よく食卓につく教えをまず受けるべきだと言つた。ストウヴァン夫人は、その方面のことはクリストフには頼めなれないと言ひ添えた。グラチアは、クリストフといつしよにしてしかられたのがうれしかつた。

クリストフは稽古けいこを始めた。彼女はいやに堅くとりすまして、両腕が身体に糊のり付けになり、身動きすることもできなかつた。クリストフが彼女の小さな手の上に自分の手を置き添えて、指の位置を直しそれを鍵キの上に広げてやる時、彼女は気が遠くなるような心地がした。彼女は彼の前でひき損じはすまいかとびくびくしていた。しかし、病気になるほどつとめても、従姉いとこにじれつたがった叫び声をたてさせるほどつとめても、クリストフがそばにいる間はいつもひき損じてばかりいた。息もろくにできないし、指は木片のように堅くなつたり、綿のように力なくなつたりした。音符にまごついたり、アクセントを逆にしたりした。クリストフは彼女をしかり飛ばして、むっとして立ち去つた。すると彼女は死にたいほどつらかつた。

彼は彼女になんらの注意をも払っていなかった。彼はただコレットにばかり心を向けていた。グラチアは従姉とクリストフとの親交をうらやんだ。しかし、それがたとい苦しいことだったとはいえ、彼女の善良な小さな心は、コレットとクリストフとのためにそれを祝していた。彼女は自分よりコレットの方がずっとすぐれてると考えていたので、コレットがすべての好意を一人で占めるのは当然だと思つていた。——彼女が従姉と対抗する自分の心を感じるのには、従姉とクリストフといずれかを選ばなければならぬ時にばかりで

あつた。彼女は小さな女らしい直覚によつて、コレットの嬌態きょうたいとレヴィー・クールが彼女に寄せてる執拗しつような追従ついでしやうとをクリストフが苦しんでるのを、よく見て取つた。彼女は本能的にレヴィー・クールを好んでいなかったが、クリストフが彼をきらつてると知るや否や、同じく彼をきらつた。コレットがどうして彼をクリストフの競争者にさして喜んでるかを、彼女は理解できなかつた。彼女はひそかにコレットをきびしく批判し始めた。そしてコレットの小さな虚偽を多少発見して、にわか態度を変えた。コレットはそれを感じづいた。しかし原因は察することができなかつた。彼女はそれを小娘の移り気のせいだとしたかつた。しかしただ確実なことは、自分がグラチアにたいして権力を失つたということだつた。つまらない一事がそれを証明した。ある夕方、二人で庭を散歩していると、ちよつと村雨が降りだしたので、コレットは追従ついでしやう的な愛情を示して、グラチアを自分のマントの中に入れてやろうとした。数週間前だつたら、なつかしい従姉いとこの胸に寄りすがるのは、グラチアにとってえも言えぬうれしさであるはずだったが、その時グラチアは、冷やかに遠のいた。それからまた、グラチアがひいてる楽曲を面白くないものだと思ふ由を、コレットが言つてきかしても、グラチアはやはりそれをひきつづけて、それを好んでいた。

彼女はもはや、クリストフにしか注意を向けてはいなかった。彼女は愛情から来る洞察力つりよくをもっていて、彼が苦しんでる事柄を推測していた。そしてそれを不安な子どもらしい注意のためにたいへん誇張していた。クリストフがコレットにたいして気むずかしい友情をしかもっていない時にでも、クリストフは恋してるのだと彼女は信じた。彼は不幸であると彼女は考えた。そして彼女は彼のために不幸であった。この憐れな少女あわは、その心尽くしの報いをほとんど受けなかった。コレットがクリストフを腹だたせると、彼女はその償いをしなければならなかった。彼は不機嫌ふきげんになつて、演奏の誤りを短気に指摘しながら、小さな弟子でしに向かつて意趣晴らしをするのであった。ある朝、コレットは彼をいつもよりひどく怒おこらせた。すると彼はいかにも乱暴な様子でピアノについたので、グラチアはそのわずかな技倆ぎりょうをも失つてしまった。彼女はひき渋った。彼はその音符の間違いを怒つて責めたてた。すると彼女はすっかりまごついた。彼は腹をたて、彼女の手を揺ぶり、こんなではいつまでたつても正しくひけはしないと叫び、料理か裁縫か勝手なものをやるのはいいが、しかしもう断じて音楽をやらないがいいと叫んだ。間違つた音符を聞かして人を苦しめるには及ばない。そう言つて彼は、稽古けいこの途中で放り出して帰つていった。憐れなグラチアは涙の限り泣いた。それは、右のような屈辱的な言葉にたいする悲しさか

らというよりも、いくら望んでもクリストフを喜ばせることができない悲しさからであり、自分の愚かさによって愛する人の苦しみをさらに増させる悲しさからであった。

クリストフがストウヴァン家へ来るのをやめた時、彼女はさらにひどく悩んだ。故郷へ帰ってしまったかった。この少女は、夢想においてまで健全であつて、田園的な清朗な素質を失わないでいたので、神経衰弱のいらいらしたパリー婦人の間に交つてこの都会に住んでると、妙に居心地が悪かつた。あえて口には出さなかつたが、周囲の人々をかなり正確に判断してしまつた。しかし彼女はその父と同様に、温良さや謙譲さや自信の不足などによつて、臆病おくびょうで気が弱かつた。主権的な叔母おばと压制を事とする従姉いとことから、支配されるままになつていた。年老いた父へやさしい長い手紙を几帳面きちょうめんに書き送つてはいたが、あえてこうは書き得なかつた。

「どうぞ私を連れ帰ってくださいませ！」

そして老いた父も、連れ帰ることを望んではいたがあえてなし得なかつた。なぜなら、ストウヴァン夫人は彼のおずおずした申し出にたいして、グラチアは当地にいてたいへんいいとか、彼といつしよにいない方がはるかにいいとか、彼女の教育のためにまだ滞在していなければいけないなどと、すでに答え返してしまつていたから。

しかし、この南国の小さな魂には流離があまりに悲しくなり、光の方へ飛び帰らざるを得ない時が、ついに到来した。——それはクリストフの音楽会後であった。彼女はそこへストウヴァン家の人たちとともに行っていった。そして、芸術家を侮辱して面白がってる群衆の嫌悪けんおすべき光景を見ることは、彼女にとっては非常に切ないことであった。……芸術家、それはグラチアの眼には、芸術それ自身の面影たる人であり、人生におけるすべて崇高なるものを具現してる人であった。彼女は泣き出したくなり、逃げ出したくなった。それでもぜひなく、喧騒けんそうや口笛や非難の声を終わりまで聞かされ、また叔母おばの家に帰ると、種々の悪口を聞かされ、リュシアン・レヴィー・クールと憐れあわみの言葉をかわしてるコレットの、はれやかな笑い声を聞かされた。自分の室の中に、寢床の中に、彼女は逃げ込んで、一夜のなかばすすり泣いた。彼女は心でクリストフに話しかけ、彼を慰め、自分の命をも彼にささげたがり、彼を幸福ならしむるようなことが何もできないのを悲嘆した。それ以来彼女はパリーにとどまることができなくなった。彼女は連れ帰ってくれるようにと父へ懇願した。彼女は書いた。

「私はもうここで暮らすことはできません、もうできませんわ。このうえ長く放っておかれると、私はきつと死んでしまいます。」

彼女の父はすぐにやって来た。そして、恐ろしい叔母に対抗することは彼ら二人にとっていかにも困難なことではあったが、絶望的な意志の努力でやってのけた。

グラチアはひっそりとした広い庭の中にもどってきた。親しい自然と愛する人々とをふたたび見出して喜んだ。彼女の痛める心は晴れていったが、太陽の光に少しずつ消えてゆく霧の帷とばりのような北方の憂鬱ゆううつを多少、その心の中に彼女は持ち帰って、なおしばらくは保っていた。彼女は時おり、不幸なクリストフのことを考えた。芝生しばふの上に寝ころんで、耳馴なれた蛙かえるや蟬せみの声を聞きながら、あるいはピアノの前にすわって、昔よりはしばしばそれと心で話をしながら、彼女はみずから選んだ友のことを夢想した。幾時間も彼と声低く語り合った。いつかは彼が扉とびらを開いてはいつてくることも、あり得べからざることだとは思えなかった。彼女は彼に手紙を書いた。そして長く躊躇ちゅうちよしたあとで、無名にしてその手紙を贈った。ある朝ひそかに、広い耕作地の彼方かなた三キロも隔たった村の郵便箱に、胸をとどろかせながらそれを投じに行った。——親切なやさしい手紙であって、彼は孤独ではないこと、落胆してはいけないこと、彼のことを考えてる人がいること、彼を愛してる人がいること、彼のために神に祈ってる人がいること、などが告げてあった。——しかも憐あわれな手紙、愚かにも途中で迷ってしまつて、彼の手には届かなかつた。

それからは、単調な清朗な日々が、この遠い女友だちの生活のうちに開けていった。そして、イタリーの平和が、平穏と落ち着いた幸福と無言の觀照との精神が、その清いひそやかな心の中に返ってきた。その底にはなお、小揺こゆるぎもない小さな炎のように、クリストフの思い出が燃えつつづけていた。

しかしクリストフは、遠くから自分をみまも見守つていてくれて、将来自分の生活中に大なる場所を占むることとなる、この純じゆんぼく朴な愛情の存在を知らなかった。また彼は、自分が侮辱されたあの音楽会に、将来友たるべき一人の男が、手を取り合いながら相並んで進むべき親しい道づれが、出席していたことを知らなかった。

彼は孤独だった。孤独であるのみならず思っていた。それでも彼は少しも失望しなかった。先ごろドイツで苦しんだあの苦にが々しい悲しみを、彼はもう感じなくなっていた。彼はいつそう強くなりいつそう成育していた。万事かくのごときものだということを知っていた。パリーにかけていた幻はすべて滅びた。どこへ行っても同じ人間どもばかりだった。腹をすえてかからなければならなかった。世間相手の子どもらしい鬭争に固執してはいけなかった。平然として自分自身たることが必要であった。ベートーヴェンが言ったように、

「もし生命の力をすべて世間のことに与えてしまうならば、最も高尚なものの最も優良なものにたいしては、何がわれわれに残るであろうか？」彼は昔あれほど苛酷かこくに批判した自分の天性と自分の民族とを、今力強く意識しだした。パリーの雰囲気ふんいいきに圧倒さるるに従って、祖国のそばに逃げてもゆきたい欲求を、祖国の精華が集められてる詩人や音楽家の腕の中に逃げ込みたい欲求を感じた。彼らの書物をひらくや否や、日に照らされたライン河ラインの囁ささやきが、うち捨ててきた旧友のやさしい微笑ほほえみが、室の中に満ちてきた。

いかに彼は彼らに対して忘恩であつたらう！ どうして彼は、彼らの誠実な好意こういの貴さをもつと早く感じなかつたのか？ 彼は自分がドイツにいた時、彼らにたいして言つた不正な侮辱的な事柄を皆、思い起こしては恥ずかしくなつた。あの当時彼は、彼らの欠点、彼らの拙劣な儀式張つた態度、彼らの涙つぽい理想主義、彼らのつまらない思想上の虚偽、彼らのつまらない卑怯ひきようさ、などをしか見てはいなかつた。ああそういうものは、彼らの大なる美点に比ぶればいかに些細せさいなものだろう！ どうして彼は、それらの欠点にたいしてあれほど酷薄であり得たのか？ 今になつて思えば、その欠点のために彼らはさらに強く人の心を打つのであつた。なぜなら、そのために彼らはさらに人間的なのであつたから。反動によつて彼は、昔自分が最も不正に取り扱つた人々にたいして、より多く心ひかれた。

シューベルトやバッハにたいして、彼はいかにひどいことを言ったことであるか！　そして今や彼は、彼らのすぐ近くに自分自身を感じた。かつて彼から辛辣しんらつに滑稽こっけいな点を指摘されたそれらの偉大な魂は、彼が遠くへ流りゅう竄ざんの身となった今となって、彼の方へ身をかがめて、親切な微笑を浮かべながら彼に言っていた。

「兄弟よ、われわれが控えている。しっかりとせよ。われわれもまた、不当に大きな悲惨をなめたのだ……。なに、どうにか切りぬけてゆけるものだ……。――」

彼はヨハン・セバスチアン・バッハの魂の大洋が怒号するのを聞いた。※風ひょうふう、吹き荒れる風、飛び去る人生の暗雲——喜悦や悲痛や憤怒ふんぬに酔もろった諸々の民衆、その上に翔かける、温和に満ちたキリスト平和の主宰者——その足音で世界を揺がす聖なる婚約者の前に、歓喜の叫びを発して飛び歩いてる、夜警らの声で眼を覚ます、諸々の都市——思想、熱情、音楽的形象、勇荘な生活、シェイクスピア式の幻覚、サヴォナロラ式の予言、または皺寄しわった眼瞼まぶたと挙げた眉まゆとの下に輝いてる小さな眼をもち、二重頤ふたえあごをもった、チューリングエンの少年歌手のいじけた身体にこもっている、牧歌的な叙事詩的な黙示録的な幻影、などの驚くべき貯蔵……。彼はその姿をありありと見た。陰気で、澆刺はつらつとして、多少滑稽こっけいで、比喩ひゆと象徴とがいつぱいつめ込まれた頭脳をもち、ゴチツク的でまたロココ的で、怒おこ

りつぽく、頑固で、清朗で、生命にたいする熱情と死にたいする郷愁とをそなえている……。彼はその姿を学校の中に見た。嗶声のきたない粗野な賤しい疥癬病みの生徒らの中に交つて、銜学的な天才はだの風貌をしているが、それらの悪童どもと口論し、時としては土方みたいになぐり合い、ある者から打ち倒されることもある……。彼はその姿を家庭の中に見た。二十一人の子どもにとり囲まれていて、そのうち十三人は彼より前に死に、一人は白痴であるが、その他は皆りつぽな音楽家で、彼に小音楽会を催してくれる……。疾病、埋葬、苦々しい論争、困窮、世に認められない天才、——そしてことに、その音楽、その信仰、解放と光明、垣間見られ予感され欲求され把握された喜悦、——神、彼の骨を焼き毛を逆立たせ口から雷鳴を発せしむる神の息吹き……。 おお力よ、力よ！
力の多幸なる雷電よ。

クリストフは息を凝らしてその力を飲み込んだ。ドイツ人の魂から流れ出るこの音楽の偉力の恩恵を、彼は感じた。往々平凡で粗野でさえもあるが、そんなことはなんの関係があるか？ 肝要なのは、それが満ちあふれることであり、満ちあふれて流れることである。フランスにおいては、音楽はパストゥール式濾過器によって、ていねいに口をふさいだ瓶の中に、一滴ずつ集められている。そして無味な水ばかり飲んでるそれらの連中

は、ドイツ音楽の大河にたいして嫌悪けんおの感をいだいている。彼らはドイツ精神の欠点をいちいち拾い上げるのである！

「憐あわれなる小人輩よ！」とクリストフは、先ごろ自分自身も同様に笑うべきものであったことを思い出さないうで考えていた。「彼らはワグナーやベートーヴェンのうちにも欠点を見出している。彼らには欠点のない天才が必要なかもしれない。……あたかも、嵐あらしは吹き荒れても、事物のりっぱな秩序を少しも乱すまいと努める、とでもいうかのように……」

彼は自分の力に欣喜きんきしながらパリーの中を濶歩かっぱした。理解されなくとも結構だ。その方がかえって自由だろう。創造するのは天才の役目であるが、内心の法則に従って有機的に組み立てられた完全な一世界を創造するには、すっかりその中に生きなければならぬ。芸術家は孤独でありすぎるといふことは決してない。恐るべきことは、自分の思想を鏡に映してその変形され縮小されたものを見ることである。自分のなさんとすることは、なし遂げないうちに他人に漏らしてはいけない。そうしなければ最後までやり遂げる勇氣がなくなるだろう。なぜなれば、その時自分のうちに見えるのは、もはや自分の思想でなくて、他人の惨めみじな思想であらうから。

今や何物も彼の夢想を乱しに来るものはなかった。その夢想は、彼の魂のあらゆる隅^{すみずみ}々から、彼の進路のあらゆる石ころから、泉のようにほとぼり出していた。彼は幻覚者のような状態に生きていた。すべて見るもの聞くものは、実際に見聞きするものとは異なつた人物事物を、彼のうちに喚起さしてくれた。ただ生きてさえいれば、自分の周囲至るところに、作中人物の生活が見出された。その感覚の方から彼を捜しにきてくれた。通りがかりの人の眼、風がもたらす一の声、芝生^{しばふ}の上に落ちてる光、リュクサンブールの園の木の間にはさえずる小鳥、遠くで鳴る修道院の鐘、青ざめた大空、室の奥から見える空の片隅、一日の種々の時間における物音と色合い、それらを彼は自分のうちに認めはしないで、夢想の人物のうちに認めた。——クリストフは幸福だった。

とは言え、彼の境遇は最も困難になつていた。唯一の財源だったピアノの教授のわずかなものを、皆失つてしまった。ちょうど九月のことで、パリーの上流社会は休暇中だった。他の弟子^{でし}を見つけるのは困難だった。彼が見出した唯一の弟子は、頭はよいが分別の足りない技師で、四十歳になつてヴァイオリンの名手になろうと思いついた男であつた。クリストフはヴァイオリンがそう上手^{じょうず}ではなかつた。それでもこの弟子よりは巧みだった。そしてしばらくの間彼は、一時間二フランのきめで週に三時間教えてやった。しかし一か月

半ばかりたつと、技師は飽いてしまつて、自分の重大な天職は絵画にあることをにわか
 発見した。——ある日彼がその発見をクリストフに語つた時、クリストフはたいへん笑つ
 た。しかし笑い終えてから、懐勘定ふんどしをしてみると、最後の謝礼としてもらつた十二フラン
 があるきりだつた。それでも彼はあわてなかつた。ただ、生活の他の方法を捜さなければ
 ならないが、出版共著の方にでもまた奔走を始めてみようかと、考えただけだつた。それ
 はたしかに愉快なことではなかつた。……が、馬鹿な！……前から氣を病むに及ぶものか。
 ちやうど天気もよかつた。彼はムードンへ出かけた。

彼は歩行の飢えを感じていた。歩いてると音楽上の収穫が増してきた。彼は音楽に満ち
 ていて、あたかも蜂はちの巣のようだつた。そして蜜蜂みつばちの金色の羽音に微笑ほほえんでいた。それ
 はたいてい、転調に富んだ音楽だつた。それから、躍り立つ執拗おどな魅惑的な律動リズム……。
 室内に蟄居ちつきよしてしびれがきれたら、律動リズムを創作しにでも出かけるがいい！ パリー人ら
 のように動きのない微細な和声ハーモニーと混和させるには、もつてこいだ！

彼は歩き疲れると、森の中に寝そべつた。木々の葉は半ば枯れ落ちて、空は雁来紅がんらいこうの
 花のように青かつた。クリストフはうっとりと夢想にふけた。その夢想はすぐに、十月
 の霽もやから落ちてくる柔らかい光の色に染められた。彼の血は高鳴っていた。彼は自分の思

想の早波が通りすぎるのに耳傾けた。たがいに争闘して老若の世界、また一都会の住民のように彼のうちに生きている、亡き魂の断片、古の客人寄食者、それらが地平線の四方から湧き上がってきた。メルキオルの墓の前で聞いたゴットフリートの古い言葉が、頭に浮かんできた。彼は、うごめいてる死人ら——見知らぬ自分の全民族——に満ちてる、生きた墳墓であった。彼はそれらの生命の群れに耳を傾け、あたかもダンテの森のように怪物に満ちたその古い森の、大オルガンの音をたてさせるのが楽しみだった。彼は今ではもうそれらの怪物を、少年時代のように恐がりはしなかった。なぜなら、支配者が、彼の意志が、そこにあつたから。彼は獣どもを咆哮させるために、そして内心の動物園の豊富さをいっそうよく感ずるために、鞭を響かせて非常に喜んでいた。彼は孤独ではなかった。孤独になるの恐れはさらになかった。自分一人だけで全軍隊であり、快活健全なクラフト家の数世紀であった。敵たるパリーにたいして、一民衆にたいして、こちらも一の民衆だった。争闘は互角であった。

クリストフは、これまで住んでいた粗末な室——室代があまり高かった——を捨てて、モンルージュ町にある屋根裏の室を借りた。この室は他になんの取り柄もなかったが、た

だきわめて風通しがよかった。たえず空気が流れ込んできた。ちようど彼には、深く空気を呼吸することが必要だったのである。その窓からは、パリーの立ち並んだ煙突がずっと見渡せた。移転は手間取らなかつた。荷車一つで十分だつた。クリストフはみずからその荷車をひいた。道具の中で彼にとって最も貴重なのは、古いかばんとベートルーヴェンの面型マスクとであつた。この面型マスクは、その後世に広まった鑄物の一つだつたが、彼はそれを、最も高価な美術品でもあるかのように、ごくていねいに包み上げていた。手元から少しも離さなかつた。それは彼にとって、パリーの大洋中における小島であつた。また、精神上的晴雨計でもあつた。彼の魂の天候を、彼のごくひそかな思想を、彼がみずから意識してゐる以上にはつきりと示してくれた。あるいは雲に閉ざされた空を、あるいは熱情の突風を、あるいは力強い静穩を示してくれた。

彼は食物を非常に節約しなければならなかつた。日に一回、午後一時に食事をすることにした。大きな腸ちようづめ詰を買つて窓につるしておいた。その厚ぼつたい肉片、堅い一片のパン、手製のコーヒー一杯、それだけで彼は山海の珍味とした。しかしそれを二人分も食べたかつた。彼は自分の食どんしよく食しょくに腹がたつた。きびしくみずから責めた。腹のことばかり考へてる食しんぼう辛棒だとみずから見なした。が実は彼には腹はほとんどなかつた。瘦やせ

犬よりもなおほつそりした腹だった。それでも彼は堅固で、骨格はたくましく、頭脳は常に自由だった。

彼は明日のことをあまり気にしなかった。その日の金さえあれば平気だった。無一文になると、思い切つて本屋回りを始めた。しかしどこにも仕事は見出せなかった。むなしく家へ帰りかけた。その時、先ごろシルヴァン・コーンからダニエル・ヘイトへ紹介された楽譜店のそばを通りかかつて、中にはいつて行つた。あまり面白くない事情ですでにここへは来たことがあるのを、忘れてしまつていた。ところが第一に眼にとまつたのはヘイトだった。彼は引き返そうとした。しかしもう間に合わなかった。ヘイトから見られてしまつていた。彼は逃げる様子を見せたくなかった。どう言つてよいかもわからないで、ただヘイトの方へ進んでいった。なるべく横柄おうへいな様子で対抗してやるつもりだった。というのは、ヘイトは無礼を容赦しない男だと信じていたから。ところがヘイトは少しもそうでなかった。彼の方へ平然と手を差し出した。普通のきまり文句で彼の健康を尋ねた。そして彼が何か言い出すのをも待たないで、事務室の扉とびらを指し、身を退けて彼を通した。ヘイトはこの訪問を内心喜んだ。傲慢ごうまんのあまりそれを予知してはいたが、もう期待してはいなかつたのである。彼はひそかにクリストフの行動を注意深く探つていた。クリストフの

音楽を知るべき機会は一度ものがさなかった。噂の高いダヴィデ演奏会にも臨んでいた。彼は聴衆を軽蔑していたので、その作にたいする聴衆の敵意ある冷遇をさほど驚きはしなかつたが、作の美点は残らず完全に感じたのだった。クリストフの芸術的獨創性をヘヒト以上によく鑑賞し得る者は、おそらくパリに幾人もなかつたであろう。しかしヘヒトは、それをクリストフに言いたがらなかつた。自分にたいするクリストフの態度が癪にさわつていたばかりでなく、親切な様子を見せることがまったくできなかつたのである。彼は生来特別に無愛想な男だった。心からクリストフを助けるつもりではいたが、そのため一歩の労も取りたくはなかつた。クリストフの方から助力を求めに来るのを待っていた。しかるに今クリストフがやつて来ると、彼はこの機会をとらえて、相手に屈辱的な態度を取らないでいいようにしてやりながら、過去の誤解の記憶を寛大に消し去ろうとするどころか、かえつて、相手に長々とその要求を述べさして喜んだ。そして、クリストフがかつて拒んだ仕事を、少なくとも一度だけはぜひともやらせたがった。五十ページの楽譜を渡して、それを明日じゆうにマンドリンとギターとに組曲してくれと言つた。そのあとで彼は、クリストフに我を折らしたのに満足して、も少しよい仕事を見つけてくれた。しかしいつもきわめて無愛想な態度だったので、クリストフは少しもありがたくは思えなかつた。

困窮に駆られなければふたび彼のもとへ走ることをしなかった。がとにかく、その仕事がいかに厭いやなものであるかと、ヘヒトからただ金をもらうよりは、まだそれで金を得る方が氣持よかつた。實際ヘヒトは、ある時彼に金をやろうとした——それも確かに好意からであつた。しかしクリストフは、ヘヒトが初め自分をへこますつもりでいたことを感じていた。彼は向こうの条件は承諾しなければならなかつたが、少なくとも恩恵を受けることは拒絶した。仕事をしてやるのはいい——おたがいに与えつこだから構わない——しかし何か負い目を受けることは好ましくなかつた。彼は、自分の芸術にたいする破廉恥こじぎな乞食たるワグナーとは異なつていた。自分の芸術を自分の魂以上に置いてはいなかつた。自分のかせいだパンでなければ喉のどに通らなかつた。——あくる日、彼が徹夜して仕上げた仕事をもつてゆくと、ヘヒトは食卓についていた。ヘヒトは、彼が無意識に食物の上へ投げた眼つきや蒼あおざめた顔色を見て、何にも食べないでいるのに違ちがいなと思ひ、御馳走ごちそうをやりうとした。その志は親切だつた。しかし、クリストフの困窮を見て取つたことや、その御馳走ごちそうが施ほどこ与しに等しいことを、どしりと胸にこたえさせるような態度だつた。クリストフは、たとい餓死するともそんなものを受けたくなかつた。が食卓へすわるのを断わるわけにはゆかなかつた——（話があると言われたので）。けれど何一つ手をつけなかつた。

食事をしたばかりのところだと言った。胃袋は食べたくてひくひくしていた。

クリストフはヘヒトに頼らないで済ましたかった。しかし他の出版屋はさらにひどかった。——また、楽句の断片を思いついてもそれを書くことさえできないような、富裕な音楽愛好家らがあった。彼らはクリストフを呼んで、その苦心の曲を歌ってきかした。

「どうです、いいでしょう！」

彼らは彼に頼んで、それを展開させ——（そっくり書かせ）——自分の名前で大書肆しよしから出版させた。するともうその楽曲全体を自分の作だと思ひ込むのであった。クリストフはそういう連中の一人をよく知っていた。世に知名の紳士であつて、落ち着きのない大きな身体をし、すぐに彼へ親しい呼びかけをし、彼の腕をとらえたりして、騒々しい感激の辞を浴びせかけ、冗談をささやき、取り留めもないことや厚かましいことをしやべりたて、それといつしよに、ベートーヴェン、ヴェルレーヌ、オフエンバッハ、イヴェット・ギルベール……などという心酔の叫びを交えた。彼はクリストフに仕事をしてもらつたが、金を払うことは閑却していた。食事に招いたり握手をしたりすることで報酬を済ましたつもりでいた。最後にようやく二十フラン送つてきた。クリストフは馬鹿ばかげた贅ぜいたく沢心を起こして、その金を送り返してしまつた。その日彼は、幾いくばく何も懐ふところにもつていなかった。それ

にまた、母へ手紙を出すのに二十五サンチームの切手を買わなければならなかった。年老いたルイザにとつてはちようど祝い日だった。クリストフはぜひとも手紙を出したかった。善良な彼女は息子むすこの手紙を非常に頼りとしていて、それなしで済ますことができないほどだった。彼女は手紙を書くのが骨折れたけれども、この数週間は、彼よりもしばしば書き送っていた。寂しさに苦しんでいた。しかしクリストフのところへ、パリーまでやって来ることは決心しかねた。彼女はあまり気が小さく、その小さな町や教会堂や住居などに執着しすぎていて、旅を恐こわがっていた。それにまた、たとい彼女が来ることを望んでも、クリストフには彼女を養うだけの金がなかった。彼は自分一人で毎日を過すごすだけの金ももたなかった。

ある時、クリストフにとつて非常にうれしかったのは、ロールヘンからの贈り物であった。ロールヘンというのは若い田舎娘いなかで、この娘のために彼はプロシャの兵士らと喧嘩けんかをしたのだった（第四卷反抗参照）。彼女は結婚する由を彼に知らしてきた。また彼の母の消息を告げてくれ、一籠かごのりんごと一片の菓子パンとを送ってきて、それを自分のために食べてくれと言つてよこした。それはちようどよい機おりに到着した。その晩クリストフは、断食と小斎日と四旬節の精進とがいっしょに来たような場合にあった。窓ぎわの釘くぎにつる

した腸詰ちようづめはもう紐ひもだけしか残っていないなかった。岩の上で鳥からすに養やしわれた聖きよい隠士いんしらに、クリストフは自分を比較してみた。しかしすべての隠士を養うのは、この鳥にとつてたいへん骨の折れることだったに違いない。鳥はもうふたたびやって来なかった。

それらの困難にもかかわらず、クリストフは元気を失わなかった。盥たらいの中でシャツを洗ったり、鶉つくみのように口笛を吹きながら靴くつをみがいた。ベルリオーズの言葉でみずから慰めた。「生活の困苦を超越して、あの名高い怒りの日の快活な歌を、軽やかな声で、くり返し歌おうではないか……。——クリストフも時々それを歌った。近所の人々はうるさかったが、彼が途中で歌をやめてふいに大笑いするのを聞くと、呆あっけ気に取られてしまった。

彼は厳格に清浄な生活をしていた。「色男の生活は閑ひまじん人や金持の生活である」とベルリオーズが言ったとおりだった。困窮、日々のパンの追求、過度の節食、創作熱などは、快楽を思ひまう隙ひまをも趣味をも、彼に残さなかった。彼は快楽にたいして無関心なばかりではなかった。パリーにたいする反発から、一種の精神的禁慾主義に陥っていた。純潔にたいする熱烈な要求とあらゆる醜汚けんおにたいする嫌悪けんおの情とをもっていた。と言って彼は、情熱に襲おそわれないのではなかった。ある時には情熱にとらわれることがあった。しかしそれら情熱は、彼がそれに屈服した時でさえもやはり清浄だった。なぜなら、彼はその中に快

樂を求めてるのではなくて、自我の絶対的傾倒と一身の豊満とを求めていたから。そして彼は、自分の誤りを見て取ると、憤然として情熱を投げ捨てていた。淫逸いんいつは彼にとって、別に罪悪ではなかった。生命の泉を汚すものこそ大なる罪悪であった。キリスト教的の古い素地が他の後來物の下に全然埋もれてしまつてはいない人々、今日でもなお強健な人種の子孫だともみずからを感じてる人々、勇ましい規律を守つてまも西欧の文明を建設した人々、彼らはクリストフを理解するに困難ではあるまい。クリストフは、快樂を唯一の目的としたクレド信条としてる四海一家的な社会を軽蔑けいべつしていた。——もちろん、幸福を求め、人間のために幸福を欲し、また、ゴートのキリスト教から二十世紀間人類の上に積み重ねられてる、弱気な悲観的な信仰を撲滅することは、いいことには違いない。しかしそれは、他人の幸福を欲する寛大な信念であるという条件においてでなければならぬ。さもなくばなんであろう。最も憐むあわれべき利己主義のみではないか。他人が苦しむのを平然と看過しながら、自分の官能へは最小の危険で最大の快樂を与えようと求むる、享樂家どもばかりではないか。——そうだ確かに、彼らの客間的サロン社会主義は人の知るとおりのものである。……しかし、彼らの快樂的主義主張は、彼らと同様な「脂肪」の徒、肥満の「選良」にとつてのみ価値あるのであつて、貧しい人々にとつては害毒であるということ、彼らはだれよりも

よく知らないであろうか？……

「快樂の生活は富者の生活である。」

クリストフは少しも富者でなかったし、また富者となるために努めもしなかった。多少の金を手に入れると、すぐにそれを音楽上のことに費やしてしまった。食物を節してまで音楽会に行つた。シャートレー座の一番上階の二等席を占めて、音楽の中に没頭した。彼にとつてはそれが御馳走ごちそうや情婦の代わりとなつた。幸福にたいする渴望と幸福を享樂する能力とを多分にもつていたので、その管弦樂の不完全さにも心を乱されなかつた。彼は二、三時間もじつと恍惚こうこうのうちに浸つていて、誤つた趣味や間違つた音に出会つても、ただ寛大な微笑をもらすのみだつた。批評なんか戸外に置きつ放しにしておいた。愛するために来たのであつて、批判するために来たのではなかつた。彼の周囲の聴衆も、彼と同じく半ば眼を閉じたままじつとして、夢想の大きな流れに身を任していた。逸樂と殺戮さつりくとの幻覺を胸にはらんでる巨大な猫ねこのように、内に思いを潜めながら影の中にうずくまつてる民衆の姿を、クリストフは眼に見るような気がした。金色の濃こまやかな薄闇うすやみの中に、種々の面影が怪しくも浮き出してきた。その見知らぬ魅力と無言の喜びとが、クリストフ

の眼と心とをひきつけた。彼はそれらの面影に執着し、その方へ耳を澄ました。そしてついに、身も心もそれと同化してしまった。時とすると、それらの一人がそれと気づいて、演奏のつづくかぎり、両者の間にひそやかな同感の情が結ばれることもあった。そういう同感の情は、心身の奥底まで沁みとおるものではあるが、一度音楽会が終わって、魂と魂とを結合する交流が絶えると、もはや何もあとに残らないものである。それは、音楽を愛する人々が、ことに年若くて最も自分を投げ出し得る人々が、よく知っている精神状態である。音楽の本質はまさしく愛であつて、他人のうちにそれを味わう時にしか完全には味わわれない。そして人は音楽会において、群衆のうちに、自分一人ではあまりに大きすぎる喜びを分かつべき、ある眼を、ある友を、本能的に捜し求める。

クリストフが、音楽の楽しみをよりよく味わうために選んだ、それら一時の友のうちに、彼をひきつける一つの顔があつた。彼は音楽会ごとにそれを見かけた。小さな女工であつて、音楽をなんらの理解なしにただ愛してゐるらしかった。かわいげのある横顔をしていて、軽くつき出た口とやさしい頤、それとほとんど同じ高さの小さなまつすぐな鼻、つり上がった細い眉、輝まゆいてる眼、のんきなかわいい小娘の一人だつた。そういう小娘の顔つきの下にこそ、無関心な平和に包まれてる喜びや笑いが、見て取られるものである。それらの

不品行な娘たち、それらの悪戯いたずらな女工たちこそ、古代の彫像やラファエロの描いた女などに見えるような、今は見られない清朗な気分を、おそらくは最も多分に反映している。それは彼女らの生しょうがい涯がい中の一瞬にすぎないし、快樂の最初の眼覚めざめにすぎなくて、凋ちよう落らくはほど近い。しかし彼女らは少なくとも、美うるわしい時を生きたのである。

クリストフは楽しんで彼女をながめた。そのやさしい顔つきが彼の心を喜ばした。彼は欲求なしに享樂し得た。そしてそこに、喜びや力や慰安を見出した——ほとんど貞節をさえ見出した。彼女も——言うまでもなく——彼から見られることをすぐに気づいていた。そして二人の間には、知らず知らずのうちに、一種の磁氣の流れができてきた。ほとんどすべての音楽会で、たいてい同じ場所で顔を合わせたので、間もなくたがいの趣味をもしり合った。ある楽節になると、意味あげな眼つきをかわした。彼女はとくにある楽句を好む時には、唇くちびるをなめるかのように軽く舌を出した。また、面白くないことを示すには、そのやさしい顔を軽蔑けいべつ的につき出した。それらのかわいらしい顔つきのうちには、人から見られてると知ってる時ほとんどだれでもしらずにはいられないような、無邪気な道化どうけた様子ようすが交まじりあっていた。また彼女は時とすると、真面目まじめな楽曲の間、しかつめらしい表情をつとめることもあった。そして横顔を向け、聴ききとれてるふりをし、頬ほおに微笑を浮かべなが

ら、彼から見られてるかどうかを横目でうかがっていた。二人はかつて一言もかわしたことがなく、出る時いっしょになろうとつとめたことも——（少なくともクリストフの方は）——なかつたが、それでもごく親しい友だちとなっていた。

ついに偶然にも、ある晩の音楽会で、二人は相並んだ席についた。ちよつとにこやかなためらいのあとで、親しく話を始めた。彼女は美しい声をもっていた。音楽について愚劣なことをたくさんしゃべった。少しも理解がないくせに通がっていたのである。しかし音楽を非常に好んでいた。最悪のものと最良のものとを、マスネーとワグナーとを好んでいた。退屈するのは凡庸ほんようなものにばかりだった。彼女にとっては音楽は一つの快樂であった。ダナーエが金色の雨を飲むように、全身の毛穴から音楽を吸い込んでいた。トリスタンの前奏曲では息絶えんばかりになった。英雄交響曲では、あたかも戦利品のように自分が運び去られるのを楽しんだ。ベートーヴェンが聾で唾つよだったことをクリストフに教え、それでももしベートーヴェンを知ったら、どんなに醜ぶおとこ男でも自分は彼を愛したはずだと言った。ベートーヴェンはそんなに醜ぶおとこ男ではなかつたと、クリストフは抗弁した。そして二人は、美と醜ぶおとこについて議論した。すべては趣味によるのだと彼女は説きたてた。一人に美しいものも他の者には美しくない。「人間は金貨ではない。万人の気に入るもので

はない。」「——クリストフは彼女が口をきかない方を好んだ。その方が彼女の心がよくわかった。イゾルデの死の間、彼女は彼に手を差し出した。その手は汗ばんでいた。彼はそれを曲が終わるまで自分の手に握りしめた。彼らは組み合わせた指を通して、その交響曲の波が流れるのを感じた。

二人はいつしよに外へ出た。十二時に近かった。話をしながらラタン町へ上っていった。彼女は彼の腕を取っていた。彼は彼女を家まで送っていった。しかしその戸口までやって行き、彼女が彼を引き入れるつもりでいると、彼はその誘いの眼つきに気も留めないで、そのまま別れ去ってしまった。しばらく彼女は呆然^{ぼうぜん}としたが、次には腹がたつた。それから、彼の馬鹿さを考えて笑いこけた。次に自分の室へはいつて着物を脱ぎながら、またいらだつてきた。そしてついには黙って泣いた。音楽会でふたたび彼に会った時、彼女は気をそこねた冷淡な多少意固^{いこじ}地な様子を見せようとした。しかし、彼があまり善良なお坊ちゃんだったので、その決心も保てなかった。二人はまた話しだした。ただ彼女は、今でも少し遠慮していた。彼の方では、ねんごろにしかしごくていねいに口をきいて、真面目^{まじめ}なことや、美しいことや、二人で聴いてる音楽のことや、それが自分にとっては何を意味するかということや、話してきかした。彼女は注意深く耳を傾けて、彼と同じように考え

ようとつとめた。彼の言葉の意味がわからないこともしばしばだったが、それでもやはり信じていた。クリストフにたいして感謝的な敬意をいだいていたが、その様子をほとんど示しはしなかった。二人は暗々裡あんあんりに一致して、音楽会でしか語を交えなかった。彼は一度、学生らの間で彼女に出会った。二人は真面目まじめくさって挨拶あいさつをした。彼女はだれにも彼のことを語らなかつた。彼女の魂の奥底には、ある神聖な小さな場所が、何かしら美しい純潔な感謝的なものが、存在していた。

かくてクリストフは、彼一人の存在によって、彼が存在するといふだけの事実によって、人の心を慰安するような影響を及ぼし始めた。彼はどこへ行っても、知らず知らずに、自分の内部の光明の跡を残した。それに最も気づいていないのは彼自身だった。彼の近くに、同じ家の中に、彼がかつて会いもしなかつた多くの人がいたが、彼らはみずから知らずに、彼の有益な光明を次第に受けていた。

数週間前からクリストフは、肉食を断ちまでして儉約しながらも、もう音楽会へ行くだけの金がなかつた。そして、屋根裏の自分の室では、今や冬になると、身体が凍えてしまふような気がした。彼はじつと机に向かつてることができなかつた。そこで降りていって、

温^{あた}まるためにパリーの中を歩き回った。彼は周囲の煩雑な都会を時々うち忘れて、無限の時間のうちに逃げ込む術を知っていた。空の深みにかかつてる死に凍えた月や、白い霧の中に回転してる太陽の円^{まる}い面を、騒々しい街路の上方にながめるだけで、町の喧^{けん}騒^{そう}は消えてしまい、パリー全市は無際限な空虚のうちに捜してしまつて、その全生活が、昔の、遠い遠い以前の……数世紀以前の……生活の幻影のようになしか思えなかつた。辛うじて文明の皮をかぶつてる自然の大なる野蛮な生活の、普通の人の眼にはつかないほどのわずかな^{しるし}徴^しを見ただけで、その自然の生活全部が彼の眼に映じてきた。舗石の間に伸び出てる草、乾燥した大通りの空気も土も不足してる所に、鉄板の幹^{おほ}覆^おいに圧迫されながらも芽を出してる樹木、または、太古の世界に充満してその後人間に滅ぼされてしまつた動物どもの名^な残り^ごとも言うべき、うろついてる犬や小鳥、あるいは、一群れの小蠅^{こばえ}、町の一郭を蚕食してる眼に見えない病菌——それらに眼をやるだけで、人間の温室たるこの都会の息苦しい中であつて、大地の霊の息^{いぶ}吹きが彼の顔に吹きつけてき、彼の元気を鼓舞するのであつた。彼はしばしば食も取らず、数日間だれとも話をせず、そういう長い散歩をしながら、尽きぬ夢想のうちに浸つた。その病的な気分は節食と沈黙とのためにひどく昂^{こう}進^{しん}していった。夜は、苦しい眠りや疲労を来たす夢に陥つた。幼時を過ごした古い家が、その室が、

たえず眼の前に浮かんできた。音楽的妄想もうそうが、しつこく頭につきまといつて来た。昼は、心の中にある人々や愛する人々、遠く離れてる人々や死んだ人々と、たえず話をかわした。湿っぽい十二月の午後、霜氷は堅くなつた芝生しばふを覆い、人家の屋根や灰色の円屋根は霧にぼかさされ、細長い屈曲した裸の枝を広げてる樹木は、霧もやの中におぼれて、大洋の底の海草に似ていた——その午後、クリストフは前日来悪寒おかんを覚え身体が温まらなかつたが、ただよく知らないルーヴル博物館にはいつてみた。

彼はこれまで、大して絵画に心を動かされたことがなかつた。内心の世界にあまり気を奪われていたので、色彩と形体との世界をよくとらえることができなかつた。色彩や形体は、ただぼんやりした反響をもたらすのみである音楽的共鳴としてしか、彼に働きかけてこなかつた。もちろん彼は本能的におぼろげながら知覚していた、音響的形体におけるごく視覚的形体における諧調かいちょうを支配する、同じ法則や、または、生命の両反対の斜面をそそぐ色と音との両河が流れ出る、魂の深い水脈などを。しかし彼はその両斜面のうちの一つしか知らなかつた。そして視覚の国においては少しも勝手がわからなかつた。それゆえに、光の世界の女王とも言うべき明るい眼をしたフランスの、最も微妙なまたおそらく最も自然な魅力の秘密が、彼の眼には止まらなかつた。

また、たとい絵画にも少し興味をもっていたとしたところで、クリストフはあまりにドイツ人であつて、かくも異なつたフランスの視覚にたやすく順応することができなかつた。新式のドイツ人らは、ゲルマン風の感じ方を排して、印象主義や十八世紀のフランスを熱愛してるとみずから信じており——フランス人よりもそれらをよく理解してるとの確信をもち合わせない時でさえそう信じているけれども、クリストフは、そういう新式のドイツ人ではなかつた。彼はおそらく野蛮人であつたろう。しかし率直に野蛮人だつたのである。ブーシェの小さな薔薇色の臀しり、ワットーの肥満した頤あご、グルーズの、退屈こそうな羊飼いや、コルセツトの中にしめつけられてる太つた羊飼いの女、よく捏こね上げられた魂たま、淑しとやかな流し目、フラゴナールのすり切れたシャツ、すべてそれらの詩的な肉体美も、世間の艶つや種だねを満載まんざいしている新聞紙にたいするくらの興味をしか、クリストフには与えなかつた。彼はその豊麗な諧調を少しも了解しなかつた。ヨーロッパのうちで最も精練されたその古い文明の、逸樂的な時として憂鬱ゆううつな夢にたいして、彼はまったく門外漢であつた。また十七世紀のフランスについても、そのあらたまつた敬けい虔けんさはでやかな肖像を、彼はやはり味わえなかつた。その大家のうちの最も真面目まじめな人々の多少冷やかな謹直さ、ニコラ・プーサンの尊大な作品やフィリップ・ド・シャンパンニユの蒼あおい人物の上に広がつてゐる、

魂のある灰色味は、クリストフをフランスの古い芸術から遠ざけてしまった。また新しいものについても、彼は少しも知るところがなかった。知つてるとすれば、誤り知つてるばかりだった。ドイツにいる時彼が心ひかされた唯一の近代画家ベックリン・ル・バロアは、ラテン芸術を見るの準備を彼に与えはしなかった。土の匂においがし、土から発する勇ましい猛獣格闘者の粗野な匂においがする、その瘴どうも猛もうな天才から受ける刺激が、クリストフの心の中には残つていた。彼の眼は、その酔える野人の、生なまなま々々しい光に焼かれ、熱狂的な雑色に慣れていたので、フランス芸術の薄ぼかしの色や細分された柔らかな語調などには、なかなか調和しがたかった。

しかしながら、人は異なつた世界に無難で生き得るものではない。いつしかその影響を受ける。いかに自分自身のうちに閉じこもつていても、いつかは何かが変化されたことに気づくものである。

ルーヴル博物館の広間をうろついた夕方、クリストフのうちには今までと変わつてゐる何かがあった。彼は疲れ、凍え、飢え、一人きりであった。あたりには寂しい陳列室の中に影がこめてきて、眠つたように静かな物の形が生き生きとしてきた。エジプトのスフィンクス、アッシリアの怪物、ペルセポリスの牡牛おうち、ポリシーのねばねばした蛇へび、などの間を

クリストフは、ぞつとしながら黙って通り過ぎた。お伽^{とぎばなし} 噺の世界にいるような気がした。神秘的な感動が心に上つてきた。そして次第に包み込まれていった、人類の夢に——人の魂の不思議な花に……。

絵画陳列室の金色の埃^{ほこり}、燦^{さんぜん}然たる爛^{らんじゆく} 熟せる色彩の庭、画面の立ち並んだ牧場、しかも空気の不足してるそれらの中にあつて、クリストフは熱に浮かされ、半ば病気の心地だつたが、はつと心打たれた。——飢えと、室の微温と、おびただし絵画とに、彼はぼんやりして、ほとんど何にも見ずに通り過ぎ、眩暈^{めまい}がしていた。そして水に臨んだ先端で、レンブラントの善良なるサマリア人の前まで来た時、彼は倒れまいとして、絵画のまわりの鉄欄に両手でつかまり、ちよつと眼を閉じた。その眼をまた開いて、すぐ前の正面にあるその作を見ると、魅惑されてしまった……。

日は暮れかかっていた。昼の明るみはずでに遠ざかつて消えていた。眼に見えない太陽の光が闇^{やみ}のうちに沈み込んでいた。昼間の働きに倦^うんでじつと休^{やす}らつてる魂から、幻覚が出て来ようとする怪しい時刻だつた。すべてのものが黙っている。聞こえるものは自分の動脈の音ばかり。もはや身を動かす力もなく、ほとんど呼吸する力もなく、うら寂しく頼りなくて……ただしきりに友の腕に身を投じたたく……奇跡が願われ、奇跡が今にも起こる

ような気がする……それが実際に起こってくる！ 金色の波が、薄暮の中に炎を発し、壁に反射し、瀕死ひんしの者を担かついでる男の肩に反射し、貧しい事物や凡庸ほんような人々の上に広がって、すべてが温和になり聖なる栄光を帯びる。それこそまさしく神である。神はその恐ろしいまた優しい腕に抱きしめる、それらの弱い醜い貧しい汚い惨めきたなみじな者たちを、靴くつの踵かかとのすり切れた虱しらみだらけの従僕を、重々しく窓に押しかけてる無格好なおびえてる顔つきの者どもを、恐怖にさいなまれて黙もつてる呆けた人々を——レンブラントが描あわしているその憐れむべき人類を、束縛された暗い魂の群れを。彼らは何にも知らず、何にもできず、ただ待ち震え嘆き祈るのみである。——しかし主はそこにいる。姿は見えない。けれどもその円光と、人間の上に投射されている光明の影とが、眼に見える……。

クリストフはふらふらした足取りで、ルーヴル博物館から出た。頭が痛んでいた。もう何にも見えなかった。街路で雨に打たれながら、舗石の水溜まりにも靴からしたたる水にも、ほとんど気がつかなかった。セーヌ河の上には黄色っぽい空が、日暮れの光を受けて、内部の炎——ランプのような光で輝いていた。クリストフはある眼つきの幻覚を眼の中にもつていた。彼にとつては、何物も存在しないように思われた。そうだ、馬車もその無慈悲な響きで舗石を揺ゆがしてはしなかった。通行人もその濡れた雨傘で彼に突き当た

りはしなかった。彼は往来を歩いてるのではなかった。自分の室にすわり込んで夢想して
 るがようだった。もはや自分の身も存在しないがようだった。……と突然——（彼はそれ
 ほど弱つていたのだ）——眩暈めまいにとらえられて、前のめりにぱったり倒れる心地がした：
 ……それはほんの束の間つかだった。彼は両の拳こぶしを握りしめ、足を踏みしめて、まっすぐに立
 ち直った。

ちようどその瞬間に、彼の意識が深淵しんえんから浮かび上がってきた間ぎわに、彼の眼は街
 路の向こう側の一つの眼とぶつかった。彼がよく知ってる眼つきで、彼を呼んでるように
 見えた。彼ははつとして立ち止まり、どこで見たのかと考えた。とすぐに、あの悲しげな
 やさしい眼を思い当たった。ドイツにいた時彼が心にもなく地位を失わせることになった、
 あの若い家庭教師のフランス女で、許しを乞こわんためにその後あれほど捜し求めていた女
 だった。彼女もまた、込み合った通行人の間に立ち止まって、彼の方をながめていた。見
 ると、彼女は突然群集の流れに逆らって、彼の方へ来るため中央路に降りようとした。彼
 も彼女に会おうと駆け出した。しかしどうにもできない馬車の輻輳ふくそうのために、間を隔て
 られた。その生きた障壁の向こう側でいらついている彼女の姿が、なおちよつと見えた。彼
 はなお通りを横切ろうとして、為に突き飛ばされ、ねばねばしたアスファルトの上に滑すべり

ころげ、危うく轢きつぶされるところだった。そして泥まみれになってまた立ち上がり、ようやく向こう側にたどりついた時には、彼女の姿はもう見えなかった。

彼は彼女のあとを追っかけてかかった。しかし眩暈がさらにひどくなっていた。あきらめるのほかはなかった。病気になりかかっていた。それを感じながらも認めたくなかった。彼はがんばって、すぐに家へは帰らずに、長い回り道をした。無駄な苦しみだった。まいったことを認めざるを得なかった。足が折れそうで、やっと歩行をつづけ、ようやくのことで家に帰った。階段で息が切れて、その踏み段に腰をおろさなければならなかった。冷え切った自分の室にもどったが、なお意地を張って寢床にはいらなかった。じつと椅子に腰をかけて、雨に濡れ頭は重く胸はあえぎながらも、自分と同じように疲憊しきった音楽の中に浸り込んだ。シューベルトの未完成交響曲の楽句が次々に聞こえてきた。可憐なるシューベルトよ！彼もまた、それを書いた時には、孤独で熱に浮かされうとうととしていて、永眠に先立つ夢現の状態にあった。暖炉の隅で夢想していた。麻痺しかけた音楽が、少しよんだ水のようにあたりに漂っていた。半ば眠りかけた子供が、自分でこしらえ出す話を面白がって、その一か所を幾度もくり返すように、彼はその音楽にいつまでも浸り込んでいく。そして眠りがやって来る……死がやって来る……。またクリストフの耳には、

他の音楽も響いてきた。燃えるような手をし、眼を閉じ、ものうい微笑を浮かべ、心は嘆息に満ち、解放の死を夢みてる音楽——ヨハン・セバスチアン・バッハの、「懐かしき神よ、われは何時死ぬべきか」という交声曲カンタータの第一合唱句が……。心地よきかな、ゆるやかな波動、遠いおぼろな鐘の音、それとともに展ひらげゆく柔らかな楽句の中に身を浸すことは、……死ぬこと、大地の平和の中に融とけ込むこと、……「それから自分の身が土となる」ことは……。

クリストフは、それらの病的な思想を振るい落とし、弱った魂をねらってる人魚の危険な微笑しりぞを拒きけた。そして立ち上がって、室の中を歩こうとした。しかし立っていることができなかつた。熱のために震えていた。床につかざるを得なかつた。こんどは重い病気だという気がした。しかし降参しなかつた。病気になって病気に身を任せるような男ではなかつた。彼は反抗し、病気になるまいとし、ことに、死ぬものかと腹をすえていた。遠く彼か方には彼を待つてる憐あわれな母親があつた。そして自分にはなすべき仕事があつた。殺おされてなるものか！ 彼は震える齒をくいしばり、逃げようとする意志を張りつめた。覆おいかる波の中に闘たたいかつづける水練家たのようだつた。それでもたえず彼は沈み込んだ。取り留めもない事柄、連絡のない幻影、パリーの客間サロンや故郷の思い出、または、馬場の馬みたい

に際限もなく回つてる、律動リズムや楽句の妄想もうそう、あるいは突然に、善良なるサマリヤ人の金色の光の投射、闇やみの中の恐怖の顔つき、次には、深淵しんえん、暗夜。それから彼はまた浮かび上がつてき、立ち乱れた雲霧を引き裂き、拳を握りしめ頤あごをくいしばつた。彼はすがりついていった、現在や過去において愛したすべての人々に、先刻ちらと見た懐かしい顔に、親愛なる母親に、または、「死も噛み込めない」岩のように感ぜられる、自分の頑丈がんじょうな一身に……。しかしその岩もふたたび海水に覆われた。ぶつかつてくる波のために、しがみついている魂の手はゆるんだ。魂は白波に押し流された。そしてクリストフは、昏迷こんめいのうちにもがきながら、無意味な文句を口にして、想像の管弦楽を、トロンボーン、トランペット、シンバル、チンパニー、バスーン、コントラバス……などを指揮し演奏し、熱狂的にひき吹き打ちたたいた。不幸なる彼は胸に納めた音楽で沸騰していた。数週間以来音楽を聞くことも演奏することもできなかつたので、高压を加えられた汽鐘きかんとのように爆発しかけていた。若干の執拗しつような楽句は、螺錐ねじきりのように頭脳へはいり込んで、鼓膜を貫き、彼に苦悩くなうの唸うめきをたてさせた。それらの発作が済むと、彼はまた枕まくらに身を落して、疲れきり、汗にまみれ、息をあえぎつまらした。寢床のそばに水差を置いて、ごくごくぐくと飲んだ。隣室の物音や、屋根室の扉とびらの音にも、ぴくりと震え上がった。周囲にぎっしり

住んでる人々にたいして、幻覺的な嫌悪けんおの念をいただいた。しかし彼の意志はなお闘たたかいつづけ、悪魔にたいする戦いの、進軍ラツパを吹奏していた……。『世に悪魔満ち渡り、われわれを呑噬どんぜいせんとするとも、あに恐るることがあろうぞ……。』

そして、彼の一身を流し去る燃える闇やみの大洋上に、風の合い間の風なまぎが、晴れ間の光が、ヴァイオリンやヴィオラの和らいだ囁ささやきが、トランペットやホルンの栄光ある穏やかな音が、突然響いてきて、それとともに彼の病める魂からは、ヨハン・セバスチアン・バッハの聖歌のような確固たる歌が、大なる壁のごとくほとんど不動の勢いで、起こってくるのであった。

かくて、熱の幻や胸をしめつける息苦しさなどと戦つてるうちに、室の扉とびらが開かれて、一人の女が手に蠟燭ろうそくをもつてはいつて来るのを、彼はぼんやり意識した。彼はそれをも幻覺だと思つた。口をきこうとした。しかしそれができないでまた身を落した。時おり、深い底から表面へ意識の波に連れもどされる時に、だれかが枕まくらもと二元を高めてくれたのを、足に夜具をかけてもらったのを、背中にたいへん熱いものがあるのを、彼は感じた。あるいはまた、まったく見知らぬ顔のその女が、寝台の足下にすわつてるのを、彼は見て取つ

た。次には、別の顔が、医者が、やって来て聴珍をした。クリストフには彼らの言葉が聞き取れなかった。しかし、自分を病院に入れようとしてるのだと察した。彼は言い逆らつてみた。病院にはいりたくないと叫び、ここで一人で死にたいと叫んだ。が口からは、訳のわからない音しか出なかつた。それでも女は了解した。というのは、彼の味方をして、彼を落ち着かしてくれたから。その女がだれであるかを彼はしきりに知りたがつた。非常な努力をしてまとまつた言葉を発し得るようになる、すぐにそのことを尋ねた。彼女の答えでは、屋根裏の隣り同士の女で、彼がうなるのを壁越しに聞き、助けを求めてるのだと考えて、勝手にはいつて来たのだつた。口をきいて疲れてはいけなないと、彼女はていねいに頼んだ。彼はそれに従つた。そのうえ、今しがた口をきいた努力のために、がっかりしてしまつていた。で彼はじつとして口をつぐんだ。しかし彼の頭は働きつづけて、散らばつた記憶をどうにか寄せ集めようとした。いったいどこでこの女を見かけたのかしら？ ……しまいに彼は思い出した。そうだ、屋根裏の廊下で出会つたことがあるのだつた。下女で、シドニーという名前だつた。

彼は半ば眼をつぶりながら、彼女をながめた。彼女はそれに気づかなかつた。背の低い女で、真面目な顔つき、つき出た額、ひきつめた髪、骨張つた蒼白い露わな、頬の上部

と顚顚、短い鼻、穏やかな頑固な眼つきをしてる、うす青い眼、引きしまってる太い唇、貧血した顔色、卑下し遠慮し多少堅くなってる様子だった。彼女はてきぱきした黙々たる心尽くしで、クリストフの世話をしながらも、親しみは少しも見せず、階級の違いを忘れない召使の控え目さを、決して越えることがなかった。

それでも、彼が快方に向かつて話ができるほどになると、彼の親切な善良さのために、シドニーは次第に多少自由に口を大きくようになった。しかしいつも気をつけていた。言うのを控えている事柄があった（それが様子でわかった）。彼女は卑下と矜持との交り合った性格だった。クリストフは彼女がブルターニュ生まれであることを知った。故郷に父親がいるのだが、その父親のことを彼女はごく慎み深く話した。しかし、その父親は酒飲みで、さんざん遊び暮らし、娘に迷惑ばかりかけてることは、クリストフもたやすく推察し得た。彼女は搾り取られながら、氣位を高くもって一言も文句を言わなかった。そして欠かさず月給の一部分を送っていた。が少しもだまされてるのではなかった。また彼女には一人の妹があつて、女教員になる受験準備をしていたが、その妹を彼女はたいへん自慢していた。その教育費のほとんど全部を仕送っていた。彼女は頑固なほど仕事に熱心だった。クリストフは尋ねた。

——彼女の勤め口は楽だったか。

——楽だった。しかし彼女はよそうと考えていた。

——なぜ？ 家の人たちがつらかったのか。

——否。たいへん親切にしてくれる人たちばかりだった。

——給金が十分でなかったのか。

——十分だった……。

クリストフには合点がいかなかった。彼は理解しようとして、彼女を励まして話させようとした。しかし彼女は、その単調な生活だの自活する苦勞など以外には、何にも話すことをもたなかったし、話したがってもいかなかった。彼女は勞働を恐れてはいなかった。勞働は彼女にとつて、一つの欲求であり、ほとんど一つの楽しみだった。彼女は最もつらい事柄を、退屈のことを、口に出さなかった。が彼はそれを推察した。同時に豊富な直覺力で、少しずつ彼女の心中を読み取っていった。その直覺力は、病氣のために鋭くなり、また、同様な生活のうちに親愛な母親が耐えていた辛苦を思い出しては、さらに洞察的どっさつになっていた。彼はあたかも自分で經驗してきたかのように、自然に反した陰鬱いんうつな不健全なその生活——中流社会が婢僕ひやくに課している普通の生活——を見て取った。主人たちは、

意地悪くはないが冷淡で、時とすると数日の間、用事以外には一言も言葉をかけない。幾時間も幾時間も、息苦しい台所で立ち働く。蠅帳はえちようでふさがれたその軒窓の前には、よごれた白壁がつつ立っている。喜びといつては、ソースがいいとか炙肉あぶりにくがよく焼けているなどと、事もなげに言われる時だけである。空気もなく、未来もなく、欲望や希望の輝きもなく、何物にも興味のない、鎖とぎされた生活。——彼女にとって最もつらいのは、主人たちが田舎いなかへ行く時だった。彼らは儉約のために彼女を連れて行かなかった。月々の給金は払ってやったが、郷里へ行く旅費は払ってやらなかった。自分の金で行くのは勝手にさしておいた。が彼女はそんなことをしたくなかったし、できもしなかった。そして一人ぼっちで、ほとんど見捨てられたその家に残っていた。外に出かけたくもなかった。他の召使たちを野卑で不品行だと軽蔑けいべつしがちだったので、それといっしょに話をすることもなかった。遊びにも行かなかつた。彼女は生来真面目まじめで儉約だった。悪い交際を恐れていた。台所か居間かにすわりきりだった。居間からは煙筒えんとう越しに、病院の庭の木の梢こずえが見えた。書物を読むでもなく、働こうとばかりした。頭がぼんやりし、退屈し、退屈のあまりに涙を流した。やたらに泣くという独特の才能をもっていた。泣くのが楽しみだった。しかしあまりに退屈すると、もう泣くこともできなかつた。生き心地も失って凍えきつたように

なつた。次にははつと元気を振るい起こすか、自然に元気がよみがえってくるかした。妹のことを考えたり、柄ハンドルオルガンの遠い音を聞いたり、夢にふけつたり、あるいは、これだけの仕事を仕上げるには、これだけの金を儲もつけるには、幾日くらいかかるかと長い間勘定した。その勘定を間違えてはまたやり直した。よく眠つた。日々が過ぎていった……。

それらのひどい意気消沈の合い間合い間には、子供らしい嘲ちやうしやう笑的な快活さが起こってきた。他人をあざけり自分自身をあざけた。主人たちの方へ批評の眼を向けなくてもなかつた、彼らの閑ひまな生活から生ずる種々の気苦労、夫人の気病みや憂鬱ゆううつ、すぐれた人間だと自称してゐる彼らのいわゆる業務、ある書面や楽曲や詩集などに彼らが覚えてゐる興味など。彼女の見識は多少粗雑ではあつたが、ごくパリー式な婢僕ひぼくの軽薄さと、自分にわからないものしか賞賛しないごく田舎式いなかな婢僕ひぼくの深い愚蒙ぐもうさことから、離れていたので、その明識でもって彼女は、遊戯的な音楽やつまらぬ饒じやうぜつ舌ぜつなど、この虚偽な生活中に大なる位置を占めてゐる、知的な全然無用なそのうえ退屈なそれらの事柄にたいして、一種敬遠的な蔑視べつしをいだいていた。万事退屈のあまりこしらえ出されたと思われるその贅ぜいたく沢たくな生活の、空想的な種々な快樂や苦勞に、自分が奮闘してゐる現実の生活を、ひそかに比較してみざるを得なかつた。それでも別に反抗心は起こらなかつた。世の中は万事そうしたもの

なのだ。彼女はすべてを、悪人をも馬鹿をも許していた。彼女は言っていた。

「世間は持ち寄りですよ。」

彼女は宗教心で支持されているのだ、とクリストフは想像した。しかしある日彼女は、自分より金持ちで仕合わせな人たちについて言った。

「つまるところだれでも皆、あとには同じになります。」

「いつのこと？」と彼は尋ねた。「社会上の革命のあとですか。」

「革命ですって？」と彼女は言った。「それこそ紺屋の明後日あさってです。私はそんなばかばかしいことは信じません。いつだって同じことですよ。」

「では、いつ皆が同じようになるんです？」

「もちろん死んでからですわ。だれでも消えてしまいます。」

彼はその冷静な唯物主義にすこぶる驚いた。があえて次のようには言い得なかった。

——それでは、人は一つの生活しかもたないとして、その生活が君の生活のようであるのに、他には幸福な人がいくらもいるということは、恐ろしいことではないですか。

しかし彼女は、彼のそういう考えを察したらしかった。あきらめた多少皮肉な沈着さで言いつづけた。

「我慢するよりほかはありません。皆が当たり前くに籤くを引けるわけではないから。はずれた者は仕方がないんですよ。」

彼女はフランス以外の地に（たとえば、アメリカから申し込みがあったように）もつと収入の多い地位を求めようとも考えていなかった。国を離れるという考えは、彼女の頭にはいることができなかった。彼女は言っていた。

「どこへ行つても石は堅いものです。」

彼女のうちには懐疑的な冷笑的な宿命観の素質があった。信念をあまりもたず、あるいははまつたくもたず、生存の知的理由をあまりもたず、しかも根強い生活力をもつてゐる人種——さほど生を愛してはいないが、しかも生にかじりついて、勇気を維持するために人為的な鼓舞を必要とせず、勤勉で冷静で、不満でしかも従順な、フランスの田舎者いなか、その仲間間で彼女はあつた。

そのことをまだよく知らなかつたクリストフは、この単純な女のうちに、なんらの信条にも偏しない心を見出して驚いた。彼女が楽しみも目的もなしにただ生に執着してゐることを、彼は驚嘆し、何物にも頼らない彼女の頑強がんきょうな道德心を、ことに驚嘆した。彼がこれまでフランスの民衆を見たのは、自然主義の小説や現代の小文士の理論などを通してで

あつた。それらの小文士は、牧歌時代や革命時代の人々と反対に、自分自身の悪徳を正当化せんがために、自然の人間を不徳なる動物と見なしがちであつた……。ところがクリストフは、シドニーの一徹な正直さを見て驚いた。それは道徳の事柄ではなかつた。本能と矜持きやうじとの事柄だつた。彼女は貴族的な自尊心をもつていた。民衆とは平民のことであると信ずるのは、愚かの至りである。中流階級にも賤せん民みんの魂があると同じく、民衆にも貴族がある。他人よりも純潔な本能を、おそらくは血潮を、もつていて、それをみずから知り、自分の真価を意識し、頹たい廢はいしないという矜持をもつている人々こそ、貴族というべきである。彼らは少数者である。しかし、たとい彼らは孤立していても、彼らこそ第一者であることはよくわかる。そして彼らがその場にいるだけでも、他の人々にとっては一つの抑制となる。他の人々は、彼らを模範としあるいは彼らの真似まねをすることを、おのずから強しいられる。いずれの地方も、いずれの村も、人間のいかなる集団も、ある程度までは、その貴族と同じ性質を帯びる。その貴族らの性質に従つて、ある所では世論はうろんがきわめて厳格であり、ある所では弛緩しかんしている。現今のごとき多数者の無秩序な跋扈はつこも、黙々たる少数者の恒こう久きゅう的権威を、なんら変じはしないであろう。彼ら少数者にとってさらに危険なのは、彼らが故郷の地から根こぎにされることであり、遠く大都市の中に散乱させ

られることである。しかし、かく異境に散り失せ、たがいに孤立していても、よき人種の個性は存続して、周囲のものと交混することがないのだ。——クリストフがパリで見えたような事柄を、シドニーはほとんど知らなかったし、知ろうとも欲しなかった。感傷的で不潔な新聞文学は、政治上の消息と同様に彼女のもとまでは達しなかった。彼女は通俗大衆の存在をさえも知らなかった。もし知っていたとしても彼女はおそらく、説教を聴ききに行くくらいのこととしか思わなかったろう。彼女は自分の職務を行ない、自分の思想を頭に置いていた。あくせくして他人の思想を考えはしなかった。クリストフはそれを彼女にほめてやった。

「何も不思議がることはありませんよ。」と彼女は言った。「私ばかりでなく皆みんなそうです。あなたはフランス人を御覧なさらなかったんでしよう。」

「いや、もう一年間も僕もフランス人の間に住んでいる。」とクリストフは言った。「そして、楽しむことや楽しんでる人の真ま似ねをすること以外に、何かを考えてるように見えるフランス人には、一人も出会ったことがない。」

「そうでしょう。」とシドニーは言った。「あなたは金持ちばかりを御覧なすったんです。金持ちはどこへ行っても同じものですよ。あなたはまだ何にも御覧なすってやしません。」

「そうです。」とクリストフは言った。「これから見てみよう。」

彼は初めてフランス民衆を瞥見した。その土地と合体し、多くの優勝階級や多くの一時的主君が過ぎ去るのを、土地とともに見たのであるが、自身は決して過ぎ去ることがなく、永久に継続するらしい民衆だった。

彼は次第によくなつて、起き上がれるようになり始めた。

彼が氣をもんだ第一のことは、病氣中にシドニーが立て替えてくれた入費を、彼女に返済することであつた。仕事を捜すためにパリー中を駆け回ることがまだできなかつたので、余儀なく意を決してヘヒトへ手紙を書いた。次の仕事にたいして前借をさしてくれと頼んだ。冷淡と親切とが不思議に交り合つた性格のヘヒトは、彼に十五日以上も返事を待たせた。——十五日、その間クリストフは、シドニーがもつて来てくれる食物になるべく手をつけまいとし、無理に強いられると牛乳やパンを少しばかり取り、そのあとで、自分が稼いだものではないとみずからとがめたりして、一人で自分を苦しめた。——その十五日後にヘヒトは、求められた金を一言も言わずに送つてきた。そして、クリストフの病氣がつづいた数か月間、ヘヒトは一度もその容態を尋ねなかつた。彼はたとい親切を施しながら

も、人に愛されない天才をそなえていた。またそれは、親切は施すが愛しはしないからでもあつた。

シドニーは毎日、午後と晩とにちよつとやつて来た。クリストフの晩飯を^{したく}支度してくれ
た。少しも音をたてなかつた。つましく仕事にかかつていた。彼のシャツが^{いた}傷んでるの
を見ると、一言もいわずにもち帰つて直してくれた。二人の関係にはそれとはなしに、あ
るこまやかな親愛さが^{すべ}滑り込んでいた。クリストフは年老いた母親のことを長々と話した。
シドニーは感動した。彼方^{かた}に一人ぼっちでいるルイザの地位に身を置いてみた。そしてク
リストフにたいしては母親らしい感情をいだいた。クリストフの方は彼女と話をしながら、
弱つて病気でいる時にはことに苦しい家庭的愛情の欠乏をみずからまぎらそうとつとめた。
他の者といつしよの時よりもシドニーといつしよにいと、いちばんルイザの近くにいろ
うな気がした。時とすると、芸術家としての^{くもん}苦悶を少し打ち明けることもあつた。彼女
はそういう知的な悲しみには多少の皮肉を示しながらも、やさしい^{あわ}憐れみを寄せてくれた。
それがまた母親を思い出させて、彼にはうれしかつた。

彼は彼女の打ち明け話を引き出そうとつとめた。しかし彼女は彼ほど打ち解けなかつた。
彼は冗談に、結婚するつもりはないかと尋ねてみた。彼女はいつもの冷笑的な^{あきら}諦めの調子

で答えた。——「そんなことは召使の身分には許されていけない。事がめんどうになるばかりである。それにまた、いい相手を選ばなければならぬ。それが容易なことではない。男というものはきわめて性質たちが悪い。金をもつてると言い寄ってきて、食いつぶしてしまふ。そのあとでは放り出す。まわりにそういう例はたくさん見てきた。そんな目に会いたくはない。」——彼女はかつて結婚に失敗したことがあるのを話さなかった。彼女の約束の男は、彼女が稼かせぎ高をすっかり家の者らに与えてるのを見ると、彼女を捨ててしまったのだった。——クリストフは、同じ建物に住んである家族の子どもたちと中庭で、彼女が母親らしく遊んでるのをよく見かけた。その子どもたちだけに階段で出会うと、彼女は彼らを熱く抱擁することもあった。クリストフは彼女を、知り合いの上かみさんのだれかの地位に置いて想像してみた。彼女は決して馬鹿ばかではなかった。他の上かみさんたちより醜みにくくもなかった。上かみさんとなつたら彼女の方がまさつてるかもしれない、と彼は考えた。だれにも気づかれずに埋もれている、かくも大なる生の力！ それに引きかえ、地上をふさぎ、他人の地位と幸福とを奪い、日の光に当たつてゐる、あれら死人同様の者ども！……

クリストフは疑懼ぎくしなかつた。彼女にたいしてごく懇切であり、あまりに懇切すぎた。大きな坊ぼつちゃんとして甘つたれていた。

シドニーはあるころ、がっかりした様子をしていた。しかし彼は、それを勤労のせいだと思つた。ある時などは、話の最中に彼女は突然立ち上がつて、仕事を口実にクリストフのところを去つた。ついにある日、クリストフが平素よりなおいっそうの信頼を示すと、それからしばらく彼女は来るのを中止した。またやつて来た時には、もう遠慮がちにしか口をきかなかつた。なんで彼女の気分を害したかを彼は怪しんだ。彼女に尋ねてまでみた。彼から気を悪くさせられたのでは決してないと、彼女は強く答えた。しかしやはり彼から遠ざかつていた。数日後に、立ち去る由を彼に告げた。暇を取つてしまったので、出て行くこうとしてるのであつた。冷やかな取り澄ました言葉で、彼から受けた好意の礼を言い、彼の健康と彼の母親の健康とを祈り、そして別れの挨拶あいさつを述べた。彼はその唐突とうとつな出立ゆつたつにびつくりして、どう言つていいかもわからなかつた。彼女がそんな決心をした動機を知ろうと試みた。彼女は一時のがれの返辞をした。彼は落ち着く先を尋ねた。彼女は答えを避けた。そして、彼の質問をうち切るために、室を出ていった。戸口で彼は手を差し出した。彼女はその手を少し強く握りしめた。しかしその顔は何物も示さなかつた。そして最後まで、彼女は堅い冷たい様子を失わなかつた。彼女は立ち去つた。

彼は少しも訳がわからなかつた。

冬が長くつづいた。湿った靄もやのかけた泥深い冬。日の光を見ない数週間。クリストフは快方に向かつていたが、まだ全快はしなかった。やはり右の胸に痛いところが残っている、病根は徐々にしか癒いえてゆかず、神経的な咳せきの発作が起こって、夜はそのため眠れなかった。医者は外出を禁じていた。それだけにまた、コート・ダジュールやカナリー島への転地なら大賛成だったろう。しかしクリストフは外出しなければならなかった。食事をしに出かけなければ、食事の方からやって来てはくれなかった。——また種々の薬も命ぜられたが、彼にはその代価を払う方法がつかなかった。それで彼は医者にかかるのをやめてしまった。まったく無駄むだ使いに終わるの思った。そのうえ彼はいつも医者と気が合わなかった。両者はたがいに理解することができなかった。それは相反した二つの世界だった。自分一人で一つの世界だとうぬぼれながら、人生の河から藁わらくす屑くずのように押し流されてる、この憐れな芸術家めにたいして、医者たちの方では、皮肉な多少軽侮的な憐れん憫びんの情をいだいていた。彼はそういう奴やつらから、ながめられ触さわられ取り扱われるのを屈辱くつじやくのように感じていた。彼は病気の身体が恥はずかしかつた。彼はこう考えていた。

「こいつが死んだらどんなにうれしいだろう！」

孤独、疾病、困窮、苦しみの理由は多くあつたにもかかわらず、クリストフは我慢強く自己の運命を堪え忍んだ。かほど忍耐強いことはかつてなかつた。彼自身でも驚いた。病気は往々ためになるものである。病気は身体をこわしながら、魂を解放する、魂を浄める。無活動を強いられた夜や昼を過ごすうちに、あまりに生々しい光を恐れ健康の太陽には焼かれるような、種々の思想が起こってくる。かつて病気になつたことのない者は、決して自己の全部を知つてはいない。

病気はクリストフのうちに、特殊な和らぎを与えていた。彼のうちの粗野なものをはぎ取つていた。各人のうちに存在しながら人生の喧騒のために聞き漏らされてる、諸々の神秘な方の一世界を、彼はこれまでになく繊細な官能で感得した。ごく些細な記憶も脳裡に刻まれる発熱時に、ルーヴル博物館を見物して以来、彼はレンブラントの画面の雰囲気いいきに似た、熱い深い穏やかな雰囲気いいきのうちに生きていた。彼もまた心のうちに、眼に見えない太陽の怪しい反映を感じていた。信仰をもつてはいなかつたけれど、自分が孤独でないことを知つていた。一の神が彼の手を取つて、彼を行くべきところへ導いていた。彼は幼い子どものようにその神に信頼していた。

数年以来初めて、彼は休息しなければならなかつたのである。病気になる前の異常な知

的緊張は、今もなお彼を疲憊ひはいさせていたが、そういう緊張のあとにおいては、回復期の倦けん怠たいでさえ一つの休息であった。数か月以来不断の警戒的気持に堅くなっていた彼は、次第に視力が散漫になるのを感じた。それでも彼は弱らなかつた。いつそう人間になった。天才の力強いしかし多少怪物的な生活は、遠景にひそんでしまった。あらゆる精神的熱狂を奪われ、活動に付随する冷酷無慈悲なものをすべて奪われた、通常の人間たる自分自身を、彼は見出した。彼はもはや何物をも憎まなかつた。もはや腹だたしい事柄を考えなかつた。あるいは考えても、単に肩をそびやかすばかりだった。自分の労苦を少なく考え、他人の労苦を多く考えた。地上のあらゆる方面において、不平も言わずに苦闘してゐる、貧しい魂らの黙々たる苦しみを、シドニーから思い起こさせられて以来、彼はそういう魂のうち自分に忘れた。平素は感傷的でなかつた彼も、虚弱の花とも言うべきかかる神秘的愛情の発作に、今や駆られるようになった。晩に、中庭の上の窓にもたれて、夜の神秘的な響きに……遠く聞けば可憐かれんと思える隣家の歌声に、モーツアルトの曲を無心でひいてる小娘のピアノに……じつと耳を傾けながら、彼は考えた。

「僕の愛する見知らない皆の人たちよ！ 生活のために少しもしぼまず、不可能だと知りながら大事を夢み、敵の世界と闘たたかつてゐる人たちよ——僕は君たちが幸福を得んことを希望

する——幸福であることは実にいいことだ！……おう友たる人たちよ、僕は君たちがそこにいるのを知って、両手を差し出してゐるのだ。……しかしわれわれの間には石の壁がある。僕はその一石一石をすりへらしている。しかし同時に僕自身もすりへらされる。われわれは決していつしよになれないのであるうか？ 他の壁が、死が、間にそびえないうちに、僕は君たちのもとに達するであろうか？……いや、僕はたとい生しょうがい涯がい孤独であつても構わないのだ。君たちのために働き、君たちのためにいいことをなし、君たちが僕をやがて、死後に、多少なりと愛してくれさえするならば……。」

かくして回復期のクリストフは、二人の善良な乳母の乳を飲んでいた、「愛と悲惨」との乳を。

彼はかかる意志の弛しかん緩中、他人に近づきたい欲求を感じた。まだ身体がごく弱かつたけれども、そして無用心なことではあつたけれども、彼は朝早く、人口稠ちゆうみつ密な街路から群集の波が遠くの仕事場へ流れ出すころ、または夕方、その人波がもどつてくるころ、外へ出かけてみた。彼は人情の慰安の風呂ふろに浸りたかつた。それでもだれかに口をきくでもなかつた。口をきくことを求めもしなかつた。人々が通るのをながめその心中を察し彼ら

を愛することだけで、彼には十分だった。彼は愛情のこもった憐憫れんびんの眼で観察した、前もってその日の仕事に疲れてるような様子で、足を早めてる労働者らを——艶つやのない顔色をしきびしい表情を見せ変な微笑を浮かべてる、青年男女の顔つきを——移り気な欲望や懸念けねんや皮肉などの波の過ぎるのがよく見て取られる、変化の多い透き通った顔を——機敏な、あまりに機敏な、多少病的な、大都市のその民衆を。彼らは皆、男は新聞を読みながら、女は三日月形のパンをかじりながら、早く歩いていた。うとうととした脹れ顔の金髪を乱した娘が、神経質な素気そつけない山羊やぎのような小足でそばを通りかかると、クリストフは彼女をもう一、二時間も多く眠らせるためには、自分の一か月分の生活費を与えても惜しくはない気がした。もしそれを申し込まれたら彼女は厭いやとは言わないだろう！ 退屈げに安逸を享樂ひましている閑な金持ちの婦人らを、まだこの時間にはびったり閉しまつてるその室から追い出して、その代わりに、その臥床ねどこに、その休息の生活に、これらの澆刺はつらつとしたしかも疲れてる小さな身体を、鈍らず満ち足らずしかも生きることに活発どんよく欲よくなこれらの魂を、置いてみたらと彼は考えた。今や彼は、彼女らにたいする寛大な心で胸がいつぱいになるのを感じた。その快活なしかも疲れたかわい顔つきに微笑ほほえんだ。彼女らのうちには、狡猾こうかつさと率直さとがあり、快樂にたいする厚かましい素朴そぼくな欲求があり、そして

底には、正直勤勉な善良な小さい魂があるのだった。そのうちのある者らが、臆面もない眼つきをしたこの大子供たる彼をたがいにし示しながら、鼻先であざけつたりたがいに肱でつき合つたりしても、彼は腹をたてなかつた。

彼はまた河岸通りを夢想にふけりながらよくぶらついた。それは彼が大好きな散歩だつた。幼年時代を守りしてくれた大河にたいする郷愁が、その散歩で多少和らげられた。あそこはもちろん、かの父なるライン河ではなかつた。かの全能的な力は少しもなかつた。精神が翔り回つて迷い込むような、広い地平線や広漠たる平野は少しもなかつた。灰色の眼をし、褪緑色の衣をつけ、繊細なきつぱりした顔つきの河であつた。都市の華麗でしかも簡素な衣裳をまとい、多くの橋の腕輪をはめ、多くの記念塔の頸輪をつけ、惻愴げな無頓着さで伸びをして、またそぞろ歩き美人のように、自分の美しさに微笑んでいる、身こなし嫺かな優美な河であつた。……そのあたりの、パリーの麗わしい光よ！

それこそ、クリストフがこの都会で愛した第一のものであつた。それは静かに静かに彼のうちに沁み通つた。彼がみずから気づかぬまに彼の心を少しずつ変化させた。それは彼にとつて、音楽中の最も美しい音楽であり、パリー唯一の音楽だつた。彼は夕方、河岸通りや古いフランスの庭園で、幾時間も過ごしながら、紫色の靄に浸つてる大木、灰色の像や柱

頭、幾世紀もの光を吸収した王政時代の塔碑の苔生した石、それらの上に射している光線の諧調を——細やかな日光と乳白色の水蒸気とでできてる、その微妙な大気を味わった。その大気には、銀色の埃の中に、民族のにこやかな精神が漂っていた。

ある晩彼は、サン・ミシエルの橋の近くの欄壁にもたれて、河の水をながめながら、欄壁の上に並んであるある古本屋の書物を、何気なくいじっていた。そしてふとミシユレーの端本をひらいた。彼はかつてこの史家の数ページを読んだことがあつたけれど、そのフランス式な誇張や言語の陶醉や性急な調子などのために、あまり面白く思わなかった。ところがその晩は、初めから感動させられた。それはジャンヌ・ダルクの裁判の終わりの方だった。彼はシルレルの作でこのオルレアン少女のことは知っていた。しかしこれまで彼女は彼にとつて、大詩人から想像的生活を与えられてる架空的な女丈夫にすぎなかった。しかるに今突然その実相が彼の前に現われて、彼女は彼をとらえてしまった。彼はその嚴かな物語の悲壮な凄みに心打たれながら、読みつづけていった。ジャンヌがその夕方死ぬことを知って、恐怖のあまり気を失うところまで読んだ時、彼の手は震えだし、涙が出てきて、読みつづけられなかった。彼は病氣のために弱っていて、みずから腹だたいいほどおかしな多感性になっていた。——彼は読み終えようとしたが、もう間に合わなかった。

古本屋は箱をしまいかけていた。彼はその本を買おうときめた。ポケットを探してみると、わずかに六スーしか残っていなかった。これほど貧しいのも珍しいことではなかった。彼は別に気をもみはしなかった。食物を購^{あがな}ったばかりだった。翌日へヒトのところへ行けば、楽譜の稿料として多少の金をもらえるはずだった。しかし、翌日まで待つのはつらかった。なぜ先刻、わずかな残金を食物の代に費やしたのか。ポケットにあるパンと腸詰^{ちようづめ}とを、古本屋へ書物の代として提供することができるなら！

翌朝ごく早く、彼は金をもらいにへヒトの家へ出かけた。しかし、戦いの大天使——ジャンヌの「天国の兄弟」——の名前をもつてサン・ミシエル橋のそばを通りかかると、彼はどうしても立ち止まらずにはいられなかった。古本屋の箱の中にはまだ貴^{とうと}い書物がいっていた。彼はそれを全部読んだ。読み終えるのに二時間近くもかかった。そのためへヒトとの面会の時間を遅らした。それからへヒトに会うために、ほとんどその一日をつぶしてしまった。そしてようやく新しい仕事を頼まれて、金を払ってもらえた。彼はすぐさま古本屋へかけつけた。他の者から買われてやしないかと気づかれた。もちろん買われていても大した不都合はなかったろう。ほかのを手に入れることは容易だった。しかしクリストフは、その書物がありふれたものかどうかわからなかった。それになお、ほしいのは

その書物であつてほかのではなかつた。書物を愛する人々は、ややもすれば拜物教徒となりやすい。汚点のある汚きたないページも、それから夢想の泉がほとぼしり出てきたせいで、神聖なものとなるのである。

クリストフは家に帰つて、夜の静けさの中で、ジャンヌの受難の福音書を読み返した。人の手前もないのでもはや感動を押えるに及ばなかつた。その憐あわれな羊飼いの少女にたいして、やさしみの情が、憐れみの念が、限らない悲しみが、彼の心に満ちてきた。田舎風いなかの赤い大きな着物をつけた羊飼いの少女、背が高く内気で、やさしい声を持ち、鐘の音の歌に夢想し——（彼女も彼と同じく鐘の音が好きだった）——慧けい敏びんと温情とに満ちた美しい微笑を浮かべ、いつも流れ出さんばかりの涙——愛の涙、憐れん憫びんの涙、気弱な涙、をたたえていた。なぜなら彼女は、いかにも雄々しいとともに女々めめしかつた。純潔でまた勇ましい娘だつた。無頼漢どもから成る一軍の荒々しい意志を統御し、また平然として、皆の者から裏切られ孤立しながらも、その大胆な明識と女らしい機敏さとやさしい熱心とで、数か月の間、周囲を取り巻いてる教会と法律との徒輩の——血走つた眼をしてる狐狼ころうの——威嚇いかくと偽善的な詭計ぎけいとを、失敗に終わらせていた。

最もクリストフの胸に沁しみ通つたのは、彼女の温情であり心のやさしさであつた——勝

利の後に涙を流し、死んだ敵に涙をそそぎ、自分を侮辱した者らに涙をそそぎ、傷ついた者らを慰め、死んでゆく者らに力をつけ、自分を売り渡した者らをも恨まず、そして火刑台に上がって、炎が立ちのぼってきた時でさえ、自分のことを考えず、力をつけてくれる修道士のことのみ考えて、彼を強いて逃げさせたのであった。彼女は「最も激しい争闘中にも温和であり、悪人の間にあつても善良であり、戦いの最中にも平静であつた。悪魔の勝利たる戦争に、彼女は神の精神をもたらした。」

そしてクリストフは、自分自身を省みながら考えた。

「俺は戦いに神の精神を十分もたらさなかつた。」

彼はジャンヌの福音史家の美しい言葉を読み返した。

「人々の邪悪さと運命の酷薄さとの間にありながら、善良でありいつまでも善良であること……多くの苦々しい諍いのうちにも温和と親切とを失わず、その内心の宝に触れさせずに経験を通り越すこと……。」

そして彼はみずからくり返した。

「俺は悪かつた。俺は善良ではなかつた。親切を欠いていた。あまりに厳酷だつた。――許してくれ。僕が攻撃してる諸君よ、僕を諸君の敵だと考えてくれるな。僕は善を、諸君

にもなしたいのだ……。それでもなお、諸君が悪をなすのを防がねばならないのだ……。」

そして彼は聖者でなかったから、敵のことを考えるだけで憎悪の念が起こってきた。彼らを見ると、彼らを通してフランスを見ると、かかる純潔と勇ましい詩との花がこの土地から生じたのだとは、想像し得られないほどののを、彼は最も彼らに許しがたく思った。それでも、かかる花が実際に生じたのだ。またふたたびそれが出て来ないとはだれが言い得よう？ 今日フランスが、シャルル七世のころのフランスより悪かろうはずはない。しかも当時の墮落せる国民からオルレアンの少女が出て来たのだ。今では、寺院は空虚であり、汚されて、半ば荒廢に帰している。それでもよろしい！ 神はかつてそこで言葉を発したのだ。

クリストフは、フランスにたいする愛のために、愛し得る一のフランス人を求めたかった。

三月の終わりのころであつた。もう数か月以来、クリストフはだれとも話をしなかつた。彼が病氣であることを少しも知らず、また自分が病氣であることをも彼に知らせないでいる、年老いた母親からの短い便りたよを、たまに受け取る以外には、なんらの手紙にも接しな

かった。世間との関係はただ、仕事の取りやりのために楽譜商へ行き来することだけだった。そこへ行くにも彼は、ヘヒトがいないとわかつてる時間にした——ヘヒトと話すのを避けるために。しかしそれは余計な用心だった。一度ヘヒトに出会ったことがあるけれど、ヘヒトは彼の健康を二、三言冷淡に尋ねたばかりだった。

かくして彼は沈黙の獄屋に蟄居ちつきよしていた。するとある朝、ルーサン夫人から一晚の音楽会の招待状を送ってきた。名高い四重奏曲が聴きかれるはずだった。手紙はきわめて親切な文句で、主人のルーサンも懇篤な数行を書き添えていた。彼はクリストフとの仲違たがいを自慢にはしていなかった。情婦の女歌手と喧嘩けんかをして彼女に容赦ない批判をくだすようになってからは、なおさらのこと自慢にはいかなかった。彼は善良な男だった。不正な目に会わしてやった人たちを恨んではしなかった。不正を受けた人たちが彼よりもいつそうそれを根にもつてるのが、おかしく思われるほどだった。それで、そういう人たちに会つてうれしい時には、躊躇ちゆうちよせず躊躇に手を差し出すのであった。

クリストフは初め肩をそびやかして、行くものかと誓った。しかし音楽会の日が近づくと従つて決心が鈍つてきた。もう人間の言葉を一語も聞かないので、ことに音楽の一音符をも聞かないので、胸つまる心地がしていた。それでも彼はなお、彼奴あいつらの家へ足を踏み

入れるものかとみずからくり返した。しかしその晩になると、自分の弱さを恥じながらも出かけていった。

その報いはひどかった。政治家や軽薄才子らの集まりにはいるや否や、彼らにたいして近来にない激しい嫌悪けんおを感じた。幾月も寂寞せきぱくのうちに暮らしてきたので、かかる人間の動物園に馴染なじみ浅あくなっていたのである。そこで音楽を聞くことはとても辛抱できなかった。それは一つの冒瀆ぼうとくだった。最初の曲が終わつたらすぐに帰ろうと彼は決心した。

彼は周囲にずらりと並んで厭いやな顔や身体を見渡した。すると、客間の向こう端で、こちらをながめてる眼に出会った。その眼はすぐにそらされたけれど、その中にこもっていたなんとも言えぬ誠実さが、まわりの鈍い眼つきの間で彼の心を打った。内気ではあるが明らかなきつぱりとした眼であった。一度だれかの上にすえられると、絶対の真実さでその人をながめ、自分のうちの何物をも隠さないとともに、おそらく相手の何物をも見落さないような、フランス式の眼であった。クリストフはそういう眼を知っていた。しかし今その眼で輝いてる顔は知らなかった。二十歳から二十五歳くらいの間の青年で、小柄で、やや前かがみになり、虚弱そうで、無髻むぜんの悩ましげな顔、栗色くりの髪、不揃ふそろいな繊細な顔だち、一種の不均衡さをもっていた。その不均衡さは顔の表情に、ある不安さをではないが、

ある落ち着きなさを与えていて、ちよつと魅力がないでもなかつたけれど、眼の平静さと矛盾してゐるようにも思われた。その青年は扉とびらの入口に立っていた。だからも注意を向けられていなかつた。クリストフはまた彼をながめた。ながめるたびごとにその眼に出会つた。するとその眼は、かわいげな無器用さでおおずとそらされた。そのたびごとにクリストフは「見覚えがある」のを感じた。別な顔のうちにその眼をすでに見たことがあるよ
うな気がした。

クリストフはいつもの癖で、自分の感じを隠すことができなかつたから、青年の方へ進んでいった。しかし近寄つてゆきながら、なんと言つたらいか考へた。そして何気なく歩いてゐるかのようには左右をながめては、心をきめかねてぐずぐずしていた。青年はそれにだまされなかつた。クリストフが自分の方へ来るつもりでいるのを覺さとつていた。しかし彼に話しかけることを考へただけで氣遅れがして、隣室へ逃げ出そうかと思つたほどだつた。それでもやはり拙劣にもそこに釘くぎ付けにされていた。二人は向かい合つてつつ立つた。思つたところへ落ち込むにはしばらくかかつた。そのままの状態が長引くにつれて、どちらも相手の眼に自分がおかしく映つてると思つた。ついにクリストフは青年をまともにながめた。そして何の前置きもなしに、微笑ほほえみながら武骨な調子で話しかけた。

「あなたはパリーの人じゃないんでしょう？」

その意外な質問に会って、青年は当惑しながらも微笑んで、パリーの者ではないと答えた。その内ごもりの響きのある弱い声は、脆せいじゃくな楽器の音のようだった。

「僕もそうだろうと思っていました。」とクリストフは言った。

そしてその妙な認定に相手が少し恐縮しているのを見て、彼は言い添えた。

「悪い意味で言ってるのじやありません。」

しかし相手の当惑は増すばかりだった。

また沈黙が落ちてきた。青年は口をきこうと努めていた。唇は震えていた。言うべき文句がまとまっていながら、口に出すのを決しかねてるらしかった。クリストフは珍しげに、透き通った皮膚の下に小さな戦おのきの過ぎるのが見えている、その変わりやすい顔を見守みまもつた。客間の中にいる周囲の人々、ただ首の延長であり肉体の一片である、どっしりした顔、重々しい物体、それとは本質的に異なっているように思われた。魂が顔の表面に現われていた。各肉片のうちに精神生活がこもっていた。

青年はどうしても口がきけなかった。クリストフは淡白に言いつづけた。

「あなたはここで、こんな人たちの中で、どうしようというんですか。」

彼は人からきらわれるほどのなみはずれた自由きで、声高に口をきいた。青年は困って、人に聞かれはすまいかと、あたりを見回さずにはいられなかった。その素振りがクリストフの気に入らなかつた。青年はそれから、答える代わりに、おとなしいへまな微笑を浮かべて尋ねた。

「ではあなたは？」

クリストフは笑い出した。多少重々しい例の笑い方だった。

「そうですね、僕は……。」と彼は快活に言った。

青年は突然決心した。

「僕はほんとにあなたの音楽が好きです！」と喉のどがつまった声で言った。

それから彼は自分の臆おくびよう病びょうさに打ち勝つためにふたたび無駄むだな努力をしながら、口をつぐんだ。顔を赤らめていた。それをみずから感じていた。そのためにいつそう赤くなつて、顛顛こめかみや耳みみまで真赤まっかになった。クリストフは微笑ほほえみながら彼をながめて、抱擁うやうやしてやりたくなつた。青年は彼の方へがっかりした眼を挙げた。

「いえまつたく、」と彼は言った、「どうしても……それが言えません……ここでは……」

クリストフは大きな口をきつと結んで無言の笑みを浮かべながら、この未知の青年の手をとった。その瘦せた指先が掌で軽く震えて、無意識な愛情で握りしめてくるのを、彼は感じた。青年の方では、クリストフの頑丈な手が心をこめて、自分の手を握りつぶしそうにしているのを感じた。客間の騒々しさは二人のまわりから消え失せた。彼らはただ二人きりの心地がし、たがいに友であることを知った。

それはちよつとの間だった。すぐにルーサン夫人が、クリストフの腕に扇で軽く触りながら、彼に言った。

「あなた方はもう近づきになりましたね。御紹介するにも及びませんでしょう。この人は今晚あなたのためにいらしたんですよ。」

すると二人は、ちよつと気兼ねをしてたがいに離れた。

クリストフはルーサン夫人に尋ねた。

「どういう人ですか。」

「まあ！」と彼女は言った、「あなたは御存じないんですか。きれいな詩を書かれる青年詩人ですよ。あなたの崇拜者の一人ですよ。りっぱな音楽家で、ピアノがお上手です。あの人の前では、あなたのことを批評はできません。あなたに惚れこんでるのですから。」

このあいだも、あなたのことで、リュシアン・レヴィー・クールと喧嘩けんかになりかかったのですよ。」

「ああそれはありがたい！」とクリストフは言った。

「でも、そのリュシアンさんにたいしてはあなたの方が悪いんですよ。あの人もやはりあなたを好きですもの。」

「そんなことがあるものですか。たまらないことです。」

「確かですよ。」

「いえ、決して決して！ 私は好きになってもらいたくはありません。」

「ちようどあなたの崇拜者と同じことをおっしゃるのね。あなた方はどちらも狂人同士ね。その時は、リュシアンがあなたのある作品を説明していました。すると今お会いなすつたあの恥ずかしがりやさんが、震えるほど怒おこりながら立ち上がって、あなたのことを口にしてはいけないと言いだしたのです。大した意気込みじゃありませんか！ おりよく私が居合まわしていました。思い切つて笑つてやりますと、リュシアンも私の真似まねをしたのです。相手は困つて黙り込んで、とうとうあやまりましたわ。」

「気の毒に！」とクリストフは言った。

彼は感動していた。

「どこへ行つたんでしよう？」と彼はつづけて言いながら、他のことを話しかけるルーサン夫人へは耳も貸さなかつた。

彼は青年を捜し始めた。しかしその友は姿を隠していた。クリストフはルーサン夫人の方へもどつてきた。

「なんとという名前ですか教えてください。」

「どなた？」と彼女は尋ねた。

「今のお話の人です。」

「あなたの若い詩人の方ですか。」と彼女は言った。「オリヴィエ・ジャンナンという人ですよ。」

その名前の反響は、クリストフの耳へは、よく知つてる音楽のように響いた。一人の若い女の影が、彼の眼の底にちよつと浮かんだ。しかし新しい面影が、友の面影が、すぐにそれを消してしまった。

クリストフは家へ帰りかけた。群集の中に交つて、パリーの街路を歩いていった。何に

も見えも聞こえもしなかった。周囲のすべてのものにたいして、彼の感覚は閉ざされていた。世界の他の部分から山脈で隔てられてる、一つの湖水に似ていた。なんらの風も音も動揺もない。平穏だ。彼はくり返していた。

「俺^{おれ}には一人の友がある。」

青空文庫情報

底本：「ジャン・クリストフ（二）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年7月16日改版第1刷発行

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2008年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 第五巻 広場の市

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>